なす、嚴檢、任回を左右となし、文斌、李遠、李國、王懷等、一同に起り發す、共に精兵二萬を以て、遂に成都の城門に押寄せ、大に勢を發して攻めたりける、羅特是に恐れて、敢て出て戰はず、李雄は城を圍み住めて、走り漏す事を許さず、外に去つて救を求むる事を、つよく吟味したりける、すでに圍む事きびしければ、城中の軍民ども、騷亂し、逃げかくれて、敵を防ぐに意なければ、羅特心慌しく、親ら城に上つて戰を督したるに、思ひの外なる流矢にあたつて、五日の間軍に臨んで、防ぐ事あたはず、又城中の粮米を給する事も洽からざれば、兵士の怨の聲、鼎の沸が如くにして、嘆息するの喧しきは、城外までに聞えければ、羅特かくの如くにては、懼くは內變をも生ぜんかと、瘡を包み自ら痛をこらへ、勉め強て城にのぼり、衆を慰め粮を散じて、兵士の心をとる、李雄この樣態を看て、馬乘出し、親ら叫んで、羅將軍、我が一言を聞け、今晉朝政を失ひ、賞罰明なる事あたはず、たとひ忠を盡したりとも、恐くは徒らに空しく死なんことを、且へ羅尙貪つて又虐なり、衆の心これによりて、已に變じたり、城の破るゝ事旦夕の間なり、將軍若し還てこゝに迷ひを執らば、必ず放火おこりて、玉石俱に焚かるゝがごとく、善人も惡心も、共に滅びて後なけん、早く降り來つて、永く富貴を保ち、家の眷屬に安堵の思ひを成さしめんにはます事あらじと云ふ、羅特、何ともこれに答へをもなさず、おめ〳〵と城を遁りて去りたりけり、李雄は、其の心に死を畏るゝ事を得心して、乃ち閻式に向つて、吾此の如く幸にして、大事をなす者は、川民の心われ〳〵になつける故なり、然るに今、城中の困窮すでに極りたりと見ゆ、若し其城を破るゝを待なば、百姓を傷らずしては全く得べからず、此の如くにしては、多の百姓の生命を、滅さんことこそ哀しけれ、吾れ意ふに、人々をして城に入れ、利害を以てこれに說かん、たま〳〵羅特順ひ從うて、民と共に援れなうして、成都城を全く得るならば、衆心の歸向く處あつくして、大事の成らん事、掌の中にありと云ふ、閻式聞いて曰く、其儀ならば、吾れ今まさに自ら城中に往て、かれが心の緊しきや、また慢きや、これを誘いて見つべし、羅特が心を察するに、多分は听き順がはんと思ふなり、李雄が曰く、軍師、肯つて行れなば、已に成都をば得たると云ふものぞと慶べり、卽ち閻式は輕騎にして、些少ばかりの從者を引ゐ、遂に城門の下に至り、門を守るの士を叫ぶ、守城の軍士　さしのぞきて見れば、閻式一人、儒巾に、素き衣を著して立つたり、軍士是を說者と見定めければ、何の畏れもなく、門を開いて內に入る、それより軍卒を相そへて、羅特が衙に送りやる、羅特は閻式に向ひ、汝これ何人なれば、こゝに到つて何を幹する、閻式が曰く、吾れ別事を爲にあらず、ことに來つて、滿城の百姓の、死命を救ひ拔んとするのみ、今思ふに、羅使君尙公、しば〳〵李益州と敵を爲事は、荊、梁、上庸、廣漢、犍爲の諸郡あつて、此の城の拔ひ助けとなつて、力を協へたる故を以てに非ずや、然るに今、右の地地、皆な解て、過半は李益州の部下に屬けり、其の上羅使君も、自らすでに遠地に去りたまへば、此の城に將軍一人あつて、外に見えたる救ひの兵の、來るべき味方もなく、內にはすでに粮食乏しうして、民まもるの心に怠る、吾れ竊に恐る、一朝にして城陷り、身家俱に破れなば、眷屬は累を負ひ、兵民は戮に遭ん、此の時の功名、又何れに在る事を知らず、君知らずや、李益州は、英雄超邁れ、寬洪なる器量あり、寔に天の資くる所にして、以て川民の溺れを救ひ拯はんとする人なり、將軍なんぞ天に應じ人に順つて、早く門を開き、李益州の兵を城中に入れ、同じく富貴を享け、一門の死命を保ち全せざる、其の上一城の民命を助くる將軍の德、あに茂からざらんや、羅特聞いて、吾乃ち大晉の方伯の臣子たり、あへて土を捐て賊に降り、豈に笑を後人に貽すのみならず、先祖までを玷け辱むるにあらざらんや、況や我が叔父李特を擒にしこれを斬る、其子弟一族、甚だ衆きに、彼れが恨み心骨に徹して、羅姓の者たる、何ぞたゞに思はん、汝は是何人なれば、ことに來り、此の言を以て、敢て我を慢らしめ、身を以て仇に就しめんとするぞ、閻式重ねて、あゝ慢りなり、然んばあらず、昔日岑彭が漢に歸し、張郃が魏に入る、豈に敵將、血戰の仇なきものにあらんや、吾れ質は卽ち李益州の軍師にして、閻子規と云ふ者なり、吾主の量度、能く物を容れ、さきにも徐盤が招きに從へば、速く行軍司總官に拜任し、今は鎭國將軍たり、中々以て李益州の心に於て、仇怨を結び留むるなんど云ふ事は、假初にもなき事なり、其の事の疑ならば　某し願ふは、天地に誓ひ、性命にこれを保たん、少しも懼あるべからずと說く、羅特は閻式が言の理あるを以て、乃ち衆人を喚んで、これに謂て曰く、今我が兵士、數年に及んで、流民と相爭うて、まことに一時の安息なく、汗馬百戰の勞に於て、其の力を用ひ盡せりと雖ども、ならびに朝廷よりとて功をすゝめ、士を恤れむの詔もなし、今力を盡し拒ぎ守りて、汝等と共に忠義に死せりと云ふとも、人得て憐れみ稱して、吾が叢の心を知るものなからん、矧や羅使君、今遠く去り、城中の粮盡き、兵日々に瘦に及べり、料るに此の城永く守るに難からん事を、さりとて、一まづこゝを逃れ去り、外兵と協合ひ、再び來て、共にこれを爭ひ取らんと欲すれば、流賊把り圍で、鐵の桶のごと

とく緊しければ、たとひ翼ある者なりとも出で難し、然れば汝等茲に於て、何等の高見あつて、一時の良策あらん、衆人みな、羅特が意降參にあれども、これ誠に衆人に飾の言なりと知りぬれば、乃ち聲をひとしく應へて曰く、事將軍の意にあり、何ぞはやく閻將軍の請に從つて軍民の苦を拔き、富貴を保つことを計り玉はざるや、羅特衆の言によつて、さらばこれに任すべしと人を使し、當官の印綬をさゝげ、李雄が軍中に降を乞ふ、李雄これを受け、乃ち大に旗幟を張り、皷樂を列ね、自ら羅特を迎へて營に入り、酒宴を設け、次の日一同に城に入り、民を安んじ、卽ち羅特に車騎將軍を授けたり、こゝに於て、李雄は遂に成都を得て、晉、漢、成、鼎足の勢始めて見えたりける、

羅承等害閻式

僞益州の牧李雄は、こゝに閻式が計を用ひて、羅特が兵を說を以て下し終り、及に血をも流ずして、成都をば思のまゝに得たりける、是に因て李雄大方ならぬ喜びにて、こゝに乃ち酒筵を開き、諸將をも召集めて、慶賀をこそなしたりける、其の後に、李讓を兵に將として、涪城を取らしめ、李壯には洛城を取らしめんとす、二將は命を領け、既に成都を離れ去る、斯て李讓は、早く涪城に至りて、城を攻めんとするとき、城の守將任明、兵を出して拒ぎ戰ひけるが、任明はつひに成兵の流矢に當つて射死さる、州の丞葉蒸は、又李讓が爲に擒となる故、涪城防に力なく、遂に再び李雄が方へとり復され、又李壯は洛城に向ひける、此洛城には、羅尙が兵士七千を留め在らしめて、食につかしめたり、すでに流兵の壕を犯すよし聞えければ、守將顏經、城門を開いて出拒ぐ、兩陣たがひに相對して、戟を交へんとする時に、顏經は、馬上に刀を横へ、高く叫んで曰く、流賊、狂徒、何ぞ敢へて吾城を來り侵すや、好々馬を下りて降を致せ、誅戮をなす事を免さんぞ、李壯聞いて乾笑ひ、あゝ死を尋ぬる豚奴、命を乞ふに猶ほ遲し、それさへあるに、亂言をなしつるや、誰かある味方の將、先づ出てこれを擒にし、軍神を祭れと云ふ、其の言も未だ畢らざるに、鑾鈴の响く處、嚴檢はこゝに馬を飛せ出で、手に燕尾の雙鉾をとり、鋒を衝て進んだり、顏經はこれを見、こゝに勇氣を逞しうし、逆へ戰ひて勝負を爭ふいまだ十合ならざるに、顏經が術や劣りけん、嚴檢が一鉾に戮り死るゝぞ無慙なれ、官兵これに勢を失ひ、其武者いろの白む處へ、李壯は下知して衆を揮ひ、晉軍を掠むれば、官兵大に敗れて逃げ散たり、嚴檢はこれに氣を得て、赶け去つて砍りみだせば、官兵あまつさへ、城に入る事をも得ずして、浩關を望んで逃れけり、嚴檢は成兵共に下知を加へ、逃るゝ兵にはかまはずして、搶ついて城に入る所へ、李壯も繼いで馳せ到り、つひに城を乘取りけり、百姓どもこゝに出て拜して、己れ〳〵が命を乞ふ、李壯すなはち令を下し、殺し掠むる事を禁じて、一城の仕置、清靜なりしかば、洛城も遂に定まりける、この由をすみやかに告て、成都に至らしむ、李雄これを喜び、卽ち上官晶等を遣し、下縣の未だ吾が手に從がはざる處々を徇へしむ、文斌等、十日ばかりの程には、悉く、下縣どもを徇へ從がへ、其綬を奉る、李雄は重て、李國、李雲に命じ、麴欽、趙甫、趙誠等を相添へ、兵士三萬を引せ、襲つて漢中を取らんとす、晉より今度、新に漢中に任ずる所の太守をば、張殷と云ふ者なるが、李雄が兵の、入つて寇するよしを聞知つて、自ら粹兵萬人に將とし、定山の東に、柵を構へて待ちけるゆゑ、成兵急に進む事あたはず、敵味方互に相守る事、旬餘に至りける、是に因て、李國、衆人に曰く、我軍粮米の通路なしがたく、其の上晉兵の守り備ふる事、嚴しくして、最も一端には勝をなすべからず、しかれば多くの日を費やさん事も、第一畳りがたき粮道なれば、其の事如何あらん、衆人聞いて、評議區々にして定らず、時に副將、咸勸は、李雲にすゝめ、兎角は一端、先づ兵を引還して、重ねて謀をなし、粮道をも思ふまゝに分別して、進むべしと云ひければ、李雲も半はこれを信じける故、李國に對して、此の議を如何あらんと計る、李國はこれを聞き、一軍もとより難意あらば、全うして成都に回らん事、最も其の理ありと雖ども、其については一件あり、定めて敵軍より味方の陣へ、日頃に間なく細作を入れ、事の動搖を問はせんは必定なり、されば惣軍一たび起つて還らんとせば、彼かならず精兵を以て追ひ蹈ひ、吾を襲ひ討たん事、疑ひなき處なり、如かじ、いま彼が計について、反て彼を破らんにはとて、遂に王角、李祺の兩將に付して曰く、爾ち二人、素より膽勇ある者なれば、この事を屬するぞ、こゝに精兵八千を帶し、儉に小路を通じて、定軍山の北に出で、漢中の要路に伏し、張殷が逃れ回る處を防ぎ、截出てとり住めよ、彼をして城に入るゝ事なかるべし、上官晶は、兵士五千を引いて、二人の爲の接應たれ、李雲、趙肅は、兵卒三千を將ゐ、歸路の左に伏すべし、上官琦、趙誠は、兵卒三千にて、歸路の右に伏すべし、毛植、襄珍は、引兵一千を領じ、定軍山の側に伏せ、只張殷が案を出づるを待て追くべし、先づ人をして爾が手より、張殷が案を放火して、渠が意を亂さしめよ、以て其の心を惑はさんためなりと、各々に分付し、其の後李國は、自ら兵士一萬五千を引き

て、多く旌旗の手をまし、洋々として潮の引くがごとく、成都を望で退きける、晋將張殷は、此の由を聞つけ、これ謀計なりとは夢にも知らずして、あれ見よ李國が、軍を返すぞと、卽ち士卒を調べ、寨を撥つて悉く起り立ち、風の追ふがごとく速に追すゝむ、李國は張殷が、其の間近く追かけ到ると見るより、放らに兵を催促し、疾走り逃れゆくを、張殷が兵は、これ兵に逃ると思ふより、勢ひに乘じて、のがさし擊取れ、喰止めよと、急やかに追ひ伐たり、李國は走りて、すでに今は伏所まで、張殷が人數を思ふやうに、引入れたりと見定むれば、こゝに號砲を放ち起しける、李雲、上官琦、是を聞くより、忽ち兩路の伏兵を發して殺て出れば、李國は自ら取つてかへし、敵の陣中を殺轉る、張殷は、前山山路のせばきを見るより、こゝにて敵に逼まれては悪かりなんと、馬を回して殺出る、かゝる處に忽ち烟焔天を沖き、熾さかんに立上る、これは何れの所ぞと察すれば、吾寨柵の目當なり、張殷衆將を叫で、反て賊の詭計に中られ、吾寨柵を燒るゝと覺えたるぞ、定めて路頭にも埋伏あらんず、油斷ばしすな、面々力を盡して殺出よ、回りて漢中を守らんぞと云へば、各々勇を奮ひ、路を奪つて走り出で、戰つて脫れんとする處に、又毛植、裏珍の二將、あらはれて殺り轉れば、張殷が兵の散ずる事、是に於て半に過たりけり、張殷はこれを見るより、いよ〳〵以て戰ふに意なく、それより惣軍をまとうて、上軍山を望んで逃れける、行くこと未だ二十里もせざるに、砲聲震ひ响ぎ、兩隊の兵殺出で、高く叫び、張殷匹夫、好々馬より下りて降を致せ、殺戮をかうむるなと、既にこれを取圍む、張殷等命をすてゝ、陣を撞き破らんとするを、成軍の裨將羅承、張金苟の二人、死を捨て抵とどむ、又王角、李祺、合ひ至といへど、張殷等これを事ともせず、すでに路を奪つて逃るゝ處へ、忽然として、前面に擁き出る一將あり、手に太刀を持ち、馬を跑て直に張殷を目あてに取て、倏ち何と上官品將軍と云ぶもの有りと云ふ事を、知り得たるやと喚はる、張殷はこれを見るに、其の威の、別將よりは殊に勝れ、すさまじき漢なれば、是並々の者に非ずと畏れ思ひて、敢て其の陣を突事もかなはずして、途にまどひ、漢中に還らんとする事も、今は叶はず、落荒して逃げ去り、やう〳〵殘崩關を出で行き、長安を望んで馳たりけり、かくて李國等遂に勝に乘じ、攻て漢中の地を降すに、梓橦の太守張演も、此事を聞き、來り救ふと雖ども、時すでに及ばずして、兵を抽んで返らんとす、李國、早くこれを知り、上官品、羅承、張金苟等をして、追ひ伐たしむ、張演も一戰をはげむといへど、遂に戰ひ敗れたれば、梓橦の地を打棄て逃げ去りけり、是に因て、

李國はこゝに上官品等をとゞめ、毛植等を相添へて、漢中の地を守らしめ、李祺、裏珍をして、梓橦の地を守らせ、兵を收めて、成都にこそ回りける、李雄大に喜び、閻式に委ね命じ、此度び漢中梓橦の合戰に於て、其の功ある輩を撰み、勳功の賞を行はせける、閻式いかゞして遺失れけん、羅承に張金苟の二裨將に、其の賞を授けされば、二人自ら其有功を訟へ、賞なき事を嘆きけり、閻式が曰く、汝二人は、もとより名も無き下將の分として、其上させる功勳なし、しかるに今、何ぞみだりに大臣の前に於て、爭ひ訟ふることの無禮なる、必して希なる賞を得ん事を欲せば、重ねて力をつくし勵むべし、方に冊書に補し記して、其の後汝に賞を頒たんと、大にこれを叱り、まかり立とて退けゝる、二人は賞に預らざる而已ならず、滿面の羞慚をうけたれば、これより深く閻式を恨んで、如何せんと思ふ處に、羅承が妹の夫なる、文碩と云ふ者、今大將軍の任たれども、もとは川中の降れる將なり、これもまた閻式とは、日頃の心不和なりけるが、二人の者文碩が方に至りて、此の事如何に爲べきと計る、文碩聞いて、其の者を今までは、何とて死し去らざるぞ、二人答へて、かれは時の大臣なれば、安く殺す事、何として致さんや、文碩が曰く、この事もとより難からず、閻式が軍に臨んで、兵を出すの時を見て、便ち是を伺つて殺さん事、一力士の制するに任せんぞ、何の畏れかあらんと云ふ、二人は深く其言を信じ、偖つて歸りたり、且また羅尚は、夔州に在つて食に就きけるが、流兵が再び涪城を奪ひ復すと聞くより、正に兵を回して、爭ひ收らんと欲しける處へ、忽ち細作の者告けるやう、李雄この頃成都に據り、又襲つて漢中を取りたり、あまつさへ梓橦までも是を併せて、勢ひ甚だみだりに强し、中々卽時に勦るべからずと云ふ、羅尚はこゝに於て本書を備へ、使者を朝廷に奉り、其れ流民の大逆なる返狀を、奏聞に遂せしむ、朝廷の諸大臣、羅尚が奏狀を見て、數日の詮義に及べども、一人として其の議を決定する事あたはず、王戎時に進んで、胡漢中原を擾亂す、寔に是れ心腹の患なり、川蜀の李雄は、偏倚の地にかゝりて、かれより外を望の大志なし、たゞ川蜀にかぎれるの願なれば、兵を發して征伐に及ばずとも、さぜる禍をば爲すべからず、しかれば但勅を下し、羅尚等に令して、權に巴東夷陵等の兵を統させ、且つ涪關を緊しく守り、彼をして東の方、荊襄の地へ、敢て侵し寇する事の、叶はざるやうにし、山西の胡漢、淸寧をまつて、那時兵を發し、道を分つて進みなば、一皷してこれを收むべし、然れば今、討手を指遣はさずとも、猶いまだこれを晩しとせずと云ふ、此の時齊王冏、自ら權を專らにするが故を以て、

衆人の意に和せず、これを以て、成都王、東海王、河間王等の親王も、各人々に兵を聚めて、齊王のしかたを覗ひ疑ふと云ふ事を、齊王もまた相知る事なれば、惟今李雄追討の爲に、大兵を出したまへと觸遣したれども、親王の鎭國より懼れて妄りに、よもや兵粮をば動せじと察する故、幸に王戎が言をとり用て、乃ち詔を下し、襄州に至つて羅尙にゆるし、其の意のまゝに便宜にしたがつて、事を行ずべしと、宣べつかはさる、羅尙かねては救ひの兵も早速に、出なんかと察したるに、此の詔を得て、思の外の事なりしかば、大に心を惱して病をなす、されども一人の意にかなはざる事なりとて、こゝに書をしたゝめ、張興を使として、荊州の刺史劉弘が處に往かしめ、來り救ふべき旨を請ひたりける、劉弘、羅尙が書を得て、我が部下の僚屬どもを集會し、これを議して、今羅益州、人をして救を我に求めたり、我もしこれを救はずんば、羅尙必して敗れなん、彼敗るゝ時は、禍かならず荊、襄に及ぶべき所なり、この事如何と云ひたりける、衆皆口をそろへ、李雄志あらば、果して流に順うて東に下り、荊襄を侵さん事、總戎公の慮の如くならんかと云ふ、是に因て劉弘は、遂に大將向奮に、兵一萬を授けて、先行となさしめ、又張興をして、米五萬石を運ばせて、以て軍中の需に應じ、乃ち張興を召んで、帳中に至らしめて、付屬してこれを汝の主に拜上す、不日に我も又自ら大軍を率ゐて到り助け、共に流賊を勦るべしと云へば、張興は極て、羅尙が賞罰不明なる事をのべ、願はくは直に、荊州に留りなん事を願ひ、川蜀に返るに倦みたりと云ふ、劉弘が曰く、こゝに今、羅使君孤軍にして、人の力を戮る事もなからんに、乃は羅尙の、心腹の如き舊將なれば、一時一刻の間も相離るべからざるの人なり、しかるを卿もし此に留らば、汝の主又倚たのむ者なからん、豈にこれ始をなし、終りをなすの道ならんや、卿ち宜しく勉めて、吾が言に從へ、貧賤のとき羅公に過せられし、志を忘るゝ事無くんば可けんと云ふに、張興これを慚入りて、已む事なく、即ち憤を發して、向奮と與に兵を督し、粮を轉し、蜀川に入つて漬をなす、羅尙はすでに、荊州劉弘が兵を促して、相助くると聞き、相議つて復、成都を取らんとするの風說、はやく成都の李雄が方に聞えければ、衆將を聚め商議して曰く、適にきく羅尙荊州の兵を會合し來て、成都を爭はんとして、已に白帝城をば過ぎたりと、然らば此方も防備をなして、これを須つべし、徐轡、范長生が曰く、荊州の兵來りて、すでにこゝに近づかば、亟に精兵を發し、先涪城に往き、これを阻て住めん、境に入りたてゝ、百姓を驚かさしむべからずと云ふ、李雄が曰く、然らば誰をか前みさきんじて、阻て守らしむべき、衆將の曰ふ、此任至つて重し、閻司徒親ら往くに非ずんば、能く敵する事なけんと、李雄これを然りとし、即ち閻式に命じ、軍師と爲し、李離を以て帥となし、兵士三萬を統べ、漢中の將佐を殘らず督し收めしめ、先づ涪城へ往て、羅尙を、途中に於て迎へしむ、こゝに張金苟と、羅承と議して曰く、前に東川をとるに、我死力を出して、張演を拒ぎ阻んで、漢中に轉さゞるは、これ我々の大功をなす處なり、しかるを閻式賞を行はず、反つて我を叱り、衆人の面前に於て、許多の愧をかゝしめたるは、實に口惜しき事共なり、今幸によき時節なれば、文碩が言に依て、此奴を刺殺さん、然し李離が同じく、張中にあるを如何せん、狼りに以て手を下しがたからん、羅承が曰く、われと倆と各利刀を帶びて、潛に中軍に入り、各一人を刺すに、何の懼れかあらんや、張金苟これを然りとして、遂に夜半にまぎれて潛に帳内に入り、羅承は閻式を刺殺し、張金苟は李離を刺殺す、夜陰に忍びて事をなしたる故、軍中並びにこの事を一人も知覺するものなし、二人はそれより、竊に首をとりもち、路を偸て逃れ行き、羅尙が處に至りて、降參をこそ投しけれ、

文碩殺二李國一

羅承、張金苟の二人は、羅尙が軍中に至り、閻式、李離が首を獻じて、告ぐるに其仔細を以てしたりければ 羅尙これを聞いて大に喜び、彼等二人に約して、今度李雄と戰に勝ち得、再び成都を取るならば、羅承を以て漢中の太守になし、張金苟を以て、梓橦の太守になさんとこそ許しける、二人は喜悅少なからず、即ち鄕導の案內となつて、向奮が兵と一同に、宜陽の地を徇へしたがへ進みゆく、路に伏したる成都の斥候、急ぎ成都に立歸りて、羅尙が軍、宜陽を下して至ると報たりければ、李雄大に驚いて、軍師兵を今涪城に出す處に、彼又反つて宜陽に趨いて來るとや、亟に兵を發し、これを拒ぐべし、又李離が涪城の軍をも移して、前後よりこれを攻めば、羅尙は捲になしつべしとて、すでに大將を撰み、兵を發し、又閻式等が方へ、使を遣らんとするときに當り、返つて涪城の嚴楡等が、行文の飛馬來り報げて、羅承、張金苟の二人、軍師主帥の二將を刺殺して、羅尙が方へ走り、今鄕導となつて進み、已に宜陽に逼ると言ふ、李雄は嚴楡が方よりの文書を看、乃ち大に慟み嘆て曰く、閻公離弟は、國の柱石、今や賊奴のために、刺れたるこそ僉方なけれ、吾何ぞ暫くも彼を容すべきとて、即日に兵士すぐつて、三萬人、楊褒を留守とし、李雲をこれが輔となして、成都城を守護せしめ、張寶を以

て先鋒となし、親ら宜陽に向ひ、閻式、李離の二人が仇を、報いんとこそ憤りける、羅尚は李雄が、自ら至ると見るよりも、こゝに計をかまへて、李離、閻式を失ひたる事を笑ひ、さて又羅承、張金苟が、其の軍中の虚實を語る事を、とくと書のせて、其議を許し、笑ふべきの一書を作り、はやく流民昔にかへり、各其郷に逃れかへり、一族誅滅せられん事を、免れよと惡口の辭を盡し、李雄が方の陣中へ　矢書にこそ射入れける、李雄が方の前陣、これを拾ひて、本陣へ進めける、李雄見て大に怒つて曰く、羅尚を擒にし、羅承、張金苟の兩賊奴をとらへ、其心を剖ずんば、今度の軍をば天地に誓て功なうしては、遂に成都に回すべからずと大に罵り、即時に寨を出で、陣を佈て、戰をこそ求めける、羅尚はもとより、これを怒らせんための戰書なれば、すなはち向奮を兵に將とし對陣せしむ、こゝに李雄が方の戰將張寶は、刀を横へ馬をすゝめて、高く叫びけるやう、向奮小卒、速に出で命を乞ひて、死をすくへ、向奮聞いて、未だ答にも及ばざる内に、羅承は鎗を引き、搶出て戰ひけるが、未だ五合にも及ばざるに、張寶が一刀を受け損じ、馬下に砍て落され、すでに危かりけるとき、向奮は刀を揮て、二の身の刀を支へとゞめて、張寶と戰ふ間に、羅承は命を助かり、深痍を蒙りながら、羅尚が陣に逃げ入りけり、それより向奮と張寶と、惡く戰ふ事三十餘合すれども、未だ勝敗は定めがたかりける、かゝる處に張金苟は鎗を引さげ、向奮を助け戰ひたり、又李雄が軍より、嚴檢馬かけ出し、接しとゞめて、張金苟と戈をあはせ、戰ひをなす所に、忽然として狂風驟に起り、木を抜き沙を揚れば、面に對して相見る事あたはず、兩家の軍こゝに於て、各自ら兵を收めて寨に入る、其の後日を連ねて、戰ひ數度に及んで、互に勝負を相なせども、未だはかばかしき勝も見えざりしかば、李雄は人をつかはし、書を巴西に送り、李國をして兵を起し、宜陽の後に出で、向奮を夾み討ぜん事を言ひ差しける、此使者如何にしてあやまりけん、路にて張金苟が爲に獲へられて、李雄が書を搜り取らる、張金苟はこれをよろこび、即ち羅承に見せて曰く、李國若しこゝに來るならば、我が等も亦あやうし　今文碩は、李國が方の陣中に在り、幸に彼が方へ人を差し、密に往て約を通じ、計策を爲さしむべし、若し文碩が、李國を殺し得てだにあるならば、此の路の兵をば阻むべしとて、それより二人打つれ、向奮が所に行き、李雄が使の持來る書を見せ、金幣を以て、密に文碩が方に遣し、彼が心を買はんと云ふ、向奮喜びてこれに從ひたりければ、羅承は已れが腹心の者を差し、文碩に約せしむ、文碩此の由を聞いて、即ち其の意に同じ、計つて安く、李國を

ば刺死し、巴西の地を以て、羅尚が方に降り歸す、羅尚大に喜び、即ち文碩を署して、巴西の太守と爲し、即時に兵を領して、李雄が兵を、夾み討ずべきよしを令すれば、文碩、夜を日に繼で、李雄と向奮が合戰する陣の後に從つて、李雄が軍に攻入りけるに、李雄は思ひもよらぬ後より伐れて、大に敗れ、軍を退くる事三十里に及びけり、かくて李雄は、文碩が重て反して、李國を殺するを聞き、心中大に懼れたりけるに、王懷進んで曰く、我國の恃む處は、閻司徒一人にかゝれり、しかるに今、賊奴の爲めに刺れをはんぬ、剩へ李離、李國の二位將軍まで害せられ玉ふ、これに依て味方の兵威、頓に挫けり、しかれば且くまづ成都城に退き回りて、再び他の圖をなし玉はゞ、報はれらんものかと進む、李雄は是を聞いて、首を低れて、しばらく言をも出さゞりける、かゝる所へ、忽ち報げて、楊褒が粮草を送つて到ると云ふ、李雄大に喜び、頓てこれに對面して曰く、我今自らこゝに至り、閻公の仇を報いんとする所に、誰か知らん、文碩那賊、又李國を害せんとは、しかのみならず、吾陣後に出て、吾を夾み攻む、これに依つて、吾軍思ひの外に、一陣を殺り破られて爰に到る、今王懷、吾にすすめて、且らく成都に回り、重ねての謀計を爲せと云ふ、吾も亦この議に從はんと思へり、楊公の高見、何れに在るや、楊

褒、此言を聞いて、主公何事ぞ、先には强にして、後には弱なるの甚しきや、閻子規殺すと云へども、部下の將、智勇の士、甚だ多うして、昔日に減せず、若し計策を以てこれを逆へば、立ち處に羅尚をば破つべし、何の爲にか兵を退くる事をすべきや、李雄が曰く、しからば、計まさに何れにか出でんとする、楊褒が曰く、我が愚見によらば、即ちこの計の上に就て、計を中用ふべし、しからばこゝに軍士に令し、暗々として力なき體に見せ、假りに退兵の狀を作し、言を發して外に聞せ、二將軍、閻司徒を討られ、味方以ての外に弱みを受け、これに依つて、先づ成都に引退くと云はせば、羅尚はこれを實ぞと思つて、彼かならず、向奮を會合し、我軍を追ひ擊たんとせん、我軍かねて先立ち、騎馬を要路に伏せ、其來るを待つて、四面より殺出して伐つならば、縱ひ彼を擒にする事を得ずとも、兵馬は必ず、多く傷り損ずべし、しからば羅尚等が銳氣をば、挫くべしと談ず、李雄聞いて、掌を撫して大に笑ひ、吾司馬の到ると聞いて、定めて良謀あらんと思ひたりしが、案の如く良謀を得たりと、躍り踊つて勇をぞなしたりける、

通俗續三國志卷之二十九

李雄計大破羅尚

斯て李雄は、楊褒が良謀をなすによつて、轍の魚の江湖に浮ぶ思ひとなり、即ち諸將を召集め、かれ等を慰め勞し、又は激し勵し、令を申べ、楊褒に今度の勦軍の下知を司どらしめ、即ち印劍を與へけり、それより楊褒は、諸將を配り分ち付けて、先費陀、徐韙の二將をば、武都東山の南に伏せ、楊珪、麴詡を、武都東山の北に伏せ、王達、文斌の二將を、武都西山の南側に伏せ、王琦、嚴檢の二人を、武都西山の北側に伏せ、任回、趙誠を、隘口に入るの處に伏さしむ、一路ごとに各弓箭の手一千、馬軍一千づゝを相そふ、王弢、王懷は、兵馬一千を引いて、任回、趙誠、二將をかなへ助く、若し羅尚が兵の、谷口に追ひ進むを見ば、即ち軍士に令して、其後を斷つて、敵の回る路をとゞめよ、砲聲一たび起らば、即ち後面より殺すべし、李讓、李漪、張寶、三員の猛將は、晉軍の後を斷つて、さて李雄公は、我と親ら當先し玉へ、趙肅は步兵三百を帶びて、武都の高山に上つて、砲を放たせよと、各分撥既にをはれば、餱糧を裹んで、地形を擇み埋伏る、李雄は老弱の兵をして、拖包げたる荷を擔はせ先に立て、我身は自ら精兵を領して、後より發す、爰に羅尚は、李雄が日を連ねて戰ひをもなさず、寂にして音なければ、心甚だ疑惑をなし、細作をつかはし、日夜に李雄が軍の消息を探らする處に、細作ども連りに接いて報けるやう、李雄今日黃昏すぎて、寨營を拔き拂ひ、俱に武都山の大路より去り了る、羅尚是を聞いて、さては賊兵、數戰つて利を失ふ故に、今遁れ去るに至れり、是が無事にして成都に回る事を得るならば、返つて威を養ひ、銳氣を蓄へて、以て盡く勦つくし難からん、宜しく此の勢ひに乘じ、追てこれを擒にすべし、成都を復すべき事、此一擧にありとて、遂に文碩、羅承、張金苟、張興の四將を遣し、鐵騎一萬を帶ばしめて、是等を先登と定め、自らは向奮と共に、大兵を率ゐて繼いで進みしに、已に武都谷口に於ては、まさに追ひ及ばんとしたりける、爰に張寶思ふやう、察するに味方の前軍、いまだ隘口を出はらふまじ、暫く爰にて拒ぎ戰はんと云うて、馬の足を立て駐むれば、羅承は先を爭ひて、遥に張寶を衝て戰ひけるが、未だ戰ふ事五合ばかりもせずして、羅承はあへなく、張寶が爲に生擒れにけり、是によつて晉軍皆走り轉つて、此の由を張金苟に報たりける、張金苟は此の報を聞くよりも、疾進んで羅承を奪ひ取らんと、馬を馳せ兵

を進めて追赶ければ、武都東山の邊に於て、又張寶に追つきたり、張寶是を見、馬を駐めて防ぎ戰ふ事、いまだ十餘合ならざるに、張寶は張金苟が、小將なるを欺いて、是をも遁り近づいて、活ながら捉へんと思ひあなどりけるが、張寶如何したりけん、返つて張金苟がため、一刀に砍り死さる、これに依て張寶が兵共、すでに風を望んで走らんとするを、李攘は爰に衆兵の、散き散らん事を恐れ、乃ち親ら後を斷へて退きたり、向奮、羅尚は、已に張金苟が、張寶を斬りたりと聞くより、今は敵の氣づかひなしと思ひて、埋伏詭計のあらんとも思はず、心を放ち騏に進みけるが、武都西山にも、已に近づかんとしければ、人馬を暫く踐とゞめ、馬に息をくれ、兵を休めんとする處に、趙肅は高峯に打あがつて、四方を看まはし、敵味方の樣を窺ひ、時分は好とや思ひけん、一齊に炮を放ち起せば、李讓、李漪、馬曳等、引回し殺轉るに、王達、文斌、王琦、嚴檢の四將も、同じく殺出でける、此成兵集つて射る矢雨點の如くなれば、官兵ども是に射しらまされ、身をかくすに所なし、弓箭少らく住れば、馬騎また進んで殺り混だすに、官兵全く亂れ立つて、羅尚は急に叫んで、住つて敵對せよ、一步も退く事なかれと、東西に下知を加ふる處に、又後面より、費陀、徐韙、楊珪、麴詡の四將出來て、羅尚が後軍を射立てけり、官軍これに惶をなし、亂れ竦れて逃げ散ず、中にも張金苟は踐止め、力を奮ひ死を極めて戰ふ處へ、敵の中より射出す矢に、頸のくさりを射中てられ、重手なれば目眩めき、馬より眞さかさまに落ちたりけり、楊珪は是を看て、首を取らんと馳寄すれば、張金苟やう〳〵に起ちたりける、楊珪すかさず、引提へ、左右の兵士に下知して細けさせ、味方の陣へ引かへす、羅尚大に叫んで曰く、已に賊徒の詭計に中てられたるぞ、急ぎ面々殺出て、身を回せと下知をなし、いまだ軍を轉ずるに及ばざるに、文碩は王達が射矢を左の目に中てられ、馬上より撞とまつ倒まに落ちたるを、王達が兵すかさずかけより、文碩を起しも立てず生捕たるは、快よかりし事どもなり、今は官軍たまりもあへず、大に敗れ立ち、自ら相踐踏んで死する者、幾許多と云ふ數を算へず、死せる屍ね道路に壘で、堆くつもりける、哭聲は地を震はせ、鎗刀器械の棄たるに、馬蹄を入るべきやうもなし、羅尚は是を見、事已に極りたり、向奮將軍は、抵り住めて後軍を拒がれよ、張興、費深、賀仁は向前せよと分付すれば、張、費、賀の三將、まつさきに進んで斬り破り、一條の血路を啓いて走りける、常深、許汜の二將もまた、敵兵の追ひ求るを拒ぎ阻て、官兵の殿となつて、又を冒して突脫れんとして、未だ李軍を衝き出でざるに、任回、趙誠、王

聖、王懷の四將、谷口より殺入つて、官軍を衝きとむ、此の時官將李興と名乘て出で戰ひ、任回が爲に殺死さる、又向奮は、後軍をおさへて殿たるに、李讓、李雄は十餘將を率ゐて、緊しく羅尙が跟を追ひかけゝる、向奮が弟向奎は、此の由を見るより、馬を轉て戰ひけるが、李讓が一刀に、肯なく斬て落されたり、向奮は是を見、忽ち忿怒の念を發し、前んで仇を報いんとしたりけるが、惣じて身に中る處の鎖きず、二十餘箇處なれば、血流れて袍鎧を浸せるは、縮縮を以て染むるに似たり、其の身鐵丸にもあらざる故、爰にて終に死にたりける、爰に又許氾、常深は、雙々たる蝴蝶の如く、輕く旋つて其の技をつくして働きけれども、文斌、王琦が爲に是も圍と められ、許氾も常深も、ともに爰にて悉く戰死をしたりける、されども尙張興、費深、賀仁の黨あるが故、死をすてゝ殺りやぶり敵陣を衝出て羅尙を保護し、やうやくに脫るゝ事を得たりければ、早く谷中を出去らんと、谷口に至れば、先立つて楊褒が 計 を用ひて、路上に木を截り倒し、通路を止めて歸路を塞ぎける故、こゝに至つて行なやむを、張興等下知をなし、盡く取移し、平路となして通りける、かゝる處へ任回、趙誠追かけ至れば、各取て回し、暫く戰ひけるが、又引回し走りける、賀仁は羅尙を脫んため、踈止めて防ぎけるが、終に任回が

爲に斬られけり、是れに因つて羅尙は、漸く落延び、其の身を見れば、三の鎗傷、十三の箭を射立てられける故、恰も蓑毛の如くなり、其の弟羅寔は、傷重く乂馬をも射られて行進む事叶はされば、是までとや思ひけん、自ら刎ねて死にたりける、羅尙は漸く步都を離るゝ事を得、宜陽に歸らんとしたりしが、又李雄が兵の爲に追ひ至られけるゆゑ、夫より又、直に走りて巴東に行く、李雄は宜陽をも遂に猶ひて、太守譙登を執へて是を斬る、又巴西を攻めて、樅の守文珍、文顏を斬り、兵を移して巴東の地に出でんとす、晉軍の探子、この事を探り得て、羅尙に早く報たりけり、羅尙は此言を聞くよりも、大に叫ぶ事一聲して、其まゝ地上に倒れて、心昏み目を眩す、張興やう〳〵に救ひ起せば、羅尙嘆じて、蒼天すでに、晉の自ら殘ふに厭きたる故を以て、爰に邊防を油斷せしめ、流賊をして、肆に猖獗しむ、此の如くんば、つひに何をか能くすべき、吾事爰にそれ休んだりとて、手に鐵鎚を取り、首らの胸を惜しげもなく搥と打てば、血を噴事一斗餘に及べり、是によりて箭瘡も又發し、床に臥す事三日にして死にたりける、張興初め荊州に下りつるとき、劉弘に歸するの志ありければ、是に於て乃ち羅尙が喪を持し、費深と與に奔りて、荊州にぞ到りける、劉弘は、羅尙が柩の至るを見るより、祭を設けて是

を哭し、羅尙が妻子を賑し發ふため、高祿を與へけり、又蜀川中の百姓どもの、李雄に附く事を、願はざる者どもは、皆走りて爰に集りける、凡そ是を約するに、數萬戶口と聞えたり、荊州刺官の者ども、川蜀の流民が禍にこりければ、此の者どもをやり除つて、此の地に止むべからずと云ひけるを、劉弘は是を聞いて、僚屬の者共に謂けて曰ふ、古の能く國を守るの主は、盜を化して良民となせり、才能をとらへて盜となすの道なし、雖者は流民が蜀に入つて居をなすとき、羅公等是を撫で御むるに方を失ふ、是によつて遂に、大亂をば起せるなり、昔し梁の惠王の寡人が民多き事を加へずとて、孟子に是を問はれしとき、孟子の曰く、よく仁政を天下に行ふときは、四方の民、其の子を襁負して至ると答へられし、今川蜀の民ども爰に集る、何の逐ひ驅と云ふ事かあらん、彼に迫らば、却つて盜となりなん、たゞ是を撫で安んじ、此の處に居をなさしめ、牛馬、屋地、農具を與へて、貧乏を給すべし、此の如くんば、數年ならずして、皆な吾良民なるべしと、良司をつけて是を養育させたるに、民皆悅び感じて、其の德に懷きけるゆゑ、荊襄の地のみ、擾るゝ事無くをはりける、

李雄昇二諸將一

かくて李雄は、羅尙已に死したると聞きければ、乃ち四方に諸將を分つて、いまだ降らざる州郡を巡り討しむるに、處々の晉の守將等、朝廷すでに蜀の地を棄て、救の兵を出さゞる事を察し知れば、肯て力を盡し、地を守るの心なく、降らんと思ふものは、即ち李雄が麾下に屬し、又遁れんと思ふ者は、家の眷族をまとつて、こと〴〵く城を明のくにより、兩川の間、今は殘らず、李雄が爲に併せられたりける、爰に於て楊褒、徐轝は、衆の文武官を率ゐ、上書して李雄を尊び、王號を稱せしむ、日を擇び壇を築き、天に告げて祭をなし、即位を成都に定めたり、それより宮室を作り、官人の役所々々を建て、國を大成と唱へ、建興元年と稱したりける、於是に范長生を以て、軍師左相とし、惣じての國事を理さしめんとす、長生是を辭退して、臣、王上の顧盼を荷ひて、光武皇帝の、嚴子陵を大澤に訪はるゝ事の如く、强ひて召さるゝに應じたる處、幸にして昆陽の捷を奏したり、願はくは臣に今、骸骨を玉はつて、青城に歸り、子陵が如く、嚴灘に優にして遊ばんは、恩榮寵に是れにすぐるの幸なからん、又是より四十年の以往までは、蜀川の中未だ兵革を見るべからざる事、是れ臣が考ふる處なり、然れば臣朝廷にありとて、何の補ふ處なからんと云ふに、李雄あへて是を强ず、即ち段物千疋、金千兩を

賜ひて、涪城の令祿は是れが俸給に定め賜る、されども范長生、皆辭退して是を受けず、成丈乃ち千安車を以て范長生に賜ひ、夫より衆の文武官と同じく、親ら迎つて城を出て、十里ばかりに迎を住め、別れをなしけり、然して李譲を以て太尉の官とし、國政を總させたり、楊褒、李遠を、左右の丞相とし、李博を中尉とし、上官晶、費陀を左右侍中とし、徐轂を司徒とし、毛植、裏珍を、左右の司馬、楊珪、王達を御史大夫、文紹、劉歆を輔國將軍、殿楡、李濟を振武將軍、王博、上官琦を、振威將軍としたりける、又外郡の守宮、大將十人を定めたり、任道を車騎將軍、定西侯として、漢中を守らす、督せる兵一萬、任臧を驃騎將軍、寧西侯とし、梓橦の地を守らす、隸兵五千、任回を驍騎將軍、安西侯とし、綿竹を守らす、隸兵五千、趙肅を武騎將軍、平西侯とし、涪城を守らす、隸兵五千、趙越を都騎將軍、鎮西侯とし、小城を守らす、隸兵五千、王幸を開成將軍、靖西侯とし、葭萌を守らす、隸兵五千、王角を輔成將軍、巴西侯とし、巴西の地を守らしむ、隸兵五千、李祺を建成將軍、隴西侯とし、徳陽を守らしむ、隸兵五千、李恭を大司寇、兼西平侯とし、廣漢に鎮たり、護衛爰に一萬人、李奨を大司農にすゝめ、西寧侯とし、上邽の地に守護とし、其の兵士七千を率ゐたり、其の餘各州の郡、陰平、江油、文階、巴東、閬州、雒城、陽平、宜陽の地、みな官將を分りて、是を守治せしむ、兵士を配る事三千づゝに相定め、品祿を爰に賞し賜ふぞ目出度けれ、將に、文碩、羅承、張金苟が血を握てゝ、諸將の今度敵の爲に討死せる、李奨、李路、李漢、閻式、李堪、李離、李國、張寶を賞りて後、皆な追謚を賜り、土地を賜うて其の子孫を封ず、大に境内に赦を行ひ、條目を約にし、侵し掠める事を堅く禁じ、又廉潔なる臣をもとめて、察官吏をつけ、民の疾苦む處を問せ、農桑を勸め課せ、又關を設け津を定め、險隘の地には、人數を置て是を守らす、是より人民業を樂しみ、中國も中々、其の安には及ばざりけりと聞えけり。

齊王招二成都王一計二漢寇一

爰に荊州の太守劉弘は、李雄が已に王號を稱すると聞くより、恐くは李雄が、是より荊湘等の州へも、かさねて直に兵を加ふるの志あらんかと思へば、乃ち上表し、使者を以て入朝せしめて、爰に兵を請ひ、速かに征討せしめん、若し此等の者を誅せずして免し置かば、天下尤に習ふの類多からんかと云はしむ、書本已に奏に及び、是を百官に下して議せしむるに、朝廷の議一ならず、孫洵、時に齊王に謂けて曰く、李雄流

賊、今みだりに尊號を稱せり、理まさに是を討して、渠が罪を問ふべき處なり、但し其勢ひ、機已でになれり、根本已に立つて、其の要險の寨に據りすまへば、未だ易くは是れを殄つくし難し、それに付いては、今聞く成都王、大に兵馬を集めて、大王と隙を構へんとすと、爰に幸の事なれば、何ぞ早く奏して、惠帝に請ひ申し、成都王をして、征西の大元帥にすゝめ、令を下し、劉弘と共に、李雄を討伐せしめ、其の原鎭證の地を復し玉へと、下知し玉はざるや、若し成都王、蜀の戰に勝ち玉ひなば、蜀川にあつて、京都の地に歸らしめ玉ふべからず、もし又成都王の戰うて、李雄に負け玉ひなば、兵を折き勢ひ衰へて、大王と威を爭ひ玉ふ事あるべからずと說く、齊王其の言を信じて、乃ち諸王と文武の官人をあつめ、共に其の事を議し玉ふ、顧榮が曰く、今に及んで、蜀を討ずるの論に於ては、その說不可なり、たとへば是を病にたとふるに、胡漢は其の根深うして、癰疽に似たり、蜀は其の痛み輕うして疥癬なるか、然るに今胡漢を於いて、李雄を問ふは、其の癰疽を捨てゝ、疥癬を治するが如くなり、豈是を、命を知るの醫と云ふべき、前には漢羌胡を引いて、大に平陽太原を掠めとりたりと、急を告ぐるの文書、雪片の下るが如くして奏せり、しかるを趙王の、其の亂を倖して、暫く安きをもとめ、是が和睦をなして、つひに其の謀をやむ、是れ討僞を失する事を致すが故、今に於ては、大なる患を養成に至れり、近ごろ又、常山、鉅鹿、兗州、邯鄲の諸處を奪取れども、是を防ぐ事なく、瀛州救を求むれども、大王の事多きについて、一たび兵を發し玉はず、皆以て虜に陷れらるゝ事をなす、日ならずして河南の地にも、寇至らんか、此れ癰疽の大病にして、餘毒まさに心腹に及ばんとす、しかるを早く先づ是をば治せずして、反つて疥癬を以て、心を庸ふる事をせんや、夫れ李雄は、自ら守るの賊なり、今蜀を得るを以て、是を足れりとす、決して他の圖事なし、望むらくは大王、急に大兵を會して、先づ胡漢を除き、後に僞成を剪らんは、方に是れ誠を保つの計ならん、齊王の曰く、然らば、衆文武の官人、各以て、如何と思へるや、衆臣皆一齊に上言して曰ふ、李雄縱んで漢川の地により、僭號して覇稱すと云へども、其の人衆數萬に過ぎず、將また數人に過ぎず、是れ味方の諸將、是を禦ぎ守るに、其の方を失ふが故、彼をして偶僥倖を得せしめ、其の志を肆にせしむるなり、聞知ぬ、漢兵十分の利害にあつて、戰へば勝たずと云ふ事なく、攻むれば取らずと云ふ事なしと、若し大に諸王を會し、早く定養の所をなさずんば、許洛の地と云へども、亦保ち難からん、江統、劉殷が曰く、今天下三尺の童も皆言ふ、晉

國不幸にして、骨肉相殘ふ、外の亂これに乘じて發す、江山恐くは固事あたはさらんか、然るを諸王、妄に自ら相妬み玉ふは、禍のまさに、身に及ばんとする事を知らさるものなりと、今臣等が愚なる意より是を思ふに、大王さまに、汝南、楚、趙の諸王の、害に遭ひたまふを以て、後車の戒となし玉はん事を、齊王曰く、然らばまさに、何を以てか是に處せん、兵を發して蜀を平らげんとすれば、胡漢の勢またさかんにして、中國に迫近きたり、又胡漢を平らげんとすれば、彼れ人強く馬壯んにして、未だ勝を取やすからず、其實に兩ながら難き處なり、是を如何がはからるべき、汝等定つたる見式あらば、申すべし、劉殷が曰く、まことに此の事小事に非ず、未だ安く議を定めがたし、大王爰に奏問あつて、詔を發し玉ひ、先づ成都王を迎へて入朝なさしめ、共に其の事を議し玉へ、しからさるときは、是れ我等の朝廷にあるものども、主を專らにするの疑ひあつて、成都王の意に悖りたがひ、若しくは大事の成さる事あらば、事の破れに至らんとすゝむ、齊王は、衆臣の言に依つて、即ち惠帝に奏請し、詔書を孫洵に持せ、鄴城に行かしめ、宣旨を以て成都王につたへ入朝せしめ、國事を議るべきの趣きを宣べしむ、孫洵、宣を領じ、逕に鄴城に到る、成都王は、詔旨を受け、是を讀み訖り、乃ち孫洵に問ひて曰く、朝中齊王の政を攝つかさどり玉ふに、聖上何事によつて、孤を今召し入れて、議せしめんとはし玉ふらん、孫洵、すなはち齊王の書を以て呈上し、對へて曰く、齊王爺、書あつて拜上す、胡漢賊、既に趙燕の地を奪取り、機で魏郡を侵せり、しかのみならず、川蜀、流民の頭取李雄、又成都を竊み據りて、王號を僭せり、是によつて、小臣某に命あつて、詔を奉じ來つて、大王の入朝を請ひまゐらせて、同じく天下の大事を、議せんとの御事なり、望むらくは大王、晉國の宗廟社稷の事を憂ひ思召さば、早く入朝あつて、大謀を定め、賊徒を剪り平げ玉はん事を、徼を移す事を吝事なうして、早く發し玉へと請ふ、成都王事を聞きをはり、孫洵に向ひ、しばらく休息し、旅懷を散じらるべしとて、孫洵をば、賓客をとゝむる旅館に出し、酒肴を贈て宴を賜ひ、さて成都王は慮志を召され、是を議して、今度齊王の方より書をそへ、詔とてねんごろに、召し上せらるゝの事心得がたし、是れ如何なる理ぞ、慮志が曰く、吾前に大王に勸め、小怨を釋て、高き志を行ひ玉へと云ひし者は、正に謂へり、此の後齊王と大王、好會の睦き對面あるべき事を、兼てはかるが故なりし、宜しく急ぎ朝に回つて、共に議して兵を起し、以て胡寇を拂ひ玉ふときは、大王の芳名萬代につたはり、永く不朽に亞るゝ所以なりとすゝむれば、成都

王もこれに從ひ、卽ち慮志、孫洵、石超、牽秀等と潤を趣し、已に洛に入たまふ、それより惠帝に朝見の禮畢り、機で齊王の府中に往て謁見し玉ふ、齊王問の曰く、今川蜀の地、流賊の手に陷れられ、漢虜又大に燕趙の州を擾りたり、是に依て、處々の郡縣より、しき波の如く入朝して奏をなす、劉聰小賊、其の兵の勢ひ甚だ盛にして、日ならずして、まさに河南の地までも、はや近かんとす、州郡の守將守臣も、多く是に敵する事かなはず、各々恐懼をなすのみなり、是れに依て特に王弟を請うて此に來らしめ、同じく其の事を議せんとす、聞說王弟の素より、其の智識ありと云事を、請らくは是を宜しく裁許決斷なしたまへ、成都王聞玉ひ、それ漢の寇賊、尊號を僭める事已に久し、殊に雄兵、四十餘萬あり、其の下にある處の者は、皆亡漢の遺臣にて、盡く將家の舊き子孫どもなれば、すべて武事に煅煉あるのみならず、近年其の身まのあたり百戰を經つれば、等閑に敵すべき事に非ず、必ず大に天下の兵を起して後、方に是を勦征すべきなり、先づ明日、諸の親王、八座以上の公卿大臣をあつめ、朝廷に於て、其の可否を評論し、衆臣の謀議を採りえらばん、齊王此の言に依て、次の日、齊國、成都の二王は、うちつれ入朝あり、宣旨を請うて、滿朝の大臣を召あつめ、共に齊王の帥府に至らしめ、胡漢の寇を平げらるべき、大事を計議し玉ひける、其の時二王言あつて曰く、宜しく諸侯の兵、各々四方の、鎭護の國は云ふに及ばず、並に代、遼、氐、羯の夷服、中國に今附屬する者共の兵までも、是を取り集めて、是を征討せしむべき、其について諸卿の異言、何にありやと問はる、其とき衆議區々にして、いまだ一決しがたき時に、江統はすゝみ出て、外州守護の諸侯、各々自ら心をなして、豈よく一同に志を合すべきや、昔袁紹、十八路の諸侯の兵を合せ、一人の董卓を降す事あたはさりき、誰か諸侯の內に於て、獨この大任に當る者あらんや、殊に又附屬夷服の諸侯は、皆これ羌胡の異族なれば、彼等が心測るべからず、恐らくは不意の反逆あらんか、しからば是れ又賴むにたらず、臣今愚見を以てはかるに、必らず衆の親王たち、各自ら兵馬を帥ゐて、亂を討ずるの首を倡ひ玉ひ、再び諸侯の兵を合せば、亦四五十萬の人數を得ん、爰に心を齊しうして、共に進み、其の次第を分つて、相和睦せしめ、共に救援くる事をせば、方に失なきを保たんと上言すれども、衆論なほ雜はつて紛はしく、每日の評定なれども、日を累ねても是を決する事なき處に、忽ち列坐の中より、閃き出でたる一人、高聲に道て曰く、劉淵左國より起り、平陽を竊んで爰により住居、鉅鹿を破り、常山を襲つて、邯鄲を侵

し、涼州まで寇し、兗汲の地を奪ひ、猶庶の如く郡縣を捲て、かたはしより羅の桑を喰ふが如く、中國を取らんとするに、官兵能く其の鋒に攖るものなくして、事の勢ひ已に盛になれり、此の時に當つて、是を全く制せんと欲せば、智謀をつくせるの士、勇略堪能の將にあらずんば、是が附翼ことをなして、何の能く此大事をなさん、且へ我國の諸守將、皆命世の英雄どもなり、然れども曾て今まで、胡漢に敵對するの者に於て、一人も渠が手を脫れたる者なく、皆討たれたり、是等を熟考ふるに、皆孤軍にして、彼を角とり跨とる、諸侯の援けの其の心を合せて、討ずるなきを以ての故なり、豈惟り漢の將、强なる計りにあらん、且又晉軍の、不足なる所あるを以ての故か、爰を以て知る時は、江中郎の進むる處の說に於て、諸王達の、自ら大軍を率ゐて、中に元帥を建て亂を討伐し、賊を誅するの先を倡ひ、つひに諸侯の兵を相和同せん事、最も此の議、是に似し、但いたづらに日を費せる長詮議、謀のならざるのみなら孑、反つて大國の大事を慢あらん、江統の善論に一決し玉へ、何ぞ外の議を採らん、衆臣みな賤いて、此の者を見れば、乃ち經筵諫議官陸機なり、成都王は、陸機が言詞のあきらかに、其の理の利を聞いて、彼が心中定めて見詆の、備はり極る處あらんと思へば、卽ち陸機を堂上に召あげて、坐を賜うて然して是に問うて曰く、陸士衡は元より、江東の英俊にして、其の名世上にふりたり、必ず高き見識のあるべし、たま〳〵漢の兇賊を殄滅すべき、まさに良謀あつて、是を滅すに於ては、其の功を樹つること第一に有るべしとあれば、陸機が曰く、臣愚、固に敢て、妄りに國議を參らず、併ら其の御訪によつて、答を發せば、只今劉淵が兵三十餘萬、詐りて六十萬と稱せり、若し只吾が七路の諸侯、其の兵二十萬なるべし、是れを以て敵兵にたくらぶれば、其の三が一にだも當らず、此の兵ばかりにして、漢兵を拒がんとせば、各々寒心して、賊の勢を恐れ、はか〳〵しき勝を得さるのみならず、少しく鋒さきを挫く事あらば、卽ち膽を落して、返て破の本たるべし、今江中郎の言處に依つて、詔を下し、各處の親王たちを招き召されて、是が棟梁となし、各鎭の諸侯の輔翼たらしめ、又親しき諸侯の中に於て、一人の盟主を立て、諸軍の印を掌どりて、惣兵を都督とし、各軍の兵馬みな、其の支配たらしめて、是を中軍にすゑ置き、また上將の武功ある者を選んで、是が左右の先鋒となし、二人俱に、印と劒とのしるしを賜はり、若し惣軍の內に於て、命を用ひず、軍法に違ふ者あらば、卽ち是を斬て捨て、制法を嚴密になさしむべし、此の如くするときは、行軍法あり、戰つてかたずと云ふ事なけん、さて又遊代雲

燕の兵を以て、漢賊の後を斷しめ、山東山南の兵を以て、其の粮道を截とゞめ、關中、河右、淮南、江、楊、荊、楚、靑、幷の兵を以て、皆中軍に集つて、其の下知に從らて働らかば、彼たとひ彼の張良が智、項羽が勇ありとも、此の賊何のなす事あらんやと說く、齊王、成都王、其の言の理あるを以て、卽ち一の盟主を卜ひ定めて、好事を司らしむべしとあるに、成都王の曰く、しかしながら、此の事易きにあらず、必ず威德ならび著れ、名譽衆の重んずる者にあらずんば不可なり、諸鎭外姓の諸侯は、決して此の任には當るべからず、必然として我司馬氏の內に於て、是を爲さしめばよからん、然らば諸親王の、皆至るを待つて、再び議をなして、一人を撰び、元帥たらしめん、誰か是に充つべき、齊王聞いて、是又小しく可なるを用ふべき任にあらず、文武の全才を得て、其の謀猷衆を伏し從ふる者にあらずんば、叶ふべからず、しかれば司馬氏にかぎらず、異姓の諸侯たりと云ふとも、世に名實のあらはれたる者、よからんと云ふ、爰に一列の諸侯大臣を始め、齊王、成都王の府中にある、孫洵、盧志の二人を、若しも進上られては、宜しかるべから孑と思ふが故、皆々一同に聲をそろへ、上言して曰く、元帥の任たるは、熟兵術陣法を諳し、機にのぞみ變に應じ、文武足備り、智能敵を料る量あつて、慮り遠くして、衆をさしつかふ者にあらずんば、叶ふべからず、臣等が心を以て是を度るに、爰に陸士衡にまします人あらじ、是をあげなば、其の能當に其職に叶ふべし、其の上陸士衡は、三代の將の家、深く兵術を得心したる人なり、此たびの元帥、外にはあぐべき人なしと云ふ、齊、成の二王、すでに陸機が、衆人の爲に心服せらるゝを見るより、乃ち奏聞を經て、陸機を拜し、天下の摠兵、征西大元帥となし、印劒令牌を玉ひ、鄴臺に於て、元帥の府を立て、諸の親王、外姓の諸侯、一月を限りて、俱に鄴臺に赴いて、漢寇を討伐すべき計策を定めらる、さて又荊州の刺史劉弘に命を下し、襄樊等の處々の鎭守と示合せ、謀を叶へて、李雄が時に乘じて、東に兵を出さん事もはかるべからずとて、是が備へを設けたり、夫より成都王は、先つて鄴城にかへり、元帥の府を修葺ひ、又武事の敎場を治め整へて、每日に漢兵を、討伐すべき支度の外、他の儀はさらになかりける、此の後の勝負、晉、漢、いづれか成しえんぞと、兩姓の運の程、知れぬは天の命なりけり、

漢奪二魏郡一渡二漳河一

爰に劉淵は平陽に在りて、僭漢軍の向ふ處敵なく、擊つところ捷を報ず、是によつて又詔を下し、其の勝に乘ずるの威に

よつて、漳河を渡り、魏、鄴を攻取りなば、好し中原を、復かへすの便ならんとある、劉聰詔を得て、卽ち張賓等の諸將を集め點して、新に收め降したる處の兵を運ね、吟味して惣計をはかるに、共に二十餘萬を撰み得たり、爰に元熙三年、丙寅二月辛卯、吉日甲戌に定めて濵州を發し、魏郡を望んで兵を進む、魏郡太守耿髣、素性き憶病なる者なりける故、智識ありと云へども、鋒敵に畏れ、既に漢將の境を侵すと聞くより、心中驚き怛れ、其の計出づる所なし、聞けば成都王、鄴城に在りて喜を聘理め、元帥の府を建て、諸國の兵士を會して、漢を討るの由なれば、よき事ありと思ひつき、手の者どもに僞り云ふ、かゝる大軍を味方の少兵にては、兎ても拒ぎ難ければ、親ら鄴城に詣り、成都王に見え、請はくは兵馬をまし加へて、黃河等の處々を鎭らせ、以て賊兵を防ぎ、河を過る事を免れしめんと云ふを以て言とし、身を脫けて逃げたりける、漢兵共はやく魏郡の界上に至り、戰書を認め人をして、城中に其の事を言入れしむ、斯くて城中には、主たる者なければ、衆士皆驚き惶れ、一語を答ふる者もなし、使者回りて、城中の樣をかたるを聞き、張賓大に喜びて、我兵初めて、黃河を過ぎたるに、はや魏郡守なし、是等天意にて善事を得んや、我漢朝の昌ゆべき、奇瑞を示すに非ずんば、何とてかゝる事に會ふべきとて、卽ち輕兵を四方に分ち、直に城下に至る、郡の丞王衡、正に衆を聚めて守り禦がんとするに、已に王彌が攻めて、北門を打開きて、內に込み入りければ、王衡、遂に防ぐべきやうなく、是も又官屬と共に、南門を開いて走りける、かゝりければ、劉聰又に血塗らずして、安と魏郡を得、それより兵を進め、漳河を過ぎ、銅雀臺の下に至つて寨を下しける、かゝる處に漢の探子回りて曰く、晉我兵を拒がん爲に、鄴臺を修め、兵を聚むるの由聞ゆると告ければ、劉聰は張賓を召んで、共に其の事を議す、張賓が曰く、しばらく四方の民を招きさとすの爲なれば、榜書をかけて、百姓にさとし告げ、以て晉兵の强弱、如何んと云ふ事を探り見ん、若し其の晉兵來つて對敵するときは、我まさに平陽に上つて、兵を請うて軍の勢を增し助けん、其れ未だ晉兵來り拒がずんば、是の兵力の內に齊しからずして、猶其の意に怯き處あり、且又惧るゝに足らず、此の處に靜に寨を下し住めて、敵來らば戰を合せて、時勢を看んと云ふ、劉聰是に從へば、遂に榜文を寫しかけ、各處に往て張かけしむ、

漢大元帥劉聰、曉諭遠近人等、今我大漢、重興開復、故業、雄兵六十餘萬、戰將三百餘員、磨刀則大行山缺、飮水則盟津河乾、戰則必勝、攻則必取、破常鉅

邯鄲勢如破竹、取濵州汲竟、功猶蓆捲、凡昔舊民、皆當念漢大德、毋得執迷抗拒、自取殺傷、其有晉宮僚、如肯去逆向順、復佐炎劉、同立功名者、定然列土封職、並無貳、榜行到日、仰衆知之、

榜書はやく已に、鄴地にも至りければ、土人共是を揭けとり、獻じて鄴の府にあげける、成都王は是を見るより大に怒り、卽ち衆將を取つて評議をなす、成都王言を發して曰ふ、主に背ける賊奴ども、かくの如くの無狀なるや、諸侯の兵いまだ至らずとも、孤先首に進んで、此の猾賊を擒にして、以て妄言の罪を正すべしとて、兵士を點じ、已に其の兵を進めんとする折から、爰に齊王は、董艾を將とし、京より兵五萬を引いて、陸元帥を送り來ると聞ゆるに依て、さらば一同にこそ進まめとて、先出陣をば止めにける、次の日程なく、陸機が兵いたる、成都王は早く人をして迎へ入れ、禮やんで陸機に告ぐるに、濵賊の掛たる榜文の事、ならびに兵を進めんとせし事を談ずれば、陸機聞いて、いまだ造次に事をなすべからず、臣日比承はる、劉聰部下には、王彌、劉靈、皆萬人の敵と稱すべし、關防、張賓、關謹、張敬は、祖父の勇にまされり、張賓深く陣法を明し、諸葛よく成敗を決斷し、其の餘の將士、智謀勇略の者共甚だ廣し、然るを今、若し諸王侯の同じく到るを俟たずして、輕しく先去つて出戰せば、恐らくは味方の兵、勝たざる事を得んか、我が銳氣少しく挫く程ならば、反つて三軍の膽怯く事をなしをはりなんは、未だ是善きことあらじと說く、成都王は、陸機が說を最に思ひ玉ひて、卽ち其の意に從へり、又各處に令を下し、石超、牽秀等を使とし、往て守備を助けしめ、險隘を守り住めて、濵兵を防がしめ、以て大兵の至るを待ち、一同にすゝんで、賊を討ぜんとこそ擬したりける、濵の細作は、此の消息を、こと〴〵く探得つれば、急ぎ濵の中軍に至りて言ふ、晉兵は未だ來つて、拒ぎ戰ふべからず、是れ畏怯くにはあらず、今や大に十八路の兵を會し、陸機を拜して元帥となし、一月をかぎりて惣軍の約を定めたり、此の故に未だ輕々しく兵を出さずと、張賓が曰く、晉兵屢我ために敗られたり、是に依て此の謀議を立て、必して今度は我等を敗らんと思ふなるべし、我等も亦、意を立て謀をなすべし、是れ往日の戰には似べからず、衆將の曰く、今此の地、前に敵兵あり、後に河あり、相持て戰を攜ふるの所にあらず、若かし、かへりて魏郡を守り、惣兵を一半づゝ分つて、營を城外に二箇所建て、內城の兵と共に相助けて、以て晉兵を敵し拒ぐべし、張賓が曰く、我今此に到り、戰はずして退かんは、是れ敵を懼怕るゝなれ、かくて焉ぞ其の大事を成就するに至らん、但

飛馬を以て平陽に至らしめ、皇上に此の事を奏して、急に大兵を發し、粮草を招きよせて、一面に兵馬を分ち、五處に寨を建て、中に於て、一の大營を建立て、以て晋兵を攻撃たば、又相救應するにようけんと云ふ、各此の議に同じてければ、劉聰卽ち令を下し、各營を建て定め、妄に動く事を免さず、凡ての事必ず謀議を須ひて行き、力を協へて、助守り、其の助の兵の、平陽より來るを待て、晋兵と一戰を合せ、その強弱を知らんとす、張賓は二道を分つて兵を發し、急文を以て、夜を日についで平陽に告げ去らしむ、いまだ數日ならざるに、飛馬既に平陽に著きしかば、卽ち表文をすゝめて、朝廷に是をたてまつる、張賓が兩道より發したる使者なる故、文書つゐて兵曹に至りつきしかば、漢主劉淵は、此の書を陳長宏、徐晋明等と計議るに、徐光が曰く、易からざるの事を爲さんと欲するときは、當に先づ莫大の志を立つべし、此の事心を動ずるにたらずと云ふ、陳元達も又曰く、臣既に久しく此の事を料る、晋朝中原を承け統べながら、屢吾爲に窘め辱しめらる、必定して大に士馬を集め、我軍と一場の大戰をなすべき事は、是れ前後免れざるの事なり、但し此の一陣こそ、敵味方成敗のかゝり關る所なれ、威を取て覇を定め 海内を靜め平げんこと、皆この回にあり、併しながら、司馬諸王の兵、

みな意とするに足らざる處なり、但し數處の救兵の、晋軍に力を協へ來らんとそ、覺束なけれ、先づ右相 諸葛修之を請うて、一良策を議すべし、其の救の兵をだに退け得るときは、外には聊かの憂なかるべし、劉淵聞いて、卽ち人を使して宣于を召さる、修之來て殿に上れば、漢主其ときに、宣于に向つて曰ふやう、昨の日、張軍師使者あつて告げ來る、晋朝天下の鎭兵を會し來り、我が軍を敗らんとすと、丞相の高謀、何を以てか敵を退くるの策をなすべき、諸葛宣于が曰く、晋國大兵を會して戰はんと欲すとも、必ず衆心一なるべからざれば、將士すべて心を協へ合せたる吾軍には及ぶべからず、しかしながら、臣が懼るゝ處の者は、遼東慕容廆と、平城の拓跋猗盧、秦州の蒲洪と、姚弋仲等、此の四路の兵共、若し晋に從ひ、彼等が兵を以て、我が後を斷ちなば、是れ四面に敵を受くるに依て、其の戰はかるべからず、爰に二人の辯舌の士を以て、幣を奉じ、前で四處に往かしめ、利害を以て是れ等に說きなば、定めて其の兵を止めて、動かすべからず、去に於ては、皆吾方の理連となり、晋兵何ぞ我に勝つ事をなすべき、遼西の段氏忠は、晋の爲心を盡し、今王浚が婚たれば、これは說とも味方すべからず、されば爰には、往て說くにも及ぶべからず、漢主の曰く、此の行の進退、國勢にかゝりたる事

にして、其の職尤も輕きにあらず、必ず古への蘇秦、張儀、隨生、陸賈が辯舌なくんば、方に能く諸の英雄どもを、動し得る事叶ふべきや、今我が國内を見るに、文武の官人多しと雖ども、其の他國に出で四方に使し、君命を辱しめざらん者は、恐くは其の撰ぶに於て難からん、陳元達が曰く、衆臣の中、英才まことに多しと雖ども、四處の主帥、皆是雄傑の人々なれば、必ず見識群を超えん、然れば大凡の事にては、よも其の心を伏するに難からん、然れば僻に華をあらせ、類を出でたる辯舌を以て、聞く内より其の耳目を動ずる者に非ずは、叶ふべからず、臣是れ等の人を度るに、誰彼れと稱すとも、諸葛公、親ら行にあらずんば、此の大事をば、成し得がたからん、漢主時に宣于が方を顧みて曰ふ、陳長宏が卿を進む、まことに大臣しばらくも、廟堂を離るべからず、但し事已む事無に出たり、只卿此の行を勉むべしとある、宣于が曰く、臣本不才たりと云へども、主上の榮寵を荷つて、每に報ぜん事を思へども、恨らくは其の門なき事を、今君命を承て、敢て其の勞をかへりみんやと、卽ち請うて行裝をとゝのへける、漢主より乃ち、金珠幣帛を備へ、車一輛、侍從十人を相添へしめ、親ら宣于を送りて、餞をなしたまひける、

通俗續三國志　卷之三十

諸葛宣于說四雄兵

晋惠帝、改元して永嘉と號する初め、丁卯の年にあたつて、齊王司馬冏は、成都王司馬穎と、漢を討伐すべきが爲め、天下の兵を糾し合せ、二十四路の鎭守、親王刺史等、道を分つて進み往く、又漢兵の歸路を扼ばり、粮道を阻て、其の巢穴を侵すべきため、各夷部の魁酋まで語ひ招かんとするに、漢主も又、兼て陳元達が謀によつて、此の議を敗るべき爲に、諸葛宣于を各處へ遣さる、宣于は平陽を去つて、先づ遼東の慕容廆が處に行く、此の慕容氏が元祖を問へば、有熊氏の子孫に、慕容屬と云ふ者あり、此の慕容屬、甚だ智略ある者也けるが、遼東に事へ、公孫度が右部長となりし後、次第に威勢盛にして、遂に遼衆の英雄を招きあつめ、莫兵十萬の多きに至る、これに依て、晋又其の制しがたきを知り、是をなだめて、遼東の刺史となしたりける、其の子、慕容廆、又兵勢日々に盛んなり、或日晋帝の詔り至つて、諸方の兵を會し、劉漢を破るべき由をのぶるを聞き、乃ち衆臣を聚めて、其の事を計りける、諸臣の内、或は晋を此の度助けず、漢を其の

儘立置きて、晉の外の懼となし置き、彼の威をおさへば、いつまでも我遼東に於て安からんと云ふ輩もあれば、又宜しく兵を動し、詔を奉じなば、功あるの後、公侯の封賞を願ふに、便ならんと云ふ、其の議紛々として、いまだ一決せざる處に、忽ち報じて、漢主の使者、諸葛宣子爰に來り、鄰國交のため、聘問すと云ふ、慕容廆乃ち衆に令し、家臣の謀士を選み出し、諸葛を迎へて互に禮を叙べ訖る、慕容廆ときに問ふ、相國をして遠くはるゝく、敝れたる我この州に至らしむるは、漢また我を、利するの道ありての事か、宣子答へて、否、さにあらず、但非常の益ありて、是れを君に報ぜんためたり、廆が曰く、其れ何の爲に然るや、宣子曰く、昨に司馬冏が檄を以て、公の幕下にくだし、兵を起して鄰に赴かしむと聞く、此の事ありや又否や、廆が曰く、其の事まことに是有り、その時宣子言を靜めて、夫れ晉國不道なる事、卒土皆知る、骨肉相殘ひ、母を弑し子を殺し、后を酖し弟を戮す、忠臣は爰に擯付られ、酒徒朝廷に滿つ、まことに智愚を問はずして、其の亡びん事、立處にして待つべき事を知れり、故に我が主、人心の動く處に依て起り、寸土を復し、以て先廟を祀りなんとす、正に英雄互に是れ志を助くべきの時なるに、足下反つて傑を助けて虐をなし、同類を凌がんとするや、慕容廆が曰く、然ばあらず、吾父子晉に事へて封を受く、今詔を奉じて往かずんば、是れ夙德に背いて、大國に信あらざるなり、正に叛臣と同じからん、宣子が曰く、今中原すでに亂れ、英雄角力ふ、惟遼の境のみ獨寧し、兵法に曰く、國を立るを上とす、國を保つ是に次ぐ、今足下兵粮、中國のため畏れらるゝ處に有りながら、遠き國を思はず、時に乘じて尺寸の業を立て、祖宗を後世に顯さんことを欲せず、區々として人の鷹犬とならん事、ひそかに君のために是を取らず、矧や足下必ず遠く行きなば、恐くは段氏が其の後を議せん、王俊また其の前を攻めん、劉琨、拓跋、勢に乘じて來らん、此れ古の趙魏謀を協へ、智伯を謀るの時に似るべし、甚だ足下の爲に最も憂ふる處なり、兵法に曰く、勇を好んで遠きに鬪ふ、明者は是を病むと、慕容廆は、諸葛宣子が言を聞くに、一々其の理ある事を察するゆゑ、宣子をば先づ賓客をやとせる旅館にとゞめ、さまざま宴飲を進め、慇懃にもてなし置き、衆臣を召集めて、適に諸葛が言を聞くに、其の理に近き所多しと思へり、汝等が高見如何ぞや、裴嶷曰く、諸葛が論ずる處、甚だ時の理に叶へり、此の際已に中國の大亂に及べる時なれば、當に境を保ち民を安んじ、威を養ひ銳氣を蓄へて、以て後の謀を思ふべきときなり、何の暇あつて遠く其の徼倖を求めんや、游邃が曰く、兵法に攻むる事あれば、又守るべきときあり、務むる事々に隨ひ、變に應ずるを上とす、今若し彼が爲に兵を出すとも、いまだ極めて勝をとる事定めがたし、若し奸雄の其の隙をうかゞつて、我が境を侵さば、反つて我が安息ずる事を得べからず、禍これより起らん、然らば晉には虛言を以て答へ、卽日兵を起すと云つて、但これを延べ慢べば、自然と兩ながら、背戻することなけんと云ふに、其の外の謀士、封抽、皇甫が輩まで、此の議よろしとすゝめ、遙く虛しき忠をつくし、近き大義を失して、鄰國劉淵に負き、後の患を殘さんやと云ふ、慕容廆も此の議に決して、宣子を請うて内に入れ、相對して曰く、謹んで敎命をうく、僕あへて兵を動して、以て虐晉を益さじと返答し、卽ち土儀を備へて餞し送りぬれば、宣子又禮謝して出で、夫より轉つて代郡に至り、拓跋猗盧が方に往きける、此の拓跋氏は、其の先き黃帝より出で、先祖を昌意と云へり、昌意の少子、封を拓跋川に受け、代々相續し來るを以て、氏とはなせり、かくて宣子は、猗盧が方に至りても、又渠が利となり、害となる、理非分明に說きたれば、是も其の意に從つて、兵を出して晉を救ふべき事を止め、自己の封境をぞ守りける、それより蒲洪が方に至つてとくに、蒲洪も全く其の說に從ひ、姚弋仲も同じければ、四鎭の兵を說し得て、諸葛はそれより平陽に回り來り、この旨を報じける、劉主を始め陳元達、此の由を聞くよりも、修之今日辭を以て、四雄の聞を動し、かれ等が意を驚す事、まことに昔年の臥龍公の舌を以て、群儒と戰しめたるに、能くも肯たる者かなと稱美し、各々宴を設けて、他日の勞を慰めける。

成都王大會軍兵

晉朝の成都王は、此の度の主盟となり、漢を伐つべき爲の謀をまうけ、鄴臺の帥府を整へ理めてより、已に今日まで二十餘日の間なり、かゝる處へ河澗王司馬顒は、詔に遵て、其の身は鎭を守りながら、大將張方を以て一軍の帥となして、勁人衆を領べさせ、其の外郅輔、席薆、刁默、呂朗、林成、馬瞻、六員の副將を指添へ、兵士八萬を滯びて、先一番に馳來る、成都王は報を聞き大に喜び、命じて帥府を開かしめ、砲を放ち威を振ひ、卽ち人をして張方を迎へ、轅門に入つて相見の禮畢る、成都王は、張方が英雄の威あつて、其の狀貌剛猛なるを見玉ふに、まことに堂々として、大將の位そなはり、畏るべきの人體なり、其の外諸の副將も、又皆英姿雄豪なるに、成都王は私に念ひたまふ、早く國中に此のごとき將帥あらば、何ぞ今日を待つて兵を會し、胡寇の志し肆まゝ

なるを制しかね、患ふるに至らんやと歎じ玉ふが、遂に張方に問うて曰く、將軍は何の處の人ぞ、張方が曰く、小將はもとより河澨の人、姓は張、名は方、字は子正、頗る武藝を能するを以て、主の命を奉じて爰に至り、大王の麾下に順つて令を聞く、願はくは前部に充てらるゝ事を得て、以て漢寇を勦らんと云ふ、成都王即ち軍正の官に命じ、是を著到に記さしめ、營地をあたへ、粮草を給うて、しばらく人馬の足をやすめけり、爰に又荆州の刺史劉弘は、詔下つて其鎭に留り、以て、蜀の寇を防ぎ守るべきの旨を見るより、再ねて書本を朝廷にすゝめて言す、天下の邊官に居するものは、皆隣國の寇あり、獨吾が隣に蜀寇あるのみに非ず、然るを隣に寇あるのものなりとて、兵を許して召さずんば、朝廷たれと共にか漢賊を除ひ玉はん、又西蜀の寇の事は、臣自ら制し伏するの術あれば、敢て東を窺はせじと、即ち表を拜めて、其のち己が留守には、參軍蹶恒、牙將奚諶、仇勃、張興、費深、劉員をとどめ、婿の夏陟を輔けしめ、夏陟を以て、州縣の留守の頭とし、自らは大將、皮初、弓欽、丁乾、蔣超、苗光、趙讓、何松、劉盤等を率ゐ、兵士五萬の人數にて、急に鄴都へ馳たりける、かくて劉弘は、成都王に參見の禮畢りければ、即ち成都王の曰く、それ朝廷の議に於て、蜀の成寇、方に熾にして、荆襄の東路を衝かんとす、故に卿をとゞめて動く事なく、不測を防がしめんとなり、然るに今日兵を提げて、國に力を効さんとす、卿が州に居せずとも、荆襄克く保ち、留守の事境して心安からんや、劉弘曰く、臣詔命にしたがはずして、擅に地を離るゝに非ず、但し漢を征するは是大事なり、臣來らずんば忠を盡すの人なく、肯て大王の命に、左右するものなからん、李雄は自ら守るの賊にして、蜀を得るときは是足れり、其の上もとより臣を畏る、必して來り寇すべからず、只兵を留守に嚴しくとゞめ置きたるは、郡內却つて張昌等が徐黨ありて、恐らくは百姓を擾らんかと、思ふがためのみなりと談ずるに、成都王兎にも角にも卿等が力を用ひ、心を齊しうして、共に漢の寇を破らん事を思ふに、任するなりとて、即ち軍正の官に命じ、粮を給せしめ、即著到に登記せるに、第一路の諸侯劉弘として、正南の首じめに營を結ばせける、斯て日を隔て、段々に諸侯の兵馬は集りける、第二路の諸侯は、乃ち漢の張耳十七代の奇、西涼の刺史張軌、字は士彥、乃ち安定烏氏縣の人なり、精兵五萬を率ゐ領ず、其旗下の謀士には、宋配、部將の佐には、北宮純、張斐、馬畅、氾瑗、陰濬、楊淑、楊胤、田洵、張闓、郭敬、索輔、孟暢、令狐亞等なり、第三路の諸侯は、世々の官家、平吳の上公、幽州の牧官王浚、字は彭祖、乃ち王沈が子、王

渾が侄なり、其參軍は、司馬奭、嵩輿、游暢、游統、婁憲、大將は、祁弘、王申始、王昌、胡矩、孫鮮、高柔等、兵士五萬を率領したり、第四路の諸侯は、楊州刺史陳敏、字は令通、機に臨み變に應ずるの量あつて、智勇兼ね全きの大將たり、又部下の勇將、錢端、白耀、花如、夏文華、夏文盛、錢廣、參軍の將には、何康錢哀、帶兵四萬を領したり、第五路の諸侯は、乃ち中山の靜王、劉勝が後、炎漢の餘裔、幷州刺史、劉琨、字は越石なり、麾下の大將、姬濟、劉希、鞮淳、高喬、凌深、牟穆、焦球、王旦、段繁、韓據、范勝、參軍司馬張儒、盧諶、崔越等、鴈門の人馬、六萬の著到なり、第六路の諸侯は、智略、兼全く、德威普く著れたる、廣州の刺史陶侃、字は士行、鄱陽の人なり、部下の大將、朱伺、吳寄、趙誘、竜奇、鄭攀、張奕、楊舉、陶正、參軍王貢、皇甫盛、牙將、李根、李楊、彭世、張誕、宋夏、陳修等、人馬六萬を領して出來る、第七路の諸侯は、青州刺史、苟晞、字は道將、河內山陽の人なり、胸に智識多くして、其の勇、關、張が類に次ぐべし、帶來る大將には、夏陽、高潤、王讚、陳午、劉會、溫畿、參軍閻亨、明預、其の兵五萬を領したり、第八路の諸侯は、豫州の刺史劉喬、字は仲彥、南陽の人にして、柔よく剛を制し、其の心多くの機を、韜み匿せる人がなり、其幕下の大將には、華文、葉武、柳梁、邊鎭、苗秀、劉賢、參軍には、呂良、刁魚、魏正、邢謙等、其の勢三萬の人馬を帶し來る、第九路の諸侯は、樂陵の刺史邵續、字は嗣祖、魏郡安陽の人なり、其の心金石の如く、力天をも回らすべし、部下には父子の親兵あり、兄の侄、邵存、邵竺、邵善、邵義なり、大將董韶、李用、勝飛、穆弼が等あつて、其の兵三萬を領し來たる、第十路の諸侯は、榮陽の太守李矩、字は世廻、平陽の人なり、智識ふかく宏うして、寡を以て衆を御するの量あり、旗下の大將には、夏雲、雷霈、郭默、楊場、駱增、梁志、江嗣、郭元、郭誦、寒韜、張皮あり、參軍には郭方、功曹官の張景、主簿の官荀遠、司務の官尚季、李瑣、其の兵馬五萬をすぐりて出できたる、第十一路の諸侯は、雍州の刺史劉沈、字は道眞、燕國薊城人なり、是亦漢の宗室にて、北州の名族なり、其の姓なり剛にして、勇氣に決斷つよく、陣に望んで安閑として謀しき事なし、其幕下の大將には、皇甫澹、衞博、高標、伍兌、霍原、許雄、夏木、司馬には麴允、索琳、主簿には、麴持、索綝、牛貴等、其雄兵四萬にて馳せまゐる、第十三路の諸侯は、武威の太守、馬隆、字は季興、東平の人なり、威名顯れ、方ら練得て老すその屬付せる大將は、邊將樹善、戎沒、骨能、獨孤、雄奚、

道那、豐引、親らの子馬咸等、蕃の人馬三千、中國の兵四萬を率ゐ來る、第十四路の諸侯は、武陽太守應詹、字は思遠、汝南の人なり、孝義を以て人の心を感ぜしめ、恩威衆を服したり、一部の勇將には、沈吟、蔣和、胡德、方態、應詔等、兵馬三萬を相ひしたがへ、召に應じて來りける、以上十四路の兵、合せて五十八萬三千、我劣らじと鄴臺の、帥府にこそは集りける、

晉王侯擇二先鋒一

衆て、諸方と共に相約したる當日に、晉の諸侯、一十四路の兵すでに皆々到り付き、一同に帥府に進んで參見す、成都王は、即ち盧志に命じ、和演、劉弘、皮初と共に出で迎へ參謁の禮畢りて、陸機、劉弘等出席して、今度大兵を會して、賊漢を征討あるの事を相叙れば、諸侯ときの挨拶あり、成都王それより、酒宴を設け、衆を分ち、位職に從つて營を安んじ、晩に至りて散じたり、次の日に至り、七位の親王たちも、皆々到り玉へば、成都王は乃ち、石超、公師藩、牽秀、和演、陳昭、陳珍、蔡克、七員の親將とも、頭を分つて、親王たちを迎へ接し、直に帥府に至る、各々の官位に從つて、坐列をすゝめ、禮儀すでに畢りて後、陸機は十四路の諸侯と共に、一齊に參拜す、又是二十一路の首將、張方等、二十一員の長史李含、參謀游暢等二十一人、並に盧志、石超等十員の成都の將、倶に入つて參見して、座をしき終る、第一位の親王は、司馬義、字は志度、忠心苟めならず、治世慮なし、封をうけて長沙王となる、即ち武帝、第六の王子なり、麾下の大將上官已、皇甫商、宋洪、王瑚、參軍劉佑、董洪、逯苞、馮嵩等、兵六萬、粮草五十萬を領して、鄴營に轉輸せけり、第二位親王は司馬顒、字は文載、雄氣人にすぐれて、兵多く將廣し、封を河間に受け、關中に據りてすまふ乃ち、宣帝司馬懿、同胞の弟、司馬孚の子なり、今度詔を奉じ、其の身は鎭にとゞまり、名代として嗣子司馬暉、兵將を督し、張方、李含を相そへ、兵八萬、粮草四十餘萬の著到なり、第三位の親王は、司馬越、字は元超、雄心にして智謀また端多し、封を東海王に受く、乃ち武帝第八の子、部下には、大將王秉、宋胃、何倫、施融、劉洽あり、引兵四萬、粮草三十萬の著到なり、第四位の親王は司馬容、字は景文、むまれつき豁達大度の人にて、喜んで賢良を納れ用ふ、乃ち司馬伷の孫なり、父司馬覲の故を以て、封を瑯琊王に受く、部下の大將には、段雄、太史賓朏、同じく計明、伏尚、潘仁、史恭、司馬參軍には、王導、祖約等、領兵四萬、粮草四十餘萬と聞えたり、第五位の親王は、司馬模、字は元範、其の名中州に播し、聲許洛に馳す、封を南陽王にうけたり、乃ち武帝第二の子秦王柬が子なり、部下の大將、卞勝、夏勇、席盛、岑紳、齊成、馬進等、其の兵二萬、粮草十萬を曳ゐたり、第六位の親王は、司馬虓、字は世雄、門に劍客多く貯はへ、自らの力も亦千鈞をよく擧ぐ、封を范陽王にうく、乃ち宣帝の庶子司馬京が子なり、部下の大將、王曠、劉輿、石正、周振、文璧等、引兵二萬、粮草八萬を以て來りたり、第七位の親王は、司馬歆、字は叔靜、喜んで貧乏を賙し、好んで忠良に結ぶ封を新野王に受く、乃ち宣帝の族子の子なり、帶領の六將、徐眕、虞袞、陳陸、周旗、鮑欽、楊威等なり、引兵三萬にて馳せ來れり、さて成都王は、九員の將官、大兵十萬の兵を領したり、爰に齊王はまた、董艾、王義等に命あつて、帶兵五萬を督さしめ、粮草の盛となして、諸用は咸、成都王の下知にしたがひ、是を辨ず、諸兵既に集りければ、成都王の曰く、今各鎭の兵皆至るに、ひとり蒲洪、姚弋仲、慕容廆、拓跋猗盧、段勿塵の五路の、夷狄いまだ到らず、早く牌を行らし去て、是を催すべしとある、南中の郎將祖狄、進言して曰く、他若し肯て來らんと思ふならば、亦すでに到りつくべき事なれども、思ふに是遠境をたのんで、此方よ

り、よも遲參をも、尤むべからざる時節ぞと考へ、全く來るの意なきなり、且へ胡狄の性、羊や犬に類したり、但恩を以て是を養ふ計にし、彼の邊の寨に來つて、侵し掠むる事無きを、それまでに打すてゝ、必ず迫つて是を驅り立て、味方の用にたてんと思ふ事無くんばよし、是にみだりに迫りなば、恐くは不測の變をなさんか、其の上胡漢と、又重ねて志を相通ずる事も未だ知るべからず、只是をば打すてゝ、さし置かんには如くべからず、是に迫りて、みだりに疑ひ懼をなさしめば、彼却て反をあらはし、邊境のひまを生ぜんか、古より道ふ、將は謀にあつて勇に非ず、兵は精しきにあつて多に非ずと、況や大兵の此に至れる者、百十餘萬に下らず、亦以て用ふるに足れり、慮る處は初會の兵、合せ練れる事なれば、各自ら心をなして、たまゝ〳〵鋒を交ふるの日、相顧みて互に援はず、爰に於て少しも、味方挫く事あらば、能く成功をなす事なからんか、昔王莽、衆を特んで紀なきを、光武ときに吳漢を將とし、精銳を帥ゐて、彼が一屯を攻むるとき、他の軍より、背て顧みさりしかば、卒に頽沛るに至れり、しかれば、只此の事を以て、よく〳〵評議成しめ玉へ、臣下として其職にあらざれば、敢て言を胃さず、諸王たちの中に、一の盟主を立て、元帥と共に一先鋒をえらばせ玉ひ、軍に前後進退の、紀律あらん事をと云ふ、成都王

の曰く、卿が公言、孤れまさに心に銘じたりとて、乃ち長沙王に宣ふやう、王兄の勇三軍に冠として、其の才主盟たるに堪へたり、即ち當に狩墳して、事を執るべし、弟謹ふ、衆を率ゐて旨を听かん、長沙王の曰く、然んばあらず、古に云ふ、事の大小となく、達する者を先とすと、王弟謀猷ふかく遠して、見識又恢に宏なるのみならず、才又衆の服するに堪へ、前には逆倫を誅し、今又大兵を集會して、賊漢を討ずるまで、皆是弟の位に出でたり、吾等まことに、萬が一にも及ぶべからず、悉く職をなしがたし、盟主たる事、まして是願はんや、汝たゞ是をつとめよ、成都王再三の謙讓なりと云へども、衆の諸侯、齊しく向に前んで曰く、齊王朝に在つて政を輔く、此の大任は殿下にあらずんば、よく是に當るの人なからんと、即ち長沙王に命じて、正座を設け、衆とゝもに成都王を扶けて上らしむ、時に成都王、衆の將官に向うて曰く、今各々の推擧によつて固く、强辭するにも及ばず、此の盟にあたるなり、されば諸の王公も、また各々謹んで、乃の職を守り、心を齊しうし、力を協へ、國の爲に功を幹てよ、彼此今より忌嫉の心あるべからず、强を以て弱を凌ぎ、親を以て疎なるを忽にし、大を以て小を喪する事なかれ、功あるをば例に任せて賞を施せ、凡て過ある者は、法に依て是を施せ、定めて隱し容す事なかれとある

に諸の王侯ことゝく皆應諾す、成都王衆に告げて坐につかしめ、列を排して次第をなす、成都王の曰く、朝中已に陸士衡を拜して、總兵元帥となし玉ふ、今正に請うて、敎場に上せて、諸將を調べしめ、各々よろしく分ち付することをたさしむべし、盧志爰に上言して曰く、今天下の兵此に在り、宜しく必して、盛なる擧あるべし、元帥は衆心のまさに服する堪なるに此の如くして豈に是、大將を尊ぶの禮にかなはんや、昔しの燕の樂毅や、又は漢の韓信が、將に拜せらるゝが如くに、壇を築き位を設けて、大王親ら印劍を上め、然して後こそ、其の身も重きに伏し、心を盡し謀を盡し、又衆の兵將も、元帥の威の尊きに悞れて、心を傾け、听從ふべけれと云ふ、成都王の曰く、卿が言甚だ善しと、即ち命じて、壇を鄴城の內に築き、日を擇んで陸機を請じ、壇に登せて印劍を授け、其職を爵せしむ、陸機が曰く、臣もと江東の弱質、學淺く才庸し、たとへば諸王の麾下に於て、軍務に參り助くと云ふとも、たゞ恐らくは其器の足さらん事を、まして況や、天下の元帥、百萬の兵士の大任を受けんや、是熟く兵机を諳んじ、廣く三略、六韜の旨に通じ、文武の全才ある者ならでは不可ならん、成都王の曰く、此の時天下紛れ擾れ、强胡横に暴し、萬民塗炭におつ、大丈夫方に時を救を以て念ひとなすべし、豈に有

才の者、其の能を隱すの事あらんやとあらば、衆の王侯も、又皆な元帥京に在りて、已に帝命を受け、今更何ぞ復び、辭するにか至らんと云へば、陸機乃ち再拜謙讓す、盧志等是を扶けて臺に上らせ、成都王親ら印劍を捧げて送上す、陸機跼て是を受く、成都王即ち、衆に對し、宣言して曰く、今朝廷、生靈の胡寇にあへるを痛しく、念ひ玉ふが故、特に征西破漠の大元帥を拜して、以て天下各鎭の兵馬を統べしめ、勅あつて劍印章を賜ふ所なり、如し大兵の將士の中に於て、命を用ひざる者あらば、其の行に任せて、誅戮をすみやかに行ふべしと云ひやんで、臺を下り玉へば、陸機位に陞り、諸將を召集めて、各分ち付て曰く、我が晉帝、漠寇を嘆忿し玉ひ、成都王を拜し、摠兵大都督とし、我に授くるに點兵元帥の職を以てしたまふ、汝たち諸將、各良材煆練を經たるの武藝を、明日敎場の中に於て、操り演べらるべし、明日辰の牌の時、俱に盔甲を鮮明にし、器械を齊整へ、凡て陣に上るの時の如くして、相集會すべしと云ふ、諸將應じ諾ふれば、衆人と共に臺を下る、次の日陸機は、早く成都王の營に入りて相見し、成都王に向つて曰く、今日諸王の請うて、同じく臺に上り、一員の先鋒を定めとるべし、成都王の曰く、兵を衆る、難に非ず、將に任ずる事難しとす、昨に關中の張方、人才猛勇

にして、相貌まことに雄れて强なり、敵人のために慴れらるべし、意ふに立て前鋒とせんが、いまた元帥の意を知らず、陸機が曰く、將たる者皆よく武藝に熾練す、みだりに高と低を定めがたし、臣すでに命じて、銅の標しを立下さしむ、約するに重百四十斤なり、硬弓一張、是又五百疋の力を挽く、竿的を離るゝ事一百五十步を隔て、諸將の此の硬弓をとつて是を射、此の標を舞さん者に、すなはち此回の前鋒の印を掛けさすべし、成都王是を聞き、元帥の論是なりとて、即ち命じて、砲を放ち金を鳴し、大に各將を會すれば、須臾あつて諸の王侯、みな臺に至り、列を擺ひて坐をなせり、陸機直に、臺の前面に坐し、位を正せば、左に立つは軍正の司、右に立つは紀功主簿、さて帥字の旗の上に、錦の袍一件、金の甲一副、先鋒の印一顆を懸けたり、乃ち各部の主將を召んで、上り前めて、分ち付けて曰く、某本一介の書生、身を王の所によせたるに諸位の大王謬ち擧ぐるに、掌軍元帥の職を以てせらる、深く恐くは其の任にたへさらんかと、幸に諸君、各得て其の忠義により、誠を協へ命に赴き、共に同じく上君恩を報じ、下黎民を安んずる事をせんと思はゞ、當に吾が令を听け、如し約束に服せざる者あらば、即時に首を斬るべしと令す、衆將の曰く、敢て令を奉ぜさらんや、陸機重ねて曰く、行軍の

道、たゞ紀律有る事を要む、茲に今當に兵を進むべし、一員の驍將を擇んで、以て破敵先鋒となさんとす、昨に推舉によつて選ばれ、又自ら薦の類は、吾みな敢て是を許さず、今や諸君教場の中に於て、各武藝を施し演べ、榜上の掛定めたる例に、合ひ得ん者には、卽ち此の袍印、盔、甲ともに與へて、前鋒たらしめん、かまへて我を以て、爭ひ競ふ事なかれと云へば、衆將應諾して、皆々去て榜を見、馬を帶びて伺候せり、陸機其時、軍政に命じて、皷を擂つ、皷聲の起る處、第一の隊の中より、一將馬を飛して出づ、生得の熊羆、虎體、鉄の臉、剛き鬚あるは、乃ち長沙王の大將王瑚、字は汝器是なり、手に方天の畫戟を舞し、場中に向つて、施し演る事一回し、其硬弓をおつとり、兩箭を連ね射て的に中つ、第三の箭に至つて、箭の力勝ふる事あたはずし、的より一丈許を隔てゝ地に墜つ、それより弓を懸け、其銅標をおつとり、横に肩上に擔つて馳廻る事一匝し、原の處に插んで叫んで曰く、先鋒の印を以て我に與へよと、道もなほ未だ了らざるに、第八隊の中より跑出す一將、生得の身の長八尺、膀濶うして濃なる眉、粉面、手に長鎗を執り、向に前で叫で曰ふ、銅標を肩にかづくが如き、怎ぞ能先鋒を做し得ん、我が來りかくるをまてと道ひ罷んで、鎗を舞して奮ひ演べ、復かの硬弓を取て、一連三箭、みな的の紅心に中つ、又銅標を取つて、雙手にて擲げ起し、教場の中に向つて、適走る事一週りし、向に前で標を插み、叫んで曰く、先鋒還つて是我なさんと、衆人是を見れば、荆州の大將皮初なりける、かゝる處に、忽ち見る、第三隊の中、旗旛開く處、早已に衝出る一將、生得雙眉直に竪つて、兩眼は輪の如し、黒麻の如き一面、手に大斧を取る乃ち東海王の麾下の何倫、字は孟常聲を厲し叫んで曰く、先鋒を留め下して、我にかへせと、臺前に向つて、宣花矛をまはし動するは、さながら雪片を飜が如し、見る人目を悦しめ、心を驚す、已に演訖りて、弓を抽て、連ねて四箭を射たりしに衆みな同音に是を賞す、再び銅標を取り、雙手にて是をとりて走るを、東海王是を見、先鋒已に是に定れりと云ふ處に、成都王の首將、馬を躍せて出て曰く、衆人我が先鋒の印をかくるを見よやとて、剛刀を輪の如くまわしたるは、風の捲くが如くなり、既に是を舞し罷んで、又流星の飛鎚をして、能く打ち下す事、五十餘歩に飛ばし、是を收むる事戲の如し、再び硬弓を取つて、連りに、五箭を中つ、成都王の曰ふ、略印を掛くべきに似たるか、司馬陣が曰く、我が將帥、各々皆演べず、是を過すを待て、甚尤れたる者を擇べ、石超が曰く、元帥快く、印を取來つて我にあたへよと、其銅標を取りて

勉め強て、左右各兩つを擲下す、軍士是を褒むる聲震ひ、動ひて、地脉をたゞよはす、陸機意に、成都王の意を奉じ承て、卽ち印を取り、石超に先鋒を命ぜんとするとき、たゞ見る十二隊の中、一員の大將、臺前に馳出で、高く叫んで曰ふ、此等の武藝、皆奇とするに足らず、何ぞ言について印を取らんと、卽ち場中に往き、雙の馬を放ち、兵人をして是を逐走らしむれば、馬は駭き、電光の如くかけ出すを、手に大刀を綽て、馬と倂つ事丈餘ばかりに、忽然と追詰め、やがて其馳踊騰つて、一疋の馬にとびのり、刀法少しも亂れず、しばらく此の馬を乘すごすと見れば、いつの間に何方にて取りかへつらん、手に取る所は、長八の蛇矛なり、盤旋ぐる事、一轉し、倏ち鞍上に伏すよと見れば、又一の馬に乘かへ、手に取つてつかふ處は、太鎚なり、前きに取りたる、蛇矛をば、何の間に何方へ收めたるらん、是を見つけし人なし、暫く鎚を舞しやんで硬弓を取り、一連六箭、みな的の紅心にあつ、軍士聲を齊しうして感じ、此の將軍は眞の神人なりと、猶かざる者もなく、是ぞ先鋒に定るべきと云ふ、此の者直に營前に前み來るを見れば、劉琨部下の大將姫澹なり、こと未だ聞くに及ばざるに、第九隊の中の大將、北宮純、横に斧を取つて出で、武藝は將家の本等、何ぞ奇とするに足らんと、乃ち獨硬弓を取つて、順に三箭を射、反いて三箭を射をはり、其銅標を拔いて、從容として舞す事一回し、又原の處に插みて曰く、盟主、元帥、立ち處に此二物を立て、以て前鋒を定む、衆大王、肯て印を賜はんや否やと、言ひも未だ畢らざるに、廣州の臭寄、滎陽の郭默、范陽の王曠等、一齊に出て、前衆にまさるの技を盡し、數箭を發して的に中て、銅標をふつて、其の力を演ぶ、是より數人の中に於て、群を離れ妙技をなせるは、河澗王の大將、張方、幽州の大將祁弘、字は子猷にならぶ勇剛の者もなければ、成都王、陸機、諸王達に至るまで、此回の前鋒は、是等に越ゆる驍騎はなしとて、不當萬夫の剛將には定りけり、かゝる處へ探子入りて報じける、漢兵潼河の東岸、銅雀の舊臺に寨をとゞめ、水道に寄つて、晉兵を拒ぐと、成都王説を聞いて、大に怒つて曰、猾賊、此の如く無禮なるや、我今親ら、天下の大兵を曾し、此に至るを聞ながら、猶いまだ退き避くる事をなさず、河によつて我と抗はんとするや、早速に是を踏破りて、魏郡より、是を取定めよと、氣勢を發に張られけり、

成都王出兵征漢

晉の永嘉元年、成都王穎、大兵を總督して、漢を征すべき

に極めたり、かゝりければ、劉聰等が漳河により守つて、退くの心中なきを見、陸機と同じく、親ら敎場に往き、衆の諸侯を集めて、兵馬を一樣に起し立しむ、各軍已に齊ひければ、陸機臺に登り、令を申て曰く、汝等衆將、皆朝廷の爵祿を食み、必ず國の爲に功を立つべし、今强寇敵をなす、須く各各令に依りて、互に相接り濟へ、傍に覩て畏縮まる事なかるべし、一心の如く救應して、共に成功を冀へ、一には以て大國の威を振ひ、二には以て平生の英勇を顯し、三には以て胡寇の强をとゞめん、若しよく將を斬り旗を奪ひ、漢兵を殺り退けたらんは、別に賞の行はるゝあるべし、是に違ふ事あるべからずと云ふ、諸將應諾して退く、是に於て張方、祁弘の兩將を以て、先鋒にさだめ、餘は皆後より發す、惣兵共に一百一十七萬三千、砲を放つて威を揚げ、千里の地を震慴し、浩浩として漳河を望んで進行く、漢の探軍報じて、大寨に入つて曰く、晉兵百萬、すでに鄴城を發したり、早く備をとゝのへよと、劉玄明聞いて、急に衆將を聚め評議するに、張賓が曰く、晉兵此に來る、亦是賭者の孤注するに同じ、若しよく其の一陣を衝いて、先づ彼れがあらたに聚り、來り至るの銳氣を挫きて、其の餘の鎭兵の勢、いさゝか沮むを待つて、然して後謀を設け、其の分合のやうをうかゞつて、與に戰はん、若し路を分つて兵を出し、力を用ひて、敵一鎭の兵をだに破らば、其の下は自ら解けん、此秦の六國を拒ぎたる勢なりと、正に議するの間、只見る漢主の方より、大尉劉伯根をして、粮をめぐらし來れるを、劉聰大に喜び、向ひ入りて禮を叙畢れば、劉伯根、即ち漢主の書を呈む、其の書中に言へらく、宜于已に五路の兵を退けたれば、不日に兵に將とし、來り接ゆべし、此回の一戰は、乃ち成敗の關り係る處なれば、往日の比に非ず、凡そ謹愼を以て心とせよ、魏郡必ず棄つべからず、乃ち中原を爭ふの形勝第一の處なり、張賓書を既に見畢り、衆と共に曰く、且つよろこぶは、此數處、兵馬を動さずして敵を待つ事、吾が半の幸を得たり、今まさに議して、敵を迎ふるの策をなすべしと、王彌、劉靈が曰く、成都王、爰に陸機を用ひ元帥となし、兵を提げて正に至るとか、その脚を立つる事いまだ定らざるに及んで、某二人願はくは、精兵一萬を引いて、先去り、敵の一陣を衝て、其の前鋒を挫かん、庶は晉人をして、我を欺く事なからしめん、劉伯根が曰く、いまだ造次に事をなすべからず、われ總に爰に至つて、其の敵の虛實は知られ共、但だ聞く、幽、冀、荊、廣、齊、趙、淮、蔡の兵皆至るとかや、然らば敵兵多き其の中には、必ず英雄の猛將、奇謀の知士、などや無て叶ふべき、焉ぞ一端に、彼を忽る事をなさん、

還つて正に大兵を整へしづめて、倶に出で一陣を試み戰ひ、さて再び後議を待たば、縱へ彼百萬の衆ありと云ふとも、亦悉く皆、陣に臨む事あたはじ、徒らに多は累をなさんのみ、何ぞ懼るゝに足らんや、張賓も亦この議を以てよしとして、其の用意をなしたりける、斯て陸機は、晉軍の前鋒、張方、祁弘の二人を喚で下知をなし、兵を領じて寨を出で、陣を排いて戰を索めしむ、漢軍も亦衆將を率ゐて營を出で、陣圖を佈き成す、劉玄明は、金盔、金甲全く裝を披き掛け、左には張賓、先鋒王彌、關防、胡延矣、楊龍等、大將十餘員なり、右には靳準、先鋒劉靈、張實、胡延攸、黃臣等十餘員の大將あり眞に是兵に氣槩多うして、將もとより雄威なれば、隊伍森嚴しくして、規模また整しう飾れり、只見る晉の陣上、皷聲大に震つて、門旗鮮かに開く時、成都王馬を當中に立て、左に陸機右に廬志、親將の石超、和演等十員、上手の先鋒、張方、大將十員を統べ領す、下手先鋒、祁弘、是又十員の大將を帶びたり、但見る、刀鎗は日に耀き、戈戟は霜を排きたり、黃なる幹已に動くと見るより、成都王は親ら出て、劉聰に謂つて曰く、玄明倘ち、乃ち洛陽にて云ひたりし忠義の語をば、盡く忘れたりや、時に劉聰は身を躬めて曰く、殿下に別れ來つてより、恙なきの事、某かねて知る所なり、但し某兵を帶して爰に來る事、是父王の命を奉ずれば、來らずと云ふ事を得ず、古に所謂、孝を盡すときは、忠を盡す事を得ず、禮を盡すときは、義を盡す事あたはずとなり、殿下是を察し玉へ、陸機が曰く、汝に賜ふ左國、あに蜀より窄からんや、何ぞ自ら諒とせずして、妄りに內地を侵し以て禍の敗れをとれる、張賓が曰く、まことに左國の邊鄙、是漢氏の樂み居する所にあらず、東西二都の故土を取らんと思ふなり、陸機是を聞いて大に怒り、衆將を顧りみ、誰か先此反賊を擒にして、以て頭功を顯さんと、道聲もいまだ絶えざるに、雙鈴の响處、一員の大將、貌は惡殺の如く、狀天神に似たるが、馬を飛して出るに、晉の左先鋒張方なり、剛て總に陣に臨めば、漢軍の中より、皷角天に喧すしくして、早く衝出る一員の猛將、威は熊虎の如く、勢は貔貅に似たるは、乃ち是左前鋒王彌なり、手に白刃大刀を持ち、身は、黃驃の高馬に跨り、場中にあらはれ出、更に話をなすにも及ばず、直に張方を敵にとる、張方も又是を喝し止め、夫より二人の雙刀ならび舉げ、四手齊しく施し、一個は目を怒し牙を咬んで、恨くは生ながら、敵將を擒にする事 得さらん事をとはげめば、一個は又、眉を揚げ齒を切り、已に活ながら捉へて、頭をならべさらんかと憤る、二人の戰上、忽ち五十餘合に及ぶと云へども、兩下の精神いよ

いよ倍して、勇力更に增りたり、又鬪ふ事五十餘合して、なほ勝負を分たざれば、成都王是を見、人は言ふ、胡寇の中、王彌、劉靈の二人あつて、甚是勇猛なりと、今日是を見る所、果然として名虛しく傳へず、若し是張子正にあらずんば、能是と與に敵する事叶ふべからずと曰へば、右前鋒、祁弘この言を聞くよりも、怒氣十分に惱み得て、胸に塡ち、目眦は逆裂けて高聲に叫んで曰く、大王まさなく、賊人の志氣を長じ玉ひ、自己の威風を滅し玉ふは何事ぞや、看玉へや人々、小將今出さつて、活ながら此賊を擒にし、以て大王委ね任するの恩に答へ奉らんと、道ひやんで馬を拍ち、衝き出て喊める聲には、山も倒るゝが如く、勢ひ潮の奔るが若く、直に王彌を取らんとすれば、漢の右前鋒劉靈是を見るより、急かに長矛を、挺げ截り出して、阻て住む、二人の雙鎖並び刺し、兩馬齊しく交り、正に是棋の敵手に逢うて相攘る事なきが如く、將、英雄に遇うて、各々强に趁ふ、四員の大將、戰うて一閘となる、看る者目を愁し、兩陣より喝采聲、しばらくも絶さりける、此回の戰は、乃ち晉、漢、初場の大戰なれば、此四員の先鋒を選び得たり、眞箇にこれ傑中の傑、尖上の尖と云ひつべし、混に戰上すでに二時ばかり、烏龍舞ひ、白鶴飛ぶ、兩對ほとんど天關を動搖せしめ、地軸もまさに翻倒すべしと見えて、すさまじかりし鬪鬪なり、劉玄明は張賓を顧み、晉將も亦雄猛なり、此回び此勍敵に逢ふ、勝負いまだ何如と云ふ事を卜はず、張賓が曰く、戰は危事にして、兵は是詭の道なり、今日實に乃ち惡戰ふ、恐怕る二將の損あらんかと、必ず一箇の暗計を用ひて、兵の不意に出で以て、彼衆を撓すなら必然として亂れなんと、劉聰きいて、然らは副先鋒をして、皆出て一齊に、是を衝いて可らんや、張賓が曰く、敵將の數多き事我に倍せり、是を助けば反つて騷動をまさん、惟り司馬顒、陸機と共に、兵馬を與ざる、才智を以て稱せらるゝと雖も、乃ち是高貴の子弟、紈袴に迷さるゝの王孫、もとより未だ戰陣の苦を經ず、若し味方より一將をして、奮つて身を顧りみず、直に中堅を搗きみださば、司馬顒、わが驟然に衝き去るに驚き、獪猝き惶をなし、必ず擾亂に及ぶべし、那時勁兵を以て、是を搔みださんに於て、勝を取る事明けし、劉聰言を听いて、衆將を顧み謂つて曰く、君等皆舊日一家の骨肉兄弟、肯て命を致さんと欲ず、今日誰か逕ちに中軍を衝て、司馬顒を撓さんやと、道ひもいまだ畢らざるに、關防、黃臣、胡延攸の三員の虎將、各大刀を舞し、西蕃の良馬に乘り、風を捲いてかけ出し、晉兵をまくり立つれば、紛々として亂倒し、血路一條を啓きなして、さながら無人の境に入るがごとく、東西に眼もふらず、南北に心もなく、直に司馬氏の中軍を目にあて、一無心に殺込みたり、司馬顒是を見、正に陸機に命じ、去て兵陣を觀よと云ふ、陸機は立て是を見るに、忽ちに三員の漢將、大に喊つくつて、電光なほ遲しと閃めき入る、陸機は急に衆將を喚んで、賊有りて至れり、向前かけて拒ぎ止めよと云ふ、石超、牽秀、郭勵、公師藩等、一齊に敵を迎へ、關防、胡延攸、黃臣の三將と、大に戰ひ住むる處、思はずも黃臣が馬、直に中麾につきかゝり、成都王を目にかけて、既に危かりつるに、司馬顒これに慌いで、陸機、盧志もろ共に、速くも馬に打乘り、後を望んで走りたり、是に依て陣中大に亂立つ、劉弘急に皮初、弓欽に命じて、馬を出さしむれば、復胡延顒、關謹は、兄の敵陣に入るを見るより、爰に往いて助け戰ふ處、正に皮初、弓欽の二將に遇うて、遂に乃ち相鏖戰す、劉伯根大に叫んで曰く、衆兄弟、まさに吾に隨うて、兩個の先鋒を助け戰へと、即ち刀を舞し搶き出でたり、爰に於て、王如、楊龍、麾全ならびに、張仲孫、楊興寶の五將、各命をすてゝ陣を侵し、張方、祁弘を衝きたれば、二人共にこらへずして、互に相顧みることを得ず、戰をすてゝ走りける陸機が曰く、わが將、敵に十倍せり、何ぞ妄りに動ずるや、再び走る者あらば、首を斬らんと下知して怒る、是によつて諸兵縱にとゞまり、張賓是を見るよりも、自ら大軍を競ひ進めて、打てかゝれば、今は陸機が喝し止るをも用ひばこそ、爭ひ亂れて走りける、漢兵赶かけ、殺て分捕りし、さつと引て寨營に回りける、晉漢、手合の大戰に、大に敵をきりくづし、全き勝を得たる事快しと、漢軍はいよ〳〵氣勢さかんなり、さて又成都王は、思の外に敗を取り、軍を退くる事二十四里にして、漸くに止まり定め、人馬を爰に點計して見れば、折き去る處の兵士、一萬七千餘とこそ聞えけれ、

通俗續三國志卷之三十一

陸機佈陣

成都王は、晉漢手合の戰に打負け、思ひの外に勢を屈し、陸機に向つて云ふやう、漢賊兼て、其猾に强しと聞きつるに、果して其雄猛なるのみに非ず、計策の端多きや、吾れ若し軍中に雜り入ずんば、幾ど彼が爲に、傷られつべかりし、事すでに此の如くなれば、如何して此の賊をば破得ん、陸機答へて、今日の戰は、賊子張賓、吾軍戰將の廣きを憚るゝが故、明に戰をなす事あたはず、特に詭計を用ひて、中軍を攪亂したるな

り事あやまつて、大王の御駕を驚ずに至れる事、是吾主兵の者共、隄防を失するの罪なるかな、細に觀るに、王彌、劉靈二人は、乃ちこれ一勇あるの夫のみ、彼今日の一陣に、少しく勝てるを以て、其の心に僥倖をよろこんで、必ず驕る志を生ずべし、われ明日は廣く兵馬を韓陵山の下に排いて、一つの陣勢を佈きのべ、漢賊の來り戰ふを誘き、引いて敵を陣中に入れ、先つて王彌、劉靈の二賊を擒にすべし、二賊をたに討取らば、劉聰重ねて、何の能する事かあらんと云ひて、卽ち軍士に命じ、東山の上に於て、一將臺をこしらへ、諸王諸侯をして、其の上面に至りて、戰を見せしめたり、さて又其の下四方をば、兵の守を以て、敵軍より其の來りて、衝突くべき事を防住めたり、たとへば敵賊詭譎れるの策をまうけたりとも、中々以て施し難かるべき用心なり、成都王の曰く、賊中の張賓も、亦進退の法を明にしたり、油斷あらば、其の間を窺はれん、かまへて〳〵元帥、よろしく心を用ひて陣を佈き、方に賊に勝べきの道をなせ、陸機が曰く、臣まことに此の重職を荷ひ委ねらる、必ら矛正に心を盡して、其の黨類まで悉く此の行に於て殄しつべし、復び吾封境を侵さしむる事なからん、方に顯かに、大王の臣を推擧玉ふ處に、負くべからずと云へば、成都王大に喜び、若し能く胡戎を平げ定めなば、元帥の功ひとへに、漢

の霍光にも超え、陳平張良が後にあらじと云ひて、諸鎭の兵馬に令を發して、盡く韓林山の下に赴き、屯をとゞめ、以て元帥の下知を待居たり、陸機乃ち命じて、寨柵を立て下し、將士を率ゐ、一十六陣を擺き作つて、五方、四維、九宮の正位を分ち、又六丁、六甲、六辛、六壬の二十四氣を參ふるに、四七二十八宿の變合の形をなす、陸機すでに佈訖りて後、豫州の刺史劉喬、南平の刺史應詹、樂陵の刺史邵續、武威の刺史、馬隆等に令し、各々本部の人馬を滑領し、韓陵山下の要處に屯し、以て將臺を守護せしむ、また齊王の親將、蓋艾、王義、劉眞、韓泰、荆州の劉弘等とをして、粮草を守護せしめ、新野王司馬歆は、本部の人馬を領じて、これも將臺の守護に居る、かくて張方、祁弘の二將は、兵二萬を引いて、敵兵を誘き導引しむ、諸軍調發し元帥の下知すでに定まれば、人をして戰書を持しめ、漳河の邊、漢寨の中に去らしめて、敵陣に案內を通じ、明日韓陵山の下に於て、聊か一陣を佈いて、以て互の勝負を決すべし、其吾が大兵を懼れざる意ならば、卽ち兵を出し、前來して鬪をなせ、若し又、兎ても吾大軍と鋒さきを、爭ふ事あたはじと思はゞ、偖等が面貌に脂粉を施し、女の粧をかざり、親ら軍門に詣りて、早く拜降せよ、以て刀兵をやめ免さん、右二箇條の趣き、俱に叶ふ

べからずんば、當に左國に通出て、故土に歸り還りて、生民を害する事を免れしめよ、謹で諭す、群胡知悉せよと書きたりける、劉聰、張賓、これを看やんで、張賓が曰く、只これ此方より戰鬪をなすべくんば、再びの勝たん事、なほ未だ圖りがたかりき、敵いま此の如くに、鬪を要むるが如きは、これ却て戰て勝つべきの計ありとて、卽ち戰書を持ち來る處の使を召で曰く、儞が元帥陸機は、もと吳國の世々の臣たりながら、今乃ち義を忘れて、仇の晉につかへ、敢て恥をも知らぬ心にて、此の如くの大言をなすや、われ來日、卽ち韓陵山の下に至り、鬪に先つて陣法をなさん、暗に詭の計を施す事を許さず、かまへて詭を用ふる事なかれ、汝ち輸けなば、卽ち來て降參せよ、かならず言を食るべからずとて、乃ち回書をつくり、使の者をば返しけり、かくて劉聰、張賓は、軍馬をひきゐ分つて五陣を作り、軍の次第に依て進みゆき、遥に韓陵山を望んで進發す、先づ使者を晉軍に通じて曰く、漢の元帥ことに來つて陣を佈く、陸元帥既にもとより、器量あつて、我と明に、戰はんとならば、徂てさまたげずして、吾が陣列の成を待て後、汝が衆將を驅立て、力量を盡して攻らて、那時自ら高下を見んと云ひやれば、漢の使者卽ち、成都王の陣營に至りて、張賓が書を呈り、趣を述べたりける、成都王の方より、陸機、復返

書をなす、其の略に、我王は堂々たる大國の王子なり、豈あへて謬の言をなして、信を胡廣に失ふべきや、必ず兵を以て汝を赫威し、汝が來て、心のまゝに行列を調ふるを待て後、方に戰を交ふべし、こゝろやすく陣を佈くべしと云へば、軍使かへつて其の由を報げる、張賓等直に、それより、韓陵の西の方に住り、乃ち陣勢を擺つて備を定む、晉の方には、先鋒張方、祁弘の兩將を出し、陣口に備をとゞめ、漢軍の陣列を調ふるを待つて戰はんと扣へたり、張賓等は、金鼓天に喧を聞得、これ晉將の軍を佈の時なる事をさとつて、乃ち同じく衆將と共に、臺に上りて觀看す、但軍兵百萬ばかり、韓陵の東川に滿々て、いまだ知らず、排らく陣勢、これ何の名なる事を、さても陸機は、兵將を分つて、四十二處に佈置き、備を立てゝ軍中にかへる、漢の將帥、西山の將臺の上よりみれば、晉陣頭の上、列ねて兩隊の精兵あり、左の陣頭の主帥の將軍を見れば、頭上の金盔は日に輝き、手中に刀を横へたる其の燦なる光は、たゞ秋の霜になぞらふべし、〝乃ち是ぞ關西の虎將と見え、旗の上大字にて、晉國勦寇、左先鋒張方と書きたり、又右邊の隊の裏、主帥一員の將官、其の人は中山の黑殺のごとく、馬は北海の烏龍の如く、衝法敢を彼るに易きを心得たれば、寨北に名高く威重き將、旗の上に卽ち名をあらは

し、晉國則寇、右先鋒祁弘とあり、張賓これを見て、此の軍は即ち敵に備ふるの將、總軍陣を佈の算にはあらず、其の外五色を分けたる旗旛は、みなこれ佈のべたる陣なりと語るに、諸將听得て、仔細に眸を凝してぞ見たりける、

陸機之陣法

正東上にあたつて、一陣を擺ひ下して立ちたる備は、兵士みな綠の幘綠袍を著し、青纓をかけたる、驄馬を揃へて乘つけ、其陣の中に當て、一の綠の旗を立て、旗の上には一條の蒼龍を繪いて、東方木氣の形をかたどる、前面に三員の大將を列ねて、此旗を守らしめ、一面に青色の號旗を執れり、是青州の大將苟晞なり、其の身は青銅の鎧仗に、綠の戎衣を著け、翠帶蒼纓、碧色の盔をかうむり、龍旗の儀戟を執つて、青驄の馬に乘り、正東の位をしめ、左右に列する二人は、夏陽、高潤、其の外の副將十員、軍兵四萬二千の備なり、正西上にあたつて、一陣を列したるは、兵士みな白袍銀鎧、白馬素纓をかさりたり、眞中に一素旗を立さため、其の旗に白虎を畫いて、西方金氣の形に應ず、これも前面に三員の大將、一首の白き號旗を取り持たるは、乃是涼州の大將張軌なり、其の身は銀の鎧銀の盔日にかゞやき、素袍白馬に打乘り、劍は秋水を横へ、刀は雪になぞらふべし、左右の列將、ひとりは北宮純、一人は令狐亞なり、ならびに副將十餘員にして、軍兵四萬二千なり、正南上に一陣を擺つて備へたるは、兵士皆、紅旗赤幘、朱甲、火騮脂馬に乘り、中にたてたる紅旗の繪は、南方火氣の形にかたどり、一の朱雀を繪いて、前面に三員の大將、赤き號旗を竪起したるは、是れ廣南の仁將陶侃が備なり、其の身は猩紅の袍を著し、赤き鎧を排きかけ、赤兎火龍の駒に乘り、朱き纓、絳き幘日にかゞやく、左右の二將、一人は朱伺、一人は吳寄、副將十員をつらね、軍兵四萬二千の一手なり、正北上の一隊は、兵士すべて、皂衣、鐵兜鍪、烏油甲を著し、中立せる旗は、皂鵰旌といへるに、一の玄武を畫きて、北方水氣の形にとる、前面の三大將、一面に黒き號旗を挟みたれば、乃ち是幷州の智將劉琨なり、鐵色の甲衣、皂羅の袍に、烏騅の馬に乘りたり、左右の將、一人は姬澄、一人は劉希なり、其の外十員の副將、四萬二千の總兵なり、正中間にあたつて、一陣を擺つて備へたるは、凡ての兵士、黄なる巾、銅の鎧銅の刀、黄なる馬に乘たり、また中立せる黄旗に、勾陳、螣蛇の形をかき、士氣の象をまなびたり、前面に列りたる五員の將、各黄色の號旗をとる、是征西の大總戎、成都王司馬穎なり、其の身は黄金の盔甲、黄金の帶、黄なる

羅の麾蓋、黄驃の馬に乘たり、左右の四將は、盧志、和演、石超、牽秀の猛將なり、併びに上將十員、軍兵すぐつて、五萬人を一備に纔ひたり、右の五陣の隅に當つて、四つの陣を張りたり、乃ち是、東南の隅上を擺つて、一陣を著たるは、兵士みな紫の衣を著し、藍の幘、鐵の甲に朱き盔をかうむり、中間にたて飾りたるは、青色の絹幡に、一首紫の幡四本なり、凡て七幡にかきたるは、角、木蛟、亢、金龍、氐、土貉、房、日兎、心、月狐、尾、火虎、箕、水豹、これ東方の七宿の形たり、前面に列りたる大將、藍き號旗をとり持たるは、是れ幽州の總官王俊なり、其の身は絳き幘青袍に、鐵甲を掛けたり、左は胡矩、右は王昌、副將十人、手勢すぐつて備へたり、西南の角上に備へたる一陣、兵士すべて紫衣銀鎧、白馬紫纓を揃へたり、中間に紫の旛三本、白幡四首、上面に畫いたるは、奎、木狼、婁、金狗、胃、土雉、昴、日雞、畢、月烏、觜、火猴、參、水猿、これ西南方の七宿に形せり、前面に列りたる二員將、是楊州刺史陳敏が備にして、皆其の方色の出立して、左に夏文盛、右に夏文華の兩將を立て、副將十員、手勢すぐつて備へたり、西北の隅の上は、兵陣みな、白冕、烏衣、漆盔、銀鎧を著けたり、中に立つたるは、白旛三本、皂幡四本、上面に畫したるは、斗、木狌、牛、金牛、女、土蝠、虚、日鼠、危、月燕、室、火猪、壁、水貐、これ西北方、七宿の形なり、前面の三員將、其の方色の出立したり、是順陽刺史張光、左は晉邊、右は息援、これも副將十人を併せて、精兵えらんで備へたり、東北角の一陣、兵士すべて、藍袍、烏鐵甲を著し、中間に皂旛三本、藍幡四本をたてたり、旛面にかきたるは、井、木獬、鬼、金羊、柳、土獐、星、日馬、張、月鹿、翼、火蛇軫、水蚓、これ東北方七星の形なり、前面の三將乃ち雍州刺史劉沈、左は衙博、右は皇甫滄、手勢すぐりて備へたり、又正東の陣の後に、一陣を著け、中間の主帥は、金盔金甲にして、黄袍を著し、黄馬に乘り、一の黄なる旗を立てたるは、河澗王の世子司馬暉なり、輔翼將軍刁默、馬勝、左邊の二將は、郅輔、席薈、綠の袍綠の幘をつけ、一の綠旗を立て、兵士二萬を督し、皆綠の甲衣をつけたるは、以て東方甲寅春木震方の氣をとりたり、右邊の二將、呂朗、林成、青袍、青幘にして、一の青旗を立て、兵士二萬を領し、皆青甲衣をつけたるは、以て東方、乙卯、春木、巽方の氣をとりしめ、以て接應の備となり、東陣の救の爲となり、正西の陣の背に一陣を着けたり、其の中間の主帥は、黄袍、黄馬にして、金盔をかうむり、金甲を排き掛け、一の黄なる旗を立てたるは、乃ちこれ長沙王司馬乂なり、輔翊將軍、王豹、王瑚、左邊の二將

は、上官己、宋洪、銀盔銀甲を着し、白袍にして、白馬に乗りたり、前に一の白旗を立て、兵士二萬を帶びたり、これ西方庚申の秋、兌方の氣に形どれり、右邊の二將は、皇甫商、陳珍、白き幘に水銀盔、素き袍に水銀甲を着し、中に一の素旗を旌し、督兵これも二萬人、倶に各素裝をなす、これ西方辛酉秋氣の金、乾方にかたどり、以て接應の備へとし、西陣の攻手の助をなす、西南上の陣後に一陣を排き、中間の主帥は、金鳳盔に、金頂甲、赫黃衣を著、黃馬に乘り、中に一の黃旗を立てたるは、乃ちこれ東海王司馬越なり、輔翊將軍王豹、王乘、左邊の二將、何倫、宋胄、各皆赤幘、朱纓、大紅袍を著け、渾紅馬に乘り、一の紅旗を立て、引兵二萬、凡て紅甲衣を著たり、右邊の二將は、施雄、周凱、赤色の征袍に紅の靸の馬に乘り、これも一の赤旗を靡かす、督兵又二萬なり、凡て赤衣の甲を著る、これ南方、丙午丁巳の離方を受け、救助の力をくはへ、南陣の應に備へたり、正北上の陣の背に、二陣を屯して、中間の主帥は、金豸冠を戴き、縷金甲を掛け、黃驃馬にのり、前に杏黃旗をかざす、輔翼將軍、段雄、伏尚、威風凜々たるは、乃ち是瑯琊王の嗣子、司馬睿なり、左手の二將は、龍同、計明なり、鐵盔をかうむり、綠の袍を著け、青旗を建て、黑馬に乘り、征兵二萬を整へたり、すべてこれ、綠の幘、皂衣の陣裝なり、右手の二將は、潘仁、史恭、赤巾、皂服、蒼馬にのり、鴉旗を飾りたて、これも征兵二萬にして、北方壬子、癸亥の水、坎の氣をうけて、北陣に接救ふべき備なり、東北の隅の上の背後の一陣、中間の主帥は、黃金の甲に、紫金の盔を戴き、黃袍黃馬の色をそろへ、柳黃旗を吹きなびかせたるは、范陽王司馬虓なり、左手の二將は、王曠、扈慶、生鐵の盔、藍戰服、黑馬に乘り、藍旗をまもる、部下の兵二萬、一色の甲冑を着たり、右手の二將は、周儁、黎厥、朱色の藤盔、飛魚、皂服、黑虎の紅旗を建てたり、屬兵これも二萬にて、皆な一色の號衣を著る、これ甲子、丁丑、水土の化氣を司どり、以て中軍を敵より衛ば、速に接住むべき、用心の隊兵なり、東南隅上、背後の一陣、中間の主帥は、亦皆金盔、金甲にして、赫服の莊嚴、黃なる旗を高くひらめかし、左邊の二將、卞勝、齊成、青巾に、黃なる服して、銅の鎧絲の旗をたてたり、相從ふ兵二萬、みな同色の號衣を揃ふ、右手の二將、岑紳、席正、朱甲を著し、赤き馬に乘り、相したがふ兵、これも二萬の總兵にて、黃服、紅甲、一色の號服を着し、甲辰、丁巳、火土の火氣を司どり、以て敵より中軍を攻撃つときは、正西陣頭の張、祁の二將、東北陣頭の曠儁等と、三處一所に心を合せて、一齊に助救はん用心のための、備と見

えたり、これ陸機が佈ける十六處、合せて一陣となすの法なりける、劉玄明は、衆將と與に、晉軍を見るに、其の間周回五十餘里にあまつて、連絡く事、各々次で有て亂れず、前後を相顧みて、關、張、黃、趙の等に曰く、人は言ふ、陸機は、四世の將家と、其の身また江東の豪俊たりと、まことに其の名、虛しく傳はらず、張賓が曰く、主帥等、この陣を知るや否や、劉聰の曰く、是渾天の陣なり、張賓が曰く、乃ちこれは混元一氣の陣のみ、東南西北、中央に、五星を按る、これを五方とす、四隅上に、二十八宿をくばりて、これを四維と定む、外に層なる六位を分ち、これ六丁、六甲を按りて、其樸氣、正氣、化氣の三を補うて、共に其の氣をなせるなり、蓋五方これが正氣をなし、四維これが樸氣をなし、六位これが化氣をなす、合せてこれを言ふときは、これを混元一氣の陣とは此の所以なり、若しこれ渾天の陣なるときは、兩儀四象倶に、全うあるべき事なれど、是なきときは、渾天の陣とは云ひがたし、劉聰の曰く、晉まことに、此の如く兵馬の衆き、戰將驍勇にして、陸機多能なる、此の陣以て能く破る事をなすべきや、張賓聞いて、兵は精にあつて多きに非らず、陸機この陣、未だ備はらざるところあり、これを破るに難き事なし、但恐くは中に於て變あらば、士馬を損じ傷るに免れざらんか、されば此方も陣勢を佈いて、彼を此方へ導引激して、彼れが來るを待て後ち討つべし、しからば我乃ち、必して勝べきの機あり、劉聰が曰く、恐らくは彼も亦陣を破るの術あらんか、張賓が曰く、妨げず、吾佈く陣は、昔し諸葛丞相の佈けるところ、八陣の圖法なり、八門金鎖の名あつて、數十萬の大兵に敵すべし、臣幼けなきより、其の旨を蓄うて、竊に心に學ぶといへども、恨むらくは、丞相の直の口授をうけざる事を、されば其の奥を窺ひ、其の玄き事を究めず、毎に悒みを懷くところに、其の後姜維此妙術を己が子の姜發と、臣とに授けんとて、臣は姜發より、年まされるを以て、姜發が兄とさだめて、同じく此の法の妙を授けられたり、姜公其のときに、其徽を指して、陣は止に、八卦方位の易を按ると云へども、敵人一たび其の內に入るときは、八八六十四卦の變あつて、其妙は窮りなし、兵士これを撓せども亂らず、これを撼せども動かず、若し一たび敵より、其の陣中を打つほどなれば、再び其の內より出る事あたはず、味方はまた其の害を蒙る事なし、劉聰聞いて、晉の將猛く、兵士強なり、恐くは其の出でざる事を如何して制し得ん、張賓が曰く、秘法玄妙の理あつて、內には、白虎、玄武、青龍、朱雀、勾陳、螣蛇の神あり、等閑の智を以て、知るべき所にあらず、今彼が兵、强盛にして、輿に明らかに戰ひがたし、正に宜しく陣法を圖はしめ、以て其の衆

心を怯し、其の敵より我を欺き、忽にする事を免れしと云ふに、劉聰は、衆將と共にこの言を听いて、咸く喜悦をなし、即ち臺を下つて、各兵馬を領じ、同じく張賓が下知を加へて、其調發するを待居たり、

張賓佈二八陣法一

張賓はすでに軍中に至り、諸將に分ち付して曰く、汝等諸兵將、吾が分てるところの、旗旛の號色を共にして、各々往日の舊き法を明らめ、其方位の如くに往て、以て備へよ、其晉兵に對する處を以て、正東と定むべし、かならず參差すべからず、又錯亂すべからず、事に違つて悞る事なかれと、軍士聞て應諾して去りけり、それより各方角に備を定めける、先づ正東上に、一陣を擺ひ立てたり、大將趙染、軍中に一の旗を立て、旗上の面には青龍を繪き、一の震の卦を畫したり、左手の大將は、次の弟趙槩、是も一の旗をしたゝめ、旗上には一豫象爻を畫したり、右手は乃ち幼弟趙潘、一の旗を認め立て、旗面には、一の解象を畫したり、背後には、副將五員、旗五面を認めたり、恒、升、井、隨、大過の五卦を畫して、以て震宮の變に應ず、精兵二萬四千を列ね、綠衣甲を穿ち、長鎗密々たるは、なほ高木の林をなすが如く、鎮めて生門の上に備へたり、

正西上を擺て一陣を備ふ、大將黃臣、軍中に一の認めたる旗を立つ、旗上には一の白虎を畫いて、其の上に一の兌の卦を畫したり、左手には、親弟黃命、これも一の認旗を立て、上に一の困の卦を畫したり、右の手は、番將の脫弓、一の旗を立て、旗上には一の萃の卦を畫す、背後には副將五員、旗五面を立て、上には、咸、蹇、謙、歸妹、小過の五卦を畫し、以て兌宮の變に應じ、精兵二萬四千をつらね、素甲衣を穿ちて、景門の上に備へたり、正南上に一陣を擺つて、大將、關防、軍中に一の旗を立つ、旗上には一の朱雀と、一の離の卦を畫し、左の側には、親弟關謹、これも一の旗を立て、旗上には旅の卦を畫す、右の側には從弟關山、旗一首を立て、鼎の卦を畫したり、背後には、副將五員、旗五面を認め、旗上には、未濟、蒙、渙、訟、同人の五の卦を畫して、以て離宮の變に合したり、精兵一萬四千人、こと〴〵く大紅の衣甲を穿ち、戈矛燁燁として、さながら烈火のごとくなり、これまた鎖めて、開門上に備へたり、正北上に一陣を擺つて、大將張實、軍中に一の旗を立て、上に玄龜を畫き、其の外坎の卦をあらはす、左側に親弟張敬、これも一旗を立て、節卦の象を畫す、右の側には邊將峽蒙、一旗を立て、屯の卦の象をなす、背後副將五員も、五面の旗を認め、既濟、革、豐、明夷、師の五卦をしるして、

以て坎宮の變に合したり、精兵二萬四千には、皆皂衣甲を穿ち、雄聲剛々として、なほ潮の聲の洶々たるがごとくに、休門の上に備鎭めたり、西北の角の上に一陣を擺ひ、大將胡延晏、軍中に一の大旗を立て、上に一の飛虎の形と、一乾の卦を畫す、次の弟、胡延攸、これも一の旗を立て、姤の卦の象を畫す、右の側は幼弟胡延類、一首の旗の上に遁の卦を畫したり、背後には五員の副將、五面の旗を立さため、否、觀、剝、晉、太有の、五の象をあらはし、以て乾宮の變に合せたり、領兵二萬四千を粹けて、盡く皆、青衣銀甲を着し、畫戟璘々として、なほ銅城、鐵壁の如くに、傷門上を堅めたり、東北角上に一陣を備へ、大將、楊龍、軍中に大旗一面を立て、上に一の勾陳、飛蟒の形を繪き、合せて一艮の卦を畫したり、左の側には楊興寶、これも一首の旗を竪て、上に賁の卦の象を畫せり、右の側は桃虎、一旗の上に大畜の卦を畫く、背後の副將五員も、五面の旗を連ね立て、損、睽、履、漸、中孚の五象を畫し、以て艮宮の變に應ず、精兵二萬四千を以て、揭衣甲を穿ち、斧鉞錚々として、堅城石壁のごとくに、死門の上を鎭めたり、東南角上に、一陣を擺ひて、一員の大將、藍面紅髭なるは、南蠻猛獲が孫、孟彪なり、軍中に一の號旗を竪て、旗上に飛夔の形を繪き、ならびに、一の巽の卦を畫す、

左の側には親弟孟豹、これも一面の旗を竪て、上に小畜の卦をしるす、右の側は、沒突羊、同じく一の旗を認め、家人の卦を畫したり、背後の副將も例にならつて、五面の旗に、益、無妄、頤、蠱、筮盍の五の卦を繪き、以て巽宮の變に應ず、發兵二萬四千人、皆青衣甲を着け、鋼叉戛々、なほ密しき柵木を重ねたるが如くして、慈門の上を鎭護せり、西南上に一陣を開き、大將、劉伯根、中に一黃旗を竪て、一の腦蛇の形、一の坤の卦を畫す、左手は、新將陳國寶、別に一の旗を立て定め、上に復の卦の形を畫す、右手は、親弟陳國寶、一の旗上に、臨の卦の象を繪く、背後の五員の將、五面の旗に泰、夬、需、比、大壯の五卦を畫し、以て坤宮の變に應ず、精兵二萬四千、各黃衣を穿ち、鈀鍥紛々、堅き事巖岩峭壁の如くにして、杜門の上に鎭護せり、張賓すでに諸將を分ち畢り、重て關河、曹疑、駿安、趙周、兵士四萬を督して、滍河を守りて、營中の根による、劉欽、靳都等は、兵三萬を督して、將臺を保護らせたり、又劉宏、靳準等を調へて、將臺に上らせ、廳の旗をとつて、諸將を下知せしむ、凡そ東を擊せんと思ふときは、東を指し、西を擊しめんとするときは、西を指す、緊しきも慢きも、時に應じて、東西南北互に助け援はしむ、又王如、王伏都は、精騎八千を都べ領じて、陣前にとゞまり、以て

救の應に備へたり、王彌、劉靈の二先鋒には、中軍を輔翼せしめたり、主帥劉聰は、こゝに西山に登りて、其戰をぞ見たりける、

張賓戰二陸機一

晋の成都王は、陸機と共に、東山の將臺に登りて、漢の陣勢を觀望めり、其の漢陣の成列、すでに定るを見て、陸機が曰く、人は言ふ、賊中の張賓、智足り、其謀事多しと、今此の陣を觀るに、亦別の大才なし、惟にこさかしき詭計あるのみなるが、何ぞ道ふに足らんやと、慮志が曰く、彼が兵のそなへを見るに、約にして亂れず、嚴にして法あり、何ぞ無能なりと云はん、吾恐くは彼めは、彼孔明、姜維が秘法を授り得たらん事を、中々以て蔑ろに視て、彼が奸しき謀に墮ちん事を、陸機聞いて曰く、われ彼の陣法を參得するに、これを破るに易からん、大王等此の陣の名を知り玉ふや否や、成都王の曰く、これ八卦の陣なり、陸機が曰く、其の旌旛を觀るに、八卦を按じて、其の旨を立つるときは、これ八門金鎖の陣たりと云へども、此陣法は、古より今を歷るまで、惟り諸葛孔明のみ、能く其妙を極めたるばかりなり、臣が祖父、つねゝこれを稱したりし、其餘は道にたらずと語る、成都王の曰く、何をか八門の陣とはするや、陸機が曰く、休、生、傷、杜、景、死、驚開、これを八門と云ふ、しかしながら、常人の窺れに知る所なり、張賓幼うして胡中に入り、焉ぞ其の玄妙を知るべきや、安にこれを以て、我を惑はさんとす、且へ其の兵二十餘萬に過ぎず、又何ぞ破るに難からん、大王は、慮參軍等と、臺上に在りて、法によつて下知したまへ、悞りあるべからずと云ひ訖りて、臺を下り、石超、牽秀、和演、陳昭、郭勵、郭嵩の六將を領じ、直に先鋒の陣中に至る、こゝに於て、兩軍砲を放ち鼓を擂つて、各皆構を整へ陣を出づ、陸機は張賓を指し、高く喚て云ふ、汝吾が陣勢を見て意得べし、吾れ此の如くの雄兵を以て、何の戰か勝さらん、何を攻めてか兢たさらん、尚はやく歸り降らずして、天威を拒ぎ爭はんとするや、張賓聞いて曰く、雞り粟粒を見て、枉げて其の口を重しとす、汝自ら其の兵の雄なると、其の陣の美に誇り、獨り我が陣を見ずや、汝ち吾が兵と戰つて、活きながら捉へらるゝ事を被らば、此の如く矜り傲るには及ぶまじ、陸機が曰く、我は乃ち大國の元帥、怎ぞ僞反寇と、口上を比べん、汝が此の八門の陣は、吾部下の小卒も、またよく曉れり、敢て我が陣に、誇り勝事をなさんや、張賓答へて、汝が混元の陣、徒に蹈み褻ぬとも、これ死籍のみ、いまだ氣化の新に生じ出ることはりに及ばじ、これ空しく圖のみを覺りて、

千里にかける職を、求むる事を知らじと云ふ、陸機は已たゝに、此の八陣を破るべきの術ありと曉りたれば、遂に令を傳へ、誰か出て、此の陣を打つべき者あると云ふに、張方、祁弘、二人齊しく應へ、願くは往かんとのぞむ、陸機見て、汝二將は、乃ち三軍の主なり、未だ擅にこの處を離るべからず、且らく別將の先去りて、一たび試むを待ちて後、其動靜如何と見定め、將軍等は、其のときに親ら出で、一鼓にしてこれを破り、張賓を擒にせよと云ふ、言もいまだ終らざるに、鑾鈴の响く處を見れば、跑け出す兩員の大將、向前がけ叫んで曰く、小將等不才たりと雖ども、願はくは陣を破らん、聊か尺寸の功をも建つべしと望める一將は、長沙王の麾下の王豹、一人は東海王の麾下の大將王秉なり、陸機大に喜んで、汝二人肯て去らんと思はゞ、吾言に依るべし、しからば必ず悞りなからん、敵の陣を見るに、正東の角の上に、綠の衣を穿ち、青龍の旗を打たる處より、殺り入るべし、乃ち是生門なり、これより直に、西門白旗の下に至れ、これ景門なり、一たび彼の處に至らば、敵の陣を攪し、其後外に出づべからず、右に遶りて、大紅旗の下に殺り向へ、これ南門の開門なれば、即ちこれより殺り出でよ、吾こゝなたより、兵をいたして來應せん、那時力を協へ合せ進み、復たび東門より殺出づべし、吾れ大兵を以て、繼いて至らん、しからばこゝに敵陣をば、心易く破りつべしと說く、二將はすでに命を令じて去りければ、陸機また、順陽の大將丘武、豫章大將岑端とを喚んで、分ち付して曰く、僞二人、兵一萬を引て、前み去て接應せよ、二將すでに東門の中より殺入たり、陣中亂れずんば、只南門に於てこれを伺候へ、久しうして二將出でずんば、即ち又打入て、これを救助け、共に東門に殺り轉り、以て大兵と一に合せよ、二人は聞いて應諾して去りにける、斯て王豹、王秉の兩將は、青龍旗の下に至り、皷ち噪ぎ殺て入る、陣中の漢兵是を見ても、全く靜りて動搖せず、晉將是に怒りをなし、遏り近づいて戰を求むるとき、漢の陣より射出す矢、雨の脚より多して、これがために射倒さるる晉軍の前手、其數を知らず、されども漢陣は、矢を射出したるばかりなり、王豹、王秉の二將、其旗の密しく、兵士の堅固にして、內に變計をかまへ、欄り阻てらるべき體を見て、こゝよりは安く入られじと、直に正西の景門に往き去り、未だ門に到つて、戰をも交へざるに、只見る漢兵の旗旛一に展うて、兵士裂け開いて、忽ち白旗のありし所の、跡かたも見ず、佈て一帶の長城のごとくなり、晉將はこれを攻打たんとすれども、忽ち東西南を辨ふる事だに能はねば、大に心疑ひ驚き、漢軍に近づく事もあたはず、角ては叶はじと見る所に、右の方の紅旗

は、其まゝにて亂れざれば、晉の二將は遂に身を轉して、南を望み去つて殺かゝる、漢兵なほ靜つてこれを赶けもせさりければ、王豺、王乘、すでに紅旗の本に至り近づき、兩邊に分つて是を擊つ、しかれども漢兵ども、爰もなほ動かず、晉の二將は大に怒り、力を奮つて攻入る所に、忽ち听、一聲の炮のひゞき、响くと思へば、兩員の漢將、後より赶け至る、王豺、王乘、方に身をかへし、抵戰はんとして、又皷の震ふ所を見るに、關山は手に大刀を舞はし、陣を出て、吶喊し、刀を兩手に取つて、一齊に手を動じ、王如、王伏都と共に晉の大將、王豺、王乘を、取り住めて殺り回れば、晉將どもゝ、今は身を脫るゝ事あたはず、王豺が乘たる馬は、關山が刀にて打傷るれば、王豺たまらず落馬せしを、あへなくも漢兵ども相聚つて、生ながら細かけて引立る、王乘これを見、大に驚き、馬を拍て首を轉らし、東の方、綠の旗の處を望んで、殺り去らんと馳せけるが、いまだ出も果さるに、先鋒王彌、劉靈、あわたゞしく突入るに、王乘大に驚き、接へ戰ふ事、未だ十合にも及ばずして、劉靈が一鎗にて、馬より下に打落さる、これをも漢の軍士相聚り、綁りて引立てたり、丘武、岑端は、漢中の砲の响を聞き、王豺、王乘が、未だ出來らざるは、これ戰の初りたるかと、即ち紅旗の下の開門中より殺り入て、相助けんと進みける、漢兵ど

もはこれを見ても、隔て止めんともせずして、通しければ、晉の二將はたゞ、戰塵の起方を望んで進み、東門の綠旗、生門の下に至り、意ふに陣を衝て出でんとする處を、趙染が旗、一たび搖いて、精兵滾れて殺出す、丘武、岑端の二將、忽ち東西南北を辨へず、如何せんと茫然たるに、王如、王伏都、王彌、劉靈の四將倶に到り、遂に丘武は、王如が手に生擒れ、岑、端は趙染が爲に生擒らる、各一人宛を擒として、張賓が前に引立て來る、張賓自ら生擒に向つて、汝等命を助くる間、はやく汝が晉軍に返り去つて、陸機に云ふべきやうは、快よく、洛陽に回り去つて、兵書を先づ讀ならひ、陣を演の法を稽古せよ、學び得たらんと思ふとき、再び來つて戰ひ、張孟孫が、本事あるところを、賭すべしと云ひ含め、二人共に大拇を斷り、墨を以て臉に髯をつくり、馬に乘せて敵陣に追放しける、二人の晉將は、口惜しさかぎりなけれども、是非に及ばず羞を忍び、頭を抱へて走りかへりたり、これより先に、晉軍の打もらされたる小兵ども、逃げ回りて東山に上り、成都王に報げて、味方の四將のこりなく、敵の爲に捉へられたりと談る、成都王大に怒り、乃ち公師藩等を喚して、親ら軍前に至り來つて、陸機に見え、吾が大晉國を傾くるの大兵を以て、賊の一陣をだに破る事あたはず、剩さへ大將を囚にせられ、辱を受く、此の

恨何ぞ消すべきと、言いまだ畢らさるに、丘武、岑端の二人、返り來り、倶に漢軍の變化窮りなく、一たび其の中に入ると否や、旗旛聊か動くよと見るに、忽ち東西南北を辨へず、内には螫將數多あり、螫兵もまた數千、皆々赤脚にて步行し、螫く藤牌撥刀を以て、地を捲いて來り、人をば縱にとらへ、馬をば妄に砍倒す、是れ放つひに打負けたり、かしこにて、兎にも角にもなるべき身なれど、この事を申さん爲ばかり、辱を被りなから、これまでは來り至れり、陸機が曰ふ、何故に儞等をば、放ちてこゝに回すらん、其とき丘武が曰く、張賓我等を呼んで、儞等回りて、汝が元帥に斯の通を語れと云ひしと、張賓が口上を、悉く演說し、其の上に切れし所の指を出して、傷を見せ、今は是迄にて候と、刀を取るべき樣のなければ、二人共に舌をくはへ、あたりの石に頭を打つけて死たりけり、陸機大に怒をなし、賊胡此の如くに悖れるや、其の巢穴を洗さずんば、誓て軍を回さじと云ふ、成都王曰く、衆兵を合し、總がゝりにつき入て、面あたりこれを攻めん、味方の大軍を以て、心を合せ推すならば、たとへば華山泰岳なりとも、など推倒さであるべき、まして賊の一軍をや、陸機は是を思按するに、一陣だに明に攻めて、戰ふ事あたはず、重てみだりに戰つて、諸人の笑を取らん事も、はかり難しと思ひければ、乃ち誑の言をなして、太山は撼かし易くとも、兵陣は搖かし難し、此賊果して、姜維が傳を授かり、孔明が遺法を繼ぎたり、其の中變化多端にして、鬼神も測る事なけん、若したゞ亂にこれを攻るならば、一へに死傷を犯し、こゝに天地の氣に逆ひ、必ず其咎を受けん、まさに八方の兵士に下知して、敵の衆陣に敵し住め置き、精銳の味方を選んで、東南の二處を攻打て見ん、漢兵ときに懈動せば、これ諸葛が玄妙を知らさるなり、其とき四面倶に進んで、彼を破るべきなり、若し其の軍端然して、動かずんは、卽ち宜しく攻むべからず、且らく兵を收め、明日又別の計を行ふべしと云ふ、成都王聞いて、此の言是なりと云へども、但長沙、東海二王、兩員の大將を折き去る處に、與に仇を報ゆるの鬪をも、爲さずして可からんや、陸機聞いて、乃ち分を下し、さらば一戰を爲申さんと、總軍を合せ、張軌を以て頭の陣と定め、劉琨を後への應となし、共に東陣生門の上を攻めさせ、又李矩を以て頭の陣となし、苟晞を後應となし、南陣開門の上を攻さしむ、其餘の諸陣を分ち、西北の處々に往き向ひ、遠まきにせめ寄せて、門々を拒ぐの手當を爲さしむ、斯て張軌、李矩の二軍、東南生開の二門を、すでに嚴しく攻擊といへども、漢軍すこしも動かず、一面に防牌を向前につき並べ、長鎗これに次ぐ、其の後に弓箭をそろへ、陣によつてこれを射る、雨の

あしよりしげき矢に、晉軍共射立られ、暫くも悚へず、紛々とみだれ倒れ、死する者算しらず、陸機是に怒をなし、北宮純、郭默の二將に命じ、晉軍より射手を揃へて射立ると雖ども、漢軍の防牌をつき並べたる事、さながら墻壁の如くなれば、悉く傷る事あたはず、陸機敵軍の動かさるを見るより、劉琨、荀晞を進めて、並び進ませ、又張方をして、往て張軌を助けさせ、祁弘をしては南の方、李矩が陣に力をかたへて打しむ、張賓はまた、劉靈、王伏都をして、南に往て三關を助けしめ、王彌、王如を東に往しめて、三趙を助けしむ、兩邊の陣相持し、午より申の後に及まで相戰ふに、漢將は、備を立し場處を、尺寸も退ぞかず、晉兵は、こゝに於て、討るゝ者萬を以て數ふべし、其の外手負傷れに及ぶ者は、算ふるに隙あらず、陸機つひに漢軍に尅つ事、あたはさらん事を察すれば、軍士を召んで曰ふ、倆漢陣へ行いて曰ふべし、我が元帥言あり、今日すでに暮んとす、倆が兵死を以て守れば、今日の內には勝がたし、其の上時すでに日晚に及べば、又互に戰を合する時節に非ず、且らく兵を收めよとなり、これに因て、我が兵を收むるなり、明日亦我れ陣を布き、汝が來りて擊つ事を待ち、明白に戰ひ、一場を決し、こゝに於て高下を見んとて、使者を漢軍に遣しける、張賓これに答へて曰く、汝が來つて、我が陣を打得る事あたはず、生前すでに王豹、王秉、丘武、岑端を擒にしたる、一戰の負を見るより、若し再び退き走らずして、此の處に永居をせば、我に又汝等も、捉へられん事を恐るゝがゆゑに、辭つくりて退かんとすや、我汝が心を、好く知りたりと雖ども、汝が心に任せて、今度は免し回すと云へとて、晉軍より使に來る小兵をば歸しけり、

通俗續三國志卷之三十二

晉漢再大戰

成都王と陸機とは、張賓が返答の趣きを听くより、其氣胸膛に滿つれども、怒り發する所なければ、只に含忍するより外なく、令を傳へ、各軍を繰ひて、且らく此の陣を退くべしとて打立つたり、斯て張賓は、劉聰に向つて、それ兵事は、詐るに厭きたる事なし、急に各方の將士に分ち附けて、晉兵の一たび退くを待ち、路を分つてこれを擊たば、必して全き勝を得べしと云ふ、劉聰きいて大に喜び、八方の諸將へ飛使を遣し、令を各所に傳へて曰ふ、汝等往日倶に爭うて、未だ功を建る事を得ず、今日宜しく、各路を分ち力を効し、晉兵の退き動くを待つて、一齊に追うてこれを襲ふべし、八方の將官令を得て、皆悉く轡を整へ、以て是を待所に、申の時の末に及んで、晉の後軍より先づ發し、それより次第々々に退き動きけり、漢將共是を伺つて、倶に起つて、各みな勇を奮ひ、前を望んで馳せたりけるが、晉の諸軍多ければ、一回には切止め難きを以て、劉伯根と胡延攸は、漢軍の前發となり、東海王、河間王の兵に衝かゝつて、これを殺りとらむ、こゝに於て晉軍各路の兵、一度に亂れ立つて倶に走るを、漢兵共この氣に乘じ、爭ひ競ひ、先んじ進みて殺亂せば、晉兵の死せる屍、壘々とし、積れる血盈々たり、漢軍も追ふ事すでに二十餘里に至つて、日もはや暮れける故に、兵を收めて寨に回りける、こゝに於て張賓、人馬を計點して見るに、兵を折きたる事七八千、傷者一萬に近し、成都王は漸く寨に北げ入り、軍政司に命じて、手負死人の簿籍を點檢せしむるに、人馬を折去る事二萬、敵兵に降り加はる者一萬、手負傷者萬餘人、副將十餘員、上將四員に及びたり、かくて兩陣、韓陵山下に對陣する事、一月餘りにして、其の間大小の戰ひ數度に及び、晉の勝をとる時もあれば、漢又晉を折く時もあり、互に相勝負する程に、其の內に晉軍の名ある大將、七員を折き死し、漢には胡將四員を討る、晉兵はもとより大軍なれば、番々の備を每日改め、輪轉つて是を攻れば、漢兵これによつて、日夜敵の爲に撓されて、隙き備ふるに苦しめらる、張賓、劉聰に向つて曰ふ、今晉の兵勢盛なり、しかも又敵は我が地にあるなれば、逸を得るの勢あり、我は他鄉に在つて勞するの氣あり、彼は內地にして主の名あり、我は他の境にして賓の名あり、夫兵法に、逸を以て勞を待つ、主賓敵する事なしと云へり、されば兵法に於て此の如きを忌む事は、最これ甚し、且へ我が軍兵粮少ければ、こゝに在つて久しく敵と對陣しがたし、されば兎に角こゝに相持じて、終に勝をとるべきの道、心得がたき處なり、劉聰聞いて、しからば何を以てか此を行はん、張賓答へて、今兵をまとひて一まつ退き、漳河を過ぎ魏郡を保ち守り、濠を深くし城を堅くしてこれを守らん、此の如きときは、我は逸し彼は勞し、我は主となり彼は客となれば、こゝに反復の勢となるなり、其の內又平陽の兵、到り得るが如くんば、再び議をなして、進取の事をなすべし、庶は軍兵をして、怨み違はしむる事なかれと云ふ、劉聰これに從つて、乃ち劉伯根、趙濬、陳國寶に命じ、倆三人、帶兵一萬を引い、漳河の邊に往去つて、竹木を伐り伐て、夜を日に繼でこれを編み、筏栰に作れ、又河を隔て向ふの方に、大寨を二箇所にたて、赶け來るの敵を防の用意せよとあれば、三將令を承り、委細畏り候とて討立ちけり、張賓は

衆を集めて議して曰く、我今すでに兵を退くるの意あり、明日晉若し、再び來つて、戰を索めば、衆まさに心を用ひ力を協へ、他の一陣を殺りみだし、晉軍の銳氣を少しく挫くに於て、其の氣に乘じ、夜に至つて寨を拔き拂ひ、河を過ぎ、魏軍に到り、又共に守り戰ふによけんと、諸將よろこびて令を听く、然る處に次の日早天より晉の成都王、親ら諸將を率ゐ、陣を韓林の右に結んで、韓陵山と相隔つ事四五里なり、こゝに言をあげて云はしむ、晉軍十路の兵を以て、漢營を襲ひ伐つと、劉聰、張賓、この事を聞くより、王彌、劉靈、關防、張實を、左右の前隊となし、關謹、張敬、胡延攸、黃臣を、左右の後隊となし、其の餘の王如、楊龍、趙染、關山も、次ぎに從つて列を擺ひ前み、晉兵と相對して備をとり定む、こゝに於て、兩陣に擂つ鼓の聲雷をなし、陣列を整ふるとき、成都王は親ら親將一班を帶領し、張方、祁弘と共に陣頭にすゝんで、鞭を擧げて劉聰を指し、恩を忘るゝ胡狗、曾て汝に經史を賜つて、讀習させられたるに依て、定めて略此の事を覺えつらん、今汝が十分一の兵を以て、大國十倍の兵と、戰を抗べ敵せんとするは、何を以てかこれ、鄭の一小國、楚に敵するに異ならんや、倘ち若しこゝに於て迷をとらば、必ず張角が儕の如く、身を裂し祀を絕に遂ふべきや、張賓聞いて高聲に打笑ひ、汝ぢ陸機がごとき、亡國の餘殘をたのみ、陣を助けて肆に言に矜るや、尙まだ陣を闘はしめて陣にまけ、戰を闘はしめて、戰ひ敗るゝ事をも慮らず、輕々しく、亡國の庸才を信じて、悟らずやと云へば、陵機は是を聞き、大に怒つて曰く、反叛の狂胡、汝等すでに是釜中の魚、なほ死の頃刻に在る事をも知らず、一勺の水を以て大洋と思ひ、自ら所を得たりとほこるや、張賓聞いて曰く、汝はこれ釜火の虫、人を照すの光あつて、自ら燭すの明なく、徒らに群をなし、草中の露に集り、自ら志を得たりと思ふや、知らず二尺の童も、輕羅小扇を以てこれを撲つの事を、汝ぢが生死も釜の如く、我掌を反すの內にあり、成都王は張賓が言を听き、怒り惱む事十分にして、其氣胸臆に滿ち、大に衆將を喝令して曰く、此等の賊徒、何ぞ與に講論するに足らん、よく此の逆賊を擒にする者あらば、賞するに千金を以てし、侯とするに萬戶を以てせん、前隊の石超、韋秀、是を聞て馬を躍らし、双びて出で曰く、更に賞と侯をば望むにあらず、戔々此者を、生ながら擒にして、大王の怒を安うせんと進む、漢軍には黃臣、趙染是を見て、早くも向前にすゝんで敵し住む、敵味方四員の將は、それより武を奮ひ威を揚げ、惡戰こゝに二十餘合、火を燧つて採合へども、双方勝負を分さるは、あだかも龍の雲裡に爭ひ渾して、虎の風中に鬪ふが如くなり、

成都王、其惡戰過ぎてみだりなれば、恐くは其親將を失する事あらんかと、急に張方、祁弘二人を召び、倆等殺出で、戰を助けよと下知し玉へば、兩人すゝんで陣前に至る所に、又王彌、劉靈、兩員の漢將に拒ぎ住められ、こゝに於て張方と王彌と、刀を以て刀に對して、韓林の地界を砍り翻し、祁弘と劉靈は、鎗を以て鎗に對し、漳麓の山關を截り倒すがごとく惡戰す、此の四將のありさま、棋手當敵に逢へるが如く、いづれも勝負は無かりける、こゝに范陽の大將王暢、南陽の大將の卞勝は、敵味方八將の戰ふを、羨ましくや思ひけん、亂れに乘じて、漢軍の中へ殺りすゝみ、直に中軍に入つて、劉聰の麾蓋を衝んとして、いまだ門旗に及ばさる處に、關防、張實左右より殺出で、凡て十二將のともがら、各雄威をふるつて、一個の鋼叉亂舞し、心中には諸將の頭功を、奪ひ取らんと要むれば、一個は大鎚を飛せ捲き、千軍の手段をこゝに顯さんと威を振ひける、關防、張實等、もとより英雄の拔萃たりと云へども、壞敵軍をやぶり、少しく力も倦みぬる處に、晉將共死を捨て、衝きかゝる鋒さきの勢ひなれば、卒に勝を取がたく、すでに三十餘合に及でも、猶勝敗を分たさる處へ、關謹は先より陣前に待かけて至りしが、來てこれを助けなんと思ひながら、顯に衝てかゝりなば、又晉將共の來り止めん事を思ひて、こゝに二の暗計ありと、弓を取り箭を拔いて、雉はつて軍中に入り、王暢に向つて、竊に覘を定め、一箭を射たりける、過たず王暢が、乘たる馬の胸に中りければ、この馬にはかに一躍りして、王暢を取つて地上になげ出す、關防是を見て、すかさず大刀を揮起し、王暢が頭を兩片に砍わりたり、卞勝これを見、心驚き膽落ちて、おぼえず手慌しく脚亂れ、馬を滑びて走らんとするを、張實すかさず赶けて、一鎗に卞勝が、逃げゆく所の背心を刺したれば、これも馬より下に、落ちてあへなく死にたりけり、半時ばかりの其の中に、兩員の晉將、さしも猛なる者ども、花ちりて果を結ぶは、哀れなりし事共なり、關防、張實は思のまゝに勝をとり、馬を拍て直に石超、韋秀が方に馳せ向ひ、高聲に叫びける、只今王暢、卞勝の二將軍をば、打取てこゝに來れるぞ、其の者共をも逃さず打取れと云ふ、石超、韋秀これを听き、心中にはかに怯れを生じて、黃臣、趙染の二將をたに、尙ほ戰つて下さゝるに、焉ぞ四將をならべ、二人にて抵とめんや、併し此の所を退んにはと、乃ち馬頭を轉じ陣を撥ひ、東に向つて走りたり、漢の四將いかゞ思ひけん、是をば赴かけずして、一齊に馬をならべて、張方、祁弘が方に殺りかゝる、張方、祁弘、これを見るより、身を開かんも所なく、大に敗れて走りたり、六員の漢將、いづくまでか逃さんとて、後に繼いて赶けゝる、

陸機勢の敗れに及ぶを見て、急に紅旗を麾き、公師藩、北宮純、高潤、王曠等の、三四十餘員の大將を下知して、頭を分つて敵し住めしむ、劉聰は、六員の大將の、晉軍に陷ると見るより、急に二十四員の上將に下知し、殺出して救ひ助けしむ、青州の大將高潤は、漢將の盡く陣を拂つて來ると見るより、只一騎馬をかけ出し、逕に自ら漢の中軍を衝て、直に張賓、劉聰に殺てかゝる、折しも劉聰の側には、張賓が子の張雄ばかりありけるが、此ありさまを見るより、慌しく鎗を執て敵しとどめ、戰ひ二十餘合に及べども、兩方少しも相ゆづる事なし、劉聰は張雄がいまだ陣上に出でし事のなき者なれば、其の失如何と恐るゝが故、早く弓を挽き、馬を出して一矢を發つに、あやまたず高潤は、弦に應して馬より下に倒れたり、王豹、太史賓これを見、大に怒つてかけ來り、又劉聰等に馳むかふ、劉聰大に怒を發し、刀を横たへて張雄と共に、各一人づゝを收り止めて、相戰ふ事いまだ五合にも及ばざる間に、王豹は劉聰が刀を奪つて、逼り近づく一刀を架そんし、砍られて兩段に別れける、太史賓是を見て、大に驚き心慌しく、鎗法の亂れけるにや、これも又張雄が一鎗に刺死さる、時に劉聰氣滿ち性發し、馬を放つて赶け進めば、漢の衆將、元帥の、親ら至るを見るより、自ら勇氣百倍して、死をかへり見ず、晉軍に突き入りたり、こゝに於て漢元帥手づから晉の副將四員を斬り、直に陸機に殺りかゝる、陸機、成都王等は、あまりに事の嚴しければ、叶はじとや思はれけん、後にぬけて走り行く、諸侯の兵共、總大將の走るを見るより、何かは以てこらふべき、盡く潰れ立て、われ先にと走りゆく、張賓は是を見て、大に悅び、衆兵を催し、力を盡して齊しく進み、晉兵を追擊にしたりける、これに依て晉兵の道上に討たるゝ者、其の數をしらず、死屍地に遍く、哭する聲天に震ひける、衣甲をすて刀鎗をとり落すは、途の中に滿々て、足を進めん樣もなし、かくて漢兵も、强ひてこれを追はんともせず、兵を收て回りける、張賓寨に歸りて、人馬をこゝに點檢して見れば、兵士を折く事二萬に及び、中にも將將、脫弓、鉄矛を始め、副將八員を失ひける、成都王等も又寨に至りて、人士の數を算へ見るに、大將高潤、王豹、太史賓、王暢、十勝を始とし、副將十餘人、戰卒四萬を折き去り、其の外手負傷を蒙むる者は、中々記すにいとまあらず、此の韓陵川の戰は、漢、晉、第三場の大戰の、其の一個とこそ聞えけれ、

劉聰退兵遭晉敗

すでに漢の張賓は、晉軍を思ひのまゝに打破りければ、即ち衆

と共に、寨に回りて議して曰く、今幸に諸公力を協へ、大に晉兵の一陣を破りけるゆゑ、敵の氣すこしは沮みぬらん、我れ先立て人を遣し、漳河中を見せしむるに、緯柵もすでに調ひたり、然れば此の二更に至りて打立て、此の所を退くべし、汝等宜しく甲を解く事なく、早く飯を遊らしめ、錢粮器械をとり持ち運んで河を過ぎ、さて天明に至るときは、盡く渡りゆき、寨によつて拒ぎ守るべし、夫より漸く退いて、魏郡に入らんときは、晉兵多しと雖ども、亦我を奈んともする事なけん、衆將皆こゝに令を聽いて去りける、張賓又、曹嶷、襄安、王伏都、桃虎等に令して、帶兵五萬を率ゐさせ、押送粮使となし、逕ちに魏郡に行かしむ、再び張雄、靳準、靳都等に、元帥劉玄明を保護させ、先立て漳河の西境、新寨の所に到つて安住せしむ、又こゝに王彌、劉靈、關山、胡延攸の四將を呼び、兵四萬を領じさせ、路口の險所に伏さしむるは、以て晉兵の追來るを防がんための心得なり、再び又孟彪、孟豹、楊興寶、麾全を喚んで、兵士二萬を率ゐさせ、漳河の近所に伏しめ、以て接應に備へたり、又關防、張敬、黄臣、楊龍の四將を、漳河の岸上に伏さしめけり、是は追兵のあるを待ち、力を協へて、敵兵の後を斬りとゞめん爲めなりける、かくて手分も定まれば、一齊に渡を越しにける、中にも趙染、趙槩、黄命、胡延安等は、衣甲等の物を收拾ひ、共に漳河を望んで去りにけり、さても成都王は、漢兵の爲めに殺り敗られ、各王諸侯を聚め會し、俱に軍中に於て、計議をなしにける、又恐らくは張賓がために、如何なる暗計を以てか、若し晉の營寨を劫し燒れんかと、こゝに細作を四五回に發し、密に漳河、銅雀臺の基に行かしめて、敵漢の消息を窺せたりけるに、回報じて、今夜漢の營中燒火亂明にして、兵馬皆動き、西にむかつて去行きたり、我等はたゞ、遠々に觀望みたるまでにて、敢て近くへ前むで看るにあらずと云ふ、陸機聞いて吾これを考ふるに、此の賊の連日に兵を折き、其の上粮米の鮮少ければ、定めてこれ走れるに疑ひなし、諸大人且らく散じ去る事なかれ、速に重ねて細作をつかはし、敵のやうを探らせ、其の後備を以て追擊つべしと云ふ、程もなく忽然として、先に遣したる、探子の飛馬又到りて、漢の兵將、甲粮車仗皆ことごとく、搬び去ると云ふ、陸機が曰く、此こ賊寇、吾が魏郡を暗に襲はん事を慮り、其もし魏郡をうたれなば、其の歸路を斷きられん事を計るが故、先立て走り回り、保守らせたるは、これ逸を以て、我が勞するを待つの計策と聞えたり、此の機會を失ふべからず、各宜しく諸將を勵まして、味方勞苦を辭退せず、すみやかに進んで、漢軍の後よりこれを擊とめよ、彼の

軍すでに動き立ちなば、復び戰ふ心はあるべからざるぞ、必して敵將を獲にすべき事、こゝにあり、漢軍一度敗るゝと見ば、彌〻後に隨ひ逼り去り、彼れを城に入らしむる事なかれ、然る時は、前より城を守るの賊も、又必ず城を棄て走らんぞと計ことを定むれば、成都王大に喜び、即ち石超、牽秀、和演、陳珍、長沙の將、蜜拱、滅琦、東海の將、糜翔、柳緯等をして、先づ兵馬三萬を將ゐて、卽時に漢軍の跟をしたうて追赶け去る、祖逖、盧志の二人が曰く、張賓は詭計の極めて多きものなれば、必ず備あるべきなり、是をみだりに追ふ事なかれ、窮寇は極めて追ふべからざる者なれば、且らく天明を待て、大兵陸に續き、齊しく起らんは、方に損じあやまつ事なけん、成都王听いて曰く、兵馬すでに出でたり、今とゞむとも叶ふべからず、さらば接應の兵を行るべしと、乃ち張方、祁弘に命じ、引兵一萬を再び起し、其あとより、陸機と成都王は、衆兵の總督となつて、後に隨うて亦發せり、其の夜四更ばかりに、石超等漢寨にいたり見るに、敵一人もある事なければ、それより道程を兼倍して、しきりに追かけ進みゆくほどに、まさに漢軍に近づかんとすれば、各喜び、いよ〳〵早く馳せたりける、かゝる處に忽然として、鉋鋭の聲天に轟き、關山、胡延攸の兩將、大刀を以て砍出す、牽秀等是を見るより、連りに忙しく敵を迎ふれば、漢陣より又劉靈、王彌、勇を奮つて其の陣に突き入りける、この勢の剛強なるには、人肯て當る事なし、されども晉將董拱は、刀を揮ひて迎へ戰へば、劉靈大に怒り、鎗を挺げて、直に董拱を刺んとす、董拱これを抵めんとすれども住らされば、旋戰うては旋退き、曾て後を顧りみず、たゞ早く退かんとするばかりにして、覺えず胡延攸が馬前に推かゝれるを、胡延攸はこれを見るより、董拱が背後より、これを一刀に砍り死す、晉將滅琦、是を見て、急に來つて仇を報いんとせしが、これも亦劉靈が一矛に刺死さるれば、其の手の人數すでに退かんと色めき立つを、陳珍見て大に怒り、味方の兵士を喝令して、黒し倆等、兩軍の見る目も恥かし、逃ぐると云ふ事やあるべき、など蹈とゞまつて擊死せぬぞと、厲すによつて、晉軍やうやく靜まれば、陳珍は衆兵の當先かけ、死を抵して拒ぎ住めける、角てしばらく戰ふ内に、關山また柳緯を砍て投擲し、威を奮つて殺轉れば、晉軍遂にかなはずして、我先にと敗走す、この時に張方、祁弘が兵すゝみ至つて、これを救ひ止めんとすれども、晉兵ども後より、王彌、劉靈が追かくるに恐れをなし、吾後れじと逃げければ、張方、祁弘が軍と云へども、大潮の湧くが如く、引立てたる大軍に揉たてられ、心ならず排かへさる、兩將はこれを怒り、大音あげて制すれども、

誰れかは耳にも聞き入るべき、剩へ逃げかゝる味方の兵と、これをとゞむる張祁が兵と、途中にてせり合ふ故、返つて自家の鎗矛刀に當つて、同士打する者もあり、我が持たる戈矛に貫かれ、引かねたる族もあり、馬に跑られ人に壓され、散亂する形勢は、目もあてられぬ事どもなり、さしも勇將の聞えある、張方、祁弘といへども、今は此にせん方なく、同じく味方に引立てられ、すでに四五里を退いて、漸くこゝに軍を扎めたりけれは、王彌等も又、漳河の岸頭を望んで去たりける、成都王、陸機等の軍も、またこゝに到り、晉兵共の、漢軍の伏に遇うて、殺り敗られ、頻りに三將まで折きけりと聞いて、銳氣頓に沮んで、この事如何があらんと議す、祖逖、盧志は進み出で、これ何んの氣を落し、心に沮むと云ふ事かあらん、思ふに賊兵勝を得つれば、定めて心を放つて、まさに河を過んとせん、しかる處を味方兵をすゝめて、急に宜しく追ひつめ、其の賊兵半は渡らん處を、擊てこれを亂しなば、敵には足をためさせじと云ふ、陸機聞いて、この計を最ともと從つて、兵を急に進めけるが、恐らくは賊すでに、渡りを過きば、其の詮なからん、何とぞ敵のいまだ、半渡に至りつかざらん中に、逐つけと下知すれば、祁弘、張方の二先鋒は、飛ぶが如く衆軍に先立て進み行く、陸機は重ねて、廣州、順陽、南平、雍州、豫州、五路の兵將に命じ、卽ち往て助け戰はしむ、張方、祁弘は令を得て、風の如くに捲て前みける、こゝに王彌、劉靈の二將は、漢軍の後を斷つて殿りたりしが、後より晉軍の赶かけ至るを見ると、早くも陣脚をとゞめて待かけたり、張方、祁弘が兵も、程なく至り、兩軍互に兵を交へて、其の戰いまだ十合ならざるに、廣州の大將、朱伺、吳寄等が兵も殺り至る、胡延攸、關山これを見るより、馬を拍て首を轉らし阻て、朱伺等を敵にとる、四將まさに戰鬪ふにあつて、未だ勝敗なき處へ、又雍州の大將御博、皇甫澄つゞいて到り、吳寄等を救ひ助けんとするに、又漢軍の伏兵、孟彪、楊興寶、麋全等、喊の聲の、地を震ふを听得て、一齊に殺り至り、晉將の兵馬と、陣を結んで戰をなしける處に、暫く在つて又、丘文、岑瑞、刀魚、魏正、蔣中、應詔等併せ至りて、晉軍を助け救ひ、漢軍をとりひしがんとす、王彌はこれを見、勇を奮つて突入り、連りに晉軍の副將仲孫規等を、三人まで斬りたりける、漢兵是に勇氣を倍し、勇み進んで鬪ひける、是に於て、麋全は魏正を殺死せば、楊興寶は刀魚を擊死し、孟彪は蔣中を生捕にし、胡延攸は直に、敵の中陣の堅きを厭はで衝き入り、丘文を把て砍て兩段となしたりける、岑瑞これを見て、抵り住めんと馬を馳せよする處を、是も關山が一刀にて、遂に砍

れて失せたりける、張方等此の形勢を見るより、大に驚き、即ち戰を打すて、祁弘と共に兵を退け、暫く味方の大軍の、來り揃ふを待居たり、漢兵共はこゝに味方を收め拾うて、河を渡し、孟彪、孟豹、楊興寶、麋仝等を住めて、岸の口の押へとし、漢軍河を渡つて、既に今は半も過んとするところ、陸機は大軍を總べ司どり、四道に分つて殺りかゝる、王彌、劉靈等も、今は已に皆河に下つて、正に綽の上にあり、孟彪、孟豹、沒突羣、楊興寶、麋仝の五將、敵勢の兇狠れるを見るより、大方にては防ぎとめられじと、射手に命じてこれを射さしむれば、軍士令を承け、萬弩齊しく發し、雨點飛蝗の如くに射出しけり、晉軍是に大に射立てられ、傷死するもの多き中に、大將郭誦も、矢場に馬より射落さる、陸機是を見て大に怒り、衆を喝して、など味方よりも、射手をそろへて射出さぬぞと令すれば、諸隊の副將これを下知して、射手を陣前に立てならべ、射出すところの勁弩の箭、さながら蝟毛の集るがごとく、大勢に射しらまかさるれば、漢兵の矢に當りて死する者、其の數を知らず、これに敵對する事今は叶はず、皆々退いて、河中にこそ下立ちけり、此の時孟彪、孟豹、沒突滅、沒突羣等も、倶に射の爲に射死さるゝは、本意なかりける事共なり、晉軍これに勢を得、河を擁いて押取廻し、漢兵を攻たつる、

是に因て漢の諸將、いまだ向ふの岸に到り著さるは、取て回して岸に登り、これを防ぎ止めんとす、時すでに黃昏なれば、漢兵共皆亂れ竄くるゝを、劉伯根大に呼びて、晉兵をして吾が西岸に登らしむべからず、必ずしも死を戰頭に守つて、これを射とゞめよ、當に力を竭すべき時なるぞ、然らば前軍も又岸に登り終つて、好しこれ陣を整へ、行列をなすべきぞと云へば、趙驎、陳國寶等、是を聽て士卒を命じ、先んでこれを射さしむれば、晉軍も敵に少しは阻へ止められ、進みかねて見えたるを、晉將覩敵勢を見、大に叫んで、大功只頃刻の間にあり、豈これ些少の兵に阻て住められ、すゝまざる事のあるべきやと云ひもあへず、我が身は諸軍の直先に進んで、河に下り立ち下知をなす、大將のかく進むを見、諸卒共我れ劣らじと命に應じ、箭を放つて射るほどに、恰れむべし趙驎も、こゝに於て面門を射やぶられ、敵のために死にたりけり、陳國寶叫んで曰く、趙三郎もすでに傷を被る、料るに此の陣、まさにさゝへ難かるべし、況や前軍もすでに遠さかれば、今は意やすしと見る、劉大尉は傷を受けたまへば、早く此の場を退き玉へ、吾まさに後にとゞまつて、晉軍をば此の岸の頭にて防り斷んと、これ吾が命を、國の爲に棄るの時なり、一所に死せんは計のつたなきなり、早々こゝを退きたまへと云捨て、敵に馳向ふ、

劉伯根も今は此の談に同じ、忽ち今討死する朋輩を打すて、殘兵をまとひ、一同に岸に上つて退けり、軍の習とは云ひながら、是ぞ是非なき次第なり、かゝる處へ晉の大軍程なく、崖の下に迫り近くを、陳國寶一隊にて、これを把り住めて、暫らくは支へたれども、遂にはこれも亂箭の爲にあたつて、命を沒しけり、張方、祁弘、朱伺、吳寄、衙博、皇甫澄等の晉將ども、劉伯根が後を追つて、これを欲り止めんと、向の岸頭に迸き上れば、劉伯根すでに危き中にあつて、今はかうよと見る處へ、さきに渡せる關防、張寶、楊龍、王如等、首を轉して救應し、劉伯根を討せじとこそ欲てかゝる、張方、祁弘等、漢軍の備あるを見るより、今はこれまでと下知して、軍を止めたるにぞ、漢將共も、劉伯根を初として、それよりは意しづかに、軍をば班しけり、かくて劉聰、張寶等は、先立て總軍、こと故なく、魏郡に到著し、今は後軍の消息もおぼつかなければ、人を差し、其の安否を探り問はんと云ふところへ、王彌、麋仝到來り、孟彪、孟豹、沒突滅、沒突羣が、倶に射殺されたる事を談る、劉聰聞いて、南蠻我が爲に、忠を効して死せる事、哀れむべしくと、正に嗟嘆の間にあたつて、關防等、劉伯根を保護して至りける、劉伯根は重手多く、薄手あまた所負うて至れるを、劉玄明これを見、大尉はこれ吾が父兄

曹嶷等上平陽乞救兵

爰に曹嶷、夔安の二人は、張寶が平陽へ遣して、粮兵を請ふべきため、其の使者を撰ぶの由を聞くより、二人の將は即刻、元帥の府に上つて、承り聞く、平陽への使者を撰みたま

ふと、願はくは我二人晩夜を辭せず、急に路程を兼ね倍し、早速に平陽に行向ひ、救を求むべし、其の答應日限を期し、凡そ一月ならざる內には、返り來るべきと存ずるなり、若し一月の期りに遲り滯らば、我等二人罪を受くべし、はやく文書を認め玉へ、我等は其の內、馬に草飼ひ、人は飽食せんと云ふに、劉聰大に喜び、即刻其の用意を調へ、又胡延顥、張敬に命じて、曹嶷、夔安の兩將を送り行しむ、胡延顥、張敬の二人は命をうけ、城外五里の地までに至り、もはや何の心元なき事なしとて、相離れ引回してぞ返りける、其の後張寔は、今にも敵の寄來らんに、暫くも油斷すべからずとて、一面に諸將に命じ、各防隄の約條をさだめ付けて、城地を緊しく守らせける、按の如く翌日に至れば、晉軍の諸王、諸鎭の兵士ども、俱に漳河の岸の口に到りついて、魏郡の城を圍まんとす、成都王はこゝに於て、諸軍の總兵を收めて、盡く皆河を過ぎ營を下して後ち、陸機が營中に至り、共にこゝにて議を定め、進み取るの策を立す、陸機はこれを接し迎へて後、成都王と共に、先日の軍冊をとり出して、共にこれを計り見るに、兵士三萬を折き、傷を蒙る者一萬餘人、軍馬七百餘疋を斃し去る、外に大將の討死する者、丘文、岑瑞、董拱、戚琦、柳綽、蔣中、魏正、刀魚が等八員、副將十餘人と記したり、成都王こゝに人を差して、其の屍を尋ねとり、韓陵山の下に葬り、即日に酒をそなへて、大に士卒を賞し、乃ち衆人に問うて曰く、今賊人逃れて魏郡に入り、暫く脚を立て定めたり、これまさに何の計を以てか、賊を敗るべき、陸機が曰く、魏郡城を圍むに於て一の計あり、衆の諸侯に令して兩兩を相對し、これを一營となし、其の城の六門の要路を將つて、悉く皆把住め、敵走りて出る事を、許す事なかるべし、又八王の兵は、別に兩づゝ四營となして、皆中軍に於て下知を聞き、救應ずる事をなし、敵城內外の消息を、通ずる事を得せしむべからず、此の如くするときは、一月を過ぎずして、城中に粮盡き、悉くみな擒とならん、今漢賊のありさまを譬へなば、鳥を樊籠に入れて、其の關鎖を緊しくなすが如し、彼れ縱ひ詭計ありとも、亦施す所なからん、成都王言を聞いて大に喜んで曰く、諸公各宜しく力を悉し、忠を攄るのはたらき、功を建て勳を立つるも皆此の一回にありと、諸將皆諾ひさる、次日に成りければ、早く兵を杉し、營を安じて、以て魏郡を圍みたり、張寔乃ち濠を深し壘を固くし、守りとめて爰をせんと防ぎける故、此の城まことにいつ落つべしとも見えさりけり、かくて曹嶷、夔安の兩將は、自ら魏郡を離れてより、晝夜雨晴を分つ事なく、直に平陽に至り、朝に入つて漢主に相見し、張寔が文書を、諸葛宣于に呈上し畢つて、曹嶷奏して、今晉軍の大兵來り、魏軍を圍むについて、我々太子の命を蒙り、星夜をきらはず來つて急を告ぐ、早く兵士粮米を送つて、魏軍の危を救ひ玉へと云つて、さて又頃日の中、兩軍の勝負を一遍、首尾くはしく此を說きたりけるに、陳元達が曰く、彼今天下の大兵を合せて、俱に魏郡に會し聚れり、これ尋常の比にあらず、然れば味方、必ず高謀ある士、大勇なる將を得て、大兵を滯しめ、以て粮米を護らせ、是を送るには如さるべし、定めて陸機、兵を途に出して、吾粮道を阻て止むるなるべし、諸葛宣于が曰く、粮草久しく集めて此にあり、兵なほ十五萬に及ぶ、亦是用をなすに足れり、併しながら但大將の、當先すべきなき事を、此の故に未だ發し行るに及ばず、こゝに孔世魯、勇あつて用ふべしと雖ども、いまだ兵になれ、大敵に臨まざれば、如何あらんと思へども、事急なれば、孔世魯を遣るべきかと云ひて、評定の訖らさる處に、程遐は入つて奏して曰ふ、只今朝門のほかに、四個の好漢ありて言ふ、是れ蜀中の人にして、ことに來つて相訪ふと云ふ、其の口說故舊の分ありと聞ゆれども、未だ敢て擅に入れずと、漢主聞いて大に喜び、即ち程遐に命じ引て、四人を進めしむ、四人の者共拜し畢れば、漢主問へらく、故人別れて久し、殆んど相忘るゝが如くなり、そも誰れの何某なる、其の時姜發進むで曰く、臣はこれ大將軍姜維が子、發字は存忠、一は吾弟、飛字は存義、二子一人は關心、字は繼忠、征南將軍關索が幼子なり、一人名は麼翊、字は鳳起、麼全が兄、麼會が子なりと云ふ、漢主言を聽き、即ち衆人を退けて、四人と共に後殿に入つて話をなす、劉主、姜發に向つて、汝が父昔日一計を以て、三賢を害するの時、天まことに姜維が願の事に從はずして、遂に其の功を空しうせし事、皆人今に嘆恨みずと云ふ事なしとて、こゝに淚をながされける、宣于其とき、今存忠こゝに到る事、これ大なる幸なり、今回魏郡の粮兵、此の人を以て行るべきに、何の仔細かあらんと云ふ、漢主は命じて、先づ宴を設け、慰め勞するの後、官職を加へて此を行るべしとて、各座を命じて酒筵を開く所に、外城の飛騎、內に入つてこれを傳へ、只今正北にあたつて、塵烟天を蔽ひ、一枝の兵馬殺到る、何の處の、何の兵たる事を知らずと報げたり、漢主大に驚き、宣于をして見せしむるに、宣于これを見、これ慕容、段氏の二人、心變じ來て、我を襲ひ伐つに非さる事なからんや、我もとより、彼れを恐るゝにはなけれども、但はやく魏郡を救ふに遲々せん事を、兩頭まさに敵を受けば、大事こゝに壞れんか、先これを防ぐの用心せよと、刁膺、支雄、

孔萇、桃豹の四人に、帶兵二萬を領せしめて、急に城門を守らしめたり、諸將も又城上に登つてこれを看る、時に程なく、此の兵陣城門の外に到り近くと、其まゝ一員の大將步行して前み來り、高聲に叫んで、吾は乃ち、西蜀の牧馬帥汲桑なり、今や趙勒公子と、兵士二萬を率ゐて來り投る、門を開いて吾々を、城に入れ進むべしと云ふ、孔萇聞いて、來將且く住りたまへ、既にこれ聞知るの人、亦主上にこの事を奏し、人を出して辨へ認め、事明白の上を以て、方に門を開くべし、只今干戈致亂の際に當れば、事急に門を啓きがたしと白ひて、孔萇馬を飛して、殿上に乘つけ入て言ふ、蜀人あつて、口に汲桑、趙勒と稱し、上黨の兵二萬を引いて、來到りて味方すと申す、漢主聞いて大に喜びて、汲桑來れば、粮を送りて魏郡に至れる事、さゝはりなからん、誰かある彼と相識るの者、速に至りて、かれを認むる事明白ならしめ、內に引つれ來れとあれば、馬寧、劉和の二人、我々還よくこれを認めたりと、即ち孔萇と共に、又馬を飛せて城上に到りて見るに、果して疑ひもなき汲桑なれば、遂に門を放いて內に入れ、與に朝廷に至りて、漢主に相見せしむ、すでに汲桑等が朝拜も畢りぬれば、漢主即ち問うて曰く、汝ち往日失散の後、張將軍をして、在る所を得ず、今また何として、這許多の兵馬を、帶び來る事を得るや、汲桑ときに、彼の黑莽坂にして、賊人に侵さるるの後、同類には相わかれ、それより多くの辛苦をなめつくし、石大夫が養子となり、石崇が爲に、晉朝に入りて仇を報ひ、孫會等を死すの話を、首尾一通、半時ばかりなしたりけり、漢主聞いて、汝ち忠心にて、故主を忘れざる條、まことに國士無雙なりと謂つて、先づ錢粮を以て兵卒を賞し、衆將に官を加へ、祿を封じ玉ひける、

通俗續三國志卷之三十三

送二粮米一輸二魏陽一

爰に諫議太夫遊光遠は、漢主に向つて、夫れ三軍は食を以て命とせり、今太子困しんで孤城を守り、日夜懸に望んで、粮米の到るを待玉ふらん、早く此の議をなしたまへと云ふ、宜子が曰く、此の回の議、其かへる事極めて大なり、吾自ら魏陽に往くの軍に隨つて、これを助くべし、但し晉の陸機を以て帥となす、此の人もとより多智なる者なれば、必ず兵あつて阻てなん、然れば粮を送りても、恐らくは到著さがたからんか、さるによつて此方の粮米を、兩路より分つて進めしめば、二路ながら、さゝへ住められるゝには及ぶまじ、一方はまさに妨なかるべし、併ながら吾一身にして、兩路を照し見る事あたはざれば、一路定めて挫失する事あらんか、又一路より行かんとせば、險阻に止められるゝの累あるべきは、如何せんとなやめる處に、姜發進み出て曰く、還今兩路より發して、粮米を運ばんと思召さば、吾不才なりと雖ども、一路をばこれを受とりて馳せん、必ず丞相を勞するに及ぶべからず、此の議に於ては、心に掛け玉ふべからずと請合へり、劉主大に喜んで、才を取る事、必ず其の友を觀ると云へり、昔し姜發は、張賓と同じく、兄弟の約ありときゝ置きたり、今や張孟孫が才能を以て、姜存忠が必ずしも、多く奇策のあらん事を知れり、今姜發が、贊け行かんに於ては、三軍何の憂かあらん、但し何人を以てか、衝鋒の將として、敵をよく殺り防ぐべき者ぞと、いまだ言も畢らざるに、只見る一員の青年の將官、班居たる中よりすゝみ出て、往かん事を願ふ者あり、衆これを見るに、乃ち漢主の族子劉曜なり、漢主の曰ふ、汝素よりいまだ陣に臨まず、噪暴かるべからず、必ず老練にして、戰に慣はん者を撰んで、此の任にあてん、劉曜承て、下官妨げず、自ら當先に進で、これを致し悞まるべからずと云へども、漢主なほ未だ許されざる處に、又一員の少將、伏せる犀の項、劒の眉、插鬢にして、口に拳を容るゝばかり、唇は紅にして齒白きが、班居たる中より進み出で、大言して、粮草を送らんと思ひ、それ百萬の兵を以てしたまふとも、我が當先にあらずんば、中々城下に至る事を得べからずと曰ふ、衆官これを視れば、乃ち今度新に到れる、上黨の尉石勒なり、漢主これを見て、吾汝が狀貌を察するに、其の雄れて偉なるは、尤も粮草を輸して、去り得べきに似たり、但し晉の將兵、皆これ戰になれ、久しく陣を歷て、物馴れたる者多し、未だ汝が膽略如何と云ふ事を知らず、石勒承つて曰く、しからば我今往いて教場に就て、武藝を操り演べて、若しこれ精しからざる事あらば、妄言の責を受けん、劉曜は石勒が、自ら誇つて過言するを見るより、恐らくは漢主の、其の先鋒たる事を、此の者に許し玉はんかと、心中に惱り、即ち又進出て、石勒を呵つて曰く、我今魏郡を救はんと要むるを聞ながら、多少の英雄老將さへ、尙且つ來り奪はさるに、僞ち何の能あつて、此の如く狂罔事をなすや、我と汝と教場に就て、手段を試み、贏ちたる者、便ち粮を送りて去るべし、石勒聞いて、如何にも汝が望む如くに、刀を用ひば刀を以てし、鎗を用ひば鎗を以てし、步射騎射は云ふに及ばず、拳を較べ、力を賭せんと云ふ、劉曜大に激あがつて、即ち走

りて殿を下り、叫んで汝が言の如く、本より習へる事あらん、來て比べ試みよと曰ふ、石勒も亦曰く、我れ倆を恐るゝに非ず、只主上の許し玉はん事を要めて、今汝と技を試みん、我弾晉の大兵をだに、彼らんと欲するもの、豎單に試むる事を怕れんやと、これも亦殿を下らんとするを、陳元達とゞめて曰く、劉永明、石世龍、互の嬈ひをなす事を休めよ、自家の和氣を破るべからず、我等正に評議すべき樣ありとて、なだめ置き、さて漠主に奏し、兩少將これが大將とし、兩路より粮を發せん、但しよく先魏郡に致し得たらん者を、頭功と定むと命ずべしと云へば、漠主はこれを尤とし、先づ姜發を以て、侍中諶粮副軍師とし、石勒を諶粮大都督たらしむ、汲桑は左先鋒、姜飛これが副となる、龔安を以て鄉導とし、桃豹、胡延模、郭黑略を合後となし、趙鹿、張暐僕等、十二將を左右とし、引兵十萬、粮草三十萬を以て、右路よりして進めしむれば、丞相諸葛宣于を以て、諶粮正軍師となし、劉曜を以て諶粮左都督となし、關山を正先鋒とし、孔萇を副先鋒とし、曹嶷を鄉導となし、廖蜊、喬吽を左右とし、馬寧、支雄、刁膺、喬晞を合後と定め、引兵十萬、粮草三十萬、左路よりこれを進めけり、卽日に平陽より、密に文書を持せ、魏郡に往しめ、粮兵の至らんとする消息を、先立つて告やりけるに、此の使路にて、晉軍のために獲にせられ、其の書を奪ひ取られたり、急ぎ成都王に、此の事を報ぜしむれば、成都王此の書を見て大に駭き、慌しく、聚まれる諸將と議して曰く、適巡軍の者、漠の文書を得たり、其の書に、大兵三十萬にて兩路を分ち、粮草を守りて魏郡に來れりと、且へ城中に張寶在つて、隄防の手分をなし、能く守るを以て、連日攻打つと雖ども、其の功なく、かへつて幾許の人馬をか失ひたり、尙いまだ味方毫忽の功をもたてざるに、又兵粮大に到る程ならば、何を以てか彼れに勝ちなん、今此の同盟の諸侯、將帥、甚んの計か奇なるあつて、以て賊を破る事をせんや、請ふらくは各、其の言をのべよ、長沙王の曰く、今敵を破らん事を要めんとならば、急に敵城の粮を、斷絶せしむるにあり、然るに賊今此の如くに粮米を運び、大兵を來らしむと云へば、是れ等を城に入立てゝは、味方何の勝利をか得んや、當にこれを要路に防いで、城に近かしむる事無からんにはしかじ、若これを半途に於て止め絶らば、城中程なく粮つきて、是を獲にせん事、一皷して進むにあり、成都王これを聽いて大に喜び、しからば誰をか前み行らしむべき、時に劉琨進み出て曰く、臣が部下に大將あり、姬澹、劉希と云ふ、皆これ等は萬夫不當の勇あり、前に吾が郡に巨なる盜、蔡雄と云ふ者、與黨十

餘萬を引いて、冀州幷州の間を橫行せしを、人たれか敢て敵する者なかりしとき、臣渠等二將に、五千の兵士を以て、行いて鄰郡まで吟味させしに、終に盜賊の首、蔡雄を斬り、其の黨類數十人を誅したりければ、其の外の殘盜は、悉く平いて降參を乞ひをはる、是に依て、其の威北の郵まで震ひけり、今漠兵前來るを止めん者は、此の二將にあり、兵一枝を傾ぜしめ、險難の要害に依て守り住めしめば、敵將たとひ戰國の時の廉頗、李牧が勇能ありとも、亦此二人が堅めたるを、奪ひ破りて、城下に至る事は叶ふべからずと云ふ、成都王是が勦めに順ひ、卽ち二將を召して、中軍營に至らしめ、賞物を賜うてこれを遣さる、時に東海王刋を出て曰く、賊書の趣を照し見れば、其の兵兩路より寄來ると云ふ、しからば味方よりも、再び一枝の兵馬を撰み、道を分つて去らしむべし、重ねて誰か能からんと問ふ、其の時劉弘進んで、我が上將の中、皮初、弓欽、丁乾の三人、皆能勇にして、數度の英雄をあらはし、其の威荆襄に震へる者共なり、渠等に一は恐るゝ故を以て、李雄も敢て東に下らず、若しこれ等を遣して、要害をとり住めば、以て賊人をば制するに足りなんと進めける、盧志聞いて曰く、此の如くは甚だ好し、大將すでに其の人を得る上は、再び守り住むべき、其の地を得ん事、是又全美な

るべけれ、これに依て臣思ひめぐらすに、魏郡に通ずる西北の險要は、沙麓山と靈昌河との、二の地に勝るゝはなし、然れば幷州の二將は、當に陸戰にならへば、北路に去つて沙麓山を固むべし、又荆州の三將は、善く水姓を知るなれば、共に西路に向つて、靈昌河にてさゝへよと、陸機此の說を聞いて、最も善なりと同じ、卽ち五將に令をなす、先づ靈昌河は、河岸の寬く濶き所なれば、皮將軍等三人、兵士三萬を引いて前み往き、河一帶を前にあて、柵門を緊立て、只敵路を阻てとゞめ、敵兵をして河を過る事あたはざらんやうに、弩手を揃へてこれを射伏せよ、又沙麓山は、陟るに峻にして路狹し、姬將軍二人、兵二萬を引いて、關塞を築き起て、靜に以て守るべし、若其の兵到るとも、彼を惹き鬪をなすべからず、若し渠來つて攻めば、其の時に兵を出して相應じ、戰ひ勝つとも敵を追擊事なかれ、只是自ら保守つて、吾此の所の成功を待て、彼自然に去るべし、其の時に兵を出し追ひとゞめ、方に賊を擒にすべしと云ふ、五將は命を領し營を出で、共に相笑つて曰く、元帥何ぞ懦く怯るゝ事の甚しき、反つて我れ等に敎ふるに、戰ひ勝つとも亦、敵を追ひ擊つ事なかれとは、何事ぞ、豈これ將を脚すの道ならんや、必らず各々奇功を建て、以て我等の手段の程を、顯すべしと憤りを發し、五將共

に相矢つてぞ別れける。

劉曜石勒雙進兵

漢兵すでに兩路を分ち、粮草を運らし往て、魏郡に赴き、早く劉璯、張賓が、籠城の救援をなさんと、揉たてゝ急ぎける、爰に劉曜は、石勒と互に爭ふ事もあれば、何とぞ今度の頭功をあらはさんと、勇みにいさんで進發する程に、未だ數日も經さる中に、思ひの外に里程つまり、將に沙麓山の地界に至らんとする時、探馬馳せ回つて、晉この所へ大將二人を差遣し、多兵を以て山隘を防ぎ阻つ、一人は姬澹、一人は劉希と云へり、しかれば味方此の山路は、しばらく進み難しと道ふ、劉曜聞きもあへず怒を發し、これ何のさまたげぞ、早くしやつばら殺り混し、關塞を引破つて通れ、何の思惟に及ぶべきとて、兵を下知して、直に沙麓山に逼る事、漸く五里許に進みより、こゝに軍を扎めて、寨營を下しける、明日になりければ、劉曜は、關心、喬晞を引つれ、兵一萬をすぐり去つて、關隘を打たんとし、山下に進み行て、關上を見あぐれば、柵をふり、旌旗を靡かし、金皷の聲忽りなく緊しく守り、其の軍法ある體なれば、漢兵もこゝに陣勢を開き、砲を放ち喊をあげ、叫び罵りて其の戰を揃みける、まさに今日の日も、すでに巳の刻ばかりならんとする時、晉兵共は、漢兵の漸々として、將に疲れんとするよと意得、遂に號砲を放ち起して、關門の開く處、兩員の大將衝て山を下り來り、高聲に叫んで曰く、汝等何の方の賊寇ぞ、みだりに來り犯して、我が關隘を誅すや、好々退去れ、しからば尚まだ事を知れりとせん、劉曜いまだ答話にも及ばさる所に、漢軍の驍將喬晞は、手に大なる斧を揮り、砍て晉の陣を過ぐ、姬澹はこれを見、鎗をひつさげ接へ住めて、戰ひいまだ二十合にも及ばさるに、喬晞が乘つたる馬、おもはずも蹶いて斃くとき、姬澹はすかさず、一鎗を過し來りて捨きければ、喬晞は馬より翻り落さる、關心これを看、刀を舞して出でんとするを、只見る劉曜、手に竹節の銅鞭を擎げ、早く衝て陣を出で、姬澹を望んで擘頭より打下す、姬澹忙しくこれを抵め、それより二人、左に遮り右に隔て、一連に塵闘ふ事、三十餘合すれども、いまだ勝敗は分たず、時に姬澹は身の勇を恃み、しかも劉曜が年の少を輕んじ、己が身を勇なりと縱し思うて、劉曜が馬の側により傍ひ、これを擒にせんとしたりける、劉曜は姬澹が空を覘ひより、彼が頭を照し、一鞭を揮りさるを、姬澹おどろき、急にこれを躱けんとすれば、鞭はや電の如く、ひらりとするよと見るまも遲く、姬澹が額の角に、はつしと當ると血流れて、忽ち滿面を染なし、眼も昏くな

り、物の色も見え分け難ければ、角ては叶はじと、稍やくにたへ忍んで、本陣に逃げかへるを、劉曜是を見て、きたなし返せと赶かけ行く處に、却つて劉希が敵しとゝむるに遇ひたりける、此の間に姬澹は、辛き命を助かり、脫去つて跡をも見せず、それより劉曜、劉希と二人、又戰上三十餘合、いまだ甲乙を分たさるに、劉曜は劉希が、勁敵なる事を覺りければ、卒に彼を勝がたしと思惟り、乃ちしばらく佯りて、少し怯るゝ體をなす、劉希は之をまことゝ思ひあなどり、即ち刀を喬つて一刀を、劉曜が懐に砍り入るゝを、劉曜は思ひのまゝに算りすまし、力を盡し手をさしのべて、劉希が刀の柄を越えさせ、一鞭を以て剛く打てば、危く劉希が手、指の上かけてしたゝかに當りける、剛力に任せて打ちければ、何かは以てたまるべき、劉希は刀を持こたへず、指をひらいて地に落せば、こは叶はじと思ひ、これも急に身を轉し逃去るを、劉曜すかさず、汝ちきたなし、最前に無用の所へさし出て、手裏の姬澹を逃したり、しかれば汝を其の代りにと、我が初念に思ひかけたり、何くまでか遣立てんと云つて、一鞭を力にまかせ中てたれば、劉希が乘たる馬の膕に、つよく中つて、馬はこらへず、後足を蹶き、後の方にうち据らるれば、劉希も是につれられ、身を仰で後の方へ倒るゝを、劉曜やがて後より、手を指し延べ、劉希が腦後の髮をひつゝかみ、横さまに馬上より引つけ、己れが乘たる馬鞍の前に、よこづけにたふして、關に攻のぼり、なほも姬澹を追かけゝるが、姬澹がすでに關上に、逃入れる後かげを見るよりも、劉曜は左右の兵士に目を配つて、これ細かげよと、劉希を取て馬下になげ出て、我が身は猶も山上に上らんと進めども、山上より木を飛せ石を打つけ、此をせんと防ぐゆゑ、前進んずる事能はず、齒がみをなして引退き、兵士共の、劉希を綁りたるを馬前に引たて、しばらく寨中に入りたるは、天晴勇なる形勢、末頼もしき小將なり、劉曜は初陣と云ひながら、老練の大將姬澹を、既にまくりつけたり、姬澹はこれを設りにくく思ひければ、其の後たゝ關隘を、第一に守るにしかじと覺悟する故、暫く關は無かりける、又石勒も兵粮を運らし、西路より進みけるが、過る所の晉の屬縣、風を望んで來り附き、廢かぬ里もなかりける故、道にて得たる所の粮草も、又かぎりなき算を增添へたり、すでに石勒、河を離るゝ事十里ばかりにして、寨營をかまへ、粮草を謎り、河岸の樣を探らするに、探軍共かへりて、河の向を見わたせば、新しく柵をつけ、兵を備へ守るにより、事なくては一時に河を、渡り得難からんと云へば、石勒聞いて、さらば一戰手痛く關はでは通し難からんと、其の支度をぞなしたりける、すでに兩軍河を隔て、相拒

ぐといへども、廣波を中に挾むゆゑ、又を接ふる事かなはず、又船舟一艘もなくして、渡すべきやうもなし、是れに依て三日の間は、空しく日を費しける、石勒は此の如く遲滯に及ぶ事こそ奇怪なれとて、心中を惱悶す、第四日に至れば、軍師姜發も後隊を引つれ、大軍と共に至りけり、石勒告げて、其の事を委曲にかたる、姜發が曰く、吾明日地勢を見定めて、其の後事を委しく計るべし、少しも心を惱し玉ふべからずとて、其の日は人馬を休め、次の日になりければ、姜發、石勒と共に、河邊に到り臨み、河の上下を看了る事一會し、姜發は獨り點首いて、それより打連れ、營中に回りける、さて其の後に先づ汲桑、夔安、桃豹、郭黑略、張噎僕らの八將を喚んで曰く、各々は早く上流頭に往き、大栰を造らしめ、其の數百餘を認めよ、さて味方より相圖のため、砲聲を三つ上ぐべし、其の三度の响きを聞かば、勢ひに乘じ殺下せ、能く先づ岸に上らん者には、別けて重賞を行ふべしと說畢り、又劉徵、劉寶、趙鹿、王楊の四將に、別に竹木を斫伐せて、同じく筏栰を造り成し、多く兵士を着けて、一夜の程に筏を牽き來て、この河岸に引つけよ、又胡延模、支屈六、張越、孔豚、吳豫、劉膺の六將は、兵を筏の上に引き備へ、伴りて渡りを爭ふ眞似をなし、以て晉兵を誘き來らしめて、戰をいどめ、又石

都督と姜飛とは、强兵を引いて、西の岸の兩傍に伏せ、若し是晉兵の來り、粮を奪ふのとき、一齊に殺出て將士を獲にすべし、晉兵ども伏に遇うて、其のすでに退き、河に下らんとするとき、號砲を起せ、ときに汲桑等、相圖の如く、上流より栰を驅り、波を衝て來らんに、晉兵必して抵當る事あたはずんば、味方の兵士勢に乘じ、自然に東の岸に登り得べしと、手に取るやうに計りければ、衆將みな計を領じて、其の座をぞ去りにける、さて又胡模を喚んで、粮草百餘輛を、岸の邊に擺きならべ、わざと晉將の來り取らん事を誘きける、此の如く諸將に約をなして後、いまだ二日も經らざるに、汲桑一手の栰、劉徵が一組の筏も、共に出來たるよしを告げ報ずれば、姜發聞いて、さらば、各々用意をなすべしとて、先づ趙鹿、王楊等に命じ、夜に乘じ河中に推下し、河廣一ばいに鋪起てて、支屈六等、西岸の上に臨み、これを賺して渡らんとする勢を見すれば、晉兵共渡られて叶はじとて、相防ぎ、一夜の程は少らくの休息もなく、守りつめて居たりける、元來り漢兵共、實に渡らん心もなければ、其の夜はかくて明けにけり、次の日に至つて、漢兵共早朝より、彌威武をかゞやかし、栰の上に乘じ、渡りを爭そはんと氣勢すれば、胡模また命令の如く、粮の車を推し擺き、岸の上に引きならべて、早く渡りをな

すべきと、態と悶ゆる形勢を見するに、晉將皮初は、この由を見るより、弓欽、丁乾を集會して議しける、今賊兵ども魏郡城の粮なきを恐るゝ故を以て、獨り大兵を賴とし、極めて渡りを爭はんとする笑止さよ、只此方も、岸に倚りてこれと戰へ、かれ人數多しと云ふとも、焉ぞ能く此の岸に飛上らんやと云へば、二將はこれを然りとし、即ち弓箭の手に下知を加へ、前み連ねて岸に臨み、衆兵を後に備へ、鳴を靜めて、敵兵の樣を伺ひけり、漢兵共わざと敵の射る矢を冒し、强て渡らんと向み前んで攻擊を見、晉の副將甄玄、巢升、竭り令して、箭を以て射下す、漢兵しばらく爭ふやうに見せけるが、態と敵に射たてられ、叶はざる體にもてなし、頭を抱へて懼れ退く、巢升等これを見、まことに漢兵の逃ると心得、大に呼て云ふ、あれ看よ、漢兵敗れたり、急に此の機に乘して、勝をとつて殺みだせ、此の一陣だに破り得ば、敵兵自然と我が鋒さきを畏れて、退き去らんぞと云ひもはたさず、自ら先に當つて衝下りて、漢兵を殺退く、丁乾、下知して、巢升尙ほ一人にては、敵に取りまかれんぞ、何故に汝等向前さると喚まはれば、こゝに於て衆兵共爭ひ搶て栰に上れば、吳豫等も又蹴く、岸の上に走り去る、丁乾又呼はるやう、漢兵共を追ひはらつて、那の粮車を奪ひ取れ、便ちこれ頭功を得んぞ、玄、升は令を受け、

心得候と云ふまもなく、敵の射る矢を冒し、直に進む、漢兵共かねて相圖の事なれば、右往左往に逃げ散りけり、丁乾、弓欽等、風の如く赶け上り、つひに粮車を奪ひとり、人步を驅て引とらしめ、氣色ばふて見えたる所に、忽ち听く、砲聲の三度起つて、大に震ふは是何事ぞと、晉兵ども少しあぐんで見えたる所に、左右の堤の邊より、兩員の漢將きり出づるを見れば、其の勢ひ猛虎より猶ほ暴く、馬を跑たて〳〵飛び出で、高聲に吼かゝり、晉將ども〳〵、速く馬より下つて降を乞ひ、枉死をなす事を免れよと云ふ、甄玄もさすがの者なれば、早くこれを敵し住めて、只一合鎗を合するよと見えしが、夢の此の世に名のみ殘り、石勒が一刀を蒙り、兩段となつて失せにけり、巢升これを見、えゝあさましき形勢や、當の敵を只今取つて、倘が怨を散ぜんとて、石勒に殺てかゝるを、姜飛すかさず陣頭に遮ぎれば、これも口には似ざりけり、一二合刀を擧ぐると見えしが、姜飛が一鎗に心胸を刺洞され、倒翻して馬より落ち、言をも續がず死たるは、あまり肯なき事なりけり、弓欽、丁乾の兩將、忙しく來つて、敵せんと馳せ向ふを、支屈六、王楊、胡摸等の衆將共、蜂の如くに起つて、四方よりおつとり込め、鎗さきをそろへて衝きかゝる、晉の兩將、これにはいかで敵すべきと、首を轉し急ぎ河中に下るを、石勒、姜飛、

追ひ迫る、弓欽、丁乾は、射手どもを喝令し、左右にすゝめて間近く射立て、すき間あらせず下知する故、さすがに勇める漢將共、馬射られては叶はじとて、暫く足を住めて戰を持し、兩陣互に爭ひける、かゝる折ふし、晉將共、上流を望み見るに、汲桑等一手の隊、砲の相圖に違はじと、大栰を河流一面に推浮め、流るゝ水の急きに乘じ、まつくろに乘つれ、をめき叫で氣勢をあらせ、矢よりも早くおし來る、晉兵もよかりけり、此の者を敵し住めんと、面を向ふる程こそあれ、步戰になれたる汲桑、龔安の兩人ながら、同じやうなる大斧をとり、一對の金甲着たる門神を、見るが如き形勢にて、さしも危き栰の上を、陸路を走るが如く、飛步つて砍りかゝる、其の勢には晉兵共、中々以て當るべきやうはなし、石勒、姜飛も、又砍かゝる、其の漢將どもの叫ぶ聲は、震のごとくなるに、晉兵共一同に、をめき叫んで亂倒するは、目もあてられぬ形勢なり、丁乾、弓欽も、遂にふせぎ住めず、引たてたる味方につれ、岸上に逃げ上る、晉の兵士此の時に殺り立てられて、死する者六七千に及びける、さればさしもに廣き、河流の兩岸まで、聯ねたる筏栰の上に、晉兵の屍は、疊みあげて山をなす、汲桑、龔安、郭墨略、張曠僕、桃豹、冀保等、六人の者共、兩々を組合せ、三所より起り立て岸に乘じ、混れて晉の陣中に殺り入らんとす、皮初この樣を窺つて、只今岸の上に登り、盔を一樣に戴いたる者共は、これ漢賊の、まぎれて陣内に混れ入らんとする者なり、早くこれを拒ぎ止めて、我が軍を躁す事なかれと下知すれば、晉兵共大將の言を聽き、一同に圍を合せて殺りかゝる、怎で汲桑等六人の勇にあたるべき、晉兵さしも大勢なりと雖ども、忽ちに砍りまくられ、交横へ亂れ立つて逃かくるゝは、嵐にもろき霜葉の、吹散らさるゝ如くなり、石勒等は、東岸上の人馬、共にみだれ立て、をめき叫ぶを見聞し、これ汲桑等が、岸を衝て登りたるならん、察するに大勢の中に取り圍れて、恐くは失あらんかと思ふが故、遂に自ら馬に策うち、刹那の間に、向ひの岸にかけ上る、爰に皮初は、汲桑を赶け來て戰ひける、汲桑は少しも驚かず、勇を奮つて進前し、一斧を振あげ、皮初が乘たる馬の頭に砍あつれば、何かは以てたまるべき、人馬共に横さまに撞と倒れけり、汲桑すかさず振り擧る斧の手に、皮初は危く見えにける、かゝる所へ丁乾やがてかけ來り、抵住めて汲桑と戰ふ間に、皮初は起あがつて、後に轉り脫去る、汲桑是を見て大に怒り、丁乾には爭そはず、たゞに皮初を目にかけ、大に叫んで、黑心し返し合せて、勝負せよと赶けたり、丁乾もまたすかさず、汲桑が後より馳ついて、鎗を引擧げ、ねらひすまして衝かんとし、既にかよと見る所に、好々石勒、馬を飛せて丁乾に追かゝり、大に喝して、賊奴何ぞ無禮なる、これ〳〵留れと喚かけられ、丁乾猛く頭を擡げて見れば、石勒がすでに逼り近くゆゑ、汲桑をば打すて、首を轉らし石勒と接へ戰うて、いまだ十合にも及ばぬ所に、汲桑は皮初を見失ひ、齒がみをなして回りけるが、丁乾が石勒と戰ふを見、やがて斧を振擧げ、丁乾に打つてかゝる、丁乾も敵二人に立夾れて忙しく、先づ汲桑が斧をうけとめ、頭を分つて戰へども、勇將二人、何ぞ力の當るべき、遂に石勒に逼られ、生ながら擒となる、弓欽これを見、丁乾を奪ひ回さんと馳せよする、姜飛是を見、傍より頓てつゝと出で、これをば我が賜らんと、縱に刀を接ふる所に、汲桑は會釋もなくかけ來つて、馬をば我が賜らんと云まゝに、弓欽が乘つたる馬の足をなぎ倒せば、弓欽たまらず、馬より直倒に落ちけるを、姜飛やがて、砍り死して首級をとる、爰に皮初は、すでに陣中に逃回つて、馬を乘かへ、又出來けるが、晉兵共の皆皆奔り潰ゆるを見、大に叫んで、さもしや汝等、漢賊は縱に十四五員なり、味方の大勢竟を合せ抵住めば、毛を抜き取ても不足なり、何事ぞこれを撐へとゞめずして、徒らに手を捧げて、逃ると云ふ事やあると、かけ回りて下知する處へ、張曠僕かけ來つて、一鎗を以て、皮初が左の腿を刺しければ、皮初は叶はじとや思ひけん、遥に進で逃さりける、大將すでに走りゆけば 晉兵どもいよ〳〵こゝに亂立つて逃散りける、石勒等衆を促し追赶けゝれども、天すでに晚れに到つて、物の色あひも分たざれば、今日の戰ひは、是までなりとて、兵を收めて、卽ち晉の立てたる舊柵によつて營をかまへ、其の夜は東河の邊に據り、總軍を休息したりけり、其れより皮初は、退く事三十里にして、打もらされの人馬をあつめ、靈昌道の路口をささへ、連夜に人を魏郡の晉陣に走らせて、救兵をこそ乞求めける、

劉曜再擊沙麓關

晉軍すでに漢兵を、魏郡城に圍み合せたる所に、平陽より救援ありと云へるに因て、成都王は兵將を別つて、其救援を止めさせつ、早く當城を先づ攻落さん事を謀り、陸機と共に、さまざまの智略をぞ回しける、時に陸機は、こゝに一計の嘉策ありとて、總軍の諸侯に命じ、各其隊を組合せ、番々の攻手を分ち、六門の寄手共に時を定め、朝より夕に到るまで、輪の如く轉して、少くの休息あらせしと攻立てける、これ晉軍は多して、其うへ時刻を分つて請取り、城を攻むる故、軍兵多くは休する隙あれども、城兵は小勢なれば、常住に閑暇あらせ

ず、困勞せさせんの巧みなり、されども張賓城に籠り、或は戰ひ或は守り、奇兵を以て敵をむかへ、晉の兵將を惱ませば、晉兵の殺傷せらるゝ者、毎日其數算ふるに隙なく、日記を背す官人も、記するに暇はなかりけり、此の如く相攻擊つ事、一連十日に至れども、惟に寄手の擊るゝのみにて、曾て寸功を立つる事なし、今は諸手の大將、如何に攻むれども其の功なければ、皆々大に攻あぐんで、軍師陸機に訴へ、如何に攻むといへども、堅城の本、其の力を盡すに益なく、返つて毎日、味方の擊るゝ者、諸軍其の數を知らず、これ必して我軍の弱みたり、重ねて如何とも、元帥の良謀こそあらまほしけれと、諸將一同に口をそろへて申せば、成都王も此の事を思ひなやみ、復各郡の主將を集會し、陸機と共に、重ねて敵を破るべきの意を尋問る、衆議こゝに區々にして、未だ其策一決しがたき所に、忽ち飛馬にして、報至つて逃たりけるは、漢將劉曜、沙麓關を極めて攻打つゆゑ、劉希將軍其の搶上るを見、急に兵を引いて衝下すと雖ども、劉曜勇强にして、喬希等の驍將數員、敵將劉曜が、銅鞭の爲に打立てられて、生ながら擒となる、姫澹將軍もまた、額角を打傷られたるにより、今退いて關に上り、死に誓つて守り住む、姫澹將の鞭の傷、未だ好からざるにより、出て戰ふ事をなさず、特に兵を請ひ、救應

となさん爲に、これまで至り來ると云ふは、卽ち姫澹が使者なりけり、諸王衆將說を听き、互に目と目を見合せ、悠き訝しみ、暫く言を發する者もなし、時に豫州の太守劉喬進出て云ふやう、此事尤も遲々に及ぶべからず、丞に兵を發して、助け援はしむべき事共なり、夫に就ては、我部下に二將あり、馮奕、包廷と云へり、勇略雄猛の者にして、往日山賊徐羅子、其の力よく牛の鬪ふをひき分け、其暴き事類ひなければ、人これを號して、無欄惡虎と云ふ、其の黨に黃橫と云ふあり、是をば班手虎と號して、近鄕を擾り害せしも、終に二人ともに、此の二將の爲に擒とせられ、其與黨五千人を降したりき、然れば今此兩將に命じて、沙麓の救應に行しめば、必ず劉曜、曹疑等は、生ながら獲とせん、兩人をだに擒とせば、たとひ漢兵多勢なりとも、再び沙關をば、恐れて仰ぎ見る事あるべからずと說くに、成都王大に喜び、卽ち二將に命じ、引兵二萬を領ぜしめて、沙麓の救ひに遣しける、兩將命を承り、人數を引つれ、飛が如くに路上を馳せて、姫澹が軍を助けゝり、兩人いまだ轅門を、漸く出はなるゝ比、又使者一人飛馬にて到り、昌河の柵閒より來ると云ふ、成都王これに出で會ひ、使者を帳中に召して、事の次でを尋ね訪はる、使者答へて、漢の步將汲桑、麴安等、死を顧みず、岸上に衝上り、石勒も

又矢射を胷して殺上る、これに因て味方の副將、頴玄、巢升等、命を捨てゝ防ぎ止むと雖ども、兩人共に漢將の爲に殺り死され、丁乾は生ながら擒となり、弓欽も斬らる、皮將軍は左の腿を、鎗にて刺され、遂に味方の負け軍となれば、皮將軍も是非に及ばず、昌河の柵を捨て、今靈昌の路口に引退いて、此の所を守り堅めらる、さりながら漢兵、すでに河を渡り、潮の涌出るが如くに寄來る、若し援の兵、すこしも遲々に及ばゝ、味方の少兵大軍に敵しがたうして、路一回これに失ある程ならば、ゆゝしき大事たるべしと報げたりけり、成都王は大に懲き、半時ばかり言をも發せず、頭を垂れ、思案にわたらぬ風情なり　時に劉弘言を發し、此等の味方討れたる上將共は、まことに百人萬人の兵といへども、當りがたき勇將たるに、今これを討程の賊手なれば、恐くは重ねて味方の大將の內、能く敵ずべき者は心得がたしとて、同じくこれも眉を顰む、こゝに榮州の刺史李矩、進み出て憤を起して曰く、劉荊州何事ぞや、みだりに賊人の威を長じ褒め、大國の兵士を餒さしむるぞ、某が部下の大將に、夏雲、雷霈の二人あり、皆能く其の威萬衆を降し、力千鈞を擧ぐ、若し彼等を今去らしめて、靈昌を守らしめば、石勒、汲桑を擒にするに於て、何の難き事か候はん、單に掌を反すが如くならん、ましてや只に阻て

戰ふにやと、冷笑つて申しける、諸王たちこれを聞き、始めて面の色なほりて大に喜び、乃ち二將を召して、帳に上らせ賜を賞せられ、たゞ戰を謹み愼んで、過ち失する事あるべからずと、付囑し戒めらるれば、夏雲、雷霈の二將命を受け、副將郭芝、江胤、寒韜、張皮の四人を召具し、兵士二萬を領し、往て皮初を助けゝり、それより晉兵共は兩路をとり、星を戴き、程を兼倍して、晝夜となく擊つほどに、馮奕、包廷の二將は先だつて、沙麓に至り着きたりける、姫澹喜び傷を包んで出合ひ、一禮もすでに畢れば、姫澹は座を近づけ、さても扨も漢將劉曜は、其年いまだ弱冠なりと雖ども、十分の英勇ありて、如何なる老練の將たりとても、是に上こす手段はあらじと思ふ、其上曹疑、關心の勇將、これが助けをなして働くゆゑ、實に以て破り安からず、今二位こゝに至り玉ふに付いて議するに、必して此關を謹み守り、かまへて彼等と共に、戰ふ事を爲すべからず、此關をだに堅固に守らば、劉曜如何程はやるとも、翼なければ能飛越えても到るべからず、暫く日を經て漢兵を阻ぎ、粮道を支ふる者ならば、其の內に味方の大軍、魏郡の城を拔取るべし、然る時には劉曜が勢ひ、自ら阻てられて退去せん、那時我等精兵を進めて、これを掩ひ討時は、全き勝を取るべしと曰ふ、包廷この語を聞きも果さず、大に怒つ

て、卿は劉曜、曹嶷を懼るゝ事虎の如くなるや、我これを見る事、犬羊とも思はぬなり、定つてこれを生擒にして、見せんず者と廣言す、姫澹重ねて然んばあらず、我前日いまだ關を下らざるときは、敗を致さゞりしかども、この近ごろ慢つて敗れを引起せりと云へば、馮奕是を聽いて、若のごとく賊ばかりを畏れ、自ら守るを專とせば、大國の將帥たる、行徑とは申すべきや、又何を以て、克く其の功を建てん、我自ら主意あれば、其通に致すべし、卿の指南は、暫くこゝに無用なり、重ねて言を受けじと云つて、各陣屋に立ち回り、其の夜は休息したりける、既に明日になりければ、劉曜は早天より、兵馬を將ゐ、沙漠關を攻打たんとて、陣勢をつらね成し、軍士に命じ、先に當つて喊を叫出すに、山河林木震動して、すさまじかりし形體なり、支雄、刁膺等は、えい〳〵聲を出し、山上に砂り登らんとする程に、行程いまだ二里ばかりにも及かさらんと見る時、忽ち砲銃天に轟き、馬烟は林木を蔽ひ、關門を開いて山頭より、坂落しに殺り下す兩將あり、支雄、刁膺の二人は、急にかさより落しかけられ、覺えず麓に退き下る、晉將包廷、聲をはげまし叫び罵て曰く、無知の逆賊、反亂の羌奴、好々退き去つて、猶命を逃るゝ事を得よ、然らずんば必ず、漳河の敗の如くならんぞ、劉曜聽き大に笑つて、關ち晉奴、

いまだ世事を諳んぜず、我今汝に教へん　早く退いて洛陽に入り、自ら守れ、尤も恐らくは、吾が漢の天に應じ、人に順ふ大兵には、敢て較べ難からんと曰ふ、馮奕是を聽くより大に怒り、馬を拍て鎗をとり、陣を過つて來り、劉曜に向はんとす、曹嶷これを見て、右の方より横さまにかけ出で、これを抵止め、二人約して兵馬を開き、惡鬪上二三十合に及んで、一個の精神は愈長し、一個の勇力は倍ず猛し、刀去れば鎗來り、恰も龍爭虎鬪ふが如く、直ちに五六十合すれども、勝敗は如何と見定めがたし、包廷は馮奕が戰つて、曹嶷を下す事あたはずと見しかば、刀を舞し馬を跑させ、急に出てこれを助く、劉曜は又是を見て大に怒つて、例の竹節の銅鞭を執て、これを敵し住め、二人亦戰上三十餘合すれども、これも何の疎失なく、正に是棋の敵手に逢ふが如く、僅の譲りもなうして、將英雄に遇うて、放ち寛さずとは、かゝる事をや譬ふべき、包廷は劉曜が是若輩の將なるをあなどるといへど、劉曜が少しも退く心なく、己と同じく抗べ扼を見、甚だこゝに忿怒を加へ、乃ち心に一計を生じ、拖刀法を用ひ、おもひらざる所に至り、劉曜を斬らんと欲し、是に於て空しく一刀を架けはづし、馬を帶びて走りゆく、劉曜すかさず、後に隨つて赶け去る、包廷これを見るより、意の内に喜んで、馬の轡をとゞめ、刀を

拖て以て、劉曜が赶け來るを待居たり、劉曜はやく彼が計あるを識りたりければ、鞭を提げ、これを意得て馳せ寄する、包廷は劉曜が馬の、我身に近づく所を、當目すまして忽ち身を翻し、一刀を掠起し、劉曜をたゞ一撃と打つくる、劉曜大に喝し、賊奴詭計を以て、我を算らんとするやと、一鞭に承とゞめ、反つて包廷が持たる刀を打てば、包廷覺えず、刀をば地上に打ち落され、危も頭を抱へて走りけり、劉曜これを見、又鞭を奮つて赶け、背後よりこれを打つ、只是鞭の先で、背に中ると見えたるが、忽ち血を吐て逃れ去る、劉曜はすでに、包廷が山に上るを見、夫よりは是をも逐ひかけず、乃ち馬を回し、曹嶷を協ひ助けたり、副將章龍は、包廷すでに打たれぬやう見えければ、鎗を挺げ救はんと來りしが、劉曜がすでに引回すを見るより、章龍後より掩來つて、劉曜をねらひよる、關心これを見、大に叫んで、賊あり暗に都督を算るに、それ心を付けられよと云へど、劉曜は、これを聞く事を得さりき、關心は劉曜が、まさに失あらんかと恐るゝゆゑ、横さまに赶かけ至り、青龍の大刀を提げ起し、頭を照して章龍を、一刀に斬りければ、あやまたず章龍は、二つになつて失せたりける、馮奕は章龍が斬れてのち、劉曜關心ならび到つて、曹嶷を助くるを見、勢の好からざるを察すれば、終に曹嶷を打捨て、落荒周

通俗續三國志卷之三十四

石勒再闘靈昌道口

章て、走り行く、劉曜大に叫び、賊奴！〳〵走る事を休めよ、料るに備へよも天に上りも得じ地上を走る分にては、我まことに逃さんやと、尾につゝいて赶け去る、馮奕は劉曜の馬の、すでに近づく見るより、遂に又身を轉らして、逆へ戰ひけるが、未だ五合にも及ばざるに、曹嶷が復び馳せて至るを見、馮奕は心慌しく、劉曜が一鞭を受けそんじて、頭上に中てられ、天柱忽ち傾き折けて、紅面になつて死たりける、恰れむべし恰れむべし、鎮蔡の英雄、空しく沙場の地に死すれば、晉兵ども主なうして、倶に關中に奔り上るに、後るゝ者はことゝくく、漢軍のために砍とゞめらる、漢兵共はこれに勝ほこつて、又關上に湧きのぼれば、關上より又、木石を打下して是を防ぐ故、漢軍も一端には上り得る事叶はじとて、皆々兵を收め、しばらく麓に下りけり、

西路上の漢軍の都督石勒は、既に靈昌河の東岸の柵を攻破れば、即ち粮を運し、米車を河に過らし、勢に乘して、直に

魏郡に押し至らんと云ふ。姜發も則ち、獨身にして岸に上り、石勒が營に入り、よく〳〵前路の地面を覩るに、軍法に忌む處々多ければ、乃ち石勒に向つて、此の處水に逼りて近く、其の上前路又地窄し、前み來るべくして、後くに退くべからず、晉兵又多して廣ければ、處々に阻てられて、糧草いまだ一端には、以て城下に至り易かるべからず、且らく只河を隔てて、粮車をば停め置き、營をかまへ、柵壘を分ち佈き、彼れ晉軍の、攻迫らんを防ぎ止むべき用心に備へ、前陰の道を味方へとくと取得、其の後魏郡の消息を、通じ得るを俟ち、方に能く一同に、軌をならべて、城下に進まん事、又いまだ遲からずと云へば、石勒も亦此の議に同じ、車をば元の如く、河の西岸にとゞめ置き、軍營を嚴しく構へ、横どり奪はるの要ぎを調へ、ひそかに探使を馳せて窺はしむ、斥候の者早速に回り報ずるやう、皮初は道口の陰阨をとり、大木を以て路上に横へ、漢兵を通ぜじと構ふと、石勒聞いて、さらば先づ道を除つてこそ、攻め撃つ事も爲るべけれとて、士卒に令を下し、横たへたる樹木をとり移し開きて道路をなす、直に早天より、暫くの休息をもなさず是を除ふに、已に今日の時刻も、午の下刻になつて、纔に路を通ずれど、晉卒また嚴しく是を防ぎ住むる故、漢兵ども、盡く、今は勞倦に至りける、姜發は是を察して令を下し、兵を收め寨に回りて、其の日は士卒を休ませけり、さて第二日に至るに及んで、正に兵を出し、晉軍と搦み戰はんと計るに、探馬來て報じて道ふ、陸機が方より、靈昌道の救ひとして、昨日夜に入り、夏雲、雷霈の二將、新手の兵二萬を率ゐて到著すと、石勒聞いて曰く、好し〳〵皮初、那の男、既に救の到るあらば、亦戰をなすの氣有んとて、遂に衆將と共に、晉寨を扣いて陣を佈く、夏雲、雷霈の二將の曰く、猾りなる賊、何ぞ敢て此の如く無禮に至るや、必して渠を擒にせずんば、大國の名をれたり、以て靈昌河邊にて討れたる、味方の靈骨に手向け祭るべしと憤る、皮初聞いて首をふり、二公みだりに彼等を、輕忽しく思ふべからず、まして此の處、險のよく防ぐべき便りあれば、何の爲に兵を出して、由なき力を渠等と爭ふべきや、但し宜しく謹愼を加へて、守るべき事なりと止む、夏雲聞いて是を可しと思はねば、眞に公の見を承る、然しながら各又、自ら分ち曉すべき了見もあるべしと、其の座をば起ちけるが、頓て兵士を引いて寨を出で、陣勢を排きなし、即時に雷霈戟を持して、石勒に指し、汝方昏て知るや、漳河邊上にて、漢兵十餘萬をきり亂したる、大將軍の名ある事を、あはれや今劉聰、張賓等、魏郡に在りて、さながら魚の釜中に住むで、生死たゞに頃刻に迫るが如くなり、

儕等も又爰に來つて、其の數に湊り入らんとするやと匈りける、石勒言を聞き大に怒り、馬を拍ち刀を舞して、晉軍を殺過る、雷霈は戟を挺げて敵し住め、二人戰上三十餘合仕けるが、未だ高下を分たざるに、夏雲は石勒が勇略絶倫たりと見るより、夾み助けて打取らんと思ひ、石勒に殺かけたり、姜飛是を見て、馬を躍せてかけ出で、夏雲を敵し住めんとせし處に、晉の副將蹇韜、此の由を見て、側より出來つて、姜飛を中にて押住め、是と戰を交ふれば、夏雲は石勒にかゝつて、雷霈を救ひける、石勒は、兩人の晉將を對手にとり、夫より三人一團となりて、攻爭ふ形勢は、只見る馬驟りて、龍の如くに滾々たれば、征塵は地に連なつて起り、人雄にして虎の如くに騰々たれば、殺氣は雲に接り飛ぶ、夏雲は雷霈を助けて、石勒を斬らんとすれども、思ふやうに殺得されば、とても彼を、殺りとめ難しとや思ひけん、身を轉してかけ走り、又蹇韜を救うて、姜飛と戰はんと仕たりける、跟にとゞまる雷霈は、只一人にて石勒と鬪ひしが、遂に其の力屈しければにや、石勒が一刀を受け損じて、馬下に砍て擲出さる、石勒は雷霈を斬て、心彌勇をなし、又夏雲を追かけ去る、夏雲は石勒が、後より追來るをも構はず、只に蹇韜を助けんと馳せけるが、早く張皮が馳合せて、蹇韜を救ふを見、さては心易しと思ひ、再び身を回し、石勒を抵住めて相鬪ひける、張皮は早く蹇韜を救はんとて、馬を馳せ、未だ陣頭にも至り著かざる間に、蹇韜は〳〵や姜飛が爲に、活ながら捉へ去れける、張皮是を見て大に怒り、背後より馬を飛し、是を取り返さんと追かけ往く、汲桑は張皮が、姜飛を追を見、大に忿怒を發し、大斧を揮て、堅子とまれと砍出す、張皮は汲桑が勢の、猥りに猛きを見るより、尋常の者ならずと、心を靜めて鎗を執り、すき間あらせず刺きかくる、汲桑是をすかし、持ちたる大斧を振擧げ、張皮が乘つたる馬の頭に打つくれば、張皮はたまらず地に落ちける、汲桑やがて飛かゝり、終に張皮を生ながら擒にす、爰に夏雲は、石勒と戰うて居たりしが、四方の物騷しきにや驚きけん、馬を放つて逃てゆく、時に桃豹、郭黑略等の漢の諸將、頭を分つて殺出すに、晉兵又大に敗れ、死する者相枕りて、道路を往くべきやうもなし、石勒は兵を下知し、直に晉寨に至つて、攻破らんと採たつれば、あはや此鬪、今に攻め破られぬと見る處に、晉將皮初、夏雲等、乘て期したる事なれば、強弓硬弩を放ちかけて、爰を專んと射住めたり、是に因て漢兵の討るゝ者數多し、中にも漢將王楊、冀保等は、身に中るところの矢、六七箭折かけながら、猶ほ止らず殺上る、石勒此の由を見、此の鬪の、一時に破り難き事を、察しければ、金

を鳴し兵を收めて、又本寨に回りける、夏雲はすでに、今日の手痛き漢軍の戰を見るより、大に舌をまいて懼れを生ず、爰に於て郭芝とゝもに營に入り、人馬を集めて、手疵死人をあらたむるに、三將の折けたるを、記祿の初として、已に兵卒一萬餘を減少す、夏雲大に驚て曰く、たゞ今よりは、緊しく寨關を防ぎ止むるより、謀あるべからずと、守將と共に志を同じうして、是よりさらに、出て戰ふ事無きにこそ、石勒等中々に思ひあぐんで見えたりける、かくて靈昌の守將共は、飛馬を魏郡に差し遣し、關ひの勝負を報げ知せ、救の兵士を請ひにける、此とき成都王は、衆と共に議して、魏郡城を攻討つべき計、如何あらんと論ずるに、劉喬、李矩は一同に口をそろへて、魏郡城中已に困しめる事一月餘りなり、思ふに粮食も必らず少く、柴水もまた端きぬべし、料るに是を破らん事、我掌の中の事となる、張賓如何なる能ありとも、そも是極まりある事なれば、遂には城をあけ、走り遁るゝに現前し、但し妨ぐるは、此の時に臨んで、一場の惡戰あらんのみ、其に付いては二處に向へる、漢粮を住むるの兵、いまだ其の如何と云ふ事を知らず、若し還た敵のために攻めらるゝや、此の救ひの兵だに、味方よく止めなば、旬日ならずして、城を破るの全功をば得つべしと談ず、其の口もいまだ舌を靜めざるに、沙麓關の姬澹が文書、奔れる馬に白汗かゝせて、營門まで乘つけ、早く成都王の軍門に入來る、其の故如何と、各立かゝつて問訊へば、使者は喘げる息もとゞめえず、馮奕、章龍が斬られ、包廷が吐血して、打殺されたるさま、漢兵十五萬、日々に關を扣いて、攻打つ事の急なれば、守兵盡夜に安み息ふ事なく、是に依て危きこと時々にあり、早く救ひの兵を玉へと、惣身を慄せて報じける、成都王是を聞き大に驚き、面色忽ち土の如くになれば、況や諸王衆將の面々、驚き駭かずと云ふ事無うして、誰か一人進んで、言を進むる者なく、上下ひつそとして音もなし、李矩ときに漸く言を發し、關上の二將ともに、賊のために傷らるとや、恐くは其の守り住むるに難からん、早く兵を發して、救應ずる計こそ有るべけれ、何ぞ恐惧に及んで、無言に至るべき、各計策をなし玉へと云ふ、衆の諸侯、いまだ對ふるにも及ばざるに、飛馬また到つて、雷霈、夏雲二將の兵士、靈昌道口に至りて守り防ぐ處に、石勒極て急に攻討により、三將も緊しく防ぎ戰ふと雖ども、つひに味方の敗れとなり、塞韜、張皮、雷將軍、賊のために斬られ畢んぬ、皮初、夏雲の二將は、然も要路を守つて防ぐと雖ども、但恐らくは賊漢兵多く將勇にして、すでに危きに至らんかと、是が爲急に來て、助を請ふと云ふ、成都王其の言ふところを聞き、歎聲

を發して曰く、兩路の小寇、又みた此の如く猖獗さや、今此の小將をだに、多くの勇將身を亡して、頓とゞむる事能はざるに、又いづくんぞ劉聰、張賓が衆兵を收め服せんやとある、時に順陽の刺史張光進み出で曰く、劉曜、石勒も亦是人のみ、豈皆楚の項羽が儕のごとく、能く天下に敵なきの勇ならんや、諸の官將の手を失する者は、皆な味方の大なるを賴みて、敵を欺くにより、反つて悞り輸事を致すのみ、我部下に大將あり、夏庠、周幷と云へり、勇にして多識なる者なり、故に機智甚だ廣うして、尋常の類にあらず、若し今この二人に命じて、劉曜を破らしめば、成功を取るに管らんか、諸王言を聞いて皆喜び、卽ち二將を召して、元帥の幕に上せ、盔甲一領づゝを兩將に賜り、以て其の威風を壯にし、全部の將卒を全く引いて、俱に往かしむ、二將はそれより、星夜を分たず、程を倍して急ぎける、其の時成都王の曰ふ、北路は旣に張景武（張光字）が兵を得て、去り守らしめたり、西路の石勒をば、再び誰人あつてか、行りて敵すべき、各よろしく是を擧よ、時に陶侃（淵明が祖父）進み出て、我が部下の家將に其の人あり、朱伺、吳寄と云へり、頗る兵法を知り、勇にして善く戰ふ、さるによつて往日より、屢よく劇賊を破り平ぐ、臣よく是を知れり、渠等二人を使者として、小賊を討ぜしめば、何の難き事かあらんと勸めける、成都王大に喜びて、卽ち又此二人を召され、賞物を賜らて、渠等が志を勵して行玉ふ、夫より二將命を受け、部下の將卒を撰んで、是も星夜を分たず、靈昌道口に急ぎ往て、石勒を取りひしがんと憤りける、

夏庠計圍劉曜

漢の左都督劉曜は、粮米をはやく魏郡城に入れて、劉太子の、急に救應せんとすれども、沙麓關の下に於て、姬澹等がために數日を阻てられ、心中已に焦れ惱めば、日夜に是を攻擊てども、姬澹、包廷、其の勇の手なみを見し故、大に懼を生じ、死を以て關を守り、更に出て戰はず、只に木石射矢を以て是を防ぐ故、急に是を攻破る事を得ず、多くの日を經れば、晉軍も亦木石を取盡して、今は投つべき樣もなし、時に漢將ども、新手を入代へ〳〵、輪輪して迭に是を攻たつる、姬澹、包廷の兩將、心中大に懼れ、如何して防ぎ留めんと思ひ惱みける所へ、探軍上り報じて言ふ、順陽の全部の兵、こゝに到れりと、包廷聞くより大に喜び、親ら出て是を迎ふ、周幷、夏庠の兩將、程なく關に上り、相見も畢りければ、姬澹其時言を發して、我等屢大敵を歷て、數强將にも遇ひつるが未だ曾て劉曜が如き者は見ず、這男つねに銅鞭を執て、利害にわたる

事大なり、今より後とても、與に彼と戰ふ事を止め、切りに防ぎ守る事のみを、肝要となすべし、夏侯聞いて、既にしかも將軍の言を以て、彼が量を考ふるに、ひとへに勇あつて謀なきの人なり、然れば我が等、策を以て是を破らんに、何の難き事あらんとて、次の日兵士に命じ、堅固に關門を守らせ置き、衆將は則ち、山に緣り林に依りて、四方の地形をとくと看過すに、關の西なる山谷より、わづか一條の路あつて、漢軍の寨の後に、通ずべきやうあり、是をよく〳〵見置いて、其より夏侯は、諸將と共に營に回り、爰に衆を集めて議して曰く、劉曜勇あれば、味方只に關下に在つて、明らかに戰ふ事を成すばかりにては、中々以て彼にやすくは勝ちがたし、我こゝに一計あり、今夜四更時分に、周將軍は、副將毛申、蔡義、胡才、王敬の四將を帶び、兵士五千を領じて、西の谷口の北、樹林の叢雜の內に伏したまへ、姬將軍は副將吳新、李奉、石欽、余叩の四將を帶び、是れも兵士五千を領じ、西の谷口の南頭狹路、坳なる塢の中に伏玉へ、楊正、馬程の二將は、吾上陣に隨へ、明潤、高梁は、包將軍を助けて、緊しく關險を守り、住めよ、今夜五更の時、我即ち關を下り、西谷の中より、遥に北頭に出でん、彼必ず思はんは、我去つて敵の根草を、截燒ん爲ぞと意得、定めて劉曜力を盡して、我を趁退けんとすべし、那の時われ詐つて敗れ、谷中を望んで逃ぬべきなり、劉曜血氣の勇を恃んで、決して我を追かけ來り、谷中に入りぬべし、其の時砲を放つて號となし、兩頭の伏を發し、彼を困しめ住めば、如何ぞ我が二員の將に、當る事をなすべきや、かれを擒にせずんば、則ち彼を此にて死さんと說く、衆將是を聞き大に喜び、此の計まことに以て、劉曜を制し、漢兵を退くるに足れり、大晉の福ありて、此の夏公に遇する事を得たりと云ひて、各々備をとゝのへ、相圖の時に依て去り伏くす、次の日劉曜、正に今日、關險を打たん事を議せんとするに當つて、忽ち探馬告げて道ふ、晉將夏侯、引兵一萬計にて來て、爰には戰はずして、遥に西谷の中に出で、ひそかに小路を廻つて出づ、察するに其の意吾根草を襲はんとするに在りと見ゆ、劉曜言を听て、急に支雄、丁膺に命じ、兵二萬を率ゐて、東路を守り止めさせ、自ら精兵三萬を率ゐて西谷口に往て、晉兵を阻てたり、果して夏侯が谷の外に出來るあり、劉曜爰に人馬をとゞめ、陣勢を開排いて待かけゝる、夏侯も亦陣を列ね、馬を出して相向ふ、劉曜が曰く、汝これ何人なれば、敢て來りて吾大寨を襲はんとするや、汝ち獨り劉希、馮奕、章龍が形勢を見さりしや、汝もし事の得失を知る者ならば、好好關を開いて、我が根草を放つて、魏郡に到り去らしめ、而して後ち、吾が兵を整へ、爾が十八路の諸侯と、一大戰を決するを見んは、方に是男子たらん、若し要へとゞめて苦戰をなし、强て我を阻てんとせば、恐らくは汝等、我這の鞭子を免れ得さらん、夏侯聞いて、爾那の胡種、只よく無名の下將を、欺くの類と思ひ過ちすな、今日吾が名を聞かば、早く風を望んで退き去り、汝が殘生を保つべきの計をすべきことなるに還つていまだ此の地にとゞまり、敢て此の胡言をなすや、是事を識らざるなり、劉曜說を听き大に怒り、鞭を揮るつて出づれば、夏侯銷をとつて接り戰ひける、二人並びに兵器を施し、各雄風を震つて鬪ひ三十餘合するに、夏侯は乃ち爰に佯り、劉曜に敵をなして、抵とゞめざるが如く、虛しく一鎗を架はずし、遥に谷中に望んで走り行く、劉曜勇あまりありと雖ども、いまだ未練の小將の、はやり切つたる心なれば、何の遠慮にも及ばず、夏侯が實に逃るぞと意得、後に從つて赶け去り、進んで北の谷口に入る、此の處樹木蓑雜りて、如何さまにも意得がたき所ぞと思ひければ、劉曜あやしみ心付きて、しばらく馬を勒し、頭をめぐらして回り看るに、並に何の動靜なし、さては伏あるにもあらさめりと、心を放して又赶けゝる、行事いまだ數里ならずして、前面山狹く路少なるに、いつしか夏侯を見失ふ、是に於て劉曜はじめて心付、猛く看りみ、急に此身を回さんとすれば、只听く砲の聲、天に沖て起りけり、劉曜さては、計に中てられたりと察してければ、兵を揮ひて殺戮り、谷口を出んとす、爰をば周幷、四たりの副將を率ゐ領し、把り住めて射出す矢は、雨點よりも繁ければ、あへて馬を進むべきやうもなし、劉曜思ひけるは、恐らくは過つて、手傷にても負ひなんは、口惜きことなるべしと、それより身を翻し、南頭に向うて去りけるが、いまだ隘口にも及ばざるに、姬澤又兵を引いて、路口を把住め、叫んで劉曜小賊、好々馬より下つて綁を受けよ、しからば汝が一鞭の仇をも免さん、今日谷口皆已に塞に斷ち切て、兩邊は是强弓にあらされば硬弩なり、たとひ汝に翼ありとも、逃るゝに及ばじ、北口上は周幷把り住めたり、夏侯將軍も、又大兵を引いて遥り出で、早爾が後にあり、急いで思案をせよと云ひて、大にこそ笑ひける、劉曜聞いて大に怒り、汝打たれていまだ死せさる所の狗奴、何ぞ敢て亂言するや、那の小男子を爾知るや、世に稀なる夫なるぞ、たとひ百萬の雄兵ありとも、吾猶これを見る事、蒿草を刈るが如し、此竹節一鞭の手段ぞかし、汝ち若吾是狂言、妄りなりと思ひなば、もとより事に覺のある者を出して試みよ、汝恐れて狹き處に身をかくし、刀鎗を避くる事を得ばず、はや〳〵來り戰へ、姬澤これを聞き、今爾が自ら廣言なすに任せ、いさゝか

以てとり合はず、吾は只汝を活ながら拿ふる計をこそ請じたれ、汝が如き半死の者の對手とならん事をば、吾は欲せず、汝が命須臾にあれば、意のまゝに繰ぐべしと云へば、劉曜大いに憤激し、卽ち銅鞭を擧揚げ、直一文字に打ち進む、晋兵どもも是を見、弩箭を齊しく發し起せば、又叟も前にあたはず、劉曜が副將岐顔と云ふ者、其の外の兵士と共に、劉曜に謂て曰く、南口は路狹し、既に又斷り絕れたり、はやく北頭に殺り轉らんには如かじ、必ず接應の兵あつて到るべし、然らば內外より、夾んで是を攻めんに、自ら守兵を破るの勢ひありと、劉曜是を然りとし、乃ち兵を回して殺り轉ぐる、姬澹は是を見、何國までか漏さんと、兵を進めて是れを掩ふ、劉曜怒つて自ら進み拒む所へ、晋の副將吳新、兵士を倂せて進みかゝる、劉曜は銅竹鞭を飛舞して、是を打除ふに、紛々として亂倒し、死する者百餘にあまり、吳新も叟に擊死され、つゐいて寄する石欽は、腕を斷れて逃げて行く、姬澹は劉曜が、あまりに勇なる武略におそれ、其れよりは兵をとゞめて追はざりけり、

曹疑等來救劉曜

劉曜はかくて北頭に到り、周幷と相攻合ひ、凡五回に及んで、今日も既に未の刻になるまでの、せり合なれば、晋兵どもゝ已に箭矢を射盡したれども、只に死を守りて、是をとり住むる故、劉曜は圍みを出づる事克はされば、亦力を盡して攻破らんとす、叟に漢軍の前鋒關心は、粮草を守つて居たりしが、諸將に向つて曰く、日已に未を過るまで、劉都督が軍をかへさざる、吾是を察するに、敵のため困しめらるゝに非ざる事なからんや、汝等は緊しく粮草を守るべし、吾は往て是を救はんとて、已に支度をしたりけるに、曹疑は是をとゞめ、將軍は叟に在つて、宜しく粮草を守り玉へ、急に人をつかはし、東路に往たる支雄、刁膺を召んで、我と共に西谷口に至りて、晋の兵を破るべし、都督は必定して、谷內に困しめらるゝに遭ひぬらん、吾は先づ一時も早く行くべしと、蒂將普魯、古祿烏の二將をともなひ、支雄、刁膺が方へは、馬を飛せて其旨をつたへ、曹疑は兵士一萬に將として、飛ぶが如くに、劉曜を救應せんと馳せたりけり、遥に隘口に至りぬる處に、却つて夏庠は思ひよらず、曹疑が兵の驟に至るを見、遂に陣を整へて待戰ふ、曹疑は叟に兵を交へ、兩家の喊をあぐるの聲、天に震うておびたゞし、劉曜は周幷と相戰つて、申の刻に至るまで、救の至るをも見ず、心中まさに惱んで、猛く叟にきり破らんとする折から、喊の聲おびたゞしく、山谷に響を聞き、是救ひの兵の

至れるよと思へば、弼氣勢さかんになり、劉曜叟に大音あげ、救ひの兵已に到ると云へども、卒に內に入る事能はずと見えて、事叟に極まりたり、惣兵力を効して吾に隨ひ、此の處を殺出よ、大丈夫何ゆゑか、肯て甘なつて、いつまでも圍の中にあるべきやと、遂に自ら當先して、晋陣に突き入たる其勢ひ、うち出す鞭は、谷風を捲て、馬に逢ひては馬を倒し、人に遇ひては人を亡す、是を見て晋兵、蜚く皆列なり開き、潰逃るに及ばず、時に晋の副將毛申、成業、雙び來りて阻て住む、劉曜は直に毛申を取り、只一合の鞭を以て、毛申が頭盖を打ちければ、忽ち其に死にけり、漢將岐顔は、亦晋の成業がために擊たれたり、劉曜是を見、大に怒り梟りて、進前し來るを成業は常の者よと、妄りに思ひあなどりて來り敵し、亦鎗をさしのべて、劉曜を刺んとせしが、思の外に手剛くして、いまだ二合も戰はざるうちに、劉曜が一鞭を以て、腦袋を金盔の上より打くだかれ、頭醢うちわれて馬より下へ、倒飜して死にたりける、周幷は外甥の殺されたるを見るより、親ら刀を輪し前み來り、甥の仇を報いんと、其勢ひ甚だ雄猛に、頭下しに亂り砍る、劉曜も亦怒り憤惱り、其の身を更に顧みず、及を冒し亂打し進む、此一鞭あやまたず、周幷が右の臂にあたれば、周幷こらへず、刀を棄て走りける、蔡義は急に來り到つて是を救ひ、周幷にかはつて、劉曜叟に向ひ、小賊不禮なり、とゞまれと打てかゝりけるが、是も肯なく劉曜が一鞭を被むりて失せたりける、劉曜は由なき者に遮られ、あつたら敵を逃したりと、つぶやきながら、周幷を赶け行く、かゝる處へ、姬澹は砲の响きを听くより、周幷を救はんと馳せ來る、劉曜是を見、周幷を棄て敵兵を赶け散し、衝て谷口を出で行きけり、夏庠は是を見、恐らくは劉曜を、なしく走り脫さんかと、親ら阻て住めんと、馳せ向ふ道にて、劉曜にひしと出遇うたり、兩人それより、大に雄威を展て殺得る勢ひに、兩馬の塵を跑たつるありさま、黃沙は捲て漠河に連り起り、四方に滾々たりければ、傍より見る人の面、其儞と我と分明ならず、敵咏方のさかひも知らぬに、天色また昏れんとし、山務すでに朦朧たり、叟に曹疑は、夏庠が後より殺り至つて、劉曜を救へるに、蕃將古祿烏は、晋將胡才が、防ぎ入る矢に、直たゝ中を洞され、馬より落ちて斃れたり、曹疑怒つてつゝと馳せより、胡才を獲へ、あまりに腹や立ちたりけん、拳を以て格き死したるは、すさまじかりし勢ひなり、已に夏庠を、內外より夾み擊んとするに、夏庠は漢兵の、救ひ至ると見るより、力を盡し劉曜を目にかけ、一鎗に衝き殺さんと、思ひ含んで搶出す鎗、あやまたず、劉曜が脇の下に入りにける、夏庠はこれを見、決して劉

曜をば刺殺しつと喜ぶに、劉曜もとより捉わさの小將、身を側め腰をひねつて手を出し、鎗頭を執へてひき付くれば、夏庠は間近くぞ寄りにける、劉曜、撲よげなるを見さだめ、例の銅鞭を擧あげ、夏庠が背心を、思ふやうに打中れば、夏庠はたまらず鎗を捨て、紅血を吐き出して走げ行きけり、劉曜是を赶かけんとする時、姬澹が兵到りて、又爰に一戰の闘場をかまへたり、混り戰ふと一番もをはらざるに、天晩谷黑ければ、双軍自ら收りて、今日の闘は別れけり、姬澹は山寨に回り、人數の傷殺を點檢するに、夏庠、周幷が傷を被むるより、始めとして、其の外副將五人、兵卒七千を折かれ、其の外劉曜が銅鞭を以て、亂れ打たれたる人馬の傷、幾許と云ふ數を知られば、晉の將卒肝胆を破つて恐をなし、今は誰か一人劉曜に敵對せんと云ふ者なければ、此の如くにては此關、長く防ぎ持つに難からんとて、早く人を魏郡に遣し、委曲の勝敗を告しるし、救の兵を亦請ひにける、

朱伺吳寄重到靈昌

既に廣州の大將、朱伺、吳寄等は、兵を引て靈昌道口に至り、共に石勒を退けんと怕り、十分の威を振はせて馳せ來る、皮初、夏雲の兩將、接對して欵を叙べける、時に皮初兩將に向つて、說きけるは、さても漢賊思ひの外、兵將共に其勇にして、戰ひを合するに、中々以て當りがたし、此の故に我等、日夜只に死を以てこれを守れり、それだにも惟其衝過す事を被らんかと恐る、しかしながら、賊兵彼れ粮米の多きに累はされて、敢て妄りにすゝまざるこそ幸なれ、二位今爰に到らる、甚の良策有て、賊兵を退くる事を得たまふべき、朱伺答へて、但これ此路すぢ、段々險隘多うして、各々守り住むるならば、兩路ともに中々進取ることは叶ふべからず、さりとても惟に、是を防ぐ計りの手段にしては、如何なる他の變出來るべきも知らず、兎角に眼前の敵賊を砍り退くるの策あるべし、其については一計あり、吾れ精兵五千を帶びて、ひそかに後にまぎれ、賊軍の營を襲ひ、火を放つて、つみ置ける所の粮草を燒却せん、彼が軍是のみにて、縱ひ退かずとも、粮草を燒亡せば、大軍久しく持がたからん、且らく明日試に、彼と與に一戰を合せ、其強弱虛實の間をはかり見、さて其の後再び計議をなすべしと云ふ、夏雲聞いて、明日の戰兩將の威力を以て、我軍全く勝つならば、其の後慢りに計を行ひたりとも、賊兵懼れて備を調へ、用心爲べし、然らば吾等の計事いたづらならん、今彼數度の勝を得たれば、其志し必ず驕らん、復以て我を意とせじ、然れば某願はくは輕兵五千を領に、ひそかに賊

營の後に出で、三更に到らんころほひ、火を縱つて是を焚かん、此の如く計り中つるとき、二將軍等火の起るを見は、兵士を以て是に臨め、定めて全き勝を獲べきと云ふ、朱伺聞いて曰く、且く明日に到るを待つて、事を計るの後になし玉へと、其の夜の議は爰にやんで、各々休息したりける、次の日石勒又兵馬を領し來つて、路口を爭ふ、晉將朱伺、吳寄は衣裝嚴に整へ餙り、副佐の將を領して寨を出で、陣を佈ける其よそほひ、盡く皆金の盔銀の甲にして、壯氣昂々たり、馬を立つて戰を待つ、時に石勒は左に襲安、右に桃豹、後に姜飛、汲桑ありて刀を横へ、向に前んで晉將に當て曰く、靈昌河口より此に至つて、晉の將士の、吾に相抗ぶる者、死せざるは或ひは傷く、汝なんぞ事體を知ずして、又來つて虎の身邊に威を逞うせんとするや、朱伺聞いて曰く、前者諸將、汝が曹を見あなどるが故を以て、反つて汝が志しを得せしめたり、今我親ら來れり、汝等理まさに手を束ね、馬より下つて擒にせらるゝ事を免れよ、猶妄に肆まゝに狂言するや、豈に廣南の大將の、威名ある事を聞すや、石勒大に怒り、馬を帶びて出でんとす、時に只見る、汲桑が手に大斧を揮つて、晉陣を過ぐるに、晉兵ども是に逢うて、乃に迎ふほどの者、一人として斬り倒されずと云ふ事なし、さながら狂風の、葉を捲が如くなり、吳寄は汲桑が步より行いて、肆に砍り狠るを見るより、戟を挺げ向に前んで、汲桑を馳んとす、汲桑すこしも畏れず、逼り近いて大斧を已に打つくるを、吳寄は馬をかけはずして、過んとせしが、汲桑が步行馬よりはやく追すがうて、つひに吳寄が乘たる馬の足を砍斷つゆゑ、吳寄もたまらず地に落ちたり、朱伺是を見、連りに忙しく來り救うて、一鎗をひねりかけ、汲桑が前に馳至る、汲桑急に敵を迎へて、朱伺と戰を合する間に、吳寄はやがて起き上り、鎗をかい〳〵て走り去る、かゝる處へ石勒が赶け來り、朱伺に向つて戰へば、汲桑は朱伺をば、石勒に押むけ、己は吳寄を擒にせんと、飛が如くに赶けゝる、吳寄は汲桑が、步行の迅速なるを見、とても逃げては追つかれんと、立住つて迎へ敵す、吳寄は元より步戰によからねば、戰十合にも及ばざるに、やがて汲桑が一斧を被り、右の腿に切あてられ、是非なく地を撲て倒れけるを、汲桑かさねて、一斧を加にあつれば、吳寄が天靈蓋こゝに開いて、さしもの猛將の失にし果こそ哀れなれ、夏雲これを見、朱伺も又失あらんかと、殺出して相助けるが、いまだ陣頭にも至り着ざるに、桃豹が一鎗を、肩坎に打中られ、大に驚き、魂飛で天外に馳せ、痛を負ながら逃げ轉へる、朱伺は石勒を、砍退けんと欲するに、姜飛、襲安が先を爭うて、共に馬を馳せならべて來るを

見、是も叶はじとや思ひけん、戰を捨て走りゆく、郭墨略等是に氣を益して、一齊に追かゝつて攻立る、是に依て晉兵十に五六を喪ひけり、朱伺は漸く寨中に逃入り、皮初と同じく、鹿角なんど云ふ防ぎの具を以て、追上る敵をやう〳〵に把り住めたり、石勒もまた、日すでに晩れに及ぶを見て、それよりは兵を收めて回りける、

陸機計選二兩路守將

爰に晉の成都王は、夏侯、朱伺等を靈昌道へ遣したれば、定めて北漢軍粮の軍をば、やすく拒き住むるならんと思ひ、乃ち陸機等と計議して曰く、今城中の劉聰等、饑粮も必して少なからん、若し此城をだに一たび下しなば、二路の殘賊は自らに走りぬべしと、陸機も此の議を尤と定めて、即ち諸侯の兵士を下知し、輪轉して爰に時を定め、番手を入替々々攻させける、張賓は城中にあつて、方を分ち將をくばつて守り禦ぎ、きびしく寄手を追ひ退くれば、晉兵の日々に討るゝ者、其數記するに暇なし、かくて第三日の未の刻ばかりに至り、晉兵盡く疲れてや在りけん、まさに他の番兵と、暫く入り換らんとして、其備の緩に動き退く所へ、王瀰、劉靈、關防、張賓、黃臣、楊龍等の十二將、六門を分つて、一齊に突出づる、此の勢に當り難く、晉兵一同に、亂れたつて引退く、晉將どもも慌しく下知して、止れと云へども、漢將共が他日の休息にて、意氣を養ひたつるの鋭氣には、誰か眞に是に當らんや、終に紛々として亂れければ、討るゝ者數知らず、其晉兵の死せる屍共を積上なば、岡をなすべく、流るゝ血は漂うて溝に似たり、首を斬ること七千級、城河の中幾んど塞がり滿ちたりけり、されども王彌等老練の將なる故、勝に乘じても遠く離れず、兵を收めて程なく城に入りにけり、成都王は又、一陣の敗をとり、其の心十分の惱悶なり、爰に衆を集め、共に其の事を議せんとして、諸王、衆大將の相見、幾に畢らんとするとき、馬を飛せる使者ありて、遥に中軍に入り、文書を持して是を奉ず、成都王急に拆いて見、諸王、衆將に是を示すに、衆人皆々色を失うて言語なし、時に成都王は使者を召して、面あたり彼に問うて曰く、そも劉曜と云へる者、何等の模樣なれば、此の如くの利害をなすや、使者其時恐懼の貌、自然にあらはれ、是に答へて曰く、先づ劉曜が身の長を申さば、大體九尺と申して、八尺五七寸には減ずまじ、面は春の桃花の如く、目は漆を點ずるに似て、眸子すゞしく只血盆に像り、眉の潤さ二指を入れ、手を垂れて膝を過ぐ、さて又鞭の法神に通じ、久しく戰つて、其力益々倍す、是に依て味方の將、かれに力を敵する事なく、かやう〳〵の次第にて、遂には味方の負となると、かの計つて谷に塡めるを始として、首尾一偏を談ずる内、多くの驍將の、折かれたるを聞くにつき、成都王は目をふさいで默坐すれば、諸王衆將は、舌を吐て仰天す、成都王は此の說を聞き、やう〳〵に嗟嘆の聲を發して、劉曜此の如きは即ち、眞の大丈夫なり　何ぞ中國の眞主を助けずして、長く胡寇の奸勇たるや、それについては、石勒も吾洛陽に入りし時に來り投せり、其節は一の娃子たりしかば、以て孫秀に仇怨を報ぜし折は、人々やさしき志ぞと賞せしに、今亦何ぞ此の如くの獰猛ものとなるやと、再嘆未だ了らさる處へ、一騎の飛馬直に轅門に入り、縄に馬より跳り下ると、乃ち是靈昌の皮初、朱伺が差し來す所の使者、救を乞の文書と云ひて奉げたり、成都王大に懽き、曾怒つて曰く、二處の兵、只守將に令して險阻を守り住めよとこそ云ひし、何の故にか苦しみ勞して、與に戰ひ、由なき兵を折き、將を損ずる事をなして、吾命令を能する事なき、使者の曰く、石勒勇を特んで攻迫る故、味方も是と戰はざる事を得ず、しかる所に其の副將、姜飛、汲桑、夔安等の數人、命を顧みざる惡もの共にて、死をすてゝ攻戰ふ故、味方の諸將多く折き、兵士四五千を亡ふ、是に因て救兵を急に求むる處なり、若し或は爰を破られなば、內外相合して、賊兵勢をまし、粮一回び城に入らば、前功盡く廢れて、由々しき大事たるべしとて、即ち兵士を折損ずる處の目錄を指出す、成都王是を取て、使者には賞を賜りて出し、文書を披いて是を看、横手を拍て怒つて曰く、百萬の大兵を以て、一魏郡の小城を圍む事、四十日に至れども、いまだ是を下す事能はざるさへあるに、又兩路の竪子が兵をだに、戰つて勝事叶はずんば、何の面目あつて、再び洛陽に入りて伏命せんや、陸機が曰く、二處の小寇、實に群を超えたる略あるに非じ、但遣る所の者共は、皆將佐の材にして、能く主帥の任に當る輩に非さる故なり、故に幾回も其失ある事を致せり、今度はまさに刺史の謀略ある者に令して、親ら兵部を領じ去らしめば、必然として二竪をば、安く破るべし、成都王の曰く、士衡元帥の職たりながら、まさに兵馬の事をば、自ら任として、心を入るべきの事なるに、何ぞ初より是を敬み正さず、妄に自ら膺むる者の言にまかせ、碌々として其器量なき者を遣し、此の如くに他らなる將士の死命を絶つのみか、賊の勢を益し、返つて大國の威風を落し、笑を天下の者に取れる事是可からんや、陸機が曰く、吾前に此の二賊を以て、與し易しとして、曾て意を著さる事是過てり、今すでに亦其の兵熾んならば、勁兵を先づ去らしめて、是を破らす

べし、爰に西涼の刺史張軌、智足り謀多く、兵精しうして將猛ければ、乃ち前部たらしめ、再び陳敏、邵續の二人を調べて是が輔翼となさん、此の者共に勇略雄れて宏いに、識見また深く遠し、此の他の三鎮の兵を遣し、姫澹を助けて、劉曜を破らん、再び青州の刺史荀晞を命して、前部とし、南平の應詹、應州の劉沈を補けとし、此の三人を選ぶべし、何れも深く六韜、三略の旨に通じ、孫子が兵の法を得つれば、機變群を超えたる者共なり、此三部の人馬を以て、皮初、朱伺を救はしめば、以て石勒を破らん事、何の仔細にか及ばん、さて又吾等は日夜に意を協へ、倶に城下に至りて是を攻めば、何ぞ敵の衝き突く事を怕れんや、若し一處功の成る事を得ば、二處は自ら幌れはゞんで、猶一戰に以て盡く破れん事、是又易きに在りと說く、成都王は此說を聞き、乃ち憂を回して喜となし、即刻六州の刺史に命令あつて、入つて此の事を議せしむ、六部の鎭將は、成都王の命に應じ、元帥の軍帳に上れば、成都王相見ありて曰ふやう、孤もとより六位は大なる方伯、兵強く將勇なる事を相知れり、まことに其威人を服するに足なんかな、其れにつきては今劉曜、石勒、兩個の賊子部、糧を連し兵を備へて、來つて魏郡を救はんとす、甚だ渠等猖獗して、昨に遣す處の將官、數回に及ぶと雖とも、皆皆是が爲に挫きをはられ、太だ國の威を失へり、思ふに列公の、親ら往て、是等を制するに非ずんば、全く討劃する事叶ふべからず、茲を以て、各位を今勞せしむる所なりと、懇懃に禮儀正しく述られたり、其の時張軌等五人、互に面を見合せ、進み出て畏つて申しける、此賊等皆々、胡虜の性に習つて、悍暴うして獰に猛し、其の力敵すべきに非ず、只是智を用ゐて取るべし、前者諸將は勇を恃んで、浪に戰ふ故に、幾回も失あるに到れり、臣等此たび命を蒙り去つて、渠を制せんには、ひとへに方略を用ひて、正に勝つ事を制すべし、卒爾を以て、大國の威武をば損ずべからず、大王心を放ち玉ふべし、不日に二豎子が頭を以て、大王の旗下に梟んと廣言すれば、後日の勝負は知らねども、天明れ勇智の大將どもや、此の人人の相向はんに、如何なる狂勇の賊漢なりとも、易く破を取るべきぞと、王の左右に列居たる群將共、始めて喜の色をあらはしける、成都王大に悅び、餞別の饗應、賞賚、其禮式を盛んにして、是を送り遣られける、張軌等の六刺史、各部軍の將士を引まとつて、晝夜を分たず、兩路を分ちて進みけり、

通俗續三國志卷之三十五

張軌戰劉曜

沙麓關の晉の救の兵、張軌等の三將は、重ねて成都王の撰みに當り、命を仰じて道を倍し、星夜を侵し討つ程に、いまだ日數の間もなく、姫澹が陣に當著す、姫澹、夏侯等恭しんで出で向へ、それより山寨に伴ひ入る、張軌等の三將、爰に於て、成都王より賜りたる、賞物を取出で、ことゞく關將共に頒ち與へて、日頃の苦戰を犒ひ說る、さて次の日になりしかば、陳敏、邵續の兩の刺史は云ふに及ばず、並に姫澹、包廷、夏侯、周抃、三部の將佐を集會し、敵と戰ふべきの事を以て相議る、時に西涼の參軍宋配、列を出で衆人に向ひ、吾れ劉曜が働きを聞知るに、力よく千鈞をあげ、箭手よく鐵を穿ち、鞭法まさに神助ありと云へり、然れば必然として計を用ひて、彼に勝を取るべし、然らずんば、諸將恐くは敵し難からんと曰ふ、時に樂陵の大將董鈞、此の事を聞いて憤り妬みて、大に聲を擧げ、參軍々々、管の中より豹を窺ふが如き見をなす事を休めよ、其の劉曜たりとて、三手四足を、具足したる身にもあらじ、何ぞ乃ち自ら畏にし、彼を詭する事是甚しきや、菜不才たりとも、願はくは一陣を破りてん、且らく是を如何と見よと云へば、豫州の大將白耀、花如も亦、不平を抱き、二人口をそろへて一度に言ふ、公等みだりに、他人の志氣を長じ、自己の威風を滅す事を已めよ、豈これ堂々たる大國、せめて一將の虜寇と、よく敵する者のなからんや、宋配聞いて、我なんのためにか、別人を誇り奬めん、此賊もとより寡に然り、英武自ら頼を出づ、列位彼を貌に視て、忽る事なかれ、必らず出戰はんと欲せば、亦正に愼をなして是を防ぐべし、再び大晉の威命を挫く事を免れよと、言もいまだ畢らざるに猛く砲聲の震ひ鳴く事を聽得、張軌諸將に向つて曰く、此れ必ず漢兵のまさに來つて、關門を打つたらん、我等三鎭方面の大臣、爰に到つて、若し出て戰ふにあらずんば、彼等に怯きを示すなり、諸將心を齊しうし、一體ならん事肝要たり、儞我を以て妬み忌み、自ら相ひ傲り慢ずる事なかれ、以て國事を誤んか、成功の日に於ては、一に併せて奏し封ぜん、陳敏、邵續が曰く、詔を受け亂を討ずるに、若し命を用ゐざる者あらば、軍法を以て是を治めんと令し、夫より三位の刺史は、親らの將佐を率ゐ、兵を領じ陣を佈き、勢を調へて、以て漢兵の寄せ來るを待ちたりける、少間あつて漢兵共、到り進んで關を扣かんとせしかども、晉兵已に備あるを見、乃ち軍を

住めて陣を列ね、劉曜は關心、支雄、曹疑、刁膺を陣前に立て、高聲に叫んで、永明劉都督爰にあり、敢て我と戰ひを合せんと思ふともがらは、快く馬を出し來れと曰ふ、時に只見る、晉の陣上より、鼓の聲大に震ひ、門旗動きて隊の列を開くと見れば、中陣上の主帥張軌、金の盔、金の甲を披き掛け、紅の錦の征袍を著し、宋配、氾瑗、北宮純、令狐亞を帶び、左手には陳敏、白耀、花如、右手には、邵續、董釣、李用、皆堂堂と、馬を左右に乘進む、時に張軌は、高く劉曜を叫んで曰く、吾は即ち涼州の刺史張軌なり、晉、漢、此に艘の年戰を擇へ、時としてやみ了る事なし、是に因つて、爲に我爰に來れり、倆に勦む、早く兵馬ををさめ拾うて、外境に退き出よ、我まさに命を成都王に請うて、一生路を開き、汝を助るのみならず、魏郡範城の倆が漢の諸將をも、再び甦がへらせ、各故土に回し與ふべし、夫によしなく無罪の百姓等を、日夜に掻き擾し、以て殘害の名を被る事を免れよ、劉曜聞いて大に怒り、いまだ口を開く間もなきに、曹疑は進み出で、當今の天下は乃ち是、吾大漢の基業なり、然るに倆が晉國の爲に、佔らるゝ事を被りたり、是に依て我輩兵を起して、意直に洛陽を搗くにあり、焉ぞ此に至つて、背て兵を退けんや、倆が輩滻河に於て、偶少しき勝を得たるやうなれど、兵將已に十に二四を失ひたるに非ずや、是何の勝利とか稱せん、然るに即ち、自ら誇る事をなすや、快よく只今能者を爰に叫び出し、吾と一戰をなさしめ、兩軍の優劣をこゝろ見よと、大に叫でひかへたる處に、只見る晉軍右陣の上より、驍將董均は、槊を揮つて當先かけ、高聲に叫び、那個の是劉曜、敢て出來り、吾と箇三百合を併べ、退き怯れさる者は、便ち好漢たらん、劉曜听いて大に怒り、自ら鞭を揚げ、陣を出て曰ふ、只我便ち是賊丈夫、敢て吾名を覺へよ、其死期近きにありとあざけりける、董釣聞いて怒をなし、是に答もなさず、槊を舞して殺り進む、劉曜是を見て、又鞭を以て架住め、夫より二人陣前に挺出て、狼りに戰上三十餘合にあまれども、聊の勝敗なし、兩邊の敵味方、此の由を見て、聲を合せて氣勢を助く、曹疑は側に居たりしが、馬を勒して乘出し、都督しばらく止み玉へ、我易らんと云ひければ、劉曜是を聞て住めて曰く、此の賊口に大言を出せり、若しよく彼が吾と三百合せば、其の後には衆將を許し出して、戰はしめんと言罷み、再び戰を合せたり、劉曜は猶も往日の威風を逞しうして、銅鞭雲の捲が如くなれば、董釣平生の勇力を奮つて、鐵の槊烟の飛に似て、又爰に戰上三十餘合に至るを、李用は董釣が戰ひ、劉曜を下す事能はずと見るより、刀を輪して躍り出で、將軍に易らんと望む、董釣も亦叫んで、兩邊もとより相助くる事を得ざれ、今日我二人が、この高下を分つを見よとて、爰に於て三十餘合すれども、いまだ上下は知れざりけり、時に劉曜大に叫で曰く、我今倆と三び戰うて、始めて三百の一を得たり、倆ち猶能く三百合を完うせよ、其の間は再び、休息する事を許さじ、戰は輸贏の處に至りて、自ら高下は知れんと、各雄威を展べ、號叫えて又戰ふ、李用は傍に見物して居たりしが、兎角に劉曜が戰ひ惡く、精神倍し長ずれば、恐らくは董釣が、遂には失を引出さんと思ひ、刀を取り兵士をすゝめて、漢陣に砍過る、剛心是を見て大に怒り、刀を舞し、是も兵卒をすゝめて、馳せ合せて相鬪ふ、是に依て二人は、勝負なくて終らんとしたりける、董釣も初の程は、劉曜を敵し易しと思へるに、乃ち爰に戰つて、百合に到れども、並に塞ずも疎忽なきを見て、かゝるいぶせき男に合ひ、侮りにくしとや思ひけん、兩陣の戰ひ混るゝに乘じ、いまだ蹉跌ちの無きを仕合に、脫れんと思案を定め、乃ち日頃の力をつくし、一の槊を以て、劉曜が鞭を架ながし、馬を回して走り行く、劉曜是に勇をなし、何國迄も逃はせじと赶け上り、背より一鞭を以て、肩よりかけて脊に中てたりける、董釣急に身をひねり轉し、繩に槊を擧たるに、劉曜すかさず、又再び電光も猶遲しと、董釣が頭額を打ちたりける、剛力に打れて、何かは以てたまるべき、さしもに堅き金の冑も碎けて、直に腦漿を迸らせ、半時の夢を驚し、沙場の怨鬼となりにける、劉曜は遂に董釣を打死し畢り、李用をも併せて是を、打死さんと求むる處に、晉將白耀赶け進み、大に叫んで劉曜小賊、汝ぢ背後より暗に算つて、吾が上將を傷れりや、快よく向前み去りて、命を逃れんと欲するとも、われ汝を逃さんや、止れとこそ匈りける、劉曜は是を聞くより、馬を住めて靜に曰ふ、倆是何者なれば、又來りて死を投ずやと、鞭を輪して、已に一連戰上三十餘合に至るまで、肯て暫くも手を住めず、陳悛は是を見、恐らくは白耀が劉曜を、敵し住むる事克はざらんかと、鎗を取つて出で助く、劉曜爰に、晉の二將に敵すと云へども、其の力少しも怯なからざれば、並に少の却事もなし、反つて晉の二將の雌手なるを、花如は傍より是を見、刀を橫へ疾く趨めるが、意ふに暗計を以て是を襲ひ、賺して斬らんと劉曜を、當目寄りけるが、未だ陣上にも至りつかざる內に、一員の漢將、其の勢乳虎の如くなる男、手に大刀を舞し、惡らく截り出て、花如を喝して、小賊々々、何くへ往くや、倆が形の覺束なさよ、曹疑爰に在り、先吾と戰へと住めたり、花如是を聞いて、是非なく曹疑と、戰を合せて爰に止りける、是に因て劉曜は、獨戰して、白耀と陳悛

とを、一鞭を以て架隔て、東西に奮ひ撃ち、手を停むるに暇なけれど、少の失も見えざりけり、白耀は隙を覘ひ力を着け、劉曜が脇の下を窺み、一鎗を刺入れたり、劉曜は右の手に鞭を取つて、陳佽をさゝふる故、此鎗を受架むべき暇あられば、慌忙しく左の手をさし延べて、鎗の柄をしつかと取り、力を借して引きければ、白耀が身は斜になつて、馬と與に劉曜が手ごろにより來る、劉曜すかさず右手の鞭を、陳佽が鎗の透間におつ取り直し、電光の如く、白耀が頭を照して撲かけたるに、何ぞ以てたまらふべき、あはれや白耀は、たゞ一打に馬より下に打ち落され、路頭の露と消えにける、陳佽是に驚いて、心怯しく、馬の轡をかい繰つて、鐙を跑たて走りける、花如今は一人に打爲りて、曹嶷と戰つて居たりしが、左右を見れば味方もなく、吾勢の孤となつて、何とやら背後の、いぶせくも又悦しくも有りければ、是も又身を引きはづし赶出す、曹嶷は、花如が己を懼るゝの故、かけ出せると見てければ、何くまでか逃さじと、やがて追つき攻めかくる、花如はしきりに危く覺へ、馬頭を轉らして左の方へよけんとせしが、反つて曹嶷が一刀の手ごろに廻り、一打に斫死さる、李用是に驚いて、馬を放つて逃れ去りけるが、頭を回して見れば、關心後より追かけ來る、こは叶はじと鞭を打つて、漸く二十餘歩計も阻たらんと思ふとき、向ふを見れば、曹嶷花如が首級をひつさげ來る故、如何せんと疑つて、馬足を少しく此に止めけるが、遂に關心が一刀に、首を砍られて死にたりけり、爰に於て刁膺、支雄が輩も、各々晉の數將を斬り、勢に乘じて兵を驅り、一度に湧いて進みけり、二鎮の兵此の勢にあてゝ退き、避くるに及ばず、相擁いて、相踐で、交へ横へ亂れ倒るゝに至つて、或は人に蹈れて死に、或は自らの兵器にあやまちて、身を破る者をかりける、されば爰にて晉兵の亡ぶる者、其の數を算ふるに計なし、斯ても張軌が一陣は、尚靜つて至りけるが、張軌此の亂を見、急に諸將に令して、是を斬りとゞめよと云へば、北宮純、令狐亞等は命を受け、刁膺、支雄等が、勇ほこつて來れるを、殺り退けて、此の一軍ばかりこそ、陣脚をば定めたりける、劉曜もまた、西涼の諸將の、勇なる事を知りたる故、人を損さして用なしと思ひ、軍を收めて寨に回れり、かゝりしかば三鎮の刺史共も、亦みな退いて、關上に回り、爰に死傷を改め見るに、大將四員、副將四人、兵卒萬餘を折きたれば、三鎮の刺史、心みな惱悶して、安からぬ事に憤り、それよりは關を閉ち、賊兵を討つべき手段の策をぞなしたりける、

石勒斬晉四將

於是に荀晞、劉沈、應詹の三刺史は、兵馬を領じ、逕に靈昌路に往き、石勒を阻て退けんと、路を急いで馳せけるが、數日ならずして、早く境内に近づきけり、晉寨を隔つる事、已に十餘里ばかりに成りて听けば、砲銳の聲大に震ふあり、應詹が曰く、是必ず賊漢の、我が晉寨を攻むる事の、急なるに非ずや、行を早めて是を助けん、彼賊倉卒に、我が大兵の至るを見ば、必ず慌て慴れて退き亂れん、衆將前に是を擊たば、我等是を後へに捉へて、終に爰に勝を獲つべし、荀晞も是をしかりとし、兵を催して疾く進む處へ、只見前路の細作の者、馬を飛して、石勒兵を引て、寨柵を攻打つ事、十分の緊急なりと報じ道ふ、雍州の刺史前陣を打ちけるが、此の由を聞いて急に衆將に下知を加へ、先行して、晉の營寨を助けしむ、此の時漢衆は、極戰ひ苦しみ攻むれば、晉兵は又寨に倚り、死を捨てゝ守りたり、されども殺傷算なきに至りて、最とも危く、あはや攻破られんかとする時に、忽然として三鎮の刺史の救の兵、數萬人、兩路を分つて、風の如くに至りけり、漢軍の謀主、姜發は、已に晉の救ひ到ると見しかば、令を各將に傳へて、軍妄に動すべからず、早く陣脚をとり定めよ、以て彼兵の赶け來るを支へとゞめ、失悞る事を免れよと下知すれば、衆將令をうけ、攻打つ事を爰に罷め、早く陣脚をとゞめ下したり、少間あつて三鎮の刺史皆到れり、中にも雍州の將官高標、伍兌、大將の前に進みて、胡寇石勒、吾等を駈き忽る事太甚し、されば我先づ漢の一陣に殺り入り、爰に軍威を振ひ、以て軍勢を盛にして、我が大鎮諸侯の氣概を顯はさんと云へど、荀晞は是に答へず、時に南平の大將蔣和、沈吟も亦是を贊けて曰く、此の漢賊甚だ是悶に悖れり、今我が手帥大兵を領じて爰に至るに、彼等猶ほ兵を列ねて覬覦る、是大國藩鎮の諸侯を、蔑にしたると云ふ者なり、若し是を向前んて逐ひ殺らずんば、彼に志を肆にさする處か、荀晞が曰く、彼吾が追ひ討たんずる事を慮るに因て、爰に陣脚をとり定むるなり、他の意有るに非ず、我今初めて此に到るの間、軍旅いまだ整はず、よろしく造次にすべからず、且兵行て多く倦めり、豈に戰を進むるの時ならんや、宜しく明日を待て計を定め、渠等を破るに遲からずと、青州の首將夏暢、此の言を聞いて、戰はざるは固に是なり、但よろしく軍を出して陣を列ね、以て彼弱を窺ひ、又我が軍容を、彼に示して威をなさん、若し彼無知ならば、退き動くべし、其時を待て擊たんも亦是善策なからんかと云へば、荀晞是に同じて、直に寨門に出て陣を佈く、漢兵共は、其の意を知らずして、戰を擧みけり、中にも上黨の驍將、王彌、龔保の二人、馬を出して戰へば、晉將高

標、伍兌、各々鎗刀を舞して來り防ぐ、是に於て四將、兩々相持して、戰上了に二十餘合すれども、いまだ高下を分たず、蔣和沈吟是を見て、馬を拍ち、向さに前んで助け合ふ、又漢軍よりは、吳豫、劉徹、出向つて是を欵り止む、是に至つて八員の將共、殺得れば、沙は飛んで漢河に接り、其塵滾れて天を遮ぎる、約し對する事二四十餘合に至りて、終に高標は王楊を刺死し、猶も勢つのりて、復び馬を勒し、龔保を夾み攻めんと馳向ふ、かゝる處へ郭墨略は、手に鐵蒺藜の玉をとり來つて、龔保を救はんとすれば、伍兌が弟伍曹は、又鐵叉を挺げて、郭墨略を拒ぎ留めんとかゝりければ、郭墨略が、一蒺藜にて眼を打たれ、眼珠忽ち迸り出で、倒に撞て馬より下つ、伍兌は是を見るより、牙を咬み齒を咽で龔保を打棄て、逕に郭墨略を敵に取る、郭墨略は急に伍兌に敵せんとしたりしが、其の忿怒の切りなるには當りがたく、未だ五合ばかりも戰はずして、伍兌が一刀を被り、郭墨略は、爰にて斬られたり、伍兌は眼前に、討たれたる弟の仇を、其場もかへず擊すまし、氣色放て刀をひつさげ、又龔保を擊たんと赶くる、龔保は此の氣の惡らきに怕れ、伍兌を避けんと走行きけるが、無殘やな沈吟に追付れ、一鎗を刺當てられ、忽ち爰にて討れけり、胡延模は是を看、大に呼んで、連りに味方の三將を失ふ、都督

や先鋒、なんぞ馬を立て救はざると云ひすてゝ、鎗を取て欵かかる、石勒此の言を听くよりも、怒呶ゆる事雷の如く、手に大刀を舞し、風捲いて晉陣に欵入る、高標是を見、鎗を挺げ敵對す、其の戰數合ならざるに、伍兌又到りて是を助く、石勒は頭を分ち、架け隔て從容ふりて、事ともせず、さながら戲をなすが如くなり、蔣和は石勒が此の如くに勇猛なるを見、亦進前して味方を助け、鎗を揉りて刺さんと、石勒を中におつとり圍み、三方より攻めかけたり、姜飛は是を見て、大に驚き救應ぜんと、飛が如くにかけ來る處を、雍州の上將、皇甫滔、かけ塞つて是を截住めて、爰に姜飛と戰を合せける、荀晞は三將の、已に石勒を圍み止めたりと見るより、衆將を下知し、一齊に斬り出で、先石勒を除き、其後餘將を欵れと云ふ、皮初、朱伺、夏雲、衙博等の十餘騎、是を聞くより、皆石勒におし趨く、姜發は是を見て、急に手をあげて味方の諸將を招き、晉將ども都督一人をはからんとす、早く出て救へと叫ぶ、靡安、桃豹、張越、孔豚、胡延模、趙毘、劉寶、劉膺、支屈六、張瞻僕等是を聞いて、各々馬を飛して競ひ進む、それよりは、敵一人を二人にて向へ、互に相對し住めたり、されども惟汲桑と吳像とは、直に石勒を救ひなんと、伍兌、高標、蔣和、二人を隔て開く、蔣和大に怒り、鎗を以て、逕

に汲桑を刺さんとせしが、返つて汲桑が一斧に、乘たる馬の足を砍り斷れ、倒に撞いて落つれば、石勒馬かけ寄せ、蔣和をば起しもたてず、一刀に砍て兩段となす、伍兌爰に蔣和を救はんとするを、石勒大に喝して進めば、伍兌は大に慌をたし、手を展ぶる事能はざるを、石勒又迫り近きて、是をも砍て兩段となす、高標は吳豫を戰住めて、爭ふ所に、思はずも石勒、背後より奮ひ砍て逐ける、高標是に驚いて、急に身を回して、石勒に敵せんとするを、石勒すかさず横さまに、高標が細腰を切て、馬より下に撞と倒せば、沈吟は又胡延模を敵にとり、正に戰ひ半はなる處へ、吳豫は傍より殺出し來れば、汲桑は又軍兵を砍り散す、晉兵ども是に刈開かれて、陣內數丈の道をなす、沈吟此の由を見、心大に驚き、戰を捨て退き走る、胡延模は一人の時だにも、勇威を振ひしに、ましてや吳豫が助を得るより、いよ〳〵氣勢勇にして、馬を雙べて赶け去る、沈吟は急に走りけるが、あまりに背後の叫聲近くに驚きて、たま〳〵頭を回し見るとて、前より來る石勒が、馬前に覺えず擒かゝる、石勒是を見て、やがて一刀をふり上げ、沈吟を馬下に斬て落しけり、爰に苟晞が家將苟應辰は、もとより驍勇の名ある者なりしが、獨り趙毘、孔豚の二將を、追かけ行きけり、石勒是を見て、横にきり隔て、刀をふり舉げ、大

喝一聲して打つくれば、苟應辰が頭べ、刀に隨つて落ちたりけり、夏陽、皇甫滔、衙博、皮初、朱伺、夏雲等は、戰つて上黨の諸將に敵し、往來互に入みだれて、陣を把り住めるが、忽ち靡安が一斧を以て、霍原を砍死せば、汲桑は胡德を砍る、是に因て晉兵ども、漸々として慓き亂れ、南北に走り散りけり、爰に又晉の副將應龍は、走りて姜飛が馬前を過ぐ、姜飛は是を見、一鎗をあげて打倒し、横さまに應龍をとらへ、馬鞍に是をひきつけて、馬を馳せて走り回る、晉の副將方態是を見て、鐵叉を舞して應龍を奪ひ歸さんと、背後より姜飛が腋の下を目當すまして、力にまかせ刺さんとす、漠の劉膺是を看、急ちに叫んで、姜先鋒々々、心つけて防ぎ玉へ、汝の側に人あつて、暗に先鋒を算らんとするぞと云ふ、姜飛是を聞いて、速く回看れば、方態が鐵叉をつき出し、已に危く近くを、姜飛はやくも、方態が鐵叉の柄を、雙手にて握つて、少しも働かせず、方態爰に鐵叉を捨て走りなば、命をば延なんに、姜飛が雙手に應龍を壓へとめ、雙手にて己が鐵叉の柄を収つて、あひしらふを見、竟に叉柄を奪はんと、兩手にて是を攀引けども、大力量の姜飛が、金剛力を出して把たるを方態なんどが取り歸さんとするは、さながら蟻力の泰山を動せんとするが如く、少しもさらに動かばこそ、剩さへ姜飛に近々

と曳付けらる、姜飛やがて方態をも挽とらへ、横さまに應寵が上にひき曇ね、二人を少しも働かせず、漢軍の中に馳入つて、やがて二人を馬上より、大地の上へ、力に任せて擲げ出し、是細へよと下知すれば、漢兵ども起しもたてず、二人を拿て綁りあげ、活ながら二將まで、安く擒にしたりけり、漢兵共是を見るより、勇氣增々十倍して、各々爰に功を建てんと、勇みかかつて大に進めば、晉兵共こらへずして、我先にと逃げ竄るゝは、淺增しかりける形勢なり、荀晞親ら向にすゝんで、飛將を喝り、陣脚を定めよと、下知して廻る處へ、汲桑は飛歩して、あたる者を砍りひらき、思ひかけずも、荀晞が面前に砍てかかりける、荀晞是に驚いて、急に是を避けんとするを、汲桑速くも、荀晞が乘たる馬の膊へ、大斧を以て斬込みたれば、馬は切れて已に倒れんとするとき、荀晞は日頃得たる捷にて、馬についで一躍をとると見えしが、忽ち二丈計を飛越え少し、小高き處にとゞまれば、馬は倒れてどうと臥す、汲桑是を見て、齒噛をなし、逃せし事の口惜しさよとて、つゞいて赴け進むとき、皇甫瀦、夏陽は、飛が如くに、馬をかけらせ雙來つて、汲桑を抵住む、是によつて荀晞は、危き處を脫れ得て、本陣に入りける、かくて汲桑は孤身にて晉の陣中に圍みとゞめられ、二將と戰を合するほどに、四面の晉兵漸々と曇り、辛に衝て出る事もかなはねば、四方八面飛歩りて相爭ふ、かゝる處へ石勒、姜飛は兵を驅り立て、大に進んで至りしが、汲桑すでに惡く闘ひ、狼りに極まると見るより、聲を合せて衝き去り救へば、皇甫瀦、夏陽は、此勢に恐をなし、叶はじと退き去りける是に因て、晉の軍兵共も、潰走りて、足をとゞめえず、劉弘ときに大に叫び、衆將もし向ひ前む事あたはずして、みだりに半歩も退く者あらば、爰にて速に斬らん、進めや者共と下知すれば、應詹、高潤、許雄、應詔、皮初、衙博、朱伺、夏雲等一同に、何しに爰を逃候はんと、進かりて砍とむ、石勒もはや、日の晩るゝを見るにつけ、兎でも一端に終るべき軍にあらずと、衆將を下知して引回すれば、荀晞も又、金を鳴して兵を收め、其の日の戰は爰に至りて止みにける、其の後三州の刺史營にかへり、人馬の數を點檢するに、今日の戰に傷を被る者五千餘人、死する者一萬人、劉弘が手にて折く處の上將は、高倫、伍兌、霍原なり、應詹が手にて折く大將は、沈吟、蔣和、胡德、方態、應龍なり、荀晞が折ける、家將には、荀應辰と聞えたり、晉軍の者共、傷悼んで嘆恨せずと云ふ事なし、朱伺は是を見、爰に何の煩惱をか爲すべき、明日二公等と共に一計をなし今日の仇を報ぜんは未だ遲しとせずと云ひ慰め、遂に酒宴を設けて、今日の苦勞を休めてこそ散

じける、

成都王計退兵

齊王司馬冏は、成都王が兵を出し、漢を征するの後、漳河の一戰捷を報じてより、是に至りて四十餘日、並に音信の事なければ、其の勝敗如何ともはかり難しとて、乃ち心腹の大臣孫洵に、軍士を犒の賞物を取り持せ、往いて其の消息を探らしむ、孫洵は命を受け、魏郡を指して往き向ひ、已に軍に至りしかば、諸王の相見すでに其の事畢りければ、情を動して問ふ、爰に於て成都王、前後の勝敗首尾一遍を說了る、孫洵是を聞き、眉をあつめて、實に此の賊此の如く雄にして黠しきは、勍敵たるに似たるか、然るに大王元帥たり、其の上五倍の兵を以て、此の城を圍み玉ふに、旬を歷て未だ尅さる事、豈是兵法の忌みたる事を懼れさらんやと、正に論ずる事も、いまだ半ばなるに當つて、探馬の小軍入て報す、靈昌路の兵、正に漢軍を相拒ぎ、其の戰ひ半なるとき、三州の兵到著し、頭を分つて殺さり、味方の諸將粉骨を碎しける故、漢將多く殺死され、已に功を成すべき處に、石勒、姜飛、汲桑が、不當の勇を鬪むが故、味方の雄將萬卒と云へども、遂に勝つ事を得ずと、軍帥の首尾一遍を逃べ畢れば、圍座諸王刺史等、盡く嘆じて曰く、賊寇何ぞ此の如く猖に獗きや、正に何の日か以て、平ぐ事を得べきと、嘆言いまだ畢らざるとき、沙簡關の飛報又到り、三鎭の兵、劉曜と、大に一陣の取り合ふ處に、早く負を引出だし、その戰將、白爛、花如を初として、折き畢らると云ふ、成都王是を聞いて曰く、寔に六鎭の兵の勝れたるだに、猶其鋒を合する事なき、狂賊は、そも如何して、勦つくすべきぞと言やんで、さらに嘆息の聲やまず、孫洵進で曰く、臣思ふに大王等、此の堅城を圍み玉ふに付けて、賊將張賓いまだ是、易く下すべきの器量にあらず、其多謀にして善く守る事、尋常の比に非ずと聞くに、寔に其聲の下むなしからずや、それさへあるに、味方今三面の敵を受け東に折け西に損じ、俱に各無功にして日を送れば、反つて是賊人の志をまし、肆に威をなさしむと云ふ者に非ずや、是に依て、臣愚が見を以て、是を計らんには、若かじ早く大王、六軍の兵を斂め、敵と大なる一戰を合せて、勝負を決し、復び漳河の勝をなすべし、否さるときは、精兵猛將、いたづらに營に俯つて、守り對せるは、正に木に緣りて、魚を求むるに同じからんか、成都王此の事を聞いてさらに、答ふる言もなき時、長沙王の曰く、孫長史の言是なり、劉曜勇猛にして、凡に非ず、諸將是に屢々挫かる、石勒また驍勇にして群を出で、勢こゝ

に盛なり、我等大兵の此の所に在るを看ば、彼等又心安からず、何とぞ隙をうかゞつて、勝事を好み、戰を謀らん事は治定なり、然るに味方、何の勝をとるべき、手段もなく、倖を願うていたづらに、堅固の敵城を守らんは、成功をなす所以に非ず、我もし惣兵を合せて一處とならば、敵は小勢味方は大軍、自ら是衆寡不敵の分あれば、彼もし再び動ずるに乘じて、大に戰ふときは、自然に又敵を破るべきの勢なりとすゝむ、成都王この議を以て、陸機に問ふに、陸機が曰く、長沙王の事又是理ありとす、今此の處成功をすゝめざるに、兩路の防ぎ屢々やぶる、宜しく一所となるべし、賊の粮道つひに、遠路に轉ずる故、兎にかく我と久しく對陣する事あたはじ、自ら其中に、彼を破るの日あるべし、成都王の曰く、しからば何の地か、以て兵を屯して、彼と對持すべき場ぞ、陸機が曰く、此去つて五鹿墟の地方こそ、南は馬陵に近く、險隘實に據りつべし、西は又黎陽を阻て、戰ふべく、守るべきの地なり、先此の形勝を取つて、據まひ然して後、兵を出して戰を合せ、與に鬪つて計をなしたらんに、彼をば遂に破るべしと云ふ、成都王は其言によつて、乃ち檄を傳へて、二處の守防の兵をも召かへし、俱に五鹿墟に至り會すべき由を、告げやりければ、張軌等使命の至るを見、其の故を問さためて、遂に夜に乘じ、寨を拔き拂らひ、魏郡に至り、俱に大軍と合しけり、

劉曜石勒入二魏城一

爰に劉曜は、張軌等が寨柵を除つて、軍を班すの事をば、いまだ且て知らずして、次の日に至り、衆を集め議して曰く、我いま此に到つて、許多の日を空しくさへられ、粮を進むる事を得ず、されば魏郡城の內、必然として食缺けんか、石勒も又阻てられたるらんに、城中の兵士、あに爰に餓死さらんや、汝等まさに、山上の小路を探り覓めて、或は以て關に上る事を得べくんば、吾計策に行ふべきの術あり、曹嶷が曰く、今彼關上の兵馬、甚だ多して、一時に以て卒くには破り難からん、必ず先軍師の、爰に到るを待ち、其の後招き催して、彼の奇計を以て是に施さん、然らば若くは、敵を破る事を得べけんか、劉曜が曰く、これは斯の如くなりと云へども、しばらく猶豫うて攻め討ずんば、敵兵われを弱なりとせんか、其中に軍師の備も押し來らんに、先一陣をすゝめて戰をなすべしとて、其の行を促す事もいまだ起さゞるに、只見る、探馬の回報して曰ふ、晉兵昨夜すでに皆な、寨を拔き去りて、軍を回せり、是何の故と知る事なし、劉曜聞いて、是魏郡の味方、何故ぞ變異あるに非さるや、若し吾が劉太子、城を去らんとするを、追

囮てんの爲なるか、然らば我又急に是を追ふべし、關心聞いて、また造次になすべからず、張軌、其識高く、副將亦勇たり其の外に夏侯、姬澹ありて、彼が助をなせり、然れば必ず備法あるべし、且く細作を關に上せて、しづかに其の實を探り求め、明日陣を列ね、跡より緩く進むべしと云ふに、劉曜此の議にしたがひ、細作をして往て其消息を探せけり、然る所に飛馬あつて、軍師もすでに後軍を領して、來り到ると告ぐれば、劉曜乃ち衆を率ゐて出接し、五里ばかりに至りて相俟ちつけ、一同に寨に歸りける、時に劉曜は、頃日前後相戰ふの事を說く、宣于是を聞き、殿下此の英武あり、何ぞ大事のならざる事を愁へんや、劉曜こゝに謙退し、皆是軍師の威德に託て、小勝を幸に得るのみ、然れども粮草を、魏郡に早く致す事あたはず、自ら愧を懷くのみと云ふ、宣于重て問ふ、さて指あたりての勝負は如何ぞ、劉曜答へて、爰に何事のありとは知らず、昨夜深更に至つて、山關の守兵、柵を除ひ、皆皆軍を班すと云ふ、是に依りて、我正に追去らんと思へども、丞相の軍の、來り臨むに逢うて、いまだ兵を發せざるなり、宣于が曰く、歸師掩事なかれ、追ふとも何の益かあらん、此は是晉の主帥、味方と對陣すると雖ども、屢々利を失ふが故、恐らくは其挫き跌事あらんかと、是を思ふが故に依て、只今軍

をば班せしめたり、思ふに彼又一處になつて、大兵を合せ、我が兵と戰はんと欲するならんと、道ひもいまだ了らざるに、細作は關上より回り報じて曰ふ、晉の大兵皆々五鹿墟に退き屯し、吾軍と大戰を決せんとすと、宣于報けを聞き、大に喜んで曰く、但粮草を以て關を過ぎ、かくて魏郡の急をだに濟ひ得ば、敵と相戰ふ事、吾れ何ぞ懼れん、此粮草を盛く移し、關を超えて平地に堆置き、明日早天に便ち起たんと、是に於て軍馬倶に關內に進めて、平川に駐めたり、次の日早天、宣于は衆將を集めて曰ふ、誰人か兵一枝を領し、先行し、以て敵兵の、路を阻つる有りや否やの、防に備へん、然して我等は其後に隨て起たんと、劉曜が曰く、城中すでに窮し極るの時なれば、亟に一時も早く進むべし、焉ぞ遲緩るべき、我と關繼忠とは、先にすゝんで是を驅るべし、孔世魯と麾鳳起とは、後を斷て、曹子高と衆將は、皆々粮草を保護せよ、喬晞兄弟は、亟相を輔翼せよ、然らば何の晉兵をか畏るべきや、宣于も此の議に同じ、さらば早速討起んと、次でに因て早く行列を進めけり、爰に又石勒は、靈昌の道口に在つて、晉兵と相持したりけるが、苟晞自ら一陣を敗られての後は、思ふにいまだ計のなす事非さるか、兩日を經ると雖ども、さらに出戰はず、石勒は姜發に謂つて曰く、我が靈此にさへられ、一路

口を爭うて、むなしく過ぎ通る事克はず、定めて城中の粮を待つ者は、大旱の甘霖を望むが如く、雲霓の至らん事を仰ぐに似て、目もまさに穿けんとするならん、しかるに今亦守兵(三鎭)をそへ、殊に荀晬が智謀多ければ、何れの時か能く、此粮を魏郡に送らんや、姜發聞いて、虎穴を探らざれば、焉ぞ虎の子を得ん、今まさに兵を出し、搦み戰ひ、彼をして味方の心を、疑はさらしめ、然して後、夜を俟つて、偸に敵の營をおびやかすに、火器を用てして、寨柵を燒たらば、方に縄に道を得、進む事をなさんか、然らずんば徒らに、日月を弊して、恐らくは大事を悞る事あるべきぞ、石勒が曰く 險中の險に作されば、人の上人たる事難しと、必ず存忠の言處の如し、かくては始めて幸に成功をなす事ならんか、存忠は此にあつて火具を辨じ備へよ、吾兵先づ去りて、搦戰ふを待つて、以て再び計をなさんぞと言ひやんで、帳を下り兵を整ふる處に、忽ち探子報じて曰く、晉兵已に皆退き去り、空營となりをはると、姜發が曰く、此乃ち晉朝の帥たる者、我がしばゝ〳〵勝つを以て、彼の衆或は將を折き、兵を亡する事多きが故、一處にあつまり、魏郡城外に於て、吾粮を止遏き、牽き動さしむることなからんとの巧みなるべし、石勒きいて、彼既に退き去る、我等即ち其後に隨つて發すべし、然らば城中の望を疑する事を免れんと云ふ、姜發が曰く、都督の言極めて善し、しかしながら恐くは、途中に於て敵兵に迫められ、或は後を斷つの兵あつて、阻て滯る事をなさば、我等は粮の絕有つて、又戰に便ならざらん事を、石勒が曰く、吾れ前驅となり、姜存殿後を斷たば、たとひ阻つる兵ありとも、何ぞ懼をなすに足らん、姜發聞いて、將軍見る所甚だ明かなり、劉王子の北路には、沙麓山の隔あり、一夫險を守れば、萬夫能く過ぐる事なし、昨に聞けば、晉兵と彼處に戰つて、頗る亦勝を得るとは沙汰すれど、但急切に關を過ぐることは、得がたからん、我先進んで以て、魏郡の急を援ふべしと、遂に兵馬を分つて三陣となし、襲安に令し、引兵五千を以て、鄉導となして進みけり、

通俗續三國志卷三十六

王彌劉曜敗晉伏兵

成都王は漢軍を、魏郡に圍み止むる事五十餘日になれば、城中殊く粮盡きて、馬を宰して食となすに至る、此の時西路救應の粮兵も沙麓、靈昌の軍にて、しばゝ〳〵勝を取るとは云へども、地形險難の處なる故、堅く令して守將を警しめ、ひとへに險に因て守る事をせば、中々一旦には通じがたくして、爰に數日と淹滯せば、魏城は易く落城すべかりしに、孫洵が謀なきの語、長沙王の不智の說に、成都王の聞を傾くるを、陸機と云へども其の議に同じ、一旦にして兩路の險を去り、一城の圍を徹てゝ、還つて五鹿墟に屯なさんと、軍を退けたる事こそ殘念なれ、爰に廣州の參軍裴悳が曰く、今我大軍已に圍を徹てゝ、心皆自らを顧るばかりにして統て一つなる事能はじ、倘や賊人精兵を以て、是を喰ひとめんとせば、必ず潰き亂に至らんか、必ず重兵を留めて、後を斷事をなさしめ玉はゞよからんと云ふ、陸機聞いて、吾が簑こと已に此に定れりとて、乃ち先鋒祁弘、張方等に命じ、兵二萬に將として、各本部の將佐を帶びて、十里の內に伏となる、是漢兵の追かけ擊つ時、防がしめんとの計策なり、重て馬隆に命し、本部の人馬を引つれて、是は又十里の外に伏となし、祁弘、張方が戰ふとき、救應ぜんの爲なりけり、爰に於て晉の大兵、みな〳〵次でに因て、漸々と繰引に卷きを解きたりける、城中其の日の巡番は、先鋒王彌が當なりければ、城池を輪りて用心をなしたりけるが、晉の大營中を望んで看れば、旌旆を竪てず、各々小寨にも人馬の行體もなく、全く皷聲鬧しからず、喚聲も寂なれば、意得がたき事なりとて、弟の王如に命じ、城に上りて見せしむるに、王如早く是を臨み見、即ち中軍に疾く趨き、張賓に見えて曰く、吾晉營の中を覩るに、並に動靜の事なく、遙に西の角にあたり、凡そ十餘里ばかりを隔て、旌旗の影飄へりて隱々たり、是我國の、救至るに非ざる事なからんか、晉兵とも是を迎ふるにぞあるべき、さなくんば又城外を明けゆるべて、我が等衝て出なば、其の故鄉にかへるの後を斷んと云ふ事か、兎に角今兵を出して、彼を追討なば、其輜重をば、獲にせん者をと、若き諸將は、たゞに勇氣を發して憤ほる、張賓問いて、敵軍の退き去る、是吾等の心も亦寬きと云ふ者よ、何のためにか、是を即ち追とゞめん、しかし其の何故に兵を退けたるぞと云ふ事を、人をやりて探らせ、再び計を行ふべきの事ありとて、早く人を城外の四門に出し、路上の人の物語を探り、百姓共の取沙汰までを尋問はしむるに、探子皆々報じて言ふ、漢兵兩路を分ちて粮を送り、此の城の援兵となさしむる處、晉人をして、沙麓山と靈昌何に於て、是を防ぎとどめさするに、其の西路より至る漢將は石勒と云ひ、其の北路の大將は、劉曜と云へるが、いづれも勝れたる英雄にて、兩路數度の鬪に、兩漢將の手にかけ、晉の將三十員にあまりて斬殺し、已に其の勢ひに、兩路の險難をも攻破らるべく見えたるを、晉の成都王是を懼れ、若し兩方の敵に、攻たてられて

は叶ふべからず、如かじ一處に大兵を集會して、是と戰をなすにはと、兩路の守兵を召き、輜車を纏つて只今退いて、五鹿城に屯をなし、漠の粮道を阻へ、其歸路を隔遏めんとなり、王彌聞いて曰く、急に是を追ひ討つて、敵の一陣をだに殺り破らば、彼他の計をなすに暇なからん、倘二路の粮草、一たび爰に到る事をだに得ば、又何をか懼れんや、張賓が曰く、いまだみだりに追ふべからず、必ず重兵あつて後を斷ち、我が赶け去る事を防なん、然らばたとひ赶去るとも、全き勝を得べからず、先づ早く二路に人をつかはし、粮草の軍に接應せん、是急務なり、王彌聞いて曰く、晉將正に張方、祁弘が最たるに過ぎず、我何ぞ是を畏れんやと、乃ち刀を横へ馬にのり、引兵五千を引いて、門を開き衝て出づ、張賓急に劉靈、關防、張眞、胡延攸を下知して城を出し、王彌が軍を助けしむ、王如は是を見、王彌が進むで失あらんかと察すれば、是も亦刀を横へ、馬を躍らせて後より發す、王彌は纔に追かくる事、五六里ばかりも至りぬらんと思ふとき、只听く一聲の炮の响きに、つゞいて殺り出る大將は、乃ち晉の伏せる前鋒張方なり、張方は兵を擺つて陣をなし、大に喝して曰く、此賊は王彌ならずや、儞は餓死去るべきの頑鬼、死期の遲を待かれて、自ら來つて命を送るや、王彌は更にこれが答の語をもなさず、刀を揮つて一文字に砍かゝる、張方是を敵し、戰ひ未だ十合ならざるに、王如は早く追ひついて、兄が戰を助けんとす、爰に林成、馬脆、丁默、呂朗等、一齊に殺出して、五員の晉將一つに成り、漠將二員を中に圍んで、たとひ死しても、肯て放たじと截とゞむ、かゝる處に背後より、劉靈、關防、張賓、胡延攸の四將、接應して相戰ふ、時に晉の諸將、祁弘、王昌、孫緯、高柔、王申等是を見て、あらはれ出て助をなす、若のみならず、晉の方へは關中の大將、郅輔、張輔もまた、來り加はりて殺りかゝる、漠の諸將共元より萬夫不當の英雄たりと云へども、其の身に四頭八臂もあらねば、多寡の敵しがたきに遂ひて、其の勝負如何あらんと見る處へ、好し是劉曜は、粮運の前鋒に當り、已に魏郡に至りつくに、前面にあたつて、風塵日を蔽ひ、喊の聲天に連り、きびしく戰鬪の音するを聞き、大に叫んで、是晉、漠、兵を交ふるにあらずや、吾まさに往て、一陣を助くべしと云へば、曹嶷聞いて、都督はいまだ此邊の地理を、心得玉ふべからず、妄に向前み玉ふな、我往て助けんと云へども、劉曜是を听き用ひず、鞭を擧げ馬を躍らし、塵を望んで飛が如くに進來りけり、祁弘は是を見、劍を取て囮て住む劉曜怒て曰く、汝は是何人なれば、敢て來つて我を阻つや、曾て知ずや、沙麓脇下に連れて、晉將二十員を打殺したる、劉永明將軍なる事を、祁弘聞いて曰く、我は是漳河に於て、胡崩三萬級を殺したる祁大王なり、何ぞ汝が如き兒曹輩、馬前の小卒を曉し得んと、劉曜大に怒り、鞭を揮つて打し去る、祁弘は又鎗をとつて、戰ひを接ふるに、二人が鬪上二十餘合、一個は惡き事狼々として、口内に烟を生ず、再び戰ひて又二十餘合ならんとするとき、關心、曹嶷競ひ至り、王昌、孫緯が陣中に衝入れば、遂に皆々奔走す、是に因て祁弘も亦、戰を棄てゝ走去れば、劉曜は復馬を拍て、張方が陣中に打入り、鞭を以て、林成が、背上に中てければ、林成たまらず馬より墜ちて死す、爰に於て晉兵みだれ立ち、風を望んで奔り遁る、劉曜、王彌是を捨てず、後より從つて又赶く、漸く二里ばかりならんとする時、砲聲震ひ起り、皷角齊しく鳴るは、馬隆が伏の起るなり、關防後より太に叫んで、天色まさに晩れたり、且らく城に回つて、他をゆるし去らしめよと云へば、王彌、劉曜是を聞いて、乃ち馬を回し、一同に城中を望んで行きけるが、いまだ五里にも至らざるとき、一彪の軍馬横さまに、左の方より涌出る、其形勢朦々茫々として、旌旗の影なほ十餘里につゞき、飄々とひるがへる、劉曜王彌關防等、各々備をとゞめ、刀を輪し馬を勒して、此れ何の軍ぞと俟つ處に、

其面前に至るを見れば、乃ち是夔安が先導にて、新氷の都督石勒なり、それより悠き定まつて、各々喜悦の顔を交へ、一行一列前後の隊、皆々城中に入り來る、粮車を命じて倶に推至り、敎場に推あげたるは、天晴れ勇々しき形勢なり、王彌劉靈入つて元帥に見え、劉王子、姜公子、趙四舍、汲桑等倶に至ると云ふ、劉聰、張賓大に喜びて出で迎ふ、諸葛宜于は劉聰に向ひ、令を傳へ、諸將をして且らく衣を更へ、休息せしめて、明日早朝に相見し玉へと云へば、劉聰の曰く、然んばあらず、卽成古人、久しく迂濶にして、恨むらくは常に見さる事を、只今たま〳〵相會して、何ぞ頃刻も相見さるべき、まして明日を待たんやと、乃ち命じて大に燈を張り、すべて中軍に至り相見すれば、各々欣んで賊をつくせる事、爰に委曲なり、宣于は坐位を排いて酒宴を設け、共に飮し、夜更の深くるに至り、各々退散したりける、

漢軍進兵、

魏軍城には、平陽の救の兵到りければ、十分の雄勢を添へ、諸將士卒に至るまで、喜の山笑の顔、人々に勇を演べさる者もなし、次の日早く鐘を鳴して、諸將を中軍に集會し、軍務の事を論ずるに、或は云ふ今我精兵二十萬を添へ、上將

二十餘人を加へ、鏡粮共に足るうへは、且らく此の城を守り住めて、敵軍南北の諸侯、定めて分散の日あるべし、其の勢の解くるを待つて、兵をすゝめて其氣に乘ぜば、坐ながらにして勝を取らんと、宣于、張賓、姜發、皆一口に、諸君逸を以て勞を待つの言、亦甚理ありと雖とも、但し衆に一件あり、晉人兵多して將廣し、若し味方出て、其に戰はざる時には、恐らくは吾等を衆に絆しとゞめ噪き、大鎭の兵將を分ち、吾が只今取りしたがへたる處の、別郡を打たしめん、其時に曾この魏郡を安んぜんや、しかれば必然として、今兵をすゝめ、敵に對して戰とゞめ、渠が他の想を生ぜしめざらんこそ、宜らんなれと說く、劉聰の曰く、我今此兵馬を添ふると雖とも、前後四十餘萬の人數に過ぎず、敵の惣兵にたくらべ見れば、尙ほ其一半にだも及ばず、此を以て敵に對し爭そはゞ、恐くは勝つ事能はざらんか、丞相以て如何とか思へる、その時宣于が曰く、夫兵は進むべくして退くべからず、若し一へに味方、弱を以て示すときは、其れ彼が爲に侮らるゝ事をなし、彼我を弱なりと思つて兵をすゝめ、遂に平陽に趨きなば、我等去る事も又得さらん、豈是敵の抑を受るにあらずや、姜發も亦曰く、兵は精しきにあつて、多にあらず、只將たる者の、善く其謀を用ふるにあり、必ずまさに軍馬を整へて、前んで五鹿嶮に至り、營を構へて對敵し、以て敵に雄威を示さん、然れども其の多寡の勢に於ては、某と丞相、軍師、二人に容し任させ玉ふべし、計策を評議して、緩々と渠が軍を消除ん、是正に曾孟德が、袁本初を破りたるの勢なり、殿下こゝに憂と爲す事なかるべしと、是に於て劉玄明も、此計に從ひぬれば、乃ち姜發、劉曜は、督兵十萬を以て一屯とし、張賓、石勒は、督兵十萬を以て一屯と定め、靳準、喬昕、劉欽は、引兵五萬を以て、魏郡を守る役とし、劉聰、宣于は、督兵十萬を以て中軍となり、王彌、劉靈、楊龍、廖全は、將兵五萬を引いて前驅となり、逕に郡城を離れ、五鹿嶮を望んで進みけり、已に劉玄明の兵士、五鹿嶮に至り、晉軍と相距つる事三十餘里ばかりなるに、路に伏したる晉の細作の小軍、飛が如くに晉の陣中に返り、漢兵已に至り、西北の角に於て屯を扎め、三の大營を立て、北の外三十六寨あつて、軍容甚だ雄壯なりと告ぐ、成都王聞いて、此の胡賊明日に至らば、即ち當に出で戰ふべし、諸將分つて十路となつて戰を持ち、一齊に殺り出て、敵一個に、味方二個と手當せば、豈勝さるの理あらんや、廬志が曰く、胡寇は元より、弓馬に熟し閑うて、多く勇力の者あり、若し只これと、みだりに角ひ戰はゞ、恐らくは易く彼を制し難からん、必ず味方計を設務めて、醜廚に勝つべし、廬

くは、兵威を一段振ひ起し、然して衆心の固に壯なるにあたつては、彼を攻擊つて破るべきの機あらん、先の一戰をつゝしみ、計策を設けんやうこそよけんと、陸士衡是を聞いて、前きに韓陵山に陣を佈くとき、漢賊曾て來て我を打さる故、むなしく心思を費したり、其の上に、彼に賺されて、よしなく賊の陣を攻め、彼が暗算に遭ひしなり、吾甚だ今に至るまで、此の事を耻おもへど、如何ともすべき樣なく過ぎしなり、我明日再び一陣を佈き、彼をして來り打しめば、必ず成功をなしつべし、我漢將の量を察するに、劉曜、石勒の二人は、いまだ年少うして、みだりに荒きのみにて、其智惠未だ熟なり、王彌、劉靈が輩は、勇あつて懆しく暴なるのみ、それに付いては、明日漢來つて陣を打たば、必して此の四人當先かくべし、其の打て陣中に入る程ならば、內に變あるを以て、たとへば渠等虎の如くに惡くとも、任他出る事能はざらん事をや、縱へば外の援ありとも、隙の以て入る事なからん、若しかれ曉勇を震ふならば、只弩箭齊しく起し、乘りたる馬を射させ、其の馬にはなれたる所をば、集まつて擒とせん、能く此の四人をだにも去り得たる時は、餘軍自然に破りやすけん、以て諸州を盡く取り回さん事、何の難意かあらん、是ぞ漢南を清め掃ふの軍なりと云ふ、成都王信然として是を聞き、便ち大に喜んで曰く、自ら兵を起して此に至る事、兩月の期に及べり、しかしながら、功勳を建立するの軍は、皆明日の一陣にあり、諸の將士各々宜しく心を用ひ、力を效せ、定めて重賞あらんと、已に各其手配を分ち付く、遂に陸機に命じて、甲冑旌旗の物色を、衆に開き辨ぜしめたり、次の日に至つて、成都王は衆々の官人上將と、臺に登つて陣を佈くを看る、陸機は諸鎭の將を下知して、各方位を分ち、列を擺ひ、下將に傳へて令を下し、遍く兵士に此命令を告げしむ、其頭を交へ耳に接しむべからされ、左に顧み右に盼る事なり、其喧言妄語發すべからず、其令旗を號となし、東に指すときは東に從へ、西に動せば西に向へよ、少しく方位を離るべからず、隊伍を錯亂るべからず、若し賊あつて陣を打せば、大に驚き小に怪しむ事なかれ、貪皇てゝ事の失あらば、軍法を以て是を治めんと、軍みな命を奉じて去る、陸機は衆に馬に乘り、旗を揮つて、東西南北の方位を佈をはり、再び四鎭諸王の精兵を以ては、協ひ助くるの援兵に定めける、

陸機戰書入漢寨

衆に晉の元帥陸機は、已に陣法を佈をはり、偏に漢兵の來り戰はん事を欲する故、一軍に於て、兵士の健かなる者を選

び軍使とし、戰書を認め漢の寨に到らしめて、戰闘せん事を激怒したりける、諸葛宣于、姜發等、封を開いて是を看るに、晋征西勦寇大元帥、陸士衡。書示僞漢掌軍張賓二知悉、切謂古之稱良將者、必全攻守之法、汝前於韓、陵川佈陣、力不能攻故、以詭言紿我幸得徹志、及至計窮、乘夜逃遁、豈男子乎、滻河之時、能無愧耶、今於五鹿墟再佈一陣、如敢來打、當即出兵、前來否則自綁轅門請罪求赦、或可少全黨類也、

さて其の後、劉聰に是を呈つれば、劉聰再び三軍師を會して議せしむるに、中軍師宣于が曰く、此の奴何すれぞ狂妄なるやとて、大に笑ひ、眞に陸機闘陣をなさんとするが如きは、晋軍あはれや又氣を晦まして、命を入れんかな、他と何ぞ計較に及ばん、軍を出し打點して、此を破るに難き事あらんやと、遂に來れる使に命じ、回言して、明日前み至り、晋の陣を打たん事を許しける、其の上に使者に向ひ、汝かへつて、汝が元帥に傳ふべし、早く頭を引縛を受ん事は、吾軍至りての所地を待てと云つて、陸機が使をば回し去らしむ、其の後張賓、姜發、諸葛宣于等は、諸將と共に臺に上り、晋軍の陣を佈けるを見る、先づ正中立の下の一陣は、主將盡く黃旗を立て、副將と見えて、左の方に立てるは、紅の旗、右に立てるは皂旗なり、上手に擺へる一陣は、盡く紅の旗、紅の甲、下手に擺へるは、皆々白旗、白き甲なり、是乃ち内陣の五隊と見ゆ、さて又外に備ふる正東の一陣は、青き旗を建て、青き色の號服、正西の一陣は、白旗を建て、白き色の號服、正南の一陣は、亦皆紅の旗を飜し、赤色の甲を着す、正北の一陣は、亦皆皂旗を飜せ、黑き甲を着たりける、其の外八王の兵士を分けて、八方に備へさせたるに、皆是整々として方あり、循々として序あるは、時にとりての見物なり、劉玄明は劉曜、石勒等と、晋陣を佈けるを見るに、其法端嚴にして、兵馬も亦強く盛なりけるを、甚だ稱贊するの辭をなし、因て軍師等に問うて曰く、此の陣も又攻めて以て、破るゝの道ありや、宣于答へて、此は是大極の陣法を按ずるなり、中に大極、陰陽の氣を排らき化して、兩儀日月の形を生じ、兩儀又四象を生じ、變じて萬物を生ずるの術あり、此の陣惟り臣が祖、諸葛亮のみ攻守の二つに於て、各其妙を極めたり、註釋家傳に授くれば其秘訣を以て、臣等と雖ども亦よく是を破るなり、但し陣を打つ事は、逸を以て勞を待つにあり、到つて兵を犯す事、是兵家の忌む事なり、若かし此方も陣勢を佈きなし、彼を誘き來して、戰陣を打せなば、立處に勝をなすべきなりと云ひて、乃ち臺を下り、馬に乘り旗を執りて分ち遣る、先づ王彌、劉

靈の二先鋒は、副將四員に、精兵一萬を以て、正中に備を立てしむ、皆是黃服、黃旗を建つ、趙染、趙槩の二將は、兵士一萬を領して、東角に陣を佈く、盡く青き旗、綠の袍の信甲なり、關防、關山、是も兵士一萬に將とし、南角の陣を持ち、紅を以て號とす、石勒、汲桑は、兵二萬を領し、西角に在て、白素旗を以て隊たり、張賓は兵卒一萬にて、北角に在つて、皂玄旗甲を列ねて、陣頭の大將を承る、此の中五つの屯あつて、是を五行に象どれり、其外に姜飛、麾翊兵士一萬、旗服皆綠を以て東の左門に備へ、蒼天風木の氣を取り、關謹、關心は領兵一萬にて、旗甲皆赤を尊び、南の右門に襍り、丹天熱氣の氣をとれり、關河、胡延顥、是も一萬の兵を率ゐ、旗盔皆紫の色を揃へて、南の左門に備へ、暑天火土の氣を受けたり、刁膺、支雄、兵士一萬を率ゐ、素色を以て、西の左素天燥金の氣に同ず、胡延偉は、兵一萬を引率し、黑きを以て北の左門に備へ、玄天寒水の氣を取つたり、黃臣、黃命は、兵一萬を率ゐて、皆褐の服を著し、北の右門黑天濕土の氣を養ふ、又曹嶷、夔安の二將は、兵二萬をひきゐ、東の後への遊軍たり、孔萇、挑豹兵士二萬をひきゐ、西の後への接應たり、馬寧、胡延模は、兵二萬を引率し、南の後への救助たり、楊龍、趙鹿は、兵一萬を率ゐ、北後の援兵たり、麾全は又蕃將張噩僕等の將九人を督し、兵士六萬を將ゐ、營寨を鎭守せり、王如は精騎一萬を領し、諸陣に往來して、救援の衝軍たり、楊輿賓は、精粹の驍射一萬を以て、將臺に守護たらしむ、宣于は、すでに陣を佈て、手組、手配を定め畢り、劉玄明に請うて、臺を下り引戰せしめ、劉曜を以て先鋒たらしむ、爰に於て諸葛宣于は、劉聰、劉曜に謂て曰く、殿下達陣を出で敵を激らしめよ、何とぞして彼が來り、我が陣を打たん樣を、計るがためなり、渠等前日張孟孫がために、一陣を殺り敗られたる故に、再び來りて吾陣を、大體にては打つべからず、只敵陣の備に迫り近いて、言語を以て罵辱しめば、晋の先鋒張方、祁弘、其勇を恃んで、寧ぞ住るに堪ふべけんや、定まつて戰をなさんと出來らん、時に小將軍先鋒となつて鬪ひ、深く爭ふ風勢をあらせ、忽ち吾が本陣を望んで、走り回れよ、敵將まことに敗ると思ひて、將軍を討取らんと赶け來らん、一たび吾陣門に至る程ならば、よも敢て退き去らじ、己等が勇猛にほこり、勢ひに乘じて、吾が陣を打たてや止むべき、便ち吾陣中に入る時は、吾が圍套の中の者なりと下知すれば、劉曜は謹しんで、軍師の將令を奉け玉はる、劉聰曰く、但恐らくは、彼等が畏れて赶け來らさらんかと、宣于が曰く、吾すでに算り定めたり、何の來らずと

云ふ事か在らん、たゞ功を延玉へと、劉曜微笑し、喜び諾して去りにけり。

宣于陸機鬪陣

諸葛宣于、すでに劉曜に分付し畢れば、太子劉聰の曰く、陸機此の陣勢を見るに及んで、渠等吾が抑をうけて、今番來らずば是非に及ばず、夫れにて罷みなん、若しや來つて打つ程ならば、必ず敵も亦猛將を出し、當先かけて來り打つべし、丞相また須らく謹み防を加へよ、貌に晉人を視るべからずとあれば、宣于答へて、臣祖傳を承け、秘法爰に記したり、此の陣玄妙にして、變化まことに測るに叶はず、たとへば昔の項羽が、爰に復生し、伍子胥が再び出でたりとも、輕易しく是を破ること能はじ、太子但心を放つて、敵の來りて網に入らん事を求め玉へ、漁り獵せんことは、臣に任させ給へと曰ふ、劉聰聞いて大に喜び、それより乃ち陣前に出て、戰を候ひけり、斯くて晉帥成都王は、陸機と與に將壘の上にあつて、漢陣を佈くさまを看るに、其れ整つて、煩がはしからず、精しうして雜ならざるを見、深く歎息を加へて、乃みづから孤言して、張賓、此の賊今日の陣、愈伶俐事を加ふ、眞に良將の材ある者なるかな、何のときか、能く逼賊を平げんやと云ふ、傍に事を探るの小軍あつて、今日の佈陣は、是れ張賓にあらず、乃ち新に來る漢國の正軍師右丞相也、此の者姓は視性にて、諸葛、名は宣于、字は修之、比倫なき才藝の者、實に漢の第一の臣子、今や大敵に臨むが故に、自ら來るのみ、成都王の曰く、此の若くは必ず臥龍が遺訓を得たるなるべし、其の陣決して打つべからざる者か、宜しく今を諸將に傳へて、妄に進む事を、禁じ玉はん事かと云ふ、陸機是を聞いて、さのみ恐れ玉ふな、是は此れ五行正連の陣なり、太乙、一氣、渾天、太極、五法、大同小異あり、別に他の變化ある事なし、今佈く所の陣は、前日の八陣の圖に非ず、併ら孔明異に授くるの、玄妙ある備にてなし、破る時は又易けん、但し是れ此の賊を引得來りて、我が陣を打たしめば、決して此を捗とすべしと言訖り、臺を下り、衆將に分ちつげて曰く、今日の戰、往時と同じからず、又劉曜、石勒の、二驍寇を添へて此に至る、若しよく是に勝を取るの輩は、即ち上公の職を授けん、衆將令を受けて去る、成都王はそれより、親將、石弇、郭陳等を引いて、當先かけ陣を出で打話をなす、左に張方、右に祁弘、此の二先鋒護衛したりけり、陸機は劉曜が單身にして、馬を前に立て、劉聰が身の邊には、只張雄等數人あるを見て、其勢の弱なるを侮り、即ち大言して是を嘆く、今我雄兵

一百二十餘萬、名將三千餘員あり、此の勢を以て、山を推さば、山倒るべく、城を踏まば、城平ぐべし、然るに汝等、よく慮るゝ事なきは、是を頑狂と云はんや、又大胆と云はんや、まことに以て、理を知る者のせざる所なり、汝ちに敎ゆ、こゝ去て早く歸降せよ、貸に死せざるを以てせば、猶これ左國を保んじ全して、汝が宗祀を有つに至らん、少も遲り、延々ならば必ず滻河の例あり、此の時是を悔ゆとも、又晩からんと云へば、漢の陣上の劉曜は、高聲に答應じて曰く、吾が皇兄昔洛陽に在りし時、成都王に於て、一面の交あり、故に倘が軍に逼るに忍びず、しばらく退いて魏郡に軍をとゞめ、一陣の功を貢る、汝等是にも肯て回轉ざるは、是れ時勢を知らざる者なるかな、今我大漢復興つて、天眷み人順ふ、されば向ふ處敵なく、打處是に勝つ、然るを汝等吾兵に抗ぺんとすや、吾れ今は、汝を免す事なく擒とし、爰に剉て萬段となさん、成都王言を聽き、大に怒つて、此の小羯奴、何ぞ敢て無禮をなし、我が大國の親王たるを、斯までに辱しむるや、先鋒速く馬を出し、此の逆賊を擒にして、以て反叛の罪を討ぜよ、張方令を得、馬を驟せ刀を輪し、漢陣に殺り過ぐる、劉曜は手に竹節の剛鐵鞭を舞し、張方と接り住む、二人はそれより兵器齊しく施し、刀鞭並び擧ぐ、正に是れ此の英雄の猛士にあひ、惡漢の強徒に向ふ形勢、人は玄城の魔帝に似、馬は黑虎の蒼龍にあらそふが如く、刀は雪片を飜せば、鞭は流星を轉して、凄じかりける勢なり、兩員の勇將戰上兩叫すれば、晉陣の上より、祁弘は張方が、劉曜と戰つて、いまだ下さゞるを見、乃ち鎗を挺つて陣を出で、高く叫んで曰く、張ー正に且住つて、我が此の賊を捉ふるを待て、前日は是れ夜晩に至るによつて、渠を脫し去らしめたり、今日は必ず活ながら捉らへんぞ、方に我手段を見よとて赶け來る、劉曜は正に是れ詐り敗れん事のよき時ぞ、晉將共を誘さんと思ひ、祁弘が陣前に到り近くを見るより、わざと恐をなせる風勢し、乃ち馬の頭を援ひ轉らし、本陣を望んで走りけり、張方、祁弘、是れを喜び、後に從つて赶け去る、陸機是を見、劉曜眞に輸て逃るぞと、爰に親ら黃旗を把りて下知すれば、苟晞、夏陽、陳午、高潤等、東陣を望んで追ひ進み、王浚、王昌、胡矩、孫緯、王甲は、北陣を望んで進めば、姬滄、李弘、姬巧、管淸は、西陣を望んで馬を馳す、李矩、夏雲、郭默、郭誦、駱臻等は、南陣に入らんとかけ向ふ、張方、祁弘の二將は、ひとへに劉曜を目にかけ追ふ程に、已に漢の惣陣に及ばんとす、是に於て劉聰、宣于等是を見るより、只逃げに逃行いて、西南の角より走り入れば、劉曜もまた後に從ひて逃げ入りけり、張

方、祁弘遏り至りて見れば、關謨、關山、兩口の大刀を取つて、馬を陣頭に立て、衆士を喝して、亂戰する事を許さず、又陣の後を見れば、孔萇、桃豹、其の雄威凜々とし、敵將二人に目を注て、睥りを疑して看る、されども張方、祁弘、もとより不敵の張なれば、敢て少しも退かず、只に向ひ進んで、漢陣を攻めんとす、時に張賓將臺にありながら、速に紅白の旗を擧げて、二處を指揮けば、漢兵共唯に弓弩を取つて、是を射たつるのみにして、小しも方位の陣を離れず、二將は爰に力を奮るひ、漢陣に衝き入らんとすれど、猶是堅き城固き壁の如く、一步と雖どもすゝみ欵事あたはず、返つて晉兵爰に於て、射殺さるゝ者其の數を知らざりけり、五路の晉將其の方位にすゝみかゝつて、漢陣を攻衝に、さながら遊蜂の巢に觸るる如くにして、隙の入るべきなかりけり、陸機は令を下し、力を竭して攻討ち、敵陣一たび動くが如きは、即ち早く攻入るべしと、五路より砲を放ち、相約して、一齊に俱に進ましむ、兩陣の相拒ぐ事、午の刻より未の了りに到れども、漢兵共は皆防牌を取つて、矢を抵むる故、さして死傷はなけれども、たゞ晉兵の射殺され、或は傷を被むるもの、坐臥地に滿ちておびたゝし、晉將共も今は早や、盡く志つかれ氣屈するを、陸機は察して、恐くは其失あらんかと思ふが故、再び劍沈、劉弘、陶侃、馬隆、邵續、郅輔等に令し、往進んで、五路の兵を助けしむ、宣于が曰く、以て晉軍の擊殺すべき時至れりと、遂に白旗を將て竪起すれば、張賓は臺上に在つて、やがて旌を合せんと、即ち白旗を把りて招き展ぶれば、漢の諸陣是を見て、大にこそは開きけり、晉將共は是を知らず、衙て中に入りにける、張賓再び紅旗を把つて、麾動すとき、劉靈、王彌、並びに關防、趙染、石勒の五路の味方、各方位より、兵を進めて殺り出し、外面の胡延晏、姜飛、關謨、關河、楊龍、黃臣、丁膺等の六路の兵も、是につゐて殺り出す、それよりは敵と味方と入交り、苦しみ爭ひ惡戰し、馬隊き兵喚ひ、魄魂忽ち逝行して、日慘み雲愁へ、神鬼もこゝに啼ばかりなるは、洽じかりける形勢かな、茲に於て兩陣の將官は、將臺の上にあつて、此の一番の惡戰を見るに、盡く敵味方を辨へ認むるにも及ばず、只に頭を搖し、舌を吐くばかりなり、

漢陣敗晉兵

晉軍は漢陣の敗難きに苦しんで、如何せんと思ふ所に、忽ち漢軍の爲め圍れたるにより、陸機大に驚いて、又五路の接應に下知を加へ、頭を分つて殺り去らしむ、公師藩、郭勵等は、令を承け、備を早め、張方、祁弘を救ひけり、張賓は晉軍の

救ひ至ると見てければ、爰に號砲を打起さす、是を聞いて曹嶷、孔萇、楊龍、王如、胡延模、五路の大兵十萬人、陣中に馳入りて、殺り立る其の働き、敵勢誠に當るにたらず、先づ北陣の上に、張敬は、晉將王甲を刺傷り、西陣の上には、石勒が手にかけて、姫巧を爰に砍死す、東陣の上には、苟晞を趙染擒ち取る、さて南陣には、路臻が梟を關防打落せば、關山は郭勵を擒にし、廖翔は桓彬を刺す、是に依つて晉兵大に亂るゝを、石勒直に衝て前み往き、苟晞、陳午、二人を相手に抵つて交戰ふ、其の戰未だ十合ならざるに、汲桑は擋て至り、斧を奮つて砍り亂す、苟晞は已に其の勢の急なるに慌れ、叶はじとや思ひけん、馬を走らせ逃て行く、石勒すかさず赶け去れば、晉將高潤向前で、石勒を抵むるにぞ、是に依つて苟晞は、危き所を逃れたり、陳午は、つひに爰にて、汲桑に殺死さる、石勒は怒をなし、高潤を赶け、已故に、あつたら敵を逃したりとて砍つくれば、高潤は肩窩をしたゝかに砍中てられ、馬を轉走りける、此に祁弘と劉靈は、戰ひ百餘合に及んで、凡そ五回に至るまで、分れ進むと雖ども、兩方共に相捨てず、かゝる處へ黃命殺りすゝみ、大に叫んで、子通輕しく放つべからず、逗の賊祁弘を除き得ば、其の餘は自ら平げやすからんずと云ふを聞き、祁弘恐らくは、併せて失を被らんかと、乃ち戰をすて、東を望んで走り行くを、黃命追かけ、逃さじとする處へ、北宮純來り敵して、戰事いまだ五合ばかりもせざるに、劉靈又至つて、相助く、かゝる所へ劉曜馬を躍らし、鞭を揮つて打入る故、劉靈はそれより馬を轉らし、東を望み、陣を掠めて去りたりける、正に見る張軌は兵を帶び來つて、北宮純を救はんとするに、劉靈阻て住むるを、張軌が大將、毛賓又殺出で、劉靈に敵せしが、五合ばかり戰ふと見えて、劉靈が一矛に刺殺されて死にたりけり、宋配是を見て、大に怒り、兵を引てかけ合せ、それより兩家混戰ひて退かず、劉聰親ら出て大に叫び、晉兵共亂れたり、努力て是を擊ちつべしとて、馬を躍らし刀を横へ、突て晉の軍に入り、葉文、葉武の二將を連ね斬れば、晉軍大にくづれ立つ、劉聰是に氣を得て、直に陸機を取りて打とめんと馳向へば、張雄つひに陸機を望んで馳せたりけり、陸機是を見て、叶はじとや、思ひけん、後へに轉じて遁れ去る、爰に於て晉兵、とる所なく潰え散じて逃まどふ、漢兵共勝に乘じて追ひ擊去れば、殺得たる死屍疊々として、器械は路に滿々たり、五鹿墟の地上黑を變じて、忽ち赤土となりけるは、目もあてられぬ形容なり、日すでに昏黑に及びければ、諸葛宣于は、乃ち命じて金を鳴し、軍を收めて引揚けたり、是に於て漢兵大に勝を得をはり、さて人

馬の斃たれ、又は損したる者を點撿して見るに、兵馬合せて今日の戰に、又萬餘を折きたれども、敵の捨てたる衣甲器械を拾ひ得る事、其の數を知らさりける、晉の帥陸機、はじめ陣法を閙はしめ、是と同じく爭はんとせしに、又劉曜がために激らされ、終に彼等が算に墜ちて、爰に大敗を被りて、走りゆく事八九里に至りければ、既に昏黑なり極りぬ、定めて敵も、軍を曳上げたるらんと、始めて陣脚をとり住め、漸くに寨に回りつく、其の後鎭軍の諸大將より、今日の戰に折所の軍兵の簿帳を奉ける、是を數へ撿みるに、惣人數四萬にあまりて討死され、其の中にも大將六員、副將八員、兗州の刺史、苟晞一人と記したり、成都王看畢り、大に怒つて、是の如くの行徑、但是れ辱を賊虜に取るのみに非ず、天下の人口の笑話とならん事の、口惜しさよ、豈百五十餘萬の大兵を動しながら、たゞ一隅の漢賊をきり止むる事ならさるのみか、返つて匪彼が爲に挫き惱まさる、孤何の顏面あつて、朝廷の士大夫に相見えんやと云ふ、陸機が曰く、是智謀の人に及ばさるにあらず、命を用ひさるが故を以て、人に笑を被るなり、殊には彼の賊將ども、萬夫も敵せさる所の者二十餘員あり、故に味方、其の鋒さきに當る事叶はす、敗をとる所以なるかな、張方、祁弘、傍に在つて、陸機が言を听き、憤を起して曰く、元帥何ぞ自己を見下せる事の甚しきや、來日試に出て陣を佈き、彼の小將等と、吾等の獨戰するを見玉へ、重ての戰場に、王彌、劉靈の二將を斬取ずんば、願はくは吾先鋒の印を歸納れ、死を誓つて沙場に命を沒し、再び寨中に回つて、各々の面を仰ぎ見るべからず、成都王曰く、二將の能は、孤ことくく是を知る、但恐らくは、再び二將に次ぐの勇能なき事をやとて、乃ち重き賜を二將に賞し、以て其の志をすゝめらる、張方、祁弘、二人同口に云つて、元帥爰に在りと雖とも、願くは某等が申旨に依つて、明日戰閧の軍令を下し玉へかし、と望むにより、卽ち成都王、陸機も共に同じ、軍政司に命じて、是を六軍に觸れたり、成都王大に喜び、人々の志略、よく二將の如くに國の爲め身を至さば、何ぞ此の賊寇に、尅たさる事を患とせんや、爰に於て六軍に犒のを頒ちあたへさせ、各軍の將士に諭し、其の志氣を激し勵す、能く漢將の一名ある者を斬得たらんは、賞金千兩、生ながら一名ある者を獲たらんは、縣公に封ぜん、能く張賓、諸葛併に王、剛、劉、石、十二將の中に、名ある者を梟らん者は、其の封縣公に當てん、生ながら獲たらん者は、封郡公に在らん、命を用ひずして、功を建てんと欲する者は、首を斬て衆に示さん、最もたとひ功ありとて、其の法を敗るの罪は、假ふに及ばず、惟其の令によ

り、法にしたがはん事をと、觸れたりけり、諸將軍士、皆憤を發し、願はくは死力を効し、誓をなして、漢の恨を復へさんとこそ勇みけれ、爰に漢帥劉聰は、兵を收めて寨に入り、一遊には宴を設け、喜び賀す族もあれば、又一遊には、軍議を商る者もあり、意々に樂嘉を成をはる、時に、宣子が曰く、前に韓陵山にて、張孟孫の八門の妙變を用ひ、一陣の殺らるゝを以て、陸機が心、すでに我が軍を難かるが故、再び以て名色奇異の陣を佈かば、彼かならず懼をなし、敢て來り犯さじと思ふ故に、吾ことさらに、陣の淺き處を敵に示し、後ちには深奥に變じて、惑し誘けり、吾が佈く處は、五行の陣にして、內に洪範、六壬、轉運の術を按じたり、されば陸機は、たゞに五行正運を以てばかり、來り打たんと云ふ事のみを知つたる故に、今度吾戰つて、彼に勝をとりし所以なり、劉聰の曰く、丞相まことによく、其の祖父の道を繩たりと云ひつべしと、再應感歎に及びける、張賓、姜發一同に曰く、我が幸にして、敵陣に勝を取ると雖とも、人馬を折く事も亦多し、其の上成都王、此の大意を起し、大兵を集會したるに、我等の爲め屈辱を受け、我等を恨み嗔る事、定めて骨髓に透つて思ふなるべし、さるに付ては、早晩に必ず、一場の大戰無うしては叶ふべからず、重ねて兩軍鋒をまじふる程ならば、以て中々往日の比に非じ、只今まで味方、勝をとれるの次第を數ふるに、皆皆彼を賤して、我が陣法を以て、逸中に利を得たるなり、是等は彼つたなくも勞するが故なりと、宣子が曰く、此の後とても、戰を論ずる時は、是以て彼に敵しては、味方勝をとるにあまりあり、兵と粮とを以てする時は、まことに自ら衆寡の分ありて、最もかれに及びがたければ、惟幾回も計を以て、敵に應ずるときは、彼をとるに妨ぐる事なけん、張賓が曰く、若し漸臺のときを以て比すれば、我が勢ひ已に半を增したるか、料るに彼をおそるゝに足らず、但し我が孤城を以て、敵境の中に、はさまれたる、爰に主客の分あつて、我が逸せざる所なり、姜發が曰く、昔東漢の班定遠、（班超が字なり）一旅の孤軍を以て、西域の中に橫行したりき、今我爰に至るは、此亦遠しと爲るにあらず、彼が兵我に多く倍れりとも、只に堅く陣脚を守らん事を要とし、逸を以て敵を待たん、更に何の害かあらん、されば衆の將士に命じ、血氣の勇を恃んで、敵のため誘れ、以て圍に陷いる事なかれと警めんときは、我將帥還つて彼に勝の機あり、但しよろしく亂動すべからず、緩急を能々はかりて進み、味方の弱なるときは、是を助け、味方の勝なるときは、止りぬべしと云ひ合す、是所謂る己を知り、彼を知る兵法の奧旨なり、此の如くに下知を加へば、何の大患をか至さんと、

劉玄明の曰く、姜存忠が言これ是なりとて、乃ち右の趣きを以て、衆將に急と觸れ廻め、令に依つてすゝみ、小も亂動すべからずと云へば、衆將皆應諾をなして、退散したりけり、

通俗續三國志卷三十七

晉漢再交兵

成都王司馬顒は、張方、祁弘が勇言により、胸憶十分の憤をはらし、昨日の恥辱を雪がんと、次の日の早天より、馬物具を調へ、粮餉十分士卒に飽せ、兵を出して備を擺く、爰に張方は、今日を吾一生の要の軍と思へば、あつぱれ無雙の功を立て、己が念をかけたる敵將を、討取らんと策り、人を陣頭に向はせ前め、大に叫んで、爰へ來れる將は張子正なり、先鋒王彌と單戰はん、速に出來れ、然らずんば、即ち當に攻め入つて、汝が寨を蹈み敗らんと云はしむ、漢の守軍其の言を傳へて、張中に云ひ入れたり、劉聰、張賓、宣子、姜發等、是を聞いて、大に砲銃を鳴し、兵の備を嚴にして出向ひ、晉陣と相對し、陣勢を列開く、三通の皷亂んで、黃羅傘動き、綵風旗開けば、成都王頭に、沖天金冠を戴き、身には鱗星金甲を穿ち、飛魚の襖蟠龍の帶、兩邊には部下の將十餘員を擺き立て、前面には張方、祁弘の二先鋒あり、引兵二萬を分けて兩翼となし、堂々として峙立つ、又漢陣の方には、漢の太子劉聰、頭に獅豕金冠を被むり、身には蛟龍の繡服を穿ち、紅の簪纓、碧玉の帶を垂る、左右の列猛將十員、左翼は上都督劉曜、先鋒劉靈、右翼は上都督石勒、先鋒王彌、ことゝく威風凜々、壯氣魏々たり、兩邊すでに陣勢を擺めて後、成都王方に親ら劉聰に問はんとするとき、只見る、陸機高聲に叫んで、張賓詭譎の小人、爾番陣を佈けども皆來り打たず、何ぞ是を好き漢と云はんやと曰ふ、張賓聞いて、僞ち自ら無能なる者ながら、能をみだりに逞しうせんとし、敗れをとれり、而るを何ぞ人を責めんや、陸機再び曰く、我と僞と、連日戰を交へ、皆是混殺つて、徒らに兵士を傷りたる而已なり、未だ雌雄を決せされば、今日當に各々兵將を戒しめ、亂鬪ふことを許すべからず、一個一人に任せて、自ら輸贏を見ん、亦追赶る事をも許さず、たとへば四個を以て合するに、三人の勝たる方をば、是を算へて勝ぞと定めん、三個の輸あらば、是を又算へて負とせん、兩個輸けば、平なりとせん、一言爰にきはめ定むる事あり、僞ち我に勝ちたば、我即刻兵を退けて、洛陽に回り、魏郡を以て僞に讓らん、我また勝

たば、即ち平陽に退き回りて、魏郡を我れに還へせ、則ち此の地を以て界となすべし かく定めての後は、且て以て侵犯す事有るべからずして、終日に無辜の生命を、害する事をやめん、且又いま炎熱に及んで、兵を用ふるの時にあらず、寔に不仁の殺を爲す事なかれ、劉聰聞いて、向に愛せらるゝ事を蒙る、今に於て、吾心切に是を念へり、それに付いては大王に勸む、君千金の軀を重じ、預め機を知て作し玉へ、しかれば今いまだ戰はざるに及んで、軍を回したまはゞ、威名尙在らん、若し是れ再び差ひ誤るの事あらば、反つて世人の爲に笑はれ玉ひなん、事恐くは美からざらん、吾れ大王の寵愛を蒙るが故、爰に分釐の讓りをもなさんとすれば、部下の者とも、此の事を領はず、返つて道ふ、敵に對して緩なりとも、怯るゝの儀あらんは、將佐の恥たり、聊以て叶ふべからずとて、吾が令を用ひざれば、讓譲るべき事能はず、隨つて問ふ、那一個の出馬、輪を致すの者、退く事をなさんと說く、是僞りの言に非ずは、我れ又言を食らじ、早く一人を撰び玉へと答ふ、張方言を听いて大に怒り、馬を躍らせ陣を出て、刀を横へ叫んで曰く、賊子敢て、かくの如く狂妄なるや、親王の面前に、なほ肆なる言の、忌む事なきとて馬かけ出し、汝一能の者を撰んで、來戰はしめよ、劉聰の曰く、誰か先づ馬を出さんや、王彌聞もあへず、此の如きの魍魎匹夫、曾て言ふ、ひとり我れと搦み戰はんと、我が前去て、他を捕にし去るを待て、見玉へと云ひすて、亦これも刀を舞して出で、二人は並び英雄を施し、各精神をなげうつて相戰ふ、只見る二子の盤旋て、凜々たる双刀の光りは目を怯し、八蹄蹶蹶、騰々れる兩馬の勢ひ人を慴し、一連戰上六十餘合すれども、勝敗を分たず、晉の陣上の祁弘は、張方が王彌に對して、勝を取る事能はずと見しかば、心中懊惱んで、忍び耐るに住らず、鎗を取つて馳かゝる、劉靈看るより、亦長矛を挺げ、向に前んで責鳥る、祁弘匹夫言食の、小輩識定て助け戰ふ事を許さず、一對一對をとり、次第して出づべき約束を背き、汝ち敢て妄りに亂らんとするや、劉子通此に在り、僞とこの三百合を併せて見ん、祁弘は劉靈が來り到るを見るより、迯りに忙しく抵住め、二人交〳〵神威を逞し、喧しく呼んで大に戰ふ、是れ天上の六丁まさに七殺に逢ひ、神中の白虎の、黃鱗に遇ふがごとくなり、二將の戰上六十餘合に及べと、是も曾て勝敗を分かず、時に南陽王の麾下の遊奕將軍翁猛は、二將の狠り鬪ふを見、急に宣花の月斧を揮つて、漢陣に砍過ぎ、以て祁弘を助けんとす、劉曜是れを見、大に怒り、手に竹節の剛鞭を擧げ、出で愚て曰く、無信の狗奴、何ぞ來つて相助くるやとて、翁猛が頭を

照し打たりければ、翁猛もよかりけり、劉曜が打鞭を、はつしと受けて、接へたゝかふ、其の戰ひ十合許なるに、翁猛力怯うして、劉曜を遁り隔事あたはず、終に劉曜が一鞭を被り、腦上に打中てらるれば、頭顱粉の如く碎かれ、直倒に馬より落ちて死にたりけり、劉曜は先づ一番の勝を得て、正に劉靈を、助けさらんと思ふ處に、忽ち鑾鈴の震ひ响く處、皷角齊しく鳴わたれば、一員の大將馬を跑かせ、赶け來る、其の威猛猘にして、狀貌また獰猙し、乃ち是れ范陽王の麾下、橫衝兵馬使王曠なり、手には双鞭を舞し、劉曜を望んで打來る、二人は是を敵し住めて入亂る、王曠は平生の勇力を奮ひ盡し、翁猛が仇を報いんとて、雙鞭を揮つて風の捲く勢をあらすれど、劉曜は從容てことゝもせず、靜に是を會釋ふうちに、王曠が力漸に乏しくなつて、劉曜を敵しとゞむるに及ばず、又劉曜が一鞭を被り、あたり處は知らねども、馬鞍を抱き、兩鞭をも打すて、血を吐て走りけり、劉曜これを逐さじとて、後より赶け行く、爰に東海王の麾下の、折衝大將宋胄、施融の二人は、殺り出して是を住む、劉曜は單騎にて、二將をとゞめ戰へども、少怯るゝ氣色も無し、又瑯琊王の麾下の、安東將軍凌霄、乃ち是は凌統が孫なるが、極つて武略ある者なり、劉曜が戰へる勢の、昌熾なるを見るより、方天の畵戟を挺げ、馬馳出して、是も宋胄等を助けんと、陣前に進みける、かゝる所三員の漢將、其の勢ひ熊羆の如く、刀を橫へ截出し、厲き聲にて大に喝し、賊弟子何の所爲ぞ、曉らかに靈昌道口のことを知りたるや、我一人にて、四員の將を斬りたりし、石世龍將軍と云へる者、爰に到れりと云へば、凌霄答へて、我は東吳四世の虎將、那知らん、倒ち邊方の胡狗をと、呼はつて、戟を挺げ、便ちつき出すを、石勒は刀を以て、拒し住む、それより二人が戰上三十餘合に至る、凌霄は是を、敵し抵むるにかなはず、終には石勒が一刀を被り、馬より下に砍落されて死んだりける、宋胄は此のありさまを見るからに、一驚を爰に吃ひ了りて、鎗法慌しく亂るゝを、劉曜すかさず、一鞭を被らしめ、背心をしたゝか中つれば、血を吐て走りたり、施融勢の諸はざることを看てければ、忽ち馬を引回し、陣中に逃げ去りける、夫より石勒、劉曜は、馬を雙べ衝き入り、背後より大喚し、走るを止めよ〳〵、蟒蛇の追ふが如くたらんぞ、何くまでも一念のかゝりたる上、逃しはせじと喚かくる、其の襟き只耳の根に聞ゆれば、兎ても逃げ得まじと思ひ、急に身を轉して敵を迎ふるに、早く一鞭にて、手腕を中てられ、持ちたる鎗を地上にからりと棄る處を、石勒爰にひかへたりとて、施融が頭をかけ、一刀にて兩片に斬り破りたり、晉軍

是を見るより、兎ても對手の闘は、叶ふまじとや思ひけん、晉將共一齊に、二十餘員殺出し、劉曜、石勒、劉靈、王彌の四人を困しめんと取り圍む、姜飛是に驚いて、急に搶進みて、四人の味方を助けたり、姜發は是を見て、旗を把て一度搖かせば、漢將齊しく奔り敢して殺住む、それよりは兩邊の兵ども、大將士卒混戰へば、直に攪れ、飛塵日を翳ひ、殺氣は忽ち空に迷ひ、暗々たる雲、四野に沈んで光りなく、神愁み鬼泣とは、寔にこの一場と覺えたり、相約して二時ばかりの戰ひに、屍橫つて地に遍く、血流れては波を擧ぐ、晉將又是を住むるに及ばず、兵衆大に敗れて走る、是に於て八王十三鎭の諸侯の兵、各みな奔り潰えて、自ら相踐み踏て、哭聲大に震ひ、其の鳴動遠近に聞えて、おびたゞし、幸なるかな、日すでに西の山に入り、雲の氣色忽ちかはつて、暴らき風東北に起り、沙土目を眩しければ、兩邊各自ら兵を收めけり、是に於て漢兵又、大に全き勝を得るのみか、晉兵の打捨てたる馬疋器械の類に至り、其數しらず奪得　凱賊をでつとあげ、勇威あらせて引擧げたり、成都王は寨に回り、軍の簿帳を點檢するに、人馬共に四萬を折き、其の外大將四五員を死したり、成都王此の事を見聞し、氣むせんで、喉嚨につまり、咽つて半時ばかりは、言をもいはず、心頭たゞに、火の燒くが如くになつて、即ち床上に打倒れ、常の座にも出でざれば、司馬顒の病體如何なると、其の實否をば晉く知れる者もなし、

晉漢議退兵

成都王は五鹿墟の再戰に、諸將憤を發するの勢ひを、見るによつて、今度は必定して、勝軍にこそあるべけれと、將士も共に勇み進だる處に、誰か知らん、思ひの外なる負軍を、又引出したりける故、成都王も今は氣倦れ、心屈し、乃ち床上に臥しぬるが、二度それより起つ事なく、事務をも廢して見さりける、是に依て諸王刺史の會面に及ばざる事、三日に至りぬれば、各々異議を生じ、陣中何とやらん、物さわがしかりけるに、陸機恐くは、衆將の志懈り散ぜん事を思ひければ、成都王の臥したる床の幃を褰げ、進んで直に榻前に近づき、成都王につけて曰く、今や强敵境にあり、連日戰を索むれども、大王高臥して出玉はず、是事に宜しからざる所なり、恐らくは自ら示すに、怯るゝを以てすと云ふ者か、豈是れ賊人の爲に、笑を取らさらんや、且へ又衆の諸侯ども、議論紛紜しく起つて、倘體を解き、心志を離るゝに至りて、兵を提げ、各鎭に回る事を得ば、是盟の事頓に廢れ終らん、然らば大王何を以て、京洛に回り、晉帝と齊王には、相見し玉はんや、成都王曰く、我爰に

軍務を理むる事を怠つて、出でさることをなすに非るなり、實にこの議を思量するに、自ら愧べき事、如何とも仕がたきが故のみなり、豈に百十萬の大兵、三百餘員の上將ありながら、幾に二三十萬の反賊を、一度快よく退くる事も叶はで、戰へば敗れを取り、攻むれば挫かれて、爰に功の成事なし、是が故に煩惱をなし、以て情を困しむる所なり、陸機が曰く、大王宜しく速出で、以て衆心を安んぜしめ、渠等が懈りの心を、進め勵しめ玉ふべし、況や勝も敗るゝも、乃ち兵家の常なり、孰かよく是を必定せん、兵法に云へる事なり、敗者は勝の機にして、勝者は敗の兆なり、我今少しく敗ると云へども、賊兵もまた多く損じ折けたり、我兵は尚全く盛にして、彼が兵には四倍せり、焉ぞ勝たさる事を知つて、遽に自ら弱せるや、成都王言を聞て、乃ち衣を整へ、軍に臨み、衆を召んで評議なして曰く、孤小疾に因て、連日軍務を整ふる事なかりき、今漢賊此の如くに猖獗し、我兵一時に平に勵る事能はじ、諸君の奇謀爰に於て、如何なる異見ありや、劇賊を破るべき處の謀策あらば、各よろしく展べ用ひよ、愼で隱し諱む事なかるべし、此孤家一身の利にあらず、寔に天下國家の大幸、諸の征鎭の偉なる勳功なり、時に青州の刺史荀晞、言を進めて曰く、今仲夏の節に當つて、炎熱まさに臨まんとす、兵を用ふるの時にあらず、書を持して漢に與へ、且らく各署の酷を避けて、兵士を休玉へ、秋涼の時至らば、再び人馬を興し、共に雌雄を決すべし、張賓、宣于、智ありとも、其の餘の賊將共は狂しく悶なるを以て、我等の兵を退くと見ば、よも赶けでや居るべき、必らず力をつくして、追赶くべし、此去つて三十餘里、高鷄泊と云ふ地は、四面に多く茂林深草あるの處なれば、兵士をして各火器火藥の類を持せ、中間に伏せ置き、敵の來るをはかつて、殺出で火を放ち起し、其賊兵の驚亂を待て、力を奮つて是を擊たん、任他あれ、王彌、劉靈、石勒、劉曜等が、孟賁、烏獲が勇ありとも、亦我が圍圖の中を出るに難けん、成都王大に喜び、初めて氣復り、情潔くなつて、床上に雀躍し、道將（荀晞が字）才高し、人の及ばさる所なるかな、此計大妙大妙、必して奇功を獲ん事疑なしとて、即刻令して書を修め、人を遣し、漢營に至らしむ、其書の大略、いま炎天の夏時なれば、疫癘まさに發せんとす、兩軍宜しく怒を解いて戰を罷め回り、此酷暑を避くべし、特一家の利あるに非ず、寔に兩軍生命の關るところ也、若この說を听き、偏の心是を允とせば、孤即日に兵を徹め、鄴に回るべし、早速に回音せよとぞ云遣りける、劉聰此書を見畢り、衆を集め議して曰く、今炎熱まさに盛ならんとす、兵を行るの爲、大に是忌ところなり、然に大

國の書來る、是幸と云ひ禮と云ひ、早速其請に從ふべし、宣于が曰く、此亦兩ながら便ある議なり、忤ふべからず、衆將の曰く、成都王我が軍を、たゞ一端にとりひしがんと、心に呑みたる處、思の外數戰に及んで利を失ふ故、一旦先來つて議を請ふなり、是實に懼れ怕れて、去るものにあらず、さては又、晉の朝中、事あつての議なるか、正に是と戰を持ち、且く慢つて其の議に從ひ、彼が心志の懈る處を見、おしかゝつて討なば、味方遂に勝つ事を得べしと云ふ、劉玄明の曰く、汝等知らず、惟り軍師の心意、吾と即ち相かなへりとて、乃ち回書をなし、允を以て應ふ、其の言に、汝ち殿下、兵を以て先づ去らば、我即ち軍を收めて、平陽に回るべし、決して爰に異變敢て有るべからずと、成都王の使承り、即ち回つて書を呈つり申して曰く、劉聰は一に即ち應へ承りたれども、惟諸將皆云ふ、戰を要めんと、然れども諸葛宣于が肯はさるによつて、故に此回答ありと云へり、成都王は、陸機、荀晞を召入れて、其の事を議せしむ、荀晞が曰く、劉聰大體に達す、故に吾命を听けり、其の下の將佐、皆々倖を思ふが故、動すれば功を成さんの心を作す、必ず約束に遵はずして、來つて我兵を討たん、王彌、劉靈、劉曜、石勒の四賊、尤も暴し、這番決して吾計に中らん、元帥急に兵を揃へ、埋伏を脊整へ、然して後に、案を拔拂つて起たまへ、陸機即ち北宮純、宋配、王昌、胡矩、朱伺、童奇、沒骨熊、獨孤雄等の、四路の兵馬を以て、高鷄泊の西頭叢襍る處に伏さしめ、又包延、周幷二人に、各本部の人馬を以て、泊中に伏さしめ、兩邊に備へたり、只砲の响を听かば、即ち殺て西頭に殺向ひて、相助けよとなり、又軍士に命じ、四面草木の生えたる處へ、火を放つて燒却せよとあれば、五路の將士計を領じて、各々其の地面を尋ねて伏したりけり、また石超、牽秀、郅輔、林成、晉邈、息援、許雄、衙博、四枝の兵馬を、高鷄泊の東頭叢襍たる處に伏さしむ、又皮初、夏陽は、本部の兵士を領じて、泊中兩邊に伏を構へたり、是も同じく砲の响に從つて殺出で、火を以て放てと約をなせば、是又五路の兵士、各々命を受去つて、伏に屬きたりけり、即ち荀晞に、萬を委ね、長沙、東海、二王の兵を摠領せしめて、接應の兵となす、成都王は張方、祁弘の兩先鋒と共に、惣軍の後を斷て、諸王刺史と同じく、一邊に起發し、人をして漢營中の劉聰に報知せ、兵を退くべきの旨を云ひやりけり、漢の諸將是を聞いて、皆言ふ、速に兵を起して追赶くべし、此の一陣をだに殺りとめば、成都諸王、即ち吾等を畏るゝ事、正に虎の如くなるべし、此の機會を挫き去るべからず、劉玄明聞いて、然ばあらず、是忠信なくんば、以て人を服すべか

らず、業すでに是を許す上、又或は是を追ふならば、是信を失ふと云ふ者か、豈大丈夫、人と約を定め、言を取つて信ならざるの道あらんやと云へば、各々領承して、己が陣へ回りける。是に王彌、劉靈、劉曜、胡延攸の四將、寄合うて議して曰く、將外にあつて、君命を受けざる所あり、苟も國家に於て利あらん者、是を專にして可なり、何ぞ必しも拘々たる小信を守りて、以て大功を棄てんやとて、遂に劉聰の約束を破り、其命令にも遵がはず、各本部の人數五千づゝ、合せて二萬の人馬を起し、成都王の後より、飛が如くに追ひ行きたり、轅門の監士ども、軍中に入つて、此由を報ずれば、宣于驚き、急に人をして是を止めしむれども、馬すでに風を逐ふが如く、跡かたもなしと云ふ、姜發が曰く、已に此の如くなれば、必ず敵の算る處に陷らん、速に兵を遣りて、是に救ひ應ぜん、劉玄明の曰く、彼命を奉がはずして、妄に行きけり、何ぞ彼等を營まん、只打捨てよけんと、張賓聞いて、然ばあらず、四將は乃ち吾軍の樞領たり、倘一りも失あらば、陸機復び勢を轉じ、事危きに至らんと云ふにより、劉聰是に從うて、遂に衆將にむかひ、誰か敢て兵を前め去て、接應せんと曰ふ、時に只見る、石勒、楊龍、關防、胡延晏の四人、班列を出て、願はくは往かんと乞ふ、劉聰命じて、各本部の兵を領じ、輕兵を以て、先じすゝめ、電閃の如くに進みけり、

漢將遇晉伏敗

永嘉二年は、晉の曆にして、漢には是元熙五歳にあたるの夏、五月下旬に、晉、漢、戰を魏郡五鹿墟に合せたりと雖ども、正に天の時酷だ暑の時にして、兩軍多く病るの兵あれば、是むなしく生靈を害するに至れる事、寔に不仁の酷だしきなりと、苟晞が計を獻じたるに因て、兩軍突に退兵の約なれり、成都王等は、されども漢兵の追ひとゞむるの詭計をつゝしんで、處々に伏兵を構へ、其の身は惣軍の殿して、緩々と引退きけり、王彌、劉靈、劉曜、胡延攸の四將は、果して己々が勇を恃み追かけゝる、張賓は彼等が去れる後にて、此の由を聞き、石勒、楊龍、關防、胡延晏の四將を發して、救應となし、以て不測の難を助けさせけり、宣于是を聞いて曰く、此の追兵の者共、一度陸機が毒算に遇ひなば、常の比にあるべからず、宜しく勁兵を發し前み去り、是を保ちて失なからんと、即ち張敬、曹嶷、夔安、孔萇、桃豹、黃臣、關山等に、兵士一萬を撰んで先行させ、又張賓、趙槩、黃命、王如、麾蚴、湖奢、關心等に、兵一萬を粹りて、再び去らしめ接應となしたりけり、王彌等已に晉軍を追赴けゝる事、十餘里ばかりなるとき、晉の先

陣は、もはや遠りぬと見れば、猶疾かに進んとするに、忽ち听く一聲の砲の响くとひとしく、張方、祁弘兵を引いて截出で、大に罵つて曰く、王彌、劉靈、關這賊子、眞の胡虜狗性なるかな、全く人心の信行とては、分毫もあらざるや、已に相通じ、相約する上、爰んぞ暗に襲ふの事あらん、且喜ぶ、我れ偶一枝の備を此に在らしめて、關を防ぎぬる事よ、好々早く退き去つて、兩家の好を全うし、外人に笑を取る事を免れよ、王彌、劉靈聞いて曰く、汝等慴れ怕れて逃ぐ、豈是相和するならん、亂言の喧しき事を休めよと、馬を拍ちて直に祁弘張方をとつて戰ふに、張方等が副將、馬瞻、孫緯等も出來り、向前んで爭ふ處へ、石勒、關防の二將も、追付きたれば、張敬、黃臣等も、又相ひつゞく、張方等の四將は、漢將共の多く到りつゞくを見、わざと慌るゝ體をなし、機に乘じて馬を轉し、高鷄泊を望んで走りゆく、王彌すかさず追赶ゆくを 姜飛は馬を飛して至り、叫び喚で、軍師令あり、南兵必ず埋伏せんぞ、彼が算に遇ふべからずとなり、留れ〳〵と云止むれど、四將はさらに留まるべうもなし、劉曜は是を聞き、たま〳〵彼がはかるとも、伏兵の外何かあるべき、伏兵何をか懼れんやと、つぶやきながら追赶け行けば、關防等が一群も、同じく進んでかけたりけり、已に前行五六里ばかりならんと思ふ時、兩邊草木茂く盛りにして、何とやらん、いぶせき所と見るより、劉曜急に馬を立てゝ、叫んで曰く、此處疑ふらくは、埋伏あらんぞ、諸將各馬をとゞめて、去るべからず、先鋒しばらく心せよと、猶いまだ云も果さゞるに、忽然として砲聲起り响き、天を冲て聞ゆ、是に因て、漢兵亟かに退けば、はや後面の草木に、皆火を著けてやき上る、其猛烈甚ださかんにして、火焔は天を燒くばかりなり、王彌等は道路の山に逼つて狹ければ、恐くは燒連けらるゝ事を被りては叶はじと、向に前んで衝ぬけんとす、爰に晉將石超、牽秀等殺出て、張敬、夔安が救の兵を、さゝへ住むれば、息援、晉邊の二將は、黃臣、曹嶷に敵對す、許雄、衙博は關謹、楊龍を抵住め、郅輔、林成は、孔萇、桃豹を向へ戰ひ、皮初、夏陽は中にして殺轉り、汲桑、楊興寶の二步將と、交へ爭ひける、張方、祁弘は、衆將を領じ、馬瞻等と共に來つて、是も又殺轉る、王彌、劉曜、劉靈、石勒、關防、楊龍、胡延攸、胡延晏、姜飛等は、頭を分つて抵り住む、又晉副將、葉荣、祖用等も來り助くるを、漢將の吳豫、趙鹿、向に前んで敵し、戰つて泊の西頭にさゝへたり、又張寔、黃命等も、一班に殺到りしが、北宮純、朱伺、王昌、沒骨能、包延、周並等に截り住められて、中には入る事を得ざりけり、東西の兩口頭に數十員、敵味方の敵將ども、入り亂れて殺り得れ

ば、塵飛で山を沒し、草木の色も見えざりけり、荀晞は漢將共の善戰上に、又接應の大兵到を恐れ、重ねて晉將十員を令し、一齊に衝き入て、四散十橫に殺り回らせて擾き亂す、關張敬の盛、火すでに山岡に滿つるを見、乃ち竣心に相ひ聚り、一處にまとひて戰ひけり、張賓、姜發は、寨中に在つて、心に思ふやう、衆將正に失あらんかと、自ら出て觀望めば、東南の角、火起りて天を炎き、たゞ一遍の紅なれば、大に驚き足を頓めて曰く、其算に逢ひたり、其計に中てられたりと嘆息しけるが、斯ては叶はじとて、姜發は刁膺、支雄、關河、關山、胡延顯に、兵卒二萬を領ぜさせて追進せける、已に高鷄泊に到りつき、正に張賓等が、北宮純等と死を抵りて、路口に爭ふを見るより、姜發が曰く、此の處だに此の如くの極に至る、中間の勢ひ、さぞ急ならん、力を協へて、道の中へ殺り入つて、泊の味方を救へとて、當先かくれば、張曠僕、胡延模、支屈六等、叫んで曰く、我々先んで關將軍を救ひ、一臂の力を助くべしとて、諸將いづれも漏くが如くに擾入りたり、是に於て胡延顯は、沒骨熊を殺死し、張賓は童奇をこゝに刺傷る、是に依て晉兵群だち、一條の路を開くにより、漢將北やすく谷に擾き入り來るを、晉將包延住めんとして、支雄が爲に殺死さる、其よりは晉兵の、抵住むる者もなく、竣心に至つて、晉軍の圍を、ことゞく斬くづし、味方の將をかぞへ見れば、劉曜、劉靈、張敬、吳豫の四人はなし、姜發が曰く、さては都督先鋒等、敵陣の中に陷りたりな、急に往いて救へ、遲くば悞あるべきぞ、誰か進で是を助けん、各々如何にと喚はれば、汲桑、楊興寶、湖寧の三將、我々こそ參らめと云ひすてゝ、走り入れば、後につゞく劉膺、胡模、支屈六、趙鹿、張曠僕が等なり、案の如く吳豫等は、谷の敵中に在つて、皆々殺り出でんと爭ひたり、かかる處へ刁支、關山も亦來りて圍を衝て入んとすれども、晉兵の圍堅固なる事、鐵桶の如なれば、たやすく入る事を得ず、中には漢將四五員、緊しく止めらる、中にも劉曜が身に中る所の矢三筋、張敬は面上に一箭を射中てらる、されども眞ともせず、力戰うて殺り轉る、荀晞は部下の軍を役して、漸々に逼り近き、正に危急なる間にあり、かゝる處に、汲桑、楊興寶、湖寧等、力を奮つて砍入るに、張曠僕等も又至る、此漢兵にきり立てられ、晉兵共亂立つを、荀晞は是を鳴し止め、下知を加へて射立つる矢は、雨の如くなれば、漢軍爰に於て大に亂墜つ、中にも楊興寶が身に中る處、已に二十餘箭に及べば、さながら簇の毛の如くなり、されども劉曜等五に力を合せ、一同に斬出して、已に圍みを出でんとす、荀晞も又漢軍の救兵の多きを見、脫せられては叶はじと、自ら兵を倒じて斬て

入る、劉靈はたゞ當先にすゝんで、殺出でんとする意ばかりにて、背後はさらに、念にもかけざれば、荀晞が至るを知らさりしを、荀晞はやがて背後より、近く逼り、劉靈が腿をしたゝかに搶たりける、劉靈怒りて身を轉らし、荀晞を敵しとゞめんとすれば、荀晞はやがて退き去る、高潤是にかはつて搶き出る、劉靈は鎗疵ことに痛みける故、正に憂へて敵し難き處へ、楊興寶出來りて是を住む、高潤大に怒をなし、一鎗を以て楊興寶が、肩の上を搶たりける、楊興寶大に忿怒し、一鎚を以て高潤が、乘たる馬に擾と打あてければ、高潤たまらず、鞍をはなれて落ちたりける、楊興寶やがて赶かけ、たゞ一擊に高潤をば死しけり、かゝる處に漢衆どもの招き召ぶにより、皆々西に向つて去りにける、中にも汲桑は、漢將の殿して行ける處に、忽ち夏陽が刁膺を擒にして皈るを見、汲桑急に飛歩りて赶けつき、一斧をふり上げ、夏陽が乘つたる馬の、諸足除らへば、夏陽、刁膺一同に大地に落ちたりけり、夏陽はこれに驚いて、刁膺を打すてゝ逃げ去れば、刁膺は喜んで立あがり、汲桑と一所になつて、渠を拿んと追かけゝる、かゝる所に姫澹來つて、彼等を扶り隔て、夏陽をば救ひさる、荀晞は爰に諸將を下知し、漢將等まさに手傷ひ、或は疲る、丞に赶けさらば、獲にしつべきぞ、すゝめや者ども、功を立てよ人々と叫はるに、宋配、郭默等、先を爭つて進めるを、石勒は周拜を砍り、關山は夏鎭を梟ぬ、此勢に辟易し、晉兵それより追かけずして退きけり、時に荀晞は、陸機に向つて、即ち只今勝を取所に、乘じて、連夜殺去る者ならば、劉聰も亦走るべし、此の議如何と云へども、陸機是を聞入れず、成都王に向うて曰く、功は成れるを倖すべからず、勝敗もと定れる期なし、否泰の時自ら反復あり、此の一陣に勝を得れば、已に大王の威命あり、漳河の勝にて、韓陵三戰の羞を洗ふべし、高鷄泊の嶺にて、五鹿墟、兩戰の恥を雪ぐに足れり、賊將小し傷く所あれども、勇者猶又廣し、輕く是を見るべからず、しかし爰に乘じて、郤を唱へ、以て漳河を渡り、秋を待て再び兵を擧げんには、是善の善たる者にあらずやと、成都王其の言の理あるを喜び、乃ち各郡に分付して、皆蕩陰に至りける、其の地寬廣にして、柳林高く茂り、水道極めて便あれば、夏を過るによかるべく、馬を馳せ、武藝を操り演るに、屈竟の場所なりとて、盡く此の處に營をぞ扎めたりける。

晉漢罷兵暫時平

斯て姜發は、危き味方の難を救うて、殘兵を招き集めたれば、すでに晩夜に至りける、夫より各一所に成り、營寨に歸りつ

けは、其の夜の二更に成りたりけり、爰に劉玄明等は、皆々中軍の帳内に在つて、議して消息を待つ處に、姜發が先づ、帳中に入來るを見、各々悦び如何と問ふに、諸將折く事なしと告て、さて劉玄明に見え、諸王を責め玉ふ事なかれと勸めければ、劉聰も是をうけがひたり、爰に於て、諸將案に入て相見す、張賓等問ふに、戰闘の情を以てすれば、姜發言ふ、兵を折く事萬餘、湖熙、廣融の二將死し、楊興賓傷重く、甚だ危に至り、劉皇子曜も亦、射傷られ、劉子通は、苟晞に左の腿を捨かる、是によつて皆寨外にあり、顔の入つて相ひ向ふべきなしと云へりと、劉聰乃ち、張賓、劉欽をして、出で向へて、是等を帳に入らしめ、劉曜等四人を少しく責て曰く、豈に人と誓約したる事を、聞き用ゐさる、是不祥ならさらんや、其の上歸る師は掩ひ擊つ事なかれと、寔に古今の至言なり、汝等血氣の勇を恃み、匹夫の行にならつて、軍令に遵はず、擅に兵馬を用ひ、以て大敗を致す、理まさに法に從ふべし、姑く國の爲を念ひみよ、誤て詭計に墜ちば、汝等が罪ならずや、今より後必ず造次に事をなし、妄りに以て進むべからず、まさに謀を定めて、戰ふ事を爲すべしとあれば、衆將各恐れをなして、自己の罪を告げ畢りて、退出す、次の日張賓は、議を進めて曰く、今晉兵已に漳河を過ぐと聞く、殿下も亦

信を失ふべからず、宜しく人馬を將ゐて、靈昌河を渡り、邯鄲の大郡に往いて駐り、威鋭を養育して時を待て動かん、以て且く、軍民を息へ、安く秋成を穫る事を、得せしめんも亦善らずや、諸將聞いて曰く、晉の師尚曾て散せず、皆滎陰に在り、我若し退き去らば、滑州、汲、兗は、皆復へさるゝ事をせん、其の時に救はずんば、前功こゝに盡く棄らん、又救はんとせば、舊に依て是れ戰ふならん、如かじ、たゞ此處に在つて、屯をとり定め、彼をして、敢て數郡を窺ひ瞰ひ見る事なからしめん、何ぞ爰を離るゝ事をせん、姜發が曰く、然んばあらず、我もし退ずんば、成都王衆の刺史と共に、吾が異あるかと疑つて、定めて是驚懼をなし、敢て散じ去るべからず、豈に自ら人をして、我に備ふるの心を懷かしむべきや、若し我爰を釋てゝ去らば、數月の中には各鎭の諸侯の兵馬とも、支へ給することたらず、其の心必ず解け、みな〳〵散じて本鎭に回らん、諸侯一たび散せば、たとひ重ねて成都王、檄を傳へて至らしむとも、今回び成功ならさる故に、反つて兵將多く折きたれば、雖も、重ねて至るべきの者あらじ、張賓が曰く、存忠の高見、大都督の下に在らじ、況や今齊王ひとり、朝權を掌りてあるなれば、成都王顒が成功あらんは、齊王問が悦びさる處なれば、晉軍解散の事は、卜はずして知られたり、其の上成都王、一

度洛陽に入りたば、即刻齊王の隙、かならず起らん、安んぞよく、再び天下の大兵を集むる事をなさんや、劉玄明の曰く、二軍師の言、理り明らかに、見識甚だ宜しきにかなへり、修之の高見、重ねて是如何ぞや、宜于が曰く、臣毎夜に天象を觀るに、晉の氣數尚盛なり、但し難星洛陽分野の位にあり、これ必ず內亂を生ずべきの象たり、內亂一たび發するほどならば、自ら顧みるに暇なうして、何ぞ他をはかるに心あらんや、然らば諸侯の兵も、不日にして、當に死の如くに自ら解けなん、か、焉ぞ能久しく爰に住らんと、劉聰は三師の說、各一口にして、兵を退くの理よき事を論ずれば、即ち其議に聞從ひ、爰に曹嶷に督兵一萬を添へて、魏郡に留めて是を守らせ、大軍と共に邯鄲まで出去りける、劉聰は邯鄲の郡に至り、衆と共に議して曰く、晉兵たほ然も此の如くの盛にては、吾等終に中原に橫行ずる事克はざらん、宜于が曰く、太子慮りを休玉へ、臣等晉朝の亂を見るに、數年を出でずして、邊塞の諸侯、各自ら覇王と稱し、天下の土宇、瓜の如くに分れ、四方救ひ護るに及ばざるの事に至り、武備と共に懈らん、此の時隙に乘じ、軍旅をとゝのへて、洛陽に赴くときは、一鼓して下しつべし、其京邑を奪ひ、其君臣を擒にして、中原を掌中に入れん、たとへば、人の一身の如し、內腑すでに潰れては、四

つの肢隨つて傾るゝが如くなり、然らば、とかく大功は、速に成がたきの者なれば、心ながに待たまへと云ふ、劉聰言を聞いて大に喜び、即ち諸葛宜于に令し、兵馬一半を分つて、平陽にかへらしめたり、爰に成都王は、滎陰におはしまし、軍兵七十餘萬、營を連ぬる事三百餘里にわたりたり、されば日々に給する所の錢粮、あげて數ふべからざるの費なりければ、かくては倘のつゞまじき事を思ひ、先づ人をして洛陽に入り、高鷄泊の提を報じ、次に再び董艾に令し、韓泰と同じく、本部の人馬を將ゐて、京に還らしめ、粮米を給がん事を求めしむ、齊王大に喜んで、即ち議して、兵粮米を運漕せん事を議せらる、かゝる處へ齊王腹心の大將、董艾は、五鹿墟より兵を提げて、京に回り、密に齊王に說いて曰く、成都王今度、十八路の諸侯を掌り玉ふ、其下を號令し、指揮をなし玉ふ樣を見るに、韓信が九里山にありしときにも辱づべからず、且へ八王亦其の驅役る事、其臣將たるに異ならず、成都王の羽翼已に廣く、威權甚だ盛なり、大王また當に、是と交りたまへ、相忤うて、其隙を成す事あるべからずは可ならん、齊王聞いて、孫洵、葛旗、洵旗に問うて、此の事を論ずれば、各一同に答へて、今成都王此の大權を惣べ玉ひて、甚だ衆望に愜へり、諸侯皆樂しんで、是が用をなす、倘賊を平ぐるの後は、朝に歸つ

て職を受けて、一も心に快からざる事あらば、其嫌ひ妬みて、隙ある事頓に生ぜん、然らば大王の身の上に於て、まさに美からざる事出來りなんか、茲に漢兵の、已に退くこそ幸なれ、其粮をおくる事なくして、書を修めて是をやり、往年孫秀が時に、錢粮を盡み耗したるを以て、府庫空虛となり、京洛歲內の食なにも、給する事なし難しと云つて、粮を送る事を止め、先づ牛酒を送り、權に犒賞を爲し、其の食の盡くるを待たば、自らに散じ去らん、此の如くする時は、成都王の羽翼解け、威權自ら妄りに、釁を生ずる事なかるべし、若し又再び、漢寇の來らんときは、我別に主帥をあげなん、此の如くする時は、自ら患なかるべしとすゝむれば、齊王は二人が言を、深く信じ、即刻使者を潛陰に往かしめ、書を持せ、犒の物をつかはし、六軍の士卒までを賞しける、成都王は書を見て、悶り悅びず、陸機、盧志等を召んで、共に其事を議したりけるに、盧志聞いて、京洛あに粮なき理あらんや、此必ず葛旗、董艾が奸しき妬を以て、恐くは大王の成功ゆゑ、威重うして、齊王の害をなさんかと思ふ巧なりと云へば、石超、牽秀進み出て曰く、吾またこの賊、我王の謀を抑ふる事を知る、我等死力を出し、以て國の功を幹つるを、董艾、葛旗等、坐ながら安逸をたゝ返つて盛忌の意を懷いて、功あるを妬み害せんとするや、今兵を領して外にあるを、其粮餉を付せずして、是れ忍ぶべき事なるか、是をも忍ぶべくんば、孰をか忍ぶべからざらん、理に於て我論ぜば、罪を問ふの軍を起して、彼等を討罰すべき事なれど、漢寇いまだ平かならぬに、內に於て爭ひ鬪ふの事あらば、是人の笑をとらん事を如何せん、成都王の曰く、二卿言を息めよ、吾れ天子の旨を承けて、賊を討ず、されば大權を掌に握れる身ながら、苟も亦妄に發し、渠等を罰する事をせば、臭き名を後世に遺すと云ふ者かとあれば、石超、牽秀等は、此言を聞いて、尤と同じて退きさる、斯て成都王、よく〳〵思案をし玉ふに、軍卒此事を聞いては、恐くは衆心の變あらんかと、密に其忠義ある刺史を召さるゝに、先づ李矩、劉琨、陶侃、劉弘、劉沉なり、是等はみな丹心二つなき者共なり、此の六人の刺史、成都王の轅內に上れる時、齊王の軍粮を却け、運らさゞるの書を以て示ず、衆刺史此を見、いまだ言を發せざるとき、荊州の刺史劉弘が曰く、三軍は食を以て命とす、已に齊王の書の如きは、是決して、軍をすくふの心なし、我等豈に坐ながらに、軍の變起るを見んや、必らず各々己れ〳〵が粮を出して、聊か一時の急を濟はん、我が地稍近し、先づ人を使し、十萬石をとり來つて助けしめん、列位亦おの〳〵、忠義に杖て推し拒む事なかれ、人々使を遣して粮をとり、其の後に人を京洛に使はし、運漕の事を求めしめば、齊王も又辭する事なからん、成都王の曰く、卿等の此の如く忠心あるは、寔に國に報ゆるの、忠義と云ふべけれと、大に賞賛せられける、それより六人の刺史等、成都王の前を辭し去り、各々人をして、粮米を運らさんとするとき、忽ち荊州の辭事官、夏詢が行李、來て急を報じて云ひける、平陽に居る、漢の張賓、姜發等、人をして蜀に入れ、成都の李雄と約して、東荊襄の地を掠むれば、李雄も又、荊寇の張昌が、舊き黨に通じ、杜曾、王冲と云ふ者共に反をなさしめ、府縣に至つて、劫し掠めとる、新野王の牙將虞彪、兵を領し振勵れども、遂に賊の爲に死されたり、此賊等甚だ是れ猖獗し、不日荊襄の地に寇せんとす、百姓殆んど震恐して安からず、早く計を爲し玉へと告ぐ、劉弘は書を見て大に驚き、即ち書を持して、入りて成都王に見え、告るに此の事を以てすれど、成都王是を允とせず、劉弘が軍中の、賴しげ無きを以て、遁れ行くにやと、疑はるゝ顏色を察しければ、劉弘其の時、大王いかに思召すにや、先日宣旨の命を蒙りしとき、臣表を拜して、自ら力を効さんと請うて、御下知に相したがひ、粉骨を盡し候ひき、然るに今我本鎭は、乃ち上流の門戶なり、一たび守りを失して、爰を破られなば、天下悉く陸沒して、生靈

みな滅れなん、爰に百姓を驅駈せさるときは、成功まさに下るべからずと云ふに、成都王是非に及ばず、勉強て是に從ひ玉ふ、劉弘は元より、成都の腹心たれば、便を失し、彼をとゞめまほしく思ひ玉ふも、げに理とは聞えけり、劉弘それより、軍馬を收め拾うて、別れを王侯に辭退し、星夜を急ぎ、荊州さして去り行きける、いまだ二日も歷さるに、郭誦が弟の郭訓は、桑陽郡の、權の管なりけるが、上書して急を、舅の李矩が方に告げ來らしめ、漢の劉淵は、賊將、趙固、周倫を遣はし、南陽を攻め陷し入れ、已に棨陽の下縣まで切し掠む、是に因つて、吾二たびまで戰をなすと雖ども、味方將士の少き故、賊に勝を取ること克ず、二日まで圍れけれども、城堅固なるが故を以て、趙固等退き去る、然れども百姓を暴虐する事已に甚だしと云ふ、李矩此報を得て、急に入つて成都王に告げ、賊を退くるの故を以て、竟に暇を乞うて、兵を引いて棨陽に還れり、西涼の刺吏の子、張寔が方よりも、飛馬を以て、書を致し、仇池の楊難敵來て郡縣を侵せば、河外の劉衛辰も、また機に乘じて竊まんとす、我父自ら回り防ぎ、勦り平げずんば叶ふべからずと云ひおこせり、張軌も又是に依つて、暇を成都王に申して、本部の鎭に回れり、其の外劉琨も、漢の王伏都、范隆、劉雅等來り、境を侵すと云ふにより、暇を告げて回り

去る、かくの如くに諸鎮の諸侯の、頼母しき者どもは、皆々境邊事ありとて、回り去るに付いては、此の屯營いかゞあらんと覺束なく思ふ内、陶侃、陳敏、張光等も、邊塞の寇起るに依り、暇を告て回りける、成都王は、つく〳〵思案し玉ふに、此の如く皆々諸侯の本鎮に回りたるの説を、敵賊聞かば、又起つて其隙を窺ふまじきに非ず、それについて、一日も糧の不足ならんは、計の足らざる處なりとて、其の子司馬咸をして、車を以て多くつゞけ、洛陽に回らしめて、米糧を羅調へしむと云へども、急に調ふらざるの返事あり、時に軍士の糧食は、日々に減少に及ぶが故、殘りとゞまる刺史軍將、一同に入つて、成都、長沙の諸王に見えて曰く、此の如く糧米一日々々に減少に至りては、永き在陣もなし難し、然れば我々各鎮に回り、若し是漢寇の來りて、域を犯す事あらば、臣等再び來り會合して、共に御下知にしたがひ、賊寇を征伐せん、然れば爰に非ずとて、其用の不足なるべきなしと云ふ、成都王の曰く、今已に秋の交、暑氣退けば、倘一りの王彌、復び來りて寇をなし、域を擾らんとき、にはかに諸侯の兵を集めん事、亦難からずや、王浚が曰く、吾輩此の事を知らざるにあらねども、但本鎮の界、邊の地の隣に續き、段氏、慕容氏の者ども、彼皆韜性にして、或は此砌隙を窺ふまじきに非ず、其の上拓跋氏、又是蝟强しき胡賊なり、渠等隙に乘じ、北境の寇一たび起らんは、又是やすかるべき事にあらされば、其の方角の者共は、皆々鎮に御回しあれかしと進むれば、成都王なほ是を肯はさるに、陸機が曰く、幽燕の地は、乃ち北鎮第一に重き守ある處なれば、必して懈りなく、鋭ぎをなすべきの地たり、他の郡の類に非ず、王彭祖（浚が字）が請、よろしく是に從ふべしと云ふ、成都王の曰く、然らば一同に、皆々倶に其の鎮に回るべし、孤又國家の事思はさるにあらねども、此の如くに糧乏しく、兵減少しては、大賊寇は防ぎがたし、皆な是畢竟、所地をなす者の罪より起れり、孤り是を愛へたりとも、其益なからん、さらば軍を班すべしとあるに因つて、是に於て、各々辭し去り、刺史の輩は、己れ〳〵が鎮に還り、八王も亦兵を帶びて、本部々々に歸路を促したまひける、さて成都王と、陸機は、また共に京に還りて命を承くれば、終に晋兵は全く屯を解いて去りたりけり、爰に漢元帥劉聰は、成都王等皆兵士を散じて、去りぬると聞くより大に喜び、乃ち人を差はし、平陽に上せ、粮草を促し備を正して、州郡に馬頭を向け、處々を攻取らんと云ひて、已に打たゝんとするに當り、漢主は、刁膺を使とし、軍中への犒ものを贈せ來り到りける、是に依て、劉聰は、頭日漢主の起居、いかんぞと尋ねらるゝに、刁膺が曰く、近來龍體いさゝか少し、例ならざるが、我疑ふに、左右の佞臣、上にすゝめて、劉和を以て太子たらしめ玉へと、云へる族のあるに依り、上も又自ら、この意に傾き玉ひ、已に此の議行なはれ、近々制を定められんとせし所に、徐光上言し、それ晋王（劉聰なり）久しく太子となつて、先に立ち、殊に六軍を總べて、其勤勞の多くまし〳〵、人望の歸する處、爰に在るを、今更事なくして是を替へたまはゞ、恐くは大亂の階内より起り、成功正に空しからんと云へるに付き、王上も又其の理默しがたくて、如何あらんと、此議に憂悶したまふ故に、病體また痊えがたしと語る、劉聰この説を聞き、大に駭いて、張賓、姜發に問尋ねらる、姜發答へて、和公子年長じ玉ふと云へども、素性怯弱にして、是が羽翼をなす者も、又少し、太子是に於て怨を趣し、早く朝廷に回り玉はゞ、人敢て異議することなからん、今晋兵の解散したるこそ幸なれ、速に軍を班し玉へとすゝむ、劉聰是を聞いて、こゝに日を以て、張賓が方を看視るに、張賓も亦默頭けば、劉聰遂に總兵を收拾して、平陽に回り去る故、是より地方暫く事無くして、民生端なる世とはなりにけり、

通俗續三國志 終

通俗戰國策自序

萬世の下に生れて、往古を捜索めんとすることは難し。然れども。牛に汗し、棟に充つるの書を、孳孳と志を傾け繙くに至りては、君道の治亂、人臣の賢否も、其屬辭は、聲あるの畫ならずや。然も帝の力をも知らざる、無爲の化に浴して、飽煖逸居して、志を遂げたるにあらずしては、奈何ぞ此を觀覽して、抃樂むことを得ん。我朝　神代より人皇に相傳へ、延いて歳曆の長き、數ふるに遑あらず。帝朝の系統一連にして、弓矢は櫜にし、戈矛は庫に藏めて、武の具を示すに足れるのみ。是を以て歷世堯舜の聖澤を被ぶり、士民悉く手足を措くに所を得たる、優游の餘、都鄙競ひて、故を温ねて、今に知らんことを意とすること、愚老幼童に迄るまで相同じ。然れども、彼保元平治の物語、盛衰、太平の二記の如きは、常に胸臆に存すると稱して、之を擲ち、又

近く伊奈氏が甲陽軍鑑、信長、天正、太閤の三記も、亦目に倦みたりと云ひて廢す、頃間事を好むの士、異朝魏吳蜀の軍事を、俗字を雇ひ、和語に綴り通俗三國志と題して、印行に弘めたり、此れ機を見るの人か。閑遊の徒聞くこと更に、見ることの新なるを欣びて、華晨月夕を離れては、目を染むること多し。此れに依つて錐刀の利を窺ふ梓人、其好する所に應じて、富を己に得んことを望み、漢楚軍談、兩漢紀の類、比次して其跡を逐ふこと一ならず。是又利に賑ひ家を昌んにす。是偏に　我國太平の餘標なり。異國の廣き、載籍の繁きも歷代の兵火に罹りて、十に八九燼燼して、我國より傳施せるも亦少からず。此に由りて之を觀れば、我朝を異域より、文物國と稱したるは、誠ならずや。一日書肆來りて、戰國策の一書を、和解せんことを予に請ふ。予之に告げて曰く、戰國策の如きは衰周の蔽に乘り、游說の徒、皆材に矜り、智を角ひ、利を逐ひ、強辨を事として、君子の取る所にあらず。

素より我業とする所にあらずと、再三辭すれども許さざるに及びて、予又謂へらく、此の書舊譚椒と題號すれば、假令其の求めに從がひ和釋して授けば、若しくは老者を安んじ、少者を懷くるの意にも庶幾らんか。梓人商ひて、小利をも得るとならば、此又仁の術ならんことを顧み、老衰の膜を渾ひ其の要を拔萃し、行行和字を用ひ、件件俚諺を借り、遂に積みて十八卷と成る。舊に倣ひ題して通俗戰國策と號く。敢て世の學者に示さんとにあらず。或は幼童の啼を止め衰老の寂寥を慰んずるの資ともならば、幸甚。

元祿十七稔仲夏穀旦揮毫於京兆寓舍書之

毛利氏虛白

通俗戰國策目錄

卷第一

五帝三王盛德大業之要旨……一

附錄三皇五帝三王之系譜供一覽

戰國七雄張本……五

久楚國染世風陷戰國徒黨……六

七雄齊國像聖跡欲張皇……七

暴秦之繁興來原……八

燕一國周同姓始有大業……九

自成周至衰周興廢之次序……一〇

卷第二

戰國壞亂時風大概……一三

秦欲奪周鼎顏率智不與……一四

蘇子東西周釣利……一五

衛鞅之盛衰變……一六

平原君之客定從於楚……一七

信陵君始禮敬二隱建大功後伴博簺

識自非……二一

卷第三

春申君之盛衰……二八

孟嘗君之雞鳴狗吠之士……三四

蘇秦依學與家帶相印……三七

張儀被辱遂事秦……三九

卷第四

范雎疑魏棄秦……四一

含蓄恩薦舉王稽……四四

爲范雎昭王復舊讎……四四

聶政竝全孝義附姊榮弟名……四六

宋王喜妖爲祥……四八

中山末主羊羹之怨一壺之報……四九

威恩救國難……四九

馮煖爲孟嘗君市義……五〇
齊閔王兒惡附太史女親法章……五二
王孫賈殺母之言討國敵……五二
卷第五
虞卿說趙王逐樓緩……五三
楚國子良欺齊有東地……五七
盜楚王藥而免罪……五九
莊辛諫頃襄王……六〇
虞卿示封地……六一
汗明請春申君之薦……六二
史疾說用臣於楚王……六三
卷第六
張儀欺楚約與地……六四
陳軫爲楚王說秦……六六
甘茂憑蘇代之辨用齊……六七
范雎爲秦王請廢四貴……六八
范雎托事諫昭王……六九
秦昭王誇勢慢韓魏……七〇
甯茂諫殉……七〇
范雎譏平原君……七一
散金除秦寇……七一
秦昭王重欲攻趙武安君諫爭……七二
卷第七
威王識章子之忠誠……七五
公孫閈爲鄒忌逐田忌……七五
鄒忌識自非諫君……七六
威王救韓早晚勝劣之辨……七七
孫臏說奇計田忌不隨……七七
杜赫說楚使放田忌……七八
鄒忌晏首薦人多容……七八
淳于髡使見多士……七八
淳于髡說宣王休伐魏……七九
齊欲伐魏魏約贈璧馬於髡請免……七九
顏觸位賤德貴之辨……八〇
王斗先生好勢與好士之論……八二
楚王欲攻齊陳軫說畫蛇足之喻止其難……八三
靖郭君諫將城薛……八四
秦勸帝號於齊……八四
蘇代爲齊說釋帝號有利……八五
卷第八
夏侯章爲孟嘗君常毀……八六
孟嘗君之下士各言志……八六
公孫戊諫孟嘗君得四喜……八七
譚拾子教孟嘗君解怨……八八
齊貫珠勸襄王於田單之做仁……八八
貂勃僞常惡田單遂被薦尊田單……八九
魯仲子抑田單攻狄……九一
孟嘗君欲起從公孫弘進諫……九二
魯仲連誹孟嘗君之不得士……九三
秦攻趙時蘇秦勸齊楚之救……九三
國子諫齊王建……九三
趙威后匡齊使者……九四
依閔王惡逆所殺附齊國重興復……九五
秦昭王贈玉連環察齊之智……九六
齊王建不納諫而餓死秦……九七
卷第九
西門豹聽文侯之誨……九八
文侯守約信……九八
田子方音樂之誘……九九
吳起廢武侯之恃險……九九
公叔痤讓大功威稱於君……一〇〇
公叔痤臨死薦家臣於君……一〇〇
惠王之宴會魯侯絕飲……一〇一
魏客諫欲攻齊……一〇一
魏太子聞徐子之說欲還軍……一〇二
惠王熾怒復欲攻齊惠施獻諫……一〇二
魏納太子鳴於齊後還國……一〇三

魏襄王納惠施之謀更葬日……一〇四
公孫衍田需二人服牛驂驥之喻……一〇五
犀首勸齊魏君敗趙……一〇五
犀首出魏相韓……一〇五
蘇代說魏王勸田繻……一〇六
惠施教田繻於親交……一〇六
田繻死後昭魚憂國相……一〇七

卷第十

秦與趙攻魏時遣使於趙說虞毓……一〇七
孟嘗君往趙燕二國得救兵……一〇八
齊楚攻魏時唐睢請得秦救……一〇九
魏宮他教周霄重魏……一一〇
魏攻邯鄲時請救於楚……一一〇
楚昭奚恤之權威如狐……一一一
江乙使疑賢之對……一一二
江乙欲間昭奚恤……一一二
魏納人於楚欲倒昭子……一一二

江乙罵辱昭奚恤……一一三
江乙之比周分爭之辨……一一三
江乙說安陵君……一一三
張儀衰稱懷王之南后鄭袁……一一四
懷王怒商於之欺欲殺張儀……一一五
鄭袁妬新美人之寵分劍之……一一六
范環說秦相於楚王……一一七
趙魏加止用臨武君於攻秦將……一一七

卷第十一

齊宣王攻燕取十城用蘇秦之說忽歸燕……一一八
蘇秦遭讒復進說大用……一一九
蘇代欺燕王噲得用……一二一
蘇代說淳于髡見齊王……一二三
陳翠勸燕王之弟爲質齊……一二三
或獻燕王於諫書……一二四
子之篡燕後滅太子平……一二五
燕王喜遺書樂間悔前非……一二四
周工師籍忌客欲去……一二六
東周文君因客飾辭復用呂倉……一二六

卷第十三

腹擊鉅家反誣君……一二七
田文封武城愛寇民……一二八
鄭同來趙公惠文王說兵……一二八
觸讋諫長安君於質齊……一二九
魯仲連却帝秦說……一三一
公孫龍諫平原君勿益地受封……一三五
秦得寧邑時不受趙賀諒毅說秦王……一三六
平原君告公子牟之辭於平陽君……一三七
平原君說張相國忘魏……一三八
魏公子牟謗建信君……一三九
奪趙周祭地鄭朝之計忽得還……一四二
宮他亡東周泄國事馮睢用計殺之……一四二
周杜赫薦景翠……一四三
張丑憎燕王將殺因辨口免死……一四三

孝成王信用齊人李伯……一六一
田駟爲韓向言殺翟章……一六一
馮忌請見孝成王遂得說……一六二
客見孝成王說遠小人……一六二

卷第十四

成午與申不害約兩重……一六三
申不害入韓探君之欲求得……一六三
申不害俱請仕從父兄……一六四
樓留諫不立兩相……一六四
秦攻韓陳軫上諫……一六五
秦昭王欲攻安邑或說韓薳王……一六六
龐葱懼遭讒諭市虎……一六六
均魏蘇代自齊免出……一六七
虞卿爲趙欲使殺范痤……一六七
張旄折攻韓曉安薳王……一六八
安薳王欲講秦魏冉強諫昭王……一六九
吳慶諫魏講秦……一六九
安薳王欲攻邯鄲季梁設譬上諫……一六九
魏欲攻管時綰高安陵君父子君臣之義……一七〇
龍陽君想失寵涕下……一七一
魏欲攻秦時或趨楚請助兵……一七二
秦王詐請易安陵地……一七二

卷第十五

莫敖爲威王說臣……一七四
蘇秦說威王進賢士……一七六
秦惠王憎蘇秦欲合從……一七七
管淺進計得上洛地……一七七
秦王留景鯉欲得楚地……一七八
田華爲陳軫說秦惠王……一七九
張儀重欲逐陳軫說秦王……一八〇
陳軫爲楚在秦將去對秦王辯給……一八〇
翟渠君聽公孫衍攻秦……一八一
公孫衍欲窮張儀……一八二
秦武王病楚客强辯甘茂說聽濡弱者……一八二
秦王愛公孫衍欲立相依甘茂辭忽逐……一八三
秦王與中期爭論怒不勝……一八三
段產請新城君毋議……一八四

卷第十六

范雎始見昭襄王說軍要……一八四
依王稽之敗軍范雎將誅……一八七
蘇秦止昭襄王欲攻趙……一八八
張儀說昭襄王成霸王之業……一八九
趙攻秦失藺離石祁欺易其地……一九三
田單與趙奢論用兵……一九三

卷第十七

蘇秦說閔王治道之要……一九五
陳軫薦犀首使主天下從之事……二〇一
張丑之言不聽君譬老妾……二〇二
惠施之楚先遣人厚己……二〇三
樓梧强太子入秦質……二〇三
呂不韋入趙還質子異人於秦……二〇三
甘羅說文信侯往趙行奇計……二〇五
頓弱不拜秦王進說……二〇七
韓非姤姚賈構讒反遭誅……二〇八
李斯將逐秦上書復用……二〇九

卷第十八(附錄)

用秦李斯之大概……二一三
秦始皇帝始卒要略……二一五
慶六國歲次……二一五
六國世系興壞先後……二一七
始皇忌除謚定帝號……二一八
止諸子功臣封地建置郡縣……二一九
立石頌始皇功業……二二〇
始皇信徐福之詐求不死藥……二二〇
始皇被欺盧生頻求藥羨仙……二二〇
侯生盧生亡去咸陽扶蘇之諫不用……二二一

始皇驕奢作阿房宮……二一
星墜示災傳璧報死……二二
始皇出遊崩于平原……二三
趙高立胡亥殺扶蘇……二四

通俗戰國策

通俗戰國策卷第一

〔第一〕五帝三王盛德、大業之要旨

古に曰、五帝官天下、三王家天下と、其官にすると云ふは、萬乘の富貴、四海の廣大なるを、子に傳へずして、賢聖の德有るに禪る、家にするとは、其子孫に傳ふるを云ふ、大凡賢聖に禪るも、子孫に傳ふるも、聖人の心に於ては私無し、私無き聖人の意に契うて、或は禪られ、或は傳ふるに依て、其人必ず前聖と同く無爲にして、天下を治め拱を垂れて德化自ら普天率土に彌綸せり、彼堯は舜の鄙夫なれども、玄德升聞えたるに叡感なされて、九人の男子あるを廢措て、親なき舜を朝廷に招き、倉廩府庫を附與し、娥皇女英の二女を其妻に納れ、嫡に定めて、歷年の帝位を自ら辭し玉ひ、舜は禹の堯帝の代より今に至るまで久しく事へて、天下の洪水を退治するに、八年の長き、四方を行り、手足を、胼胝にするを厭はず、其往來に當つて、三度家門を經過りても、民を蚤く濟ふに志切にして內に入らず、終に故なく水の難を平けて、天下復び耕種の利を施し玉ふ功業を感じ悅びて、子の商均に位を與へず、賓祚を禹に授け玉へり、禹王帝位を受けて後、罪人を已むことを得ずして、死に行ひ玉ふ時、其刑戮を行ふ場に出臨み、車より下り玉ひ、其科の輕重を尋聞いて、之が爲に淚を流し玉へり、左右に附從ふ臣下、奇異の思を發し、彼等は皆道に順はざるの罪人なれば、君何ぞしも、痛悲むことを爲玉ふべからずと言せば、禹王の返答に、去ればこそ、斯に差ある、過にし堯舜の代には、二帝の德に照されて、天下の民に罪なし、我れ君として、二帝に及ばず、萬國の百姓皆我心を同く心とするが故に、罪人絕ずと仰せられき、斯仁心の德に感じて、四海靡然と從ひ、萬國靜謐に歸り治まりて、禹王は子の啓に與へてより、世々骨肉受繼けて十七代、桀王先祖の帝譜を屬ながら、暴虐天下に漫る時、小國の諸侯名を履と云へる人あり、其原は五帝の內、帝嚳の後葉にて、堯舜二帝に事へて、大功を遂ばなる契より十四代の

華雒隱士　毛利貞齋述

末孫なり、仁心下に洽く垂れ、四海の極まで、其化を喜ばざること無し、或る時野外に出で、羅を四面に張りて、鳥を逐入れて捕らんとする者を見て、此の如くの設にては、鳥の種を盡すべしとて、三面を切除ひ、一方を餘して、飛行する鳥に對ひて、東に行かんとするは、東に行け、西に往かんとならば、西に去れ、若命を惜まざるは、網に納れと仰せられしを、人咸聞て、仁德人に覃ぶのみならず、鳥獸の異類までに、夢れりと感じて、滋服し從へり、此時天子桀王暴虐甚しく、四海の民を苦惱ますを、天より緊しく怒り玉ひ、大旱七年の災を示し、五穀盡て寸草も生ぜず、萬民飢に迫るに及びて、天文を考ふることを掌る太史の官人に、仰付けられて占はせ玉へば、生を有つ人を、天に供へて、禱らずしては、此患止まじ、雨降ることあるまじと告ぐ、履此を聞て、雨を請望むことは、民の爲なり、人を供へずして、雨降らじとならば、何ぞ一人も命を損ふことを好まず、我が身を天に供へて、萬國の惱を救はんと仰せられて、遂に自ら齋戒なされ、髮を剪り、爪を斷ち、素車白馬に乘り、死たる模樣を表し、身を白茅にて曳ひ、形を天神の犧に定め、桑林の野外に出で、天に仰いで祝の辭を高聲にして仰せらるゝは、某一人の道理に通達せざるの罪を咎めて、天下の民の命を傷ひ玉ふことを免し玉はれと、禱を懸けて後に、六箇の條目を述べて、自己の非は、此なりやと、天に謝し玉ふ、其一つに、我政道節度に契はざること在りや、二つに下知するところ違うて、下民職を失へりや、三つには我が宮室華麗を好みて、崇く築きて建てたるや、四つに美女の色に惑ひ、其が辭に欺かれて、正邪を顚覆したるや、五に我に善へ得ることを悦びて、下より賂を運ばせたるか、六に小人を親み、讒者を昌に聚めたるやと、我を責玉ふことを、天心感應なされて、其語未だ已まざるに、大雨忽ち數千里四方に洋溢せり、此の如く天意に通ずるが故に、小國なれども、中國は論ずるに及ばず、四夷の極まで心服し、天憎む所の桀を南巢の地に放ち、令名を失ずして、四百五十八年續きたる夏の代を、殷の天下と革め、遠孫に傳へ延て、湯王と號して、二十八代の長きに及べり、然るも其末に、紂王の虐政に煩へる民、文武の聖德に潤ひ化して、天下周に心服して、殷の六百四十四年の帝位一朝に變壞せり、彼堯は其德無量にして、萬國治化に澤へども、猶我政の至極ならずして、下に悦ばざることありやと叡慮を厚く運し玉ひ、帝門の外に大鼓を繫け、四民推竝て、政治意に契はざる事あらば、必ず怖れずして此れを擊ち、其音を聞て、萬機の中、何れか民の心に應ぜざると、我に願み改むべしと定め玉へり、此を敢諫の鼓と稱けたり、上を懼れ憚ることなく、鄙劣の者にも、其治の疵あらば、此れを用て、君に諫め告げよとの具にし玉へばなり、舜も亦王城の許に、長く大きなる柱を立て、民の心に好ぜざる事あらば、其肯ざる品を、明に記し、我政の非を告示すべしと、天下に求め玉ふ、此を誹謗の木と名く、斯る聖帝互に位を禪り禪られて、世を治め玉ふに依て、堯舜の御宇には、雨塊を動さず、風條を鳴らさず、民却つて君恩を忘れて、井は鑿りて飲み、粮は耕して食ふ、日出れば作き、日入れば臥すと云て、其泰平なるは、帝の力也と悦べるを、莞爾へる人もあり、此至聖至神の致す所にあらずや、萬世の下異域本朝共に、治化の標準とするは、此が爲の故なり、桀紂は此れと反覆するが故に、天理に背き、人心と離れ絕つに依て、天下を喪へり、

附錄三皇五帝三王之系譜併一覽

【三皇五帝系譜】

伏羲―女媧―神農―黃帝―第一少昊―橋玄―第三帝嚳―摯
                                  ―第四堯
                                  ―窮蟬

【夏禹系譜】

夏禹 起壬巳在位二十七年―啓 禹之子在位九年―太康 啓之子、在位二十四年
  仲康 大康之弟、在位十三年―帝相 仲康之子、在位二十八年 仲康之末に有窮君羿、臣として帝相を弒して、帝位を簒ふ、羿が臣寒浞、又羿を弒して、帝と號す、羿は壬寅に起り、寒浞は辛巳に少康に滅さる、之を考ふるに帝相は壬寅に羿が爲に絞り、少康は壬午に寒浞を殺して、夏の代に復す、其間、夏帝の統系、中絕すること三十九年なり、
    少康 帝相之子、在位二十二年―王杼 少康之子、在位十七年
      王槐 杼之子、在位二十六年―王芒 槐之子、在位十八年
        王泄 芒之子、在位十六年―王不降 泄之子、在位五十九年
  契 十四餘世―殷湯王
  棄 二十餘世―周文王
  敬唐―句望―蟜牛―瞽叟―第五舜
  昌意―第二顓頊―鯀―夏禹

王扃（不降之子、在位二十一年）—王厪（扃之子、在位二十一年）
王孔甲（不降之子、在位三十年）—王皐（孔甲之子、在位十一年）
王發（皐之子、在位十九年）—王履癸（諡桀、在位五十二年終二甲午）
夏王此十七主、合四百五十八年

【殷譜系圖】

商湯（商地名、湯王初都ノ商後盤庚改ニ地殷ニ湯起ニ乙未ニ在位十三年）
太甲（湯之孫而太丁之子 起ニ戊申ニ在位十三年）—沃丁（太甲之子、在位二十九年）
太庚（沃丁之弟、在位二十五年）—小甲（太庚之子、在位十七年）
雍己（小甲之弟、在位十二年）—太戊（雍己之弟、在位七十五年）
仲丁（太戊之子、在位十三年）—外壬（仲丁之子、在位十五年）
河亶甲（外壬弟、在位九年）—祖乙（河亶甲之子、在位十九年）
祖辛（祖乙之子、在位十六年）—沃甲（祖辛之子、在位二十五年）
祖丁（祖辛之子、在位三十二年）—南庚（沃甲之子、在位二十五年）
陽甲（祖丁之子、在位七年）—盤庚（陽甲之子、在位二十八年）
小辛（盤庚之弟、在位二十一年）—小乙（小辛之弟、在位二十八年）
武丁（小乙之子、在位五十九年）—祖庚（武丁之子、在位七年）
祖甲（祖庚之弟、在位三十三年）—廩辛（祖甲之子、在位六年）
庚丁（祖甲之子、在位二十一年）—武乙（庚丁之子、在位四年）
太丁（武乙之子、在位三年）—帝乙（太丁之子、在位三十七年）
帝辛（諡紂、在位三十二年終二戊寅一）
殷王此二十八主、合六百四十四年

【周譜系圖】

周武王（文王之子、邑ニ己卯ニ在位七年）—成王（武王之子、在位三十七年）
康王（成王之子、在位二十六年）—昭王（康王之子、在位五十二年、王之廿六年甲寅佛誕三年算王ニ涅槃乃當ニ于王五十二年ニ）
穆王（昭王之子、在位五十五年、佛涅槃乃當ニ于王五十二年ニ）—共王（穆王之子、在位十二年）
懿王（共王之子、在位二十五年）—孝王（懿王之子、在位十五年）
夷王（孝王之子、在位十六年）—厲王（夷王之子、在位三十七年）
周召共和（十四年周召之二臣厲王後以ニ太子靜尚幼ニ相與協和共理ニ國事ニ十四年）
宣王（厲王之子、在位四十六年）—幽王（宣王之子、在位十一年）
平王（幽王之子、在位五十一年）—桓王（平王之孫、在位二十三年）
莊王（桓王之子、在位十五年）—僖王（莊王之子、在位五年）
惠王（僖王之子、在位三十三年）—襄王（惠王之子、在位三十三年）
頃王（襄王之子、在位六年）—匡王（頃王之子、在位六年）
定王（匡王之子、在位二十一年）—簡王（定王之子、在位十四年）
靈王（簡王之子、在位二十七年、其二十一年庚戌孔子生）—景王（靈王之子、在位二十五年）
敬王（景王子、在位四十四年、其三十九年春秋絕ノ筆、其間二百四十九年也、王之四十一年壬戌孔子卒）
元王（敬王之子、在位六年）—貞定王（元王之子、在位二十八年）
哀王（貞定王之子、立三月弟思王に弑さる）—思王（哀王之弟弑ノ兄立五月少弟考王に弑さる哀思幾一年）
考王（貞定王之少子、在位十六年）—威烈王（考王之子、在位二十四年、戰國始ニ此時一）
安王（威烈王之子、在位二十六年）—烈王（安王之子、在位七年）
顯王（烈王之弟、在位四十八年）—愼靚王（顯王之子、在位六年）
赧王（愼靚王之子、在位五十九年終ニ乙巳一）

〔第二〕戰國七雄張本

爰に成周の末に當りて、勢を爭んにし、一朝に帝位を簒ひ、四海を我が有に領せんと、互に干戈隙なく、騷動して、天下一日として、穩ならざること百八十三年、帝威は日に斜陽の西山に傾ぶくが如く、武將勇士四方に馳せ、智を運らし謀を工にして、生民を久しく惱したる濫觴を搜索むれば、成周の開基武王より、第三十二王威烈王（名は午第三十一代考王の子なり）位に卽いてより、二十三年春正月に當りて、晉國の執權、韓虔、趙籍、魏斯の三人、先祖より年代久しく晉の政を掌り、其の功每度彰れたるに依つて、國中に、威勢を强くし、其の勢に募りて、主君の國を奪取らん術に、天子を慢り、上下の禮を敗り、諸侯の爵を我等に免賜れと願ふ時、威烈王より其望を委免し玉へり、此偏に朝廷、前代より次第に衰微し、王威振はざるに依りてなり、其勅免を被りたるを

楯にして、頃間まで、己が國の陪臣と(諸侯の臣を云)天下に呼れたる、韓氏、魏氏、趙氏、頓に己が姓を國の名に用ひ、魏國侯、趙國侯、韓國侯と權威を逞しくして、趙氏は河北の邯鄲に、魏氏は大梁に、韓氏は宜陽に、別れて、都を建て、城郭堅固に構へ、剩己が主君、晉の靖公を(名は俱酒孝公の子)庶民に蔑下して、遂に晉の國を三分に割ちて、押領せり、此より以後、久しき晉の一國を三晉と世上に言傳へたり、彼の晉の國に、天子より諸侯を始めて封じ玉ふことは、上世周の成王の弟名を虞と言したるに、此の國を與へ玉ひしより、相傳へて三十九世、其の年序を經たること、七百十三年の長久なる社稷(其の國土の神を一處に勸請して、崇祠るを、社と云ふ、五穀は生民の命を養ふ干要の物なれば、一國の穀神を祭る祠を稷と云ふ)宗廟を(人君國を有つも先祖の功に依て、天子より國を賜はり、其の餘慶を代々受け繼で、賑足ることを悦び、先祖の神を祭る處を、宗廟と云ふ)一時に壞ち、姓氏を革めて、韓魏趙の國とす、此のみならず、重々の大欲を企てゝ、互に周の天下を、己に一統せんことを願とする張本は、此の三人より、事發れり、世に傳ふる所の資治通鑑も、三氏が諸侯を免されし威烈王の第二十四年より、筆を起したり、本朝人皇第五主孝昭天皇の即位以後、第七十三年に相丁れり、

〔第三〕久楚國染二世風一陷二戰國徒黨一

斯りし後哀哉、威烈王は、三氏に諸侯を免玉へる翌年に崩じ玉ひ、王子安王(名は驕)位に即き玉へる、其の元年に、楚國の悼王(名は熊、史記熊疑に作る)先祖の遺跡を踐みて、幾二年、父の喪服も未だ終へさるに、彼の三晉、兵を楚國に進めて、伐んとして、桑丘に迫る、此より以前、朝廷の衰敗に依りて、列國互に兵器を動し、地を相削り、勢を爭ふ時なれば、勝敗の際に志を奪はれて、共に勇氣を熾んにし、世々傳へて、天下を爭ふの列聞と成る、悼王の父聲王は、(名は當關王の子なり)威烈王の第二十四年に、名もなく勢もなき者に殺されたる時に、國人に取立てられ、遺跡を定めたる人なり、其の先祖を搜ぬれば、五帝の中、顓頊の後胤にして、楚國の諸侯に封ぜられたるは、周の成王の元年に、往代の祖熊繹を肇とし、聲王に至るまで、已上三十二代、其の年歴合せて七百十五年なり、上古五帝の顓頊及び帝嚳に事へて功を建て、其の後周の文王武王の時に至るまで、相襲いで、勳勞を遂げたる故に、成王の叔父に預り、國を熊繹に賜り、先祖を照らして、諸侯に封ぜられたる系譜なれども、(緒の長きが如く世々相襲を譜と云ふ)意ならずも亂世に陷り、悼王より負芻まで、又十世、其の歳數百七十九年にして、終に秦の始皇二十四年に、先祖より前後合せて、九百九十四年の長き遺國滅されぬ、其斷ちたるは、本朝人皇第七主、孝靈天皇の即位より、六十八年の後に當れり、

〔第四〕七雄齊國偷二聖跡一欲二張皇一

齊の一國、王位を簒はんと求むる、其の原を尋ぬれば、國の名は今古一なれども、舊を偸みて、世を欺き、己が私欲を遂げんとするより起れり、戰國の齊は田氏にして、上世より太公望の後裔なる姜氏にはあらず、然も舊恩を遺れたる大賊なり、其の來由を語れば、周の代の末、春秋の時に當つて、陳國に陳完と云ふ者、陳の國君厲公、佗の子なれども、父の佗、陳の先君桓公の弟として、我が母の國蔡人の力を屈ひ、桓公の太子免を殺し、其の國を奪ひ、蔡人の女を迎へて、妻とし、君の位に立て、第七年に、桓公の太子免が弟三人あり、長を躍と云ひ、中を林、少を杵臼と云ふ、三弟意を合せて、父兄の敵なれば、厲公を殺して後、其の長兄躍を國君に立つ、此れを利公と云ふ、利公位に即で僅五月にして死す、弟林其の跡を繼ぐ、莊公と云ふ、莊公も七年にして死す、少弟杵臼立つ、此を宣公と云ふ、立ちて第二十一年に、又宣公の寵妾一子を生めり、名を欵と云ふ、父宣公專ら欵を愛して、國を繼ぐべき太子御寇を殺す、御寇素より、國の讐敵なることを忘れて、厲公が子完を愛するが故に、連年完は、陣に留りたれども、今般禍の、己に及ばんことを懼れて、齊の國に出奔して、後に齊の桓公に見えて、感ぜられ、遂に官に任じ用ひられ、齊に趨く時に、陳氏を變じて田氏と改め、家を繁んにし、勢を振ひ、二死して後に、敬仲と諡す、其の子に稱孟夷、夷が子に湣孟莊、莊が子に、文子須無は、齊の莊公に事へたり、莊公より下も八世、康公の十九年に、文子が六世の孫田和は、宣公(齊の第三十の王)康公に事へて、國の執權に用ひらる、康公淫酒に耽りて、政を聽かさるを咎め、蔑恩を遺れて、周の安王十一年に康公を海濱に遷し、僅に一城の納るゝ所を與へて、其先祖の祭祀の用に定め、國を奪ひてより、第三年に當りて、魏の文侯と、意を合せて、諸侯の列に、連ならんことを、周の天子に請望む、上下の勢、顚倒する時なれば、天子故なく、望を許し玉へり、此に依りて彼の康公、位に即いてより、第十九年に、田和遂に、諸侯に立ちて、周の朝廷に列なり、紀元を改め、一朝に先祖を輝すが如くなれども、其の源厲公に、骨肉の親しきを殺し、國を盜めるの罪あり、其の子完齊に奔りて、桓公の意を得るに似たれども、實は皆智術

を用ひて、君の意を迎へて、利を專己れに釣るの匠を、精しくすること甚だし、其の後裔、皆祖父の志を擴いで、君を欺き、民を悅ばせ、其の意を得て、國を奪ふの志、止む時なく、終に其の志を遂げたれども、國を領すること僅に七代、其歲數百六十六年、始皇に併せ呑まれたるは、其非理なるが故ならずや、誠哉、貨悖而入者、亦悖而出との訓辭、當に配思ふべし、抑齊國、齊の諸侯の領地と、定まることを尋ぬれば、殷の紂が代の末に、姜子牙と稱する、東海の邊地に生れたる人あり、其の先祖は堯帝の時に、四嶽の官に用ひられ、禹、天下の洪水を平治し玉ふに從ひて、功を彰したるに依りて、虞（舜の代の名）夏の（禹天下を有つの號）際に、呂の地に封ぜられ、又申の地に封ぜらる、牙は其の後裔なり、根元は姜を姓に定めたれども、先祖の封ぜられし地の名を、姓に改めて、其の家の榮耀とし、又の名を尚と號するに依つて、呂尚と云ふ、呂尚以前貧困にして、又年老いたり、飢を資くる便に、漁釣を業とす、斯時に、周の國の西伯（周の文王始め紂に事へて、西方の諸侯を治むることを掌り玉ふ時の稱なり）獵に出て、共に語り、感じて、西伯悅の餘に、我が先祖太公、當有聖人適周、周以興んと、仰せられき、汝眞實に是なるべし、我が太公、汝を待望みたること久しき人なればとて、太公望と號を與へ、倶に宮中に歸りて、師に立て玉ひしより、周の都する豐邑、克く治り、大に作りて、西伯期望まざるに、天下の內三分にして、二分を自有ち、人服し政平に、其の後武王に從ひ、紂を滅して、天下の疾苦を救ひ、武王殷を平らげ、天下の王に立ちて、太公望が勤めし聖公を感じて、齊の大國に封じ玉ひ、諸侯の爵に定め玉ふより、世々傳へて、十一主、其の年數七百四十四年、長く繼ぎたる聖跡の宗廟を墜ち、姜氏の國を、田氏の有つ所と變じ、無道を曇みて、一旦侯國と呼はり、剩へ、共に競ひて、天下を簒はんとして、何ぞしも、遂ぐ可けんや、

〔第五〕暴秦之繁興來原

秦の國、勢を振ふことは、趙韓魏の、朝廷衰へたるを、幸として、頓に諸侯なりと、誇耀ずが如きとは、一樣ならず、往世の貧かなるを語れば、五帝の內、顓頊の苗裔にして、伯益は、舜の政を佐けて、山澤を掌り、山虞の官に膺ひられ、始めて姓を嬴氏と賜はる、此を伯翳と云ふ、其の後非子は、周の第八主、孝王の時に、馬を能く養ひて、秦の地に封ぜられて、秦嬴と號す、第二十二主宣王の朝に、非子が曾孫秦仲、大夫の官に用ひられて、西戎を誅戮し、其の功に感ぜられて、國始めて大きに、車馬禮樂射御の類具れり、秦仲より下十一世、穆公は、春秋の時に當つて、五霸の一人として、威を天下に熾んにし、穆公の下、十七世の孫、孝公の時、衛の國公孫鞅を用ひて、國政を委せ、裡には法度を正しく立て、男は耕し、女は織ることを勵務め、城郭を守り、敵と戰ふ兵具を專ばら蓄ふるを第一とし、一向に我國中上下和睦して、士庶の意を懷け、他の六國（韓魏燕趙齊楚）兵戈を弊させ、人民滅させて、諸侯互ひに國を重ねて、彼の國悉く衰敗に就くことを表とす、戰國の時に當つて、秦の一國、天下に懼れられて、虎狼の國と、稱せられたるは、孝公より始まり、子の惠文王孫、武王、其の弟昭王、其の子に、孝文王、孝文王の子に、莊襄王、相繼傳へて、彌威を逞しくせり、然も秦の國戰國の一列に呼ばれて、勇威を起すことは、周の第三十五主顯王卽位の後三十二年に、惠文王、父の遺業を受けて、國を固め、列國恐れて、秦に來朝する人多し、惠文王立ちて後、七年に、韓趙魏燕齊の五國、匈奴の勢を借り秦を弱まさんと計りて、攻めたるより、事長じて、終に六國の禍を招ぎたり、惠文王より、下五世、其の歷數九十一年なり、莊襄王の子、政、後に、帝號を始皇と稱する、此なり、此時に當りて、六國を屢し、四海を一統す、始皇の天下を併せたるは、本朝人皇第七主孝靈天皇の卽位以後、第七十年、庚辰の歲次に、相丁れり、

〔第六〕燕一國、周同姓、始有大業

燕の一國其の故を溫ぬれば、上世周の武王殷を伐ち、天下を一統なされし元年に、召公奭と稱へる人、周の天子と、同じき姬姓にて、且つ聖德あるが故に、北方燕の國の諸侯に封じ玉へり、成王の時に、奭二公となり、弘農郡の陝縣より西は、召公治むることを主り、陝縣より東は、周公旦之を主る、西東を限りて、治を天下の爲めに輔佐し玉へる、大功の人なり、其の後裔、世々國を相繼ぐこと十七代、其の間七百九十年の末に、文公の子、易王、遺跡を踐めども、先祖簡公（易王より九世の先祖なり）以來、彼の三晉の韓魏趙氏、勢を列國に恣にし、齊の國の田常、燕を攻めて、簡公を殺す、其より數代を經て、桓公の子文公立ちて、二十九年にして卒す、易王は、父文公の喪を、勤め玉ふを便として、齊の宣王攻め來りて、燕の十城を取るに依つて、其恨を散ぜんとするより、勝敗定まりがたく、閱迎年に積り、易王卒して、子の王噲立ちて、臣下の子之に欺かれ、國を讓り、子之國を得て、民を惱したるより、燕の民憤を晴さんとて、兵を他國に請ひ、遂に子之を醢にし、王噲の子、平を立て、此れを昭王と云ふ、然れども、國を奪ひ得ることを要とする時なれば、費に乘りて、列國より

燕を覬覦ふこと止まず、昭王より惠王、武成王、王喜に至るまで五世、或は討ちて出で、又國に他の兵を入れ、干戈靜ること無し、易王は周の顯王の第三十七年に立つて、七雄の數に呼れてより、末主王喜に迄るまで、已上七主、其年曆百十一年、終に秦の始皇二十五年に滅されたり、已上韓魏趙楚齊秦燕の七箇國を、戰國の七雄と、世に傳へ稱することは、互に私欲を募り、帝位を己に領せんと爭ひて、干戈を交へ、合戰に隙なく、英雄の勢氣を、張皇にすればなり、中にも秦には、英雄武略の君相續ぎ、其の器ある人を能く知りて、任用ふるが故に、世々を經て、彌我が國を強くし、其の餘の六國を、猛虎の群獸を視下すが如く、一朝に呑噬はんと志す、彼の六國は、林中に群がる獸の、猛火俄に發りて、身を焚く災の迫るを知らずして、互に居處を防ぎ攫み搏つが如く拘り、大難を顧みずして、小事に害を招き、國を喪へる、其の愚なること、勝て言ふべからず、強秦日を逐うて滋強く、弱國年々に劣りて、終に秦の爲めに併呑まるゝの所以は、智愚の二より致す所なり、又外に宋、衛、中山の小國、其の勢七雄に比べては、日を同じくしても語る可きことならされども、時風に牽れて、連歳六國と戰ふといへども、終に弱きが強に制せられて、宋は周の赧王の二十九年に、齊楚魏の爲めに滅され、中山は魏の文侯に滅され、衛の一國は、其の後秦の二世元年に君を廢せられ、庶人に引き下されて、其國斷えたり、

〔第七〕自二成周一至二衰周一興廢之次序

抑周の帝位興始まることは、殷の代の末に當り、天下亂虐の不道に疲れたる頃、大王（文王の祖父）王季（文王の父なり）の親子二代、共に仁を以て民を撫で、國を治め玉ふより、周の國の庶民、子の如くに懷き、殊に先祖より續き受けたる、周の國に隣き國民、皆文王の聖德に感じ、紂王の暴虐に至極惱まされたるに依つて、孺子の父母を慕ふが如く、誘き招かされども、天下九州の內六箇國は、周に心服せり、文王は、其の三分の二つを、意ならず有ちながら、君臣の禮を變ぜず、殷の朝廷に服し從ひ、給事し玉へるは、至德なりと稱美せさらんや其の子武王、父に劣らず、盛德大業を輝し、天下感悅する驗現はれて、召さるに、漢南の諸侯八百競來りて、殷の帝都を壞し、紂を伐ち、庶民塗炭の苦を（比喩の辭なり、虐政に爛ふも、泥塗の深に沈む如く、猛火の炭に燋るゝに似たりとなり）蚤く救玉へと催すが故に、已む事を得ずして、兵器を牧野に（紂が都する所の朝歌より南に當る、近き地の名なり）前め玉ふ時、紂は驚き、七十萬人の多勢を出し、火急に逐除へと、下知するに依りて、手々に、兵具を携へて、我一に逐退く可しと、勇猛みて、討ちて出る時、武王の陣より、我を長るゝこと勿れ、我來て汝等を安逸ならしむるの師なりと、唱へるを聞くと齊しく、正先を爭ひ、馳出でたる軍勢、大きに悅びて、忽ち退かんとする時、多勢の競騷りたることなれば、退路の塞るを憤り、今の理を、汝等未だ聞かずや、蝮と退ぞかさるを、曲事なりとて、却て味方の者に、戈を倒しまにして截り除ひ、武王の兵士を、帝都に誘引ひ、紂を睚き鹿戮に（紂歡樂を遂る雅の名なり）引入る底なれば、紂も天下の心、我と離れたると思ひ、猛火の中に、身を投げ入れて、燔死にたり、元祖湯王より六百四十四年、帝代革らず、二十八君傳屬きたる、天下なれば、一億の麗にも、超えたる、骨肉の親遠からさる、一族多けれども、誰か一人防ぎ戰ふ者なく、獸の角を伏するが如く、一同に武王と與して、終に帝位に仰がれ玉ふ周の朝廷なれども、其の末葉として、春秋の頃より、王位日に衰へ、天下の諸侯朝拜を疎にし、貢を獻つらず、下には亂臣賊子のみ、年を逐ひて重なり、剩へ戰國の時に下りて、滋王法地に墜つることは、何故ぞや、上德を失ひ、先王の道を遺れたるより始れり、往時夏桀王の頃、湯は縲に、七十里の地を有つ主なれども、德を修めて道を守り、諫を悅び敎に從ひ、遂に仁心禽鳥まで、弘まるが故に、四海歎服し、天下の心に應じて、軍を發し、桀王を南巢に逐ひ放ち玉へども、天下に臣として、君を黜くるの誹を得ず、四夷の遠まで、我君と慕はれ、遂に殷の代と、天命に隨ひ、奇き聖人、禹王の後胤にて、然も四百五十八年、連屬したるが、桀王の末喜を寵愛して、其の意に契はんと求めて、費を省みず、精を用ひて、堤を築き、酒池を湛へて、遨遊の歡樂を積みて、天下を煩はしたるより、一朝に喪へるにあらずや、又湯王の功業相繼きたる、殷の天下も、紂王辨智を用ゐて、非を飾り、諫を閉ぢんとて、忠臣の心を割き、猛獸を搏にするの勇氣を快とし、昼夜に淫酒を好み、姐己と稱くる美女を得て、心に飽くまで契ふことを、專一として、彼が憎む所に、罪なきも即ち誅戮して、淫聲の時勢粧、婆娑の舞、亂雜なる樂を好みて、後宮に（宮女の居る所を云）積み、前代桀王に同じく、糟を積み、丘を架へ、酒を流して池となす、此皆姐己が好む所に從へり、百姓朝廷を望みて、怨を起し、諸侯畔けども顧みず、剩へ炮烙の刑と稱けて、罪ある者を引き出し、銅柱に膏を塗り、其許に炭に猛火を加へ、其の上に行かせ、火に爛れて、炭の中に墮死ぬるを見ては、姐己喜びて笑ふ、姐己が笑顏を見んとて、罪人盡きて、罪なき者をも、笑を招くが爲めに殺す、斯る暴刑を熾んにするより、天下の心離れて、獨夫

と、世に疎まれて、長久なりし先祖の宗廟社稷を、須臾の間に失へり、周も又殷鑒遠からず、夏后之世に在りとの訓誡に背き、第十代の厲王は、專ら利を好みて、大夫芮良夫が諫に逆ひ謗者は、必ず殺さる、是の故に諸侯悖みて來朝せざること、三十四年、遂に亂發りて、天子帝都を辭りて、遁に出奔し、邊地に死し玉ふ、太子靜は、臣召公の家に身を匿し、漸く周公召公二臣の輔佐を受けて、帝位に立ち、此を宣王と號し、亂れたるを悲歎なされて、上文武成康數王の遺風に法り、政を脩めて、再周の天下に、中興したれども、惜乎第十二主幽王、前車の覆るを視て、後車の誡と、守ることを辨へず、女色に耽り、妖怪の美女を寵愛し、褒姒と稱けて、一向に彼が色に溺れ、遂に伯服と名くる一子を生めり、惑溺るゝの甚しきより、申國の諸侯より迎へて、皇后に立て、宜臼と云へる太子まで、在ますを、申后を退け、太子を廢てるに意あり、褒姒が美艶なるは、王の意に至極契へども、宮に冊かれてより、笑ふことを遂に好まず、笑顏を見ざるだに、斯る面貌なれば、笑はゞ倍して、麗しからんと思ひ、千計萬慮を運らせども、笑を獻ぜず、幽王或る時に若し不時の害來る故、鄰國の諸侯、急に馳せ到らんことを求めて、燧燧を擧げ、大鼓を喧しく擊ちて、近隣の士卒を聚めんと、兼ての支度し約束して、嘗に燧燧を揚げ、急に大鼓を鳴すに、近國驚き、士卒早速來れども、其事なく、茫然れたるを見る時、褒姒笑顏を彰すを、願を此に遂げたりと、笑を得んとして、燧を揚げ、諸侯の騷動絶えず、後には例の笑の爲ならんとて、來ること無し、又縑帛を裂く聲を聞いては、喜ぶに依りて、彼れが意に悦ぶを幸として、數萬の絹を裂き、費を惜しまず出入褒姒と車を同じうし、遂に伯服に位を禪らんとし、褒姒を皇后の位に、改上る故に、申國の主、我女の退けられ、孫の帝位を繼がさるを憤ほりて、西夷犬戎と力を戮せて、幽王を火急に攻むるに遑びて、以前より定めたる事なれば、燧火を頻りに擧げて、西方の兵を、急に來れと求むれども、毎度珍しからさる徒事なりと莞爾ひ、一士も馳就かさるに依つて、幽王は驪山の下にて、殺されぬ、幽王を殺しての後、天下の怨解けて、諸侯皆申侯に意を合せ、幽王の太子宜臼を、天子と崇む、此れを平王と號す、然れども、前朝厲王の時に、人意を失ひ、重て幽王を怨み、殊に力を一旦借りたる犬戎、其功に誇り、王城に迫る、其意を辟けんとて、酋京の東、雒邑に、僅なる帝居を架へ、遷變したることなれば、王威次第に衰微して、齊楚晉秦の諸侯、勢を强くして、四方の命令は、君より我等受けたりと、威を振ふ、王法の地に墜ちたること、平王の時より、甚しきは、未だ有ら

ず、是の故に、平王の即位より第四十九年は、魯國の隱公元年に當れり、孔子の、王法を、古に復したく思召し、天下の定規に、筆を染め玉ふ春秋經も、此歲より始め玉へり、平王より下、其の終り赧王に至るまで、二十四主にして終る、右周自厲王至赧王共に二十八主、年歷六百二十三年なり、厲王より以前は、開基の武王より次第して、成王、康王、昭王、穆王、共王、懿王、孝王、夷王、合せて九主、其の年數、別に二百四十四年、總合すれば、三十七主、歲數束ねて、八百六十七年なり、春秋の衰亂より、朝廷絶えなんとすること、幾の危が如くなれども、延いて戰國の末まで、未だ斷絶せざるは、文武の聖德に依つて、結べるにあらずんば、何ぞ能く此の如くならんや、其の基業を被ぶり、危を脫かれて、六百有餘年を縣絲の如く繫ぎても、六國の亂を過ぎて、遂に秦の爲めに、天下を併呑れたるは、故業を守らずして、中世より、色に淫し、諫を閉ち、私慾を恣にするより、招く所なり、凡人君として、世を興し天下を安平長久に有つことは、德を愼み、行を修め、諫爭を拒がざるに超えたることなし、彼の六國には、名士を招くに、珍器重寶を吝まず、膏腴の地を與へ、其の智謀を借り、時として、他國を奪ひて、一朝の榮耀を輝せども、間も無く簒遷され、猶先祖の故國を合せて、喪ふことは、守る可きを忘れ、誡む可きを、却つて樂しみ、我意を專にし、不仁を以て民の心に背けばなり、是の故に唐の代の杜牧が、後世より、嘲を前代に進めて、嗟夫滅六國者六國也、非秦也、族秦者、秦也、非天下也と、逃れ難き辱を與へて、後世までの、鑒誡を、垂傳へたり、

通俗戰國策卷第二

〔第八〕戰國壞亂時風大概

威烈王の時、韓氏、魏氏、趙氏が望に任せて、諸侯の權を許し玉ふ年は、小國宋の悼公（名は野由、昭公の子なり）元年なり、其の翌年は燕の國の僖公の元年にして、威烈王崩じ玉ひ、太子の驕、其明年に帝位を繼玉ふ、此を、安王と號す、此年春秋楚國の聲王の子悼王（名は類）焉人に取り立てられて、其の遺跡を踐む、二年に秦簡公卒す、（懷公の子なり、雖然な く命數を盡して死するを卒と云ふ）三年に、秦の惠公、韓の烈侯、趙の武侯立つ、安王二十六年の在位にて崩じ、其次き烈王、顯王、愼靚王の三主を經、赧王幼君なるが故に、朝廷彌衰へて、東西の兩周と分れ、政治を別にし、諸侯西周に與す

るあり、東周に親しむありて、亂暴日を逐ひて甚しく、七雄の戰爭將士の智謀、張儀蘇秦が辨說の徒多く、秦の國には、衛鞅、趙の國に趙勝、魏の國に無忌、楚の國に黃歇、齊の國に田文、己が主君に、其の材智器量を感ぜられて、鞅は商君、勝は平原君、無忌は信陵君、歇は春申君、田文は孟嘗君と、重する所を列國に輝かさん爲に、君號を免し與へたるに依つて、其名士は、主の爲めに、他國を偃し、其城地を、我事ふる國に合せ、一つにせんことを、旦夕籌策に心を盡し、智を運すに暇なく、辯士は列國に馳せて、利口を第一とし、一旦君意を悅ばせて、賞賜の富を己に釣ることを要とす、其の區なる事は、舊策に條記し載せたれども、前後に散在し、其の文簡約にして、事實明らめ難きこと多し、今史記、通鑑前編、國語等に考へ、加へ足して、其智術の勝れたる、辯才の瞻ひたる數百條を拔萃して、閑遊の徒、睡課の暇に、友なき寂寞の一助に供へんと、筆に隨すること左の如し、

〔第九〕秦欲奪周鼎顏率智不與

周の顯王の第三十三年に、秦の國より大軍を興し、周の朝廷を責めて、往代より、帝位を天命に契ひて、天下を有つ信なりと、受繼來る九鼎の靈器を、秦の都に奪移さんと、頻に催す、其の事隱なく、顯王叡聞ありて、大に患ひ玉ふ時、朝臣、顏率と云ふ者、王の宸襟を慰めて、必ず憂と爲し玉ふ可からず、我意に委せ玉はゞ、東方齊國に走りて、今般秦より責來る大難を、救ふ加勢を請ふ可しと訴へて、齊の國に往き、齊王に對面して、秦より無道を燒んにし、軍兵を周に前めて、朝廷の靈寶を、奪はんとするの禍生じぬ、周の君臣共に、評議するに、虎狼の勢ある秦の大軍には、勝ち難かる可し、迚も勢徹にして、有つ事を得ずとならば、秦に奪はれんよりは、進年意を加へられたる、齊の大國に與へんとの願なれども、秦の兵器火急に來ることを、齊王の意に計り玉ふことを請願ふと言ば、齊王大に悅び、斯時節に、周より九鼎を贈られては、我が國の强き勢にて、萬乘の富は、掌中に在りと思ひ、先づ秦より寄する兵を防ぎ、其の後約束の如く、此を得んとて、五萬の人衆に、陳臣思を、大將に加へ、周の難を救はせんと、此の事蚤く秦に聞えて、兵を周に進むることを罷む、其の後齊より周に、九鼎を贈る可しと、使を立つるに依つて、君又此れを患ひ玉へば、顏率、少しも大王には、憂ひ玉ふ可からず、我れ齊に行きて、此の難儀を解く可しとて、齊王に對つて、惜も周の朝廷には、齊の大國より、盡し玉ふ、義を便として、君臣父子、互に命を保つことを遂げたり、此悅びに前約の如く、九

鼎を獻んことを願へり、齊の大國には、何の路より、通じ納玉はんや、其の路不審と言へば、齊王聞くと同じく、其の路次は、魏國梁都より、通さんと答ふれば、顏率聞いて、路を梁より通ずること宜しかる可らず、其の故は、梁の君臣、兼て九鼎を覬覦むこと日久し、鼎梁の地に入らば、彼は必ず幸として、魏に奪はれんこと定まれりと云ふ、齊王重ねて、然らば、路を楚國に假らん、顏率又答へて宜しかる可からず、楚の君臣も、九鼎を得んと望むこと日久し、楚の地に入らば、齊に得がたからんと云ふに依りて、齊王料簡に惱みて、然らば、何の塗よりしてか故なく齊に得んやと問へば、顏率が對に、去れば周にも、今に當りて齊王の爲に案じ煩へり、鼎は醯を納るゝ壺、醬を入るゝ瓶の類に似さる物なれば、懷にし挾み、提挈へて、齊の國に贈り難し、往年周の、般に帝位を代り玉ふ時に當りて、九鼎を王都に運移すに、凡一鼎に、九萬の人衆を用ひて輓きたり、其九には、九々八十一萬人、此が爲めに營固の士卒、又其の數に倍すること數ふるに遑あらず、其の時に用ふる器具、勝て計ふ可からず、今、齊王、假令其の人衆足るとも、何塗より出し玉はんことを曉明めず、某も又憂に懷くと云へば、齊王熟聞訖りて、汝每度來れども、一時秦の難を免がるるが爲めに、方便にして、齊に鼎を與へんとは、都て虛談なり、と怒る、顏率些しも騷がず、全く齊王を詐欺くに意なし、兎角鼎を通ずる路を、早く料定め玉ふべし、周より鼎を、今社遷來せと宜ふを待つと云ふ、齊王度方に惑ひて、其願を止められたり、

〔第十〕蘇子東西周鈞利

東周は連年の費に疲れ、地に稻を多く種ゑて、國の糧を給さんと求むる時、西周より、其富は我に利あらず、猶惱を與へんとて、素より河水の上流に居るを幸として、水を塞ぎて下さゞる、此れ、東周に深患ふる時、辯說の士、蘇子、東周の君に見えて、我智術にて、西周より水を潤澤に下させんこと、宜しかる可きかと問へば、君大に之を悅ぶ故に、西周に往き、其の君に逢ひて、水を塞ぐの謀は過にして、却て東周の富を增すの基なり、東周の民、今皆麥を種うることを最として、他の種を作らず、君若し東周を惱むるに意あらば、麥は燥ける地を宜しとするが故に、彼國に煩と爲ず、彼を病しめんとならば、急ぎ水を流し下だすに超たることなし、彼俄に水を得る時は、必ず悅びて、稻を種うることは、必定なり、稻を得るに迄びて奪はば、東周の民一つに飢を歎きて、西周を仰尊び、命令を（俗語の下知と云ふに同じ）此の君に受けんこと定まれりと云へば、西

周の君、誠もなる事と感じて、其欺くことを知らずして、過量の金を、蘇子に與へたり、蘇子は辯才を用ひて、始め東周の君を悦ばせて金を得、又西周に來ても之を得たり、凡そ戰國の頃、列國に馳回りて、事る所の主を定めず、利口を用ひて、勢ある君を悦ばせ、水に書きて跡無きが如くなる、無實の辭を飾りて、一旦自己の富を求めんとて、四方を遊歷して、辯說を干要とする者なれば、世に遊說の士と呼るゝ類、皆此の如し、斯徒の、天下に橫行するも、王法上に廢れて、諸侯偏に、利欲に汲々たるより、(事を急ぐを汲々と云)斯輩多く常に絕えずして、列國に彌滿せり、

〔第十一〕衞鞅之盛衰變

衞鞅は其の先衞國の君の末葉にして、姓を公孫子と稱し、名を鞅と云へる人なり、魏の國の宰相公叔座に事へ、己が器量を知られて、魏の惠王に薦められたれども、惠王用ひざるに依つて、魏國を出亡して、秦國に入り、孝公に感ぜられて、秦の宰相に擧げられ、弘農郡の商の地に封ぜられて、商君と號す、鞅が秦國を治めてより、法令至極に行はれ、公道平均にして、一塵も私なし、罪あるを罰するには、君の宗徒の一族をも、除避る事なく、功あるを賞するに、親族昵近に、私を用ひず、猥に與ふることなし、鞅が政を爲ふ時、孝公の太子(後に惠文王と稱する、此れなり)法を犯せるに當りて、鞅が判斷するに、凡そ法の正しく行はれざるは、上より犯亂すに據れり、然れども太子は、君の遺蹟を繼ぐ人なれば、法に糺すことを得がたし、太子の行擾れ壞るの罪の本は、常に從ひて、導く可き傅の官人、敎を綿密に勵す可き師の職に定れり、今此の罪師傅に限れりと云ひて、其の傅公子虔を刑戮に陷し、其師公孫賈を黥して、(顏を鉅にて傷け其の痍に墨を入れて一生黥の如く面に留めて、其の罪を世上に示す標と云ふ)罪を露はす、其の明日より、秦の一國咸鞅が下知に違ふ者なく纔二年の際に、道に遺ちたるを拾はず、民妄りに取らず、山林にも盜賊なく、家給し人足り、下民皆公の戰に勇氣を張り、私の鬪には怯く、鄕邑大に治まるに依りて、列國の諸侯、都て秦の國を畏懼れざること無し、五年にして、天子も、宗廟の祭の餘肉胙を、孝公に贈り玉ひ、諸侯畢來り賀を行ふ、此偏に鞅が政治に出づれども、法令を嚴厲にして、仁恩を施すこと寡く、專勢を强くして、人を制服するのみなり、孝公鞅が治を、肯行ふこと八年の後に、疾に罷りて、起居意に契はず、國の位を、鞅に傳與へんと欲へども、辭退して受けず、孝公遂に周の顯王三十一年に死す、翌年太子代り立ちて、少選して、

鞅が已前師傅を坐したる怕に依つて、今誅に遭はんことを懼れて、領する所の商地に、退かんことを、告訴へて、歸隱せんと請ふ頃、彼の公子虔が徒類、前の怨を含み、讎を報ぜん爲に、惠王に告ぐるに、凡大臣の威、太重き時は、國危し、左右君と太はだ親しきは、君の身危し、今秦國の婦人嬰兒に迄るまで、總て商君の法令なりと稱へて、大王の法令と呼ぶこと、一人もあらず、是くの如きは、商君上を倒して、反つて國主と爲り、大王は更りて臣と爲る也、且又商君は、大王の仇讎也、今大王之を圖り玉へと訴へて、鞅が命を絕たんとす、鞅此を傳聞き、禍來ること近きに在りとして、商の地より故國の魏に歸らんとすれば、魏人彼が孝公に用ひられたる時、魏の軍を敗りたるを恨に懷きて、拒きて入れず、力に及ばず狼狽えて、復秦の國に還らんとして、遂に捕へられて、車裂に殺されたれども、往年の不仁を、意趣に含まれたるに依つて、一人の悲哀をも被らず、

〔第十二〕平原君之客定從於楚

彼主君に感ぜられて、辱も君號まで免賜りたる平原君趙勝は、趙の國の君惠文王の弟多き中に、最賢なる人なり、國の爲めに大功を成就するに、志厚くして、四方の賓客を、我許に招懷けんと、意を傾けたる故に、平原君が家に至る客、數千人を從へて、惠文王又孝成王に事へて、國の宰相に用ひらるる時、二たび相を去り三たび相に復る、(去るは意に契はざることあればなり、復は君に薦はるゝが故なり)遂に淸河の東武城に封ぜられて、富貴繁榮なり、平原君の家に、樓閣を高く構へて、四邊を、遙に眺望するの具、士庶の往來を詠めんとて、下民の家を直下す遑にして、常に此に上りて遊ぶ、樓の近き民家に足を疾みて跛えたる者、水を酌まんとて、井の側に行かんとしても、疾に障えられて、行步意に隨せず、槃散疲れたる底にて、汲まんとするを、平原君が寵愛する美人、樓上より此の不成人を臨見て、大きに笑を擧げたり、其の翌日に、笑ひを受けたる者、平原君の門に來りて、君には名士を愛し喜び玉ふ故に、器量ある人、千里の路を遠しと爲ずして、來るの所以は、士を重んじて、妾を賤しめ黜け玉ふよりと、前より承はりぬるに、今某不幸にして、(俗語に不仕合と云ふに同じ)斯疾を受けたるを、君の宮閭に寵して、冊き玉ふ美人に笑はれたり、我を笑へる美人が頭を、與へ玉ふことを請望むと云ふ、平原君聞きて大笑して、其返答に、汝が所望に從せんと云へば、實なりと思ひて、不成人は去出りぬる時、平原君復大笑して、今此の賤人、一たび笑はれたるを、遺恨にして、

我が愛する所の美人を殺せと願ふは、上を憚らさるの甚しきにあらずやと、罵辱めて、美人を終に殺さずして止みぬ、其の後一年餘過ぎて、數千の家に來れる賓客、漸次に引き去ること、半に過ぎたり、其の去るに驚きて、我多くの賓客を納れたるは、此を待遇ふ禮を、失たさるが故なり、然るに今多く去ることは、如何なることぞと怪しめば、門下に餘存る一人、前出て此別事にあらず、壁者を笑へる美人を、殺し玉はさるに依つて、去る者の意に、皆君は色を愛すること厚く、士を輕賤しむこと甚しと思ふが故なりと言ふ、平原君其の語を聞いて、過を悔い、笑へる美人が頭を斬り、自身壁者の門に造つて、其の非を謝びたれば、此れより後、門下に復賓客集れり、其の後趙の惠文王の九年は、秦の昭王十五年なり、今茲秦より大に兵を興して、趙の邯鄲城を責むると聞え、趙國の弱が、強秦と勝敗を競ふに、及ぶ可らさる事なれば、怖れて平原君に、蚤く楚國に行きて、一味の談合を遂げ、彼より加勢を請來れと、仰せ付けられたる時、平原君、今般の使者は、小事に在らず、此の國の存沒此に定まれり、當代の事なれば、楚國より、我國に力を戮す時は、秦に憎まれて強兵を招くこと決定なり、卒易に往きては後悔あるべし、我門下、客の多き、其の中を選拔き、此の一大事を、天晴他國に約し定めて、還る可しと思ひ、衆賓に對して、門下の食客の中（養を得て其の下に事を定めさるを、食客と云ふ）勇力文武共に具はるを、二十人從がへ偕にせんと云ひて、其人を擇むに、十九人を拔出して、今一人足らさるを惱とする時、巳往には、其人とも思はさる毛遂と名くる者、平原君に對し、我を自ら贊めて、君は今般楚國に行き玉ふに、一人を少き玉ふと、承はる、願はくは不足の員に、我を充ちて行き玉へと請ふを聞いて、平原君より、先生には我が門下に處ること、幾年を經たりやと問へば、毛遂答へて、此に三年と云ふ時、平原君復、凡そ賢士の世に處る譬、若錐之處囊中、其末立見、今先生處勝之門下、三年於此矣、左右未有所稱誦、勝未有所聞、是先生無所有也、先生は能はず、先生留れと云へば、毛遂其の語に乘りて、臣今日より囊中に處らんことを請ふ、我を蚤く囊の中に處ることを、許し玉はゞ、其穎脫出でん、（穎錐頭の稱を末の穗末に比て云）其の末の見るゝのみにては、巳まじと云ふに依つて、此ぞと見認る處は無けれども、口爽に辭を放つは、器量の具る所あるべしと思ひ、連從へる時、餘の十九人は、互に目を與に交へて、笑を進めたれども、既に楚國に至る時、十九人と與に議論するに及びては、十九人皆心服せり、平原君楚に至つて、考烈王と、趙に一味して利あり、離れて害あるを述ること、日の出より日中に及ぶまですれども決らさるを思ひて、十九人皆、毛遂を殿上に上せ、共に論し玉へと云へば、毛遂些しも臆せず、頓て劒を手に按り、直に階級を歷盡して上り、平原君に向ひて、一味か一味せさるか、其の利と、害は、多言を重ねず、唯二言にして、分明なる可きことにして、始め趙の國を出づるより、更に別事なきを、日中までに、其の事の明らかに聞えさるは如何と云ふ時、考烈王怒りて、平原君に、今殿上に怖れずして、上る者は、何者ぞやと問へば、平原君此は、勝が家人なりと答ふ、楚王滋怒りて、下賤者、何ぞ殿を下らさる、我は、汝が、主人と仰ぐ者と語る、汝は何爲者ぞやと、緊しく咎むる時、毛遂彌驕がず、反て堅く劒を握り王の面前に近きて、王の、遂を輕易りて、叱する所以は、楚國の人衆を意に楯と頼むより、外なることあらず、然れども、王と我と、僅に間を去ること十步の內なれば、（六尺を一步と云）楚國の人衆を恃とすることは、成るまじ、王の一命は忽毛遂が手裏に握る、我事ふる所の主人、王の前に在すをも省みずして、叱することの無禮なるは、何故ぞや、且我れ嘗て聞けり、殷の湯王は、纔に七十里の少地より興つて、終に天下の王となる、文王も、百里の壤地より、遂に天下二分が二を有ちて、羣がる諸侯を、臣と從へ玉へるにあらずや、此れを以て見れば、士卒の衆を何ぞ賴まんや、今楚の國は地方五千里にして、甲冑を帶する徒百萬なれば、是れ霸王の資益ならずや、楚國の勢強を怖れて、天下の衆、敵對久しく弛りたれども、秦の白起は、小豎子の如き身として、數萬の軍兵を引帥し、楚國に馳來り、一戰に早く、楚の鄢郢の地を破り、再戰に夷陵を燒き壞し、三戰には王の先祖を辱しめたるにあらずや、此の如きは、百世の遺きまで怨とする所にして、我が趙の國にも羞づる所なり、此れを惡むことを知らさるは愚なりと云はさらんや、今趙より合從せんとすれば、楚國の爲にして、趙の爲にあらず、此を辨へずして、我が主人王の前に在るを叱するは、何事ぞやと、勢猛にして罵れば、考烈王遂が述ぶる所の道理に、心服して、誠に先生の言理に當れり、今より謹みて、國の社稷を尊奉して、趙と永く合從せんと約す、（六國縱長き國なれば、秦の強に畏れて、一味して、秦を偃さんと計るを合從と云、秦の強きが六國を憚れす、身方士卒に至るまで、意を一同して六國を滅ぼさんとするを連衡と云、從は縱に同く、衡は橫に通用して、よこと讀む、秦は橫長き國なればなり、）毛遂猶も從の約束定まるやと、重ねて問へば、楚王愈に定まれりと返答する時、毛遂又楚王の左右に近習する臣に向ひて、雞狗馬の血を取り來るべしと下知す、遂が威に怖れて、早速取來る時、毛

遂銅盤に三種の血を納れ、王の前に、此を捧跪きて、大王には此の血を歃りて、固く從の交を定め玉へ、其の次には、我が主人、其の後は我れ歃るべしとて、緊しく定め、毛遂も同じく歃り畢りて後に、左の手には盤を持ち、右の手にては、連來る所の十九人の士を招き、汝等も、與に堂下に血を歃るべしとて、盤を傳渡しての後に、又汝等は、錄々と頭數に、羣從がひ來るのみにて、他人の勢に因附きて、事を成就せんとする人なりと、嘲言を吐き、偖平原君は、毛遂が功にて、難なく、從を定て、趙の國に歸りて、自身言を出して、趙勝已來に、必ず士を相することを(俗に目利と云ふに同じ)止むべし、前來より、今に迄るまで、我れ士を相したること、千人の多きを重ねて、我が心に、天下の士を相するに、失たじと思へり、今毛先生を相し失ちて、面目なし、毛先生、一たび楚國に至り玉ひて、趙の國の威を重くすること、物に喩へば、天下の靈器九鼎、又彼周の廟にて、重ずる所の、大呂と稱くる、大鍾より尙倍して重くせられたり、先生は、三寸の舌を用ひて百萬の軍勢より、强からしめられぬ、勝は必ず以來に、士を相することを止めんと辭を重ねての後に、群がる賓客の中にて、最上の客と毛遂を崇擧せられたり、平原君趙の國に歸りて程なく、楚より約の如く、國に重んずる、春申君を十萬の大將と定め、急に趙の救の爲とて、赴來さんとす、又魏の國より信陵君も、趙に往いて救はんと馳來る、兩國の軍兵共に未だ到來せざる前に、秦の國より、急速に大軍驅來りて、邯鄲城を圍攻むること、星火より甚しきに依て、城中歃に惱んで、降參せんと思ふが故に、平原君深く憂を懷く時に、邯鄲城下の傳舍を治むることを、掌る者の子に、李談と名くる者、平原君が、憂患の意を料り知りて、平原君に對つて、今秦の兵を拒ぐに、力の足らざるは、國民常に上を怨み、下貧乏に迫ればなり、今公の寵し養なふ所の夫人以下美女の多きを、士卒の中に出し、家に貯たる所を盡く散じて、士卒に饗す時は、危苦を免るゝを悅び、公の恩德に感じて、必ず死を効して、秦の兵を拒ぐに足らんと云ふ、平原君其の言に從ふに、忽ち恩惠を悅び、國の爲めに死なんと進み出づる者三千人、李談其の人衆を引率して、秦の軍中に赴くに、死を定めたる勢氣に、流石の秦の兵も戰ふことを得ずして、逐退けられたること、三十里、左右する間に、楚魏兩國の救の軍兵馳至つて、力を戮せたるが故に、秦の兵奪ることを得ず、拔かれんとしたる邯鄲の城も其の難を一時免れたり、李談志剛なる者なれども、此時討死したる故に、其の功を感じて、平原君が趙の君に告して、其の父を李侯に封じたり、

(第十三)信陵君始禮敬二隱士一建二大功一　後伴二博奕一識二自非一

其聲列國に濫なく信陵君と呼れて、無忌と名きたる者は、魏の國昭王の(戰國の時は魏の第五主)末子にて、安釐王の(魏の第六主)別腹の弟なれば、公子無忌と云、(諸侯の末子を公子と云は通例なり)父昭王薨じ玉ひて後、(國を有つ諸侯の死るを薨と云)安釐王遺跡を踐みて、無忌に地を與へ封じて、信陵君と(信陵は魏國鄕邑の名)名乘らせて、其威光を現はさせられたり、無忌が信陵君に封ぜられたる比、范雎と云へる器量の者、魏齊と云ふ國の宰相、狐疑せられて、(邪路なる疑怪を起すを狐疑と云)魏國を出奔して、後秦に感じ用ひられ、國の宰相に擧げられたる故に、奮躍を晴し、又己を知れたる、今の秦を富貴にし、威を天下に振はせんとする忠心より、秦の君莊襄王に薦めて、大兵を興し、魏の大梁城を圍み、魏の華陽の下郡を破りて芒卯を逐走らせたるの難に、昭王公子、共に患を懷き、何にもして、秦を弱まさんことを、常に意とせり、彼の公子は人品仁愛にして、他人に謙下り、其の賢不肖を擇ばず、己れが勢を忘れて、慇懃に禮敬を盡し、交を厚くして、一毫も富貴に驕る志なし、此を感じて、四方數千里の名士、我一と、先を爭うて、歸往くに依て、公子の家に、食客三千人招ずして聚れり、是の故に列國の諸侯、皆公子の賢に依つて速さるの名士多きを怖れて、魏國に兵器を加へざること十餘年なり、斯時公子と魏王博簒の遊を設けて樂しめる比、周章北境より趙王烽燧を擧げて、魏を攻むる勢を揃へて、急速に魏の界に入ると、傳告るを聞て、魏王怖れて博を釋て、思ひ寄らざる大事頓に興りたれば、大臣を召して、此の事何如すべきと評議せんことを欲へども、公子は些も驕がず、反て王の意を抑へて、畏るべき事にあらず、此は趙王會田獵に出るが故なり、魏の國に寇を催すにはあらずと云て、故の如く博すれども、王の恐止まず、博の游を翫びながらも、心は博に在らず、頃して復北方より傳へ來りて、趙王は獵して寇をするにあらずと告る時、魏王大に驚き、公子は何を以てか未然に之を知るやと尋ね玉へば公子答へて、去れば某が門下に聚る客の多き中に、兼ねて趙王の陰密に爲す事を、能く探り得る者、今ま我が下に屬す、趙王の爲る所を、地を隔てゝも審く識りて某に每々告ぐるが故に、知れりと云ふ、是より以後、魏王は公子の賢者にして才能あるを畏れて、國の政を委任することを難澁して、君より公子に心を隔てたり、此の時節、魏國の侯嬴と云ふ人、此國に住居し、其の年七十にして、家貧しく粮の資に、大梁の夷

門を開閭することを役とす、公子彼れが事業を聞き、徒なる者にはあらじ、時を惡みて世に現れず、卑賤の地に、形を伏せ、身を完うする隱者ならんと察して、公子彼の許に往き、見えんことを請ひ、遂に相見し畢りて、貧を賑はし、厚く遺らんとすれども、受ることを辭退し、我れは身を修め行を潔よくすること數十年、今門卒の貧困なればとて、公子の財寶を受くることを肯はじと云ふ、公子彌貧賤を厭さる潔直の士なりと、感ずる故に、其の人を高く世に顯さん意にて、俄に酒肴を調へて、多くの賓客を會め、既に其の坐悉く定まる時、酒肴をも進めず、車を飾へよ、騎卒出でよと下知して、公子は其車騎に過從ひ、車の輿の左を虛しくして、（凡そ車輿に乘るには、尊きは、左に居る、左は陽の位なり、賤しきは右に居て、尊者の用を給するを禮とす右は陰の位なり）侯嬴夷門まで迎に出でられたるに、侯嬴は、公子の位ある人を憚なく、弊れたる衣冠を百結會めて、車の上に瞪せず上り、常に公子の居るべき坐に載せて、公子を國の宰相なりと重んずる氣色も無く、反て公子の無禮なる動ぞと、化轉する底を料觀んとす、公子は己が貴ときを忘れて侯嬴が乘りたる車の馬轡を執りて、愈禮恭を大に盡す時、侯嬴は公子に對うて、我れに來り親しむ客朱亥と云ふ者、市中に在り、獸の肉を截斷ちて糧の資とす、今ま彼れが許に立寄らんと思へり、此の車を彼の方へ枉げよと云へば、公子逆はず、其の辭に從ひて車を市中に引入れたる時、侯嬴嬉氣にて、車より下り、朱亥を見るに、後目遣して、故と久しく立ちて物語りし、時時公子の容貌を窺察れども、公子は些も倦る〻事なく、顏色愈溫和なり、斯る事を知らずして、公子の家には招かれたる、魏國の將軍宰相、君の宗徒の一門、賓客を始めとして、堂上に充滿し、公子の還るを遲ち、歸らば酒を酌まんと待構へ、又市中の人は、皆公子の自身侯嬴が車の轡を引くを觀て、賤しき者に謙下り、自己の貴きを喪ひ玉ふは、何事ぞと茫然、公子に從へる騎卒は、皆尊卑顚倒し、公子の、國威も虛に滅ぶるを知り玉はざるは在るべき事ならずと云ひて、聲喧しくは爲され共、互に耳語、卑劣の身として、侯嬴が公子を慢るとの無道甚しと罵る、侯嬴は公子の色、終に變せざるを熟視る、左右の間に、車は公子の家に輾屆れども、侯嬴は車より下りず、直に門内に入る、公子は侯嬴を車より、堂の上坐に請待して、偏く坐中賓客に對つて、此人の凡常ならざるを告らる〻を、賓客聞いて、皆駭異しめり、既に酒行、宴長じたる比公子は德あるを敬つて禮を形に表す、侯嬴の前に起ちて、君子は萬壽までの、祝辭獻られたるに及びて、侯嬴は、公子に語るに、今日こそ某が意の長を盡して、公子の爲めを遂げ足したり、我は國中に隱もなき夷門の開閭を職どる鄙人なれども、公子は我れを賤まず、親く車騎を陋室の下に枉げ、今又自嬴を、衆人廣坐の中央に迎へ玉ふ、我が居は來過すべきの處ならざるを、公子は故に過れり、我れ其の心の賢に誇らず、高爵を遺れて、善士を索めて、友とするの志を感じて、其人の名を成就せんことを欲ふに依て、故に公子の車騎を市中に久しく立て、我が交はる所の朱亥に、其の人を覩すに、公子は愈恭めり、市中の人は皆我れを咎めて小人たりと、公子は長者にして、能く士に下れりと感歎すと語る、此より侯嬴遂に上客と仰がれぬ、其の後又侯嬴公子に對つて、我が過る所の屠者朱亥は賢人なれども、世に能く知らる〻事莫きを自知して、我より屠者の間に隱れたりと語るが故に、公子又其の人を慕ひ、朱亥を數請待すれども來らず、又屠者の卑しきに、公子往けども、貴きが賤しきに就くことをも辭退せず、公子其の器の長を料り得ず、滋怪の思を致す、魏安釐王位に立て後、第二十年に、秦の昭王始めに趙の長平の軍を破り、又兵を進めて、邯鄲城を圍む、魏公子無忌が姉趙の惠文王の弟なる平原君が夫人なれば（大夫の妻を夫人と稱す）其の內緣の親を、賴にして、趙の岡より切に魏王又公子に書を遺來して、趙の難を、魏の國より蚤く救はんことを請ふに依て、魏王より將軍の官晉鄙を十萬の大將として、趙を救はせんとする時、秦の莊襄王より使を魏王に馳せて、我れ趙を旦暮の間に責下さんと志す、天下の諸侯我が兵を妨げて、趙を救ふ者は、趙城を拔いて後に、其の餘國は暫盧措きて、其の救へる國を、必擊たんと、言遣るに依て、魏王大いに驚恐れて、晉鄙が軍中に人を使はし、其の救を止むべしと制し、其の軍勢を鄴の地に留めたり、始めに名は趙を救ふ底なれども、實は秦と趙の師の成敗兩端を待窺ふに意あり、斯くとは趙に知らず、救の遲を急ぎ、平原君が使者冠蓋を盛んにして、魏の國に相屬ぎ、魏の公子に理を謾りて言來すには、勝が其の門に親附いて、婚姻を調ふるの所以は、公子の義を高うするあり、能く他人の困を助くるに、急なるを要とするを聞けばなり、今邯鄲秦に圍まれ逼迫する故に、旦暮に秦に降せんこと定れり、然れども、魏の兵今に迄るまで來らず、何ぞしも公子能く人の困を濟ふに急なりと稱はんや、且公子の意に、勝を輕じ、我を棄て秦に降するを厭はずとも、公子の姉を專憐れむべからざるの理なし、此を聞いて、公子大いに患ひて、頻に魏王に救の兵を早く趙に進めんことを請ひ、又賓客辯士更、魏王に說くこと萬端すれども、魏王は、秦を畏る〻こと甚しき故に、終に聽納れず、是に於て公子も、自ら王に求めて得ざらんことを、意

に度れども、又我れ生を全くしながら、趙の亡ぶるを見るべからざることを計り、賓客に請うて車騎百餘乘を整へ、賓客と共に、寄手の秦の軍門に赴き、趙と共に討死せんと、思を決めて、夷門に行き、侯嬴に見えて、具に秦の軍中に入て死なんと、志す形狀を告げて、別れ行く時、侯嬴は段々を聞きながら、他の語を吐かず、唯公子能く勉め玉へ、我れは老衰して從ひ行くこと能はずとのみ云ひて別れ去る、公子行くこと數里、快からずして、熟思量するとありて後、獨言に我れ今日に至るまで、侯嬴を待遇ふに、闕けたることなきは、天下知らざる人なし、今我れ忽ち死なんとするに臨めども、侯嬴より、一言半句も承けざるは、必ず我れに於て失なくんばあるべからずとて、復車を引返し、我別れに臨んで、先生より、一言なきは如何と問ふ、侯嬴莞爾うて、我れ公子の還らんことを預に（俗に前方と云ふに同じ）知れり、我詞を用ひざるの所以は、公子常に名士を懷くることを喜で、其の名天下に聞えたり、今難あり、他に大いなる急なきに、秦の軍に赴かんとするは、譬へば肉を用ひて、餧えたる虎に投與ふるに異ならず、何の功を成就することか有らんや、此の如くにて、倘客を懷くることを事として、何の益あらんや、然れども、公子は我を遇ふこと厚し、公子往けども、我れ送らざるに依て、公子の意に恨んで、復還らんことを知れりと云ふ、公子再拜して、又親しく問ふ、侯嬴邊側の人を皆屏け、聲を閑にして語るに、嬴始めより晉鄙が趙を救の爲に引率する所の軍兵の符は、魏王の寢所の中に、留在りと聞く、彼の如姬は、後宮の美人多き中に、最も寵愛せらるる故に、常に魏王の寢所に出入すること自由なれば、彼れが力らにて、能く竊み得ん、侯嬴嘗て聞く如姬が父人の爲に殺されたりと、如姬如何にもして、此を擒へて、父の讐を報ぜんと願ふこと今にて三年、魏王より以下に至るまで、父の讐を報じて寵妾の意に契はんと求むれども、遂に得ず、如姬又公子に涙を垂れて、此れを賴むと聞く、此れ究竟の幸なり、公子の從へたる客に、其の仇を搜出させ、其の頭を斬らせ、敬しんで如姬に進めば、至極仇を晴したること、公子の恩なりと悅びて、公子の爲めには、死するとも辭する所なけん、此事を遂げ、彼を悅ばせて後に、公子眞實に、一たび口を開きて如姬を賴み、彼の兵符を如何にもして、我れに賜はれと、請望まば、如姬必ず肯ふべし、此れを得ての後は、晉鄙が軍勢を忽ち奪ひ、北方には、趙の難を救ひ、西方にては秦の敵を却くることを掌を指すが如くならん、此れ春秋の頃、五霸の功伐なりと敎へたれば、公子其の計に從ひ、彼の美人に其の悅を遂げさせて後に、請求むるに、案の如く、晉鄙が兵符を、易々と盜出して與へたり、公子大に悅びて、趙に往かんとする時、又侯嬴に行き、求めは遂げたりと云へば、侯嬴重ねて說示すに、此の如き上に、又一大事あり、將軍として外國に在る時は、主君の下知とても、聞受けざる所ありて、偏に國家の便なるを要とす、公子彼に行きて、晉鄙が符と、魏王の寢所より得たる符と、丁と合せたりとも、晉鄙は猥に兵を公子に授けじ、符の合へるを證として、必ず我れに授くべしと、強く請ふ時は、其の事必ず危に迫らん、已前我れ親しみ交はる客と告げたる、屠者の中に雜居する、朱亥と、今般同道して往き玉ふべし、此人は比類なき者なり、晉鄙が公子の事を聽くならば、喜び大に此れに超えたるなし、聽かざる時は、朱亥必ず擊殺さすべしと云ふ、是に於て公子俄に泣く、侯嬴此底を見て、公子には死を畏れて、此の如くなるや、何の故にか泣くと問へば、公子答へて、我れ何ぞ死を畏れんや、彼晉鄙は彊勇の老將なれば、我れ往いて符を合するとも許さらんことを恐る、此を肯はざる時は、必ず殺すべし、流石の勇將を、一時に殺すべきを憐みて泣くと云ふ、侯嬴が下を出でて、直に朱亥に至りて、軍門に誘引せんことを請求むれば、朱亥嬉れし氣にて、大いに笑ひを擧ぐ、我れは市中に住みて、獸の肉を割り、賣つて糧を給す賤しき屠者なれども、公子は慢らずして、數禮を厚くして、我れを

遇ひ玉へるを受けて、久しく報ぜざるの所以は、少しきなる報禮は、用ふるに益なしと思へばなり、今ま公子急難に赴むく、此れ我が公子の爲に命を奉つるの時に當れりと云ひて、遂に公子と俱に行くことを約す、公子又侯嬴に往き、同じく俱にせんことを請ふに、侯嬴答ふるに、我も最とも從はんと思へども、老衰して用ひらるゝことなし、我れ此に留まり公子彼の地に行き至らん日を數へ、今は晉鄙が軍に著くべきと思ふの日に當りて、北に鄉ひて（北は陰の方、死は陰に取る故に、死なんとする者は、北陰の方に向ふ）自剄ねて、公子を送るの禮に致さんと云、公子別れて、遂に行き、晉鄙が軍兵を、屯めて留まる鄴の地に至りて、魏王の命令なりと矯り、晉鄙が軍將を我れ代らん、其の信此に在りとて、符を出せば、晉鄙符を合せ見るに、素より紛なき事なれども、猶ほ不審の思ひして、兩手を擧げ、熟公子の顏を視ての後に、今ま我れ十萬の軍勢を從がへ、自他の國の境上に、陣を張るは、我が國の爲めに重き役なるに、公子輕しく單車に乘來りて、我と將を代らんとは、疑はしと云て聽納るゝことなき底に見えたる時、彼の朱亥は、衆ねて支度したることなれば、重さ四十斤の鐵椎を袖裏より擲にし、即時に晉鄙を椎殺し、公子は其の軍勢の大將に代り、麾下に下知を觸流すに、此軍中に、父子俱に在るは、父當に鄉里に

歸るべし、兄弟同じく居らば、兄歸れ、若獨身にて兄弟なきは
蚤く歸りて親を養へと定めて、十萬の中、二萬は、右の法令
を悅で、故國に歸り、其の選拔きたる八萬人を從へ、兵器を
進めて、切に秦の軍を擊つ、秦の軍此勢に中てられて、圍を解
きて去り、遂に邯鄲の難を救ひ、趙の暫時に絕えなんとするを、
安かなる大功を顯したるに依て、趙王大いに悅び、平原君と
共に、自公子を城郡の界まで、迎の爲めに出でらる、此の時
平原君趙國の宰相なれども、歡娛の餘、警固の式を示し、轜
矢を自負うて、公子の爲にとて、先手をして城中に引導す、
趙王軍功を悅び、公子を再拜し畢りて後、古より賢人餘多
なれども、公子に及べる人は未だ有らずと云て感稱せられた
り、此の時に當りては、平原君も、自我は、人に比らずと思へ
り、彼の侯嬴は、朱亥が晉鄙を殺し、公子其軍を奪へりと聞
て悅び、公子鄴の軍に進まんとする時、別れに臨むの語を食ら
ず、遂に北に鄉うて自到ねて死す、又魏王は公子の兵符を盜
み矯りを架へて、晉鄙を殺せることを强く怒に含み、公子も魏
王の意を察知して、秦の軍を却けての後は、其の身は朱亥と
共に趙國に留り、奪從へたる軍勢には、別に部將を造らへ、
其の將に下知して、魏の國に悉く歸されたり、趙の孝成王は、
公子の矯りて、晉鄙が兵を奪ひ、絕えなんとする趙の國を穩に
靜められたるを、恩德とし、平原君と、評議して、趙の國中、五
城を公子に與へ封ぜんと定めたるを、公子は傳へ聞いて、意に
騎矜りて、此偏に我が大功に依て此の如しと思へる自負の
(俗に自慢と云ふに同じ)色、露れたるを見て、公子の客に唐睢と
云ふ人、此れを敎誡しめて、凡そ物に忘れまじきことあり、又必
ず忘れずしては措くべからざるあり、今ま公子の爲に、他人よ
り恩德を施したるは、必ず忘るべからず、又公子より他人に施
したる恩德は忘れ玉はんことを願ふ、且公子は魏王の下知な
りと矯りて、晉鄙が從へたる軍兵を奪ひ、其の兵を用ひて、趙
を救ひ玉ふにあらずや、此れ趙國の爲めには大功あれども、魏
國に於ては、忠臣とは爲ず、然るを今公子は、趙の國に功を施
したる效しを驕りて、其の不忠を省ずして、大功と思ひ玉ふ、
某が小見には、公子の意、道に中らざることを悲しむと云へば、
公子忽恥ぢて、我が身を容るゝ所なき者に似たり、其の翌日
趙王感悅至極にて、殿堂を掃除し、自公子を迎へて、主人
の禮を我れに執行ひ、公子を引導して、客位に崇め、西階に
就いて居らしめんとし玉へる時、(主人は東階に就き客は西階に就
くを禮とす、若し客の位、主人より下なれば、主人の階に就くも、禮記
に見えたり)昨日唐睢が訓辭、心裏に徹したる故に、驕慢の志
早く消えて、强く尊崇せらるゝことを、辭退して、側より行き、

東階より上り、自罪を責め、我れは魏に負いて、趙の國には功
なしと云へるが故に、趙王も酒を進めん爲に、側に隨侍し玉へ
ども、公子の辭に、感動して、暮に迫るまで、五城を獻ぜんと、
口より吐くことを得ず、公子竟に趙の國に逗留せらるゝに依
て、其の受けさるを知りて、趙の領內、鄙邑の地を、湯沐の費
に給與ふるのみなり、魏の本國にも、彼の辭を傳聞いて感じ、
始の怒を遁れて、信陵の邑を與ふること、故きを改めず、公子
趙に逗留の間に、官祿の榮耀を厭ひ、卑賤を恥ぢずして、博
奕の徒類に藏れたる毛公、藥を賣るの家に藏れたる薛公の
二人、此國に在ると聞いて、彼等に相見せんことを欲へり、兩
人其の意を識り、蚤く匿れて、公子を見ることを好まず、公子
遂に其の在る所を聞いて、間に步きて相見すれば、二人素の
意を革め游ぶことを遂げて、甚歡べり、平原君此事を聞いて、
己れが夫人に告ぐるに、我れは始は汝が弟の公子は、天下に
雙びなき人と聞きたり、今に當りて此の人を聞くに、身を妄に
して博徒賣藥の者と游を娛しむ、公子は妄なる人なることを
決せりと云ふ、夫人駭きて、此の辭を公子に語れば、公子は
夫人に告ぐるに、趙國を去るに意あつて、夫人に告ぐる辭に、
我れ素平原君は賢者なりと聞きたる故に、族類の親、恩を受
けたる魏王に負きて、今般趙の國の難を救ひて、平原君の
意に稱ふことを成就せり、然るに、平原君の門下に多く懷いて
游ぶことを成す客を觀るに、皆賢ならずして、材のみなり、世
に知られて用ひられんとを求むるの徒にして、名譽の士を求め
得たるにあらず、無忌は(公子の名)往時魏の大梁に居る時より、
平生此の兩人は賢なるを聞く、幸に趙に來れども、見ゆる
ことを得さらんかと、恐れたるに、今我れ從がひ游べども、二人
の心に猶我れを好まさらんことを恐る、今平原君の意に、此れ
に見ゆるをも、羞と思へり、況や從がひ游ぶことをや、我れ其の
德友を喪ひ、不賢に親しむことを欲はず、速に國を去らんと云
ふ、夫人歸りて、具に平原君に語れば、平原君も、其の辭に感
に、我が前言過てりと悔い、此の事を、公子に謝遂げざる時は
仕官の途を長く斷つべしと思ひを定め、冠を免ち、强て公子
を留めんとす、平原君が客、此の意を聞いて、門下を去ること、
半にして、公子に心服す、之に依つて天下の士も、復公子に
歸服せり、公子は、平原君が客を我れに傾從べても、猶趙に
留まること、十年まで、魏に歸らず、秦の國には公子趙の國に
在るを聞いて、大に幸と悅び、晝夜を分かたず軍勢を張出し
て、東方魏を伐つこと甚し、魏王惱され患ひて、使を趙の國に
馳せて、公子の國に歸らんことを請ふ、公子は以前の符を盜
み、晉鄙を殺したる事を恐れて、緊しく門下に誡めて、魏王の

使來ると、我れに通ずる者は皆殺さんと下知す、之に依りて賓客皆魏に背きて、趙に走り、公子に從ひ、公子に歸り玉へと勸むる者なし、斯時に毛公薛公の兩人、公子の許に往見えて、今公子の趙に重んぜられ、其の名の諸侯に聞えたる所以は、魏の國あるに依てなり、今秦より、魏を攻むること急なるに、公子故國の破れを恤へず、秦に大梁城を拔かせ、先祖の宗廟を夷げさせて、何の面目にか天下の間に立たんやと告ぐる辭の未だ卒らざるに、公子は忽ち色を變じて、車を飾へよと告げ駕を趣して、魏に歸り、難を救ふ、魏王は公子を見て相ひ與に泣き、來るを悅びて、上將軍の印を、公子に授け玉ふ、公子將として、魏の安釐王の三十年に使を列國の諸侯に馳せて、遍ねく魏國の難を告げ玉へば、諸侯皆公子の將と成るを聞いて、各大將に兵を加へて、魏を救はせらる、公子五國の（韓趙燕齊楚の五國）兵を引率し、秦の軍を河外に破り、秦の將蒙驁を逐走らせ、勝に乘つて秦の軍を函谷關まで逐迫めて、兵を懲しめたるに依て、兵震れて、秦より出づることなし、是に於て公子の威、天下に振へり、秦王此を患として、黃金萬斤を、魏に行りて、公子に殺されたる、晉鄙が客を求め得て、公子を魏王に毀らせたり、其辭に公子は、故國を亡げて、他國に在ること、已に十年、頃間歸りて、魏の將軍となり、諸侯皆連屬すれども、公子の言に從ひて、魏王には聞くなく、公子も、今は南面の位を定めて、天下に王たらんことを望む、諸侯は公子の威を畏れて、共に帝位に立てんと思へりと云はせて、魏王と公子の意を、隔つることを謀る、又反間者を遣り、公子を賀する底に僞りて、最早、魏王に立ち玉ふや、未しやと候ふ底を現すに依て、魏王も其の方便なることを知らずして、公子の軍將を、他人に代らせたれば、公子は、兩度の毀に遭うて廢てられたりと自知するに依て、病に託けて、出仕を止め、賓客と共に、長夜の飲を設け、醇酒を飲み、婦女を多く近づけ、晝夜淫酒を樂とすること四年、竟に酒に中てられて卒す、其の歲安釐王も亦薨ず、秦には、公子の死を聞て、蒙驁を遣し、魏を攻めて、城二十を拔き、其の地に初めて、東郡を置く、後ち十八年過ぎて、秦より、魏王假を虜にして、大梁の都を壞てり、

通俗戰國策卷第三

〔第十四〕春申君之盛衰

楚國に用ひられて、春申君の號を受けたる者、姓は黃氏、名は歇、楚の地の生れなり、始め四方に遊行して、學術を好み、博聞强記なる故に、終に楚國頃襄王に（名は横、考烈王の父にて戰國の時、楚の第六主也）事へ、辯才に達せる者なりと感ぜられて、虎狼の勢を振ふ秦の國へ、使の命を受けて赴かんとす、此頃秦の昭王は、其の將白起を、韓魏の二國を攻めに遣して、華陽の地を責敗り、魏將芒卯を擒にしたる故に、韓魏の國大に怖れ、秦に歸服して事ふ、昭王勝に乘りて、重ねて今與する韓魏の兵を合せ、白起を楚國に馳せて伐滅さんと催し、其の兵楚に未だ來らざる時なり、黃歇秦の國に適至りて、楚を討つの計を能く聞けり、此れより前にも、白起楚に來て、巫黔中の兩軍を攻取り、鄢郢の二城を拔き、東方竟陵郡まで討つて運るに依て、頃襄王も、東方陳縣に居を移して、微力の最中、殊に秦に至りて、懷王（頃襄王の父）昭王秦の爲に誘かれて、遂に國を敗られ、其の身は秦の他國にて死せられたる故に、其の子頃襄王の時なれば、彌秦より慢りて、楚を滅ずことを掌の中に握りたる思ひを成す、然れども、黃歇心剛なる者なれば、斯かる次第に氣を呑まれず、昭王に書を上る其の辭には、今天下に秦楚の二箇國より、勢の强きは之なし、然るに大王より楚を伐たんと計り玉ふと聞く、此の如きは兩虎相與に鬪ふに同じ、兩虎鬪ふ時は、駑犬其の弊を受けて幸あらんに同じく、韓魏の弱、期望さるに地を得ん、惟秦より楚國を全うして、其の福を固むるに超えたることあらじ、臣其の說を言さんことを請ふ、凡そ物至極なれば、必ず反覆す、冬至夏至に陰陽極りて、陽に復し、陰に復する是れ也、安んずる時は、必ず危し、蓁子を累ねて、倒る是也、今大王の土地天下に半して、西東を極めて有ち玉ふこと、生民あつてより以來、萬乘の地此の如くなるは、未だ曾てより有らざる也、韓魏一旦大王の强を怖れ、服し從ふに似たれども、實は大王を欺くなり、又秦より韓魏に往歲より恩なく、累世の怨を積めり、小敵は易るべからず、其の時を失ふべからずと云へるを聞く、韓魏の亡びざるは、秦の社稷の憂なるを辨へずして、今王の楚を攻むるは亦失にあらずや、王の楚を攻めんの日は、兵を出すこと、何れよりならん、路を仇讎の韓魏に藉ること必せり、兵出づる日に、大王の秦に反ること得ざるを憂へん、是れ楚を伐つの兵を興して、仇讎の韓魏に彌資を施すにあらずや、王楚を破らんとして、韓魏の勢を中國に勁くせば、遂に其の强きは、秦に較ぶるに足りなん、是れ王の失計なり、今臣王の爲めに慮かるに、楚國を善いはんに超えたることなし、秦楚合せて、一ならば、韓は必ず服して、誅を請ひ、魏も亦關内に從はんこと有らん、韓魏の兩國、秦に心服する時は、兵を强國の齊に進

めば、齊の地を手を拱いて取るべし、此の如くならば、王の地は西海より、東海に至るまで、我が有とし、遂に天下を要約せん、（干要の地を約束して、得るを云ふ、是れ自ら燕趙は齊楚なく、齊楚も燕趙なくして、四國に攻伐の痛を用ひずして、服せんと云ふことを進むるに依て、昭王最なりと肯ひ、白起が楚國に發向することを止め、別に使を楚國に馳せて、賄を納れ、永く與國の約を定め、楚國一朝の大難を黄歇が辯材にて息め、歇も難なく約を定めて楚國に歸りぬ、猶秦の勢ひ强きが故に、楚國の太子名は完を、秦の都に約を變しましきの質に入れたり、完を秦に留むること數年の後、楚の頃襄王重病に罹れども、太子は質に取られたるに依て、故國に歸ることを得ずして、愁ひ玉ふ時、太子始より、秦の宰相應侯と親むことを、黄歇聞いて、秦に往きて應侯に慇懃に說き、相國には、楚の太子と交を善くし玉ふやと問へば、應侯答へて然りと云へば、歇又應侯に向ひて、今ま楚王の疾は起たさらんことを（疾の愈るを起つと云）恐る、秦より楚の太子を歸し玉ふことに勝れたることはあらじ、王卒して後、太子國に立たば、歸したるの悦忘れずして、秦に事ふること重くして、相國の恩を感ずること寡りなからん、是の如きは與國に親しくして、萬乘の（天子の位を萬乘と云）基を儲ふることを遂ぐるの要なり、若歸すことを許さゞる時は、太子は秦の咸陽の地にて、永く一人の布衣にて終へん、楚には別に太子を立つる時は、必ず秦に事ることを止めん、然らば與國の親を失ひて、萬乘の和睦する交を絶つことは、計の是にあらず、相國此の事を熟意慮し玉はんことを願ふと云へば、應侯誠にもなりと思ひ、秦王に奏聞するに、秦王の仰せには、然らば先楚の太子の傅を遣り、楚王の病を伺はせよ、返りて後に圖るべしとなれば、黄歇が匠も爲方なきに至りて、歇又太子に見えての計に、今秦に太子を留むることは、利を求めんとの意より外なけれども、太子の力にて、秦に利を與ふることを得ず、歇之を憂ふること甚だし、楚王の寵妾陽文君が生む所の二子、楚國の中に在り、王若し大命卒り玉はば、太子國に在まさずとして、陽文君が子必ず後に立て、太子は永く宗廟に奉へ玉ふこと能はず、國の得喪此に決まれり、畢竟太子は、秦の國を亡げ、楚國より疾を告げ來る使者と倶に此を出玉へ、臣は後に止まり、太子の爲めに身を死に定めんと云ふ、太子は歇が諫に隨せ、衣服を變じ、使者の乘りたる車の御者を勤めて、秦の關門を出て離れ玉ふ、歇は太子去りし空舍を守り、病に臥すと詐り、太子今は已に遠に去つて、秦より追ふことを得ましきを度つての後、自ら秦の昭王に對つて、楚の太子は已に國に歸れり、今は出ること遠く隔り

なん、歇は死に當れり、我れを死に就け玉ふことを願ふと云へば、昭王怒ること甚しきに、意狠狠へて、人の殺すを待つこと勿れ、汝今自己に死すべしと云ふ時、應侯前み出て、歇は人臣として主の爲めに身を出したる忠臣なり、太子楚國に立たば必ず歇を用ふること定まれり、此を罪することなくして、國に歸して、楚と親を厚くし玉ふに勝ることはあるまじと云ふ、秦王其辭を肯ひ黄歇を免して、楚に遣る、歇國に還りて三月の後に、頃襄王卒し、太子完立つ、是れを考烈王と稱す、考烈王の元年に、歇が前の功を感じて國の宰相に登庸ひ、淮北の地十二縣を與へ封じて、春申君と仰ぎて、其威光を熾んにし玉へり、其れより十五年後に、歇は楚王に訴ふるに、臣に賜はる所の淮北の地は、齊の國に近邊りて、國の仇に急なる處なれば、下臣猥に領知すべからず、國の要害第一の處なれば、君に獻ぜん、改めて江東に封ぜらるゝことを請ふ、考烈王其の願を許されて後に、春申君は故春秋の吳王闔閭が遺蹟に城郭を築きて、自己の都邑と定めたり、春申君が楚國に登庸ひられ、宰相の威を振ふ時に當りて、齊國に孟嘗君、趙國に平原君、魏國に信陵君と、皆其器量を王君に感ぜられて、君號を被り、天下此れを四君と稱して、人皆羨むこと大なり、四君共に我れ一と爭ひ、名士に己れを卑下し、四方の賓客を其家に招致して、互に他國を傾け奪ひ、我國を輔け、楯を持つことを要とす、春申君、楚の宰相に用ひられての四年に、秦の國より趙の長平の軍勢四十餘萬を敗り、五年に邯鄲を圍む時、趙より我れに急ある事を楚國に告げて、救の兵を請ふ、楚より春申君を兵將と定め、趙に遣り救はせんとする時、秦の兵已に往き去るに依て、春申君は楚に歸る、宰相の後八年に、楚の爲めに魯國を滅す荀卿を、蘭陵縣の令官に用ひたり、是の頃楚の勢復彊くして、趙の平原君より、春申君が許へ、使者を遣る、春申君其の使を上舍に（俗に上屋數と云ふに同じ）舍せり、趙の使者、我國の富饒を受けて、士も又榮耀なるを示して、楚國に夸らん爲に、璋珌の鞞を造り、刀劍の室に珠玉を飾り、此を至極と思ひ、春申君が賓客に對し、春申君に通ぜんことを請ふ時に、門下に在る三千人の中、上客に崇められたる、皆珠履を踏みて、趙の客を出迎へたるを見て、趙の使我飾の彼に及ばざるを大いに慙ぢたり、角て春申君、相を十四年勤めたる時、秦の莊襄王、（昭王の孫、孝文王の子なり）孝文王に繼いで立ち、呂不韋を國の宰相と定め、文信侯に封じ、東周を滅せり、春申君相として二十二年に、列國の諸侯、皆秦より、歷年其の國を攻伐つこと今に至つて已む時なきを患ひて、相與に從の交を合せて、西方秦を伐たんと謀

る、此の時莊襄王の繼嗣、始皇立て第六年に當れり、合從の中ち楚國は其の長として、春申君軍事を掌りて、函谷關に責寄せたる時、秦より軍兵を出して、諸侯の兵を攻めて、皆敗北したる故に、楚の考烈王怒りて、春申君を咎められてより、次第に疎末にせらるゝ故に、春申君が客の中に、觀津より來る朱英と云ふ者、春申君に語るに、人は皆楚國は彊けれども、君の用ふること弱しと云ふ、我れは然らずと思へり、楚の先君の時、秦に惱まされざる二十年が間、楚を攻めざること何故とならば、秦より申州毘の地の隘を踰えて、楚を攻めては、秦の便ならず、道を東西の兩周に假り、韓魏に背きて、楚を攻める時は不可なればなり、今に於て然らず、魏は旦暮に亡びんとす、其の要害とする、許鄢陵の地を愛することをも得ず、其の許は魏より割いて、（領地を分けて敵國に與るを割くと云ふ）秦に與ふることは秦の兵許の東南陳を去ること、僅に百六十里なればなり、某が觀る所は、秦と楚の日に鬪はんを近きに見んと云ふに依て、陳を去つて、壽春に徙れば、秦には衝の都を河北野王の地に徙して、東郡とす、春申君も此れより改め封ぜられし吳の地に就いて、猶宰相の事を行へども、楚の考烈王に子なきことを思ひて、婦人の宜しく子を生むべきを、四方に求めて、進むること多けれども、卒に子なし、爰に趙の國の李園と云へる人、始其の女弟を進めんと願ふ間に、楚王には、子を求めんとする便に宜からざることを聞て寵愛を久しく得ましきを恐れ、春申君に事へて、家人と成るべしと求め見を遂げて、歸りて故と出て進む期を過ちて、後に來り進みたるを、春申君異みて、其の故を問へば、其の對に、齊王より、臣が女弟を求め玉ふ使者を得て、其の使者と酒を飲みて遲なはれりと云ふ、春申君聞て、女弟は齊王の聘を受けたりと問ふに、未しと答るに依て、又其の女弟を我れ見ることを得んやと云へば、素より匠を架へたることなれば、如何にも見せんとて、春申君に進め、容貌美麗なる故に、春申君に寵せられて、其の身めることあるを知りて、李園と女弟密に謀合せて後、女弟は間に、春申君に說く、楚王に君を貴く愛し玉ふことは、兄弟よりも勝れり、君楚國の宰相の威を振ひ玉ふこと、已に二十餘年なれども、王に子なければ、百歲の（命數の長からんことを祝して云）後、王の兄弟を立つると必せり、君の後更まる時は、又各其の故より親む所を貴で、君を寵し玉ふこと有るべからず、君功を用ふること久しく、貴きに依て、王の兄弟に禮を失へること多し、兄弟立たば、禍君の身に及ばん、然らば何を以てか宰相の印を江東の封ぜられ玉ふ地に保たんや、今妾自身めることを知れども、他人知ること無し、又妾が君に幸せられたることも未

だ久しからず、君の身に重きことあるを省み玉ひて、妾を楚王に進められ、幸を被らば、天に禱りて男子を得る時は、君の子は、王と成りて、楚國は盡く君の有とならん、測らざるの罪に臨むとは、孰與ぞやと、實なる底に語れば、流石の春申君も最なりと同意して、李園が女弟を頓に他の舍に出して、楚王に勝れたる美女ありと言ず、楚王悅んで宮に召入れ、大に幸して、遂に男子を生めり、立てゝ太子に定め、李園が女弟を王后に舉げ、李園貴ばれて國の事を職り、威を逞しくすれども、春申君が語泄れて、益驕らんことを恐れて、陰に力士を多く養ひ、春申君を殺し、其の口を滅さんと催せり、國中には過半李園が匠を知る、春申君楚國の相を勤めたること第二十五年に當つて、考烈王病に臥す時、朱英が春申君に語るに、世に望むことなき福あり、又望むことなきの禍あり、望むことなきの世に處て、望むことなきの主に事ふ安くんぞ以て望むことなきの人なかるべけんやと云、春申君其辭を聞て怪みを起し、何をか望むことなきの福と云ふと問へば、朱英答へて、去れば君、楚に相たること二十餘年なり、名は相國と呼ばれても、實は楚王に同じ、今楚王病に罹りて、旦暮に卒らんとす、君は少主の爲に相として、代りて立つ時、君國の事に當らば、伊尹、周公に齊しかるべし、少主成長の後、政を反さん、然らずんば遂に南面の位を定めて孤と稱して、（乃ち國を有つの諸侯德無く、人貧きて孤獨なるとの卑下にて、自己を孤と云ふ通例なり）楚國を有たれん、此れ彼の望むことなきの禍なりと云ふ、又問ふ何をか望むことなきの禍と云ふぞや、答ふ李園は本國を治めざる者にして、君の仇なり、國を固むる兵の爲ならずして、力士を多く養ふこと日久し、楚王卒する時は、李園必ず先づ君の家に入りて、少主の祖父なるとの權威に據りて、君を殺して以後の口を滅すべくは、此れ望むことなきの禍なり、又問ふ、何をか望むことなきの人と云ふや、答へて、君は臣を郎中に做く、楚王卒せば、李園必ず先づ君の家に入らん、其時臣は君の爲め李園を殺さん、此れ望むことなきの人なりと云へば、春申君條聞畢りて後、汝、此の事を必ず止むべし、李園は勢弱者なり、我が力にて計るべし、且汝の言ふ所に及ぶことあらじと云ふを聞て、朱英我が言の用ひられざるを知り、又禍の身に及ばんことを恐れて、遂に亡げ去る、去て後十七日に、考烈王卒し玉ふ、朱英が案の如く李園先手に力士を、壽州の棘門の內に（城門の名）伏置く、春申君此を知らずして、棘門に入らんとするを、待架へたる力士共、前後に夾んで刺殺し、頭を斬つて門外に投廢てゝ、其れより、春申君が家に雜士を餘多遣りて、盡滅させたり、彼の李園が女弟、初め春申君に幸

せられて、身みたるは、王の宮に入りての後、男子を生む、遂に考烈王の遺蹟を継ぐ、此を幽王と云、

〔第十五〕孟嘗君之雞鳴狗吠之士

齊の國に威を逞しうし、名を列國に鳴したる孟嘗君は、姓を田氏、名は文と云、齊の宣王、威王に事へて、薛の地に封ぜられ、國の宰相に用ひられたる田嬰が庶子にして、本齊王の族類なり、始め田嬰四十餘人の子あり、文は賤妾の生む所、然も五月五日に生れたるを忌みて、田嬰其の母に此の子を生長つること勿れと禁しめたれども、母は愛に溺れて、竊に養育し、生長の後、母は兄弟を憑みて、我が子を田嬰に見えさせたるに、嬰其の母を大に怒りて、我れ子を去てよと云へるに、我が言を用ひずして、生育たるは何に事ぞと答むれば、田文首を父の前に頓せて、父として我を去てよとは何故ぞと問ふ、父答へて五月五日の子は、其の長家門の戸に同じきに至て、男子は父を害なひ、女子は母を害ふの災ありと語り傳ふる故なりと云ふ、田文此を聞畢りて、又父に向ひて、凡そ人は生るゝことの命を天より受るや、又命を戸に受くるやと問へば、父も答話に難みて默然として、左右を言ふことを得ず、田文又辭を進めて、必ず命を天より受くるとならば、父に何の憂あらん乆必ず命を戸に受くるとならば、其の戸を高うする時は、何の害あらんやと云へば、父大いに感じて、親子の交を許したり、其の後田文父の間あるを窺ひて、子の子は何と名るぞと問ふ、父孫と云ふと答ふ、又問ふ孫の孫を何とか云、玄孫と云ふと答ふ、又玄孫の孫をか何とか云ふと問へば、田嬰其の上は知らずと云ふに至て、（爾雅郭親爾宗族部云、子之子爲ㇾ孫、〔註孫猶ㇾ後也〕孫之子爲ㇾ曾孫、〔註曾猶ㇾ重也〕曾孫之子爲ㇾ玄孫、〔註玄者、言親屬微昧也〕玄孫之子爲ㇾ來孫、〔註言ㇾ有ㇾ往來之親ㇾ來孫之子爲ㇾ昆孫、〔註昆後也、汲冢竹書曰、不窋之昆孫ㇾ昆孫之子爲ㇾ仍孫、〔註仍亦重也〕仍孫之子爲ㇾ雲孫、〔註輕遠如ㇾ浮雲ㇾ〕）田文又父に辭を進めて、君は齊の宰相に用ひられ、事を用ふること、今に至るまで、三王を（威王宣王湣王）經たれども、齊の國廣きことを加へずして、君の私家は富んで萬金を累ね、門下に一人の賢なるを見ず、我れ齊て將軍の門には、必ず將軍有り、宰相の家には必ず宰相出づると云ふことを聞けり、然るに今君の後宮の美人、皆綺穀を踏めども、下に從ふ士は、悉く短褐をも得るに便りなし、卑女は粱肉に飽いて、士卒は糟糠にも厭かず、今君は尚積ことを厚くし、藏むること深る計にして、終に何人に遺す所を知らずして、一向に得ることを急にして、公家の事、日に損ずることを忘れ玉ふを、我れ竊に怪しむと云ふに感じて、父の田嬰は、

子の文を禮拜し、家事を委せて主どらめしより、賓客日に進み來り、名聲は天下の諸侯に徧ねく聞えて、列國より田嬰に使者を來して、田文を後嗣に定めんことを請ふ、父も文が材器を感ずる故に、諸侯の望を許したり、田嬰卒して後、靖郭君と諡す、文遺蹟を踐んで薛の地に立つ、是を孟嘗君と云ふ、孟嘗君薛に居住して、列國諸侯の賓客を招き納る、又出亡して罪ある者、皆歸き懷くを愛して、家の產業に拘はらず、慇懃に待遇ふに依て、次第に天下の士を傾入れて、其養ふ所の客數千人を重ねたれども、貴賤を隔てず、孟嘗君と同じくせり、會其門に客來り安坐して語る時、屏風の後に執筆の人を定て、君が客と語る所を記留むることを主どらせ、又客の親戚、其居處まで、詳に問ひ、客去て後に、其の存否如何を搜ね、親戚に悉遺物を獻ずることを常とせり、孟嘗君に來る一人の客、夜に至りて、食ふ時、燭光の陰に蔽れたるを、我が食は、孟嘗君に等しからずと怒り食はず、辭して去らんとするを、孟嘗君蚤く其意を曉りて、我が飯を自持ちて比べ示して異ならざるに慙ぢて、客は卽坐に自剄ねて死したり、此の事世に聞きて、四方の名士、多く孟嘗君の門に集まれども、其の客に擇ぶ所なく、皆善く待遇ひて、其の意を得たり、秦の昭王其の賢なるを傳聞いて見えんことを求むれども、互に仇敵の思ひを含む齊の國に在る人なれば、我れに薦ひ懷けんと、欺むくに意なき信に、國に愛し重んずる涇陽君と稱する臣を、齊の國に先立て質に遣りて、孟嘗君を請招かるゝ時に、孟嘗君は秦の國に入らんとするに及びて、門下の賓客皆其の行かんとするを肯はずして、種々諫むれども、心剛なる人なれば、聽納るゝことなし、爰に蘇秦が兄弟に、蘇代と云へる辨智の人、孟嘗君に見えて、某今朝外より此に來らんとする路にて、希有なる事を見る、木偶人と　木を用ひて人の如くに造る傀儡子を云ふ）土偶人が（土にて造るを云ふ、共に俗に人形と云に同じ）物語するを聞くに、木偶人より、（木偶人を孟嘗に比す）土偶人を（土偶人を涇陽君に比す）弔ひ、其方は今此の如く歷々たる底にても、天大いに雨降る時は、本土を埏して、形を整へたれば、雨水に和げられ、忽敗壞るゝを、我れ痛歎くと云へば、土偶人聞畢りて、謂れさる我を弔ふは無用なり、我れは土より生じたれば、敗れても、亦故の土に歸る、汝は雨に遭ふ時は、水の爲めに流されて、江河を過ぎ、海潮に漂ひて止息する所を知るまじきは、我が强く太息する所なりと云へり、今此れに配せて、熟思量すれば、彼の秦は虎狼の如き恐あるの國なり、君往きて、若齊に還ることを得ざる時は、土偶人に木偶人が笑はれたるに異ならざるを如何んと告ぐるを聞て、孟嘗君實にもなりと感

じて、秦に行くことを一旦止めたり、齊の宣王卒して後、湣王立ち、第二十五年に當て、復孟嘗君は、湣王の意に得られざるの故に、秦より頻に請ひ求むるに依て、秦の國に遣る、昭王悦びて秦の宰相に用ひ玉へるを、或人昭王に諫めて、孟嘗君は賢者なり、且齊の種族ならずや、今秦の宰相としても、必ず齊の爲を先にして、秦の事を後にすること決定なれば、秦は行末危きに近かるべしと云ふを聞いて、昭王の意に、斯も在るまじき事ならずと、又た思ひ變じて、宰相を止め、猶意惑ひ怖れ、甚しく胸に迫りて、請求めたる孟嘗君を囚籠め、終には謀を用ひて殺さんと用意せらるゝことを傳へ聞いて、孟嘗君は不意の禍、身に近くことを憂ひ、如何にもして、免れんと計り、昭王の寵愛渥つき美人に、人を賴みて、我難の解けんことを求めたれば、美人は前に孟嘗君が許に、狐白裘とて、狐の腋に在る、白毛を擇みて裘と造りたる其の直珍物なれば、千金にして天下に雙なきを貯へたりと聞得るに貪りて、此を我れに贈與へば、秦王に告げて汝を許さんと云へども、始め秦に入る時に、王の所に此を獻じて、更に他の裘なし、孟嘗君は美人の求めを給す時は、免るゝこと定まれども、別に得るに路なきを患ひて、偏く從へたる客に如何と問計れば、其の對へを進むる者なきに至りて、末席に列なる者、常に狗の吠ゆる音を眞似して、能く盜を遂げたるを以て、進み出でゝ、臣が力にて、狐白裘を得ること容易しと云ひて、夜に入り、狗の形に身を變じ、其の音を吠えて、寶の狗に疑れず、遂に秦の寶藏の中に入り、獻つたる所の狐白裘を偸課せたるを、美人に進めたるに依て、孟嘗君の爲めに、昭王に言を盡せば、美女の辭に溺れて、孟嘗君が囚を釋され、出づることを悦びて、疾く馳せ去る時、名姓を變じて、函谷關まで逃來る、昭王平生遠き慮に短かき人なれば、許して出せるを後悔して、孟嘗君を求むれども、已に去りたるを覺ひて、多勢を追はせらる、孟嘗君は關に到りて、忽ち難儀に迫ることあり、關の法に鷄鳴きて、後に客を出すことを常の式に定めたるに、今夜半なれば、關吏門を開かず、追手の遲來らんとを患とする時、常に下坐に居る者、鷄の鳴を能く眞似る名人なれば、其の音を揚ぐると、關門近邊の鷄一同に盡鳴くに徹き、門を發きたるを悦びて、快く出脫かれぬ、其の後朝飯の頃に、秦より追手來れども、後れたれば、孟嘗君を捕ふることを遂げず、齊に遲りて後、鷄鳴狗吠の力にて、虎口の如き難を脫れたるを感じて、二人を賓客の列に入れたるを見て、衆賓久しく其の下に在つて、未だ功を著はさゞる事を羞に懷けり、孟嘗君趙國に行て、平原君が客となる時、趙人先に孟嘗君は賢なりと聞きて、今來るを皆出て、熟

觀畢りて、大に笑つて、始めには薛公は魁然と大なる人ならんと思へるに、今視れば眇々と短丈夫なりと云ふ、孟嘗君、其の言を怒り、客と倶に下て、數百人を斬撃ち、遂に一縣を滅して去りぬ、齊の湣王は、孟嘗君が他國に去るは、我が德なきに依れりと、自己を恥ぢて樂まざるに、遲れば卽ち大に悦んで、齊の宰相とし、國の政を任せられたり、

〔第十六〕蘇秦依學興家帶相印

六國に横行し、智辨を昌んにして名を鳴らしたる蘇秦は、東周維陽の人なり、始め東方齊の國に往き、隱者鬼谷先生と云ふ人、時に應じて、縱(六國)横(秦國)の軍事、得失利病の術に長じたるを師と仰がんと志し、故郷を辭りて游學すること數年を經、大に困しむこと極まりて後に歸りたる時、兄弟嫂妹妻妾に至るまで、生産を營まず、徒に他國を游行して、身の依る處なき故に、今復還れりと慢る意にて、異口同音に笑を揚げて、凡周人の風俗は、産業を治むることを干要とし、工商を怠らず、力めて什が二の利を逐ひ、專ら務めて身を立て、家を養ふは常なり、今子は務むべき本を釋て、口舌の譽を事とするの故に、此の如く困窮するは、意より招く所ならずやと云ふ、蘇秦此の辭を聞きて、慙に懷き、自傷みて、室を閉ぢて出でず、鬼谷が授けたる所の書を、旦夕廢てず、倦れて睡萌さんとする時は、錐を用ひて、自股を刺し、血流れて踵に至るを厭はず、此の如くせざれば何ぞ人主に說き、其金玉錦繡を受け、卿相の尊を取ることあらんやと云て、偏ねく觀覽すること期年の後、(歲月一周するを期年と云)今こそ當世の君に說くべしとて、周の顯王に見えんことを求むるに、顯王の左右に事ふる臣、皆素より、蘇秦を知つて輕る故に見えを遂げずして、西の方秦の國に至る、孝公卒して、子の惠文王に見え、今大王の國は、西に巴蜀、漢中の利(三郡地在二益州一あり、北に胡貉(胡は林胡樓煩の夷の地を云、夷狄は貉を表に著)代馬の用(代郡在二幽州一あり、南に巫山黔中の限あり、東に殽山函谷の固あつて田は肥え美しく、民は殷に富み、戰車は萬乘の多きを重ね、勢を奮ひて強敵を擊折くの勇士は、百萬を從へ、千里の沃野形便なる地勢にして、蓄へ積むことの饒かに多きは、此れぞ彼の天然の府庫にして、天下に勝れたる英雄の國と稱すべし、今大王の賢士、民の衆き、車騎の滿ちたるに、兵法の教を用ふる時は、諸侯を併せ、天下を呑んで、四海の帝と稱して治め玉ふべきこと、掌に在り、願はくは大王少く意慮を加へ玉へ、臣其の効を、君前に述べんことを請ふと云へば、秦王聞畢りて後、寡人(諸侯已れを謙下て德寡き我れなり

との義なり）嘗て聞けり、毛羽豐滿ならされば高く飛ぶこと能はず、法令成就せずして、誅罰を用ふべからず、道德足らずして、民を使ふべからず、政敎人心に應ぜずして、大臣を煩はすべからずと云へり、今先生威儀を整へ、千里を遠からずして、寡人が庭に來りて、敎を施せども、其人に寡人は未だ當らず、已後他日を俟たんと答へ玉ふ時、蘇秦語を反して、臣固より大王の用ひ玉はざらんことを疑へり、昔し神農は補遂の國を伐ち、黃帝は涿鹿の寇を滅して、蚩尤を擒にす、堯も驩兜を放ち、舜又三苗の國を征伐し、禹は共工を流し、殷湯は有夏の君を南巢に放ち、文王は崇侯虎を殺し、武王は紂を伐ち、齊の桓公戰を任ひて、天下の覇王に立つ、此を以て觀れば、何ぞ戰はざるの人あらんや、古へにも車轂衆く相擊ちて、萬里に馳せ、言語を相約し、親みて後に、天下平なり、今縱を約し、橫を連ぬれども、兵革（兵は干戈矛戟の類、革は甲冑の類を云）藏まらず、辯士口を飾り、諸侯列國に亂れ惑ひ、萬端並び起ること勝げて計ふべからず、條目繁多にして、民に世を僞はるの態繁く興り、法令の書策日に稠く、閭る者の心亂れ迷ひ、上下互に愁を懷いて、民心聊む所を喪ひ、兵甲愈起りて戰攻息むことなし、若し徒に處て利を願ひ、安坐して地を廣めんと求むることは、古の五帝三王、五覇の賢君も、其の勢能はざること定まれり、今天下を併せ、萬乘を凌ぎ、敵國を服し、海內を制らひ、萬民を子とし、諸侯を臣とすることを求むるには、兵を用ひずしては可ならざるなり、今の國を嗣ぐ君は、至道に忽にして、皆敎に悖く、治に亂り、言に迷ひ、語に惑ひて、辨に沈み、辭に溺る、此を以て論ずれば、固は王は行ふことを得じと云て、遂に秦を去る、凡そ蘇秦が秦王に書を上つること十たびすれども、其の說行はれず、黃黑の貂裘敝れ資用乏しく絕ゆるに依て、趙の國に至て、肅侯に見え、掌を捋つて談ずれば、趙王大に悅びて地を與へられ、武安君に封ぜられ、遂に宰相の印を帶びて、革車（兵車を云）百乘錦繡千純、白璧百雙、黃金萬鎰、（一鎰は二十四兩なり）此れを後に隨へ、列國に行りて縱を約し、橫を散れて、彼の強秦を抑ふることを專にす、蘇秦が趙の國に宰相に用ひられてより、六國皆其の國を出でゝ、假にも秦の函谷關門を窺ふ者なし、此の時に當りては、天下の大なる、萬民の衆き、王侯の威、謀臣の權、總て蘇秦が籌策を決めんと、意を一等して、疑ふ者なし、一斗の粮を費やさず、一兵を未だ煩はさず、一士を未だ戰はしめず、一弦を未だ絕だず、一矢を未だ折らず、諸侯相親しむこと、兄弟よりも賢れり、賓人在つては、天下服し、一人用ひられて天下從ふ、此れを政を式ひて、勇を式ひず、廊廟の內に式ひて、四境の外に式ひずと云ふ、蘇秦が勢の隆なる時、黃金萬鎰を捨てゝ用を給し、後車の轂を多く轉らし、隨時の士、騎を疊ね連ねて、道を炫橫かす、山東の國（六國を指す）草の風に從ふが如く服せざる者なく、趙の國は一朝に、九鼎より太重し、蘇秦が楚國に往きて、威王に說かんとする時、其路故鄕雒陽を過ぐることを、父母は聞いて、家を淸め飾り、道を掃除うて、音樂を調へ、飮酒を湛へ、郊外まで（國の都より百里の外を郊と云）迎へること二十里、妻は其富貴に驚き、目を側めて正しく視ず、聽くに耳を傾け、嫂は蛇行匍伏して禮拜すること數回、蘇秦斯る底を視て、嫂には、何ぞ前に我れに倨りて、後に己れを卑劣にするぞやと問へば、嫂答へて、今季子に位尊くして、金多きを見るが故なりと云ふ、蘇秦其辭を聞いて、嗟乎、貧窮なる時は、父母も子とせず、富貴なる時は、親戚も畏懼ること此の如し、人は世に生れて、勢位富厚なることを忽にすべけんやと云へり、

（第十七）張儀被辱遂事秦

蘇秦と時を同じうして、游說の口才を用ひ、列國を弱まし、秦の勢を熾にして、利を己れに積むことを、第一意としたる張儀は、魏の國の人なり、始め蘇秦と共に鬼谷先生を師と仰いで、其の術を學ぶ時、蘇秦自張儀に及ばずと思へり、張儀學び畢りて後、列國に行りて游說を專とす、一時楚國の宰相に從がひて、酒を飮み、飮むことを已りて、楚の宰相璧を亡なへり、宰相の門下の人、皆張儀は貧乏の者なれば、璧を盜むは、彼れなるべしと云ひて、頓て張儀を執へて掠笞つこと數百を累ぬれども、彼れ實ひ盜むとも知れざる故に、免されて家に還りたるを、其の妻悲視て、嗟乎我が夫無益の辱を讓まず、游說することを好まざるならば、何ぞしも此の如き辱を被むらんやと云へば、張儀怒りて、妻に我が舌在りや、此れを早く看よと云ふ、妻此れを聞いて斯かる惱を受けながらも懲りずして、辯口を息めましき意なりと笑ひて、舌は儼に作りと答ふれば、舌だにも健なれば、我が意に足れりと云て、快氣にして樂しめり、彼の同學の蘇秦は、今趙の國にて、宰相の權を振ひ、專六國縱の親を合せ約すれども、卒には強秦より、諸侯を攻め、約敗れて後に負かんことを恐る、當時秦に用ひらるべき者、張儀を除けて外あらず、彼れ秦に用ひられば、趙の害定まれり、以後趙の禍を脫るゝ爲めに、故と他人を雇ひ、張儀が許に遣り、汝は始め蘇秦と交を善くしたるにあらずや、今蘇秦は富貴にして、仕官の路に當れり、汝何んぞ趙に走つて、汝の願を蘇秦に通じて遂げさると云はせたり、張儀其の辭を

肯ひ、趙國に至て、蘇秦に對面せんことを求む、蘇秦は門下の人に誡めて、張儀を必ず我れに通ずること莫れと制し、又去ることを得させずして、此に留むること數日の後に逢ふ時、張儀を堂下に坐ゑ、僕妾を食ふ麤飯を與へ、剩へ愚辱しむるに、汝が才能にて、己れと困窮し、辱を受くること此の如き底に至れるや、我が言にて、汝を富貴に至らしむることは容易き事なれども、汝は取り用ふるに足らずと云へば、張儀も茫然として去りぬ、張儀始め此國に來る時、蘇秦は我が故舊の朋友なれば、身の爲めに益を求むるに宜しき便と思ひたるに、反つて辱しめられ、此れを怒りて列國の諸侯に見えんと念へども、何か事ふべきなし、秦の一國のみは、怒を含む趙を苦めんことを意慮し、思を定めて遂に秦の國に入る、蘇秦は此の事を聞て家人を近けて、彼の張儀は天下の賢士にして、我が及ぶ所にあらず、我れ今幸に先づ用ひらるれども、能く秦の政を用ひん者は、獨り張儀なり、然れども貧困に障へられて、進むに因なからん、我れ彼が小利を樂みて若しくは大功を遂けさらんことを恐れ、方便を用ひ、召辱しめて、其の意を激したり、我が爲めに汝は秦に往きて、張儀に我が贈物を奉せよと云ひて、趙王に言して、金幣車馬を調へ、微に家人を張儀と秦の旅館に宿させ、稍々に近就て、車馬金幣を奉じ、張儀が用ひんと願ふ所を給せども、蘇秦より贈れりと云ふことを告げず、遂に張儀は秦の惠文王に見え、惑ぜられて、客卿に仰がれて、與に諸侯を伐たんと謀る時、旅舍に同宿したる蘇秦が家人、辭して去らんと云ふ、張儀は留めて汝の惠を受けて、今名を顯はすことを得たり、其の恩を報ずるに意あり、何んの故にか去らんと云、家人の辭に、臣は君を知るにあらず、君を知る人は蘇君なり、蘇君常に秦より趙を伐ち、縱の約を敗られんことを發に懷き、秦に用ひらるゝ人は君にあらずんば其の政を得ること莫けんと、是故に君に一旦怒を發させ、又臣に命じて、君の資用を給したるは、盡く蘇君の計謀なり、今君用ひられ玉ふを、趙に歸りて告げんと云へば、張儀此の處分を聞きて、嗟乎此れ我が術の中に在れども、然も悟らざるは、我れ蘇君に及ばざるなり、我れ新に用ひられて、何ぞしも、能く趙を攻むることを謀らんや、我が爲めに蘇君に告げられよ、蘇君の時、我れ何んぞ其恩を忘れて、趙を攻むることを、秦の君に云はんや、蘇君趙に存在す間に、我れ如何んしてか趙を伐つこと遂げんやと云、

通俗戰國策卷第四

〔第十八〕范雎疑魏榮秦

魏の國に范雎と（字は叔）云ふ人、列國の諸侯に游説すれども、感じ用ひられず、今は故國の魏王に事へんと求むれども、家貧しく其の資用を得さるに依て、先づ魏に事へたる中大夫の官人須賈の家に暫く事へたり、須賈が魏の昭王の命を承けて、齊の國に使に趣むく時、范雎も其の下に從がひ、齊に留まること數月を經たり、齊の襄王以前より、范雎が事を能く辯ずることの勝れたるを聞て、今來るを悦び、黄金十斤に、牛酒を加へて賜りたるを、范雎は辭退して、遂に受けされども、須賈は齊王より賜物を范雎に遣したることを知り、彼れに賜物を運ばするは、徒ならじ、范雎齊に來りて、魏國の陰謀を悉く漏したる故なりと怒り、國に還り、宰相魏齊に告ぐ、魏齊大に怒りて、家人に命じて、范雎を捕へ、强く笞擊せて、脅を折り、齒を摺せたり、范雎は意ならさる疑に責められども、威權重き人の咎なるに依て、半死半生の底に伴はりたれば、形を褰卷にして廁の中に（俗に云ふ雲雘なり）措き、邊りに警固の士卒を居ゑて、魏齊が家に來る賓客、沈醉する者、更唯が簀卷の許に集まりて、溺を汙流させたり、此の如き大なる僇を著すことは、以後にも妄言を發つことを懲誡しめんが術なり、睢は簀の中より、我れを守る者を賴み、公等我を脱出し玉はば、後に必ず厚く報ぜんと云へば、快よく憑れて、守の者共、簀の中の者は死したり、今は出して弃てんと、魏齊に訴ふれば、魏齊酒に酩酊する時にて（大醉を酩町と云）死したらば弃てよと云、睢は不慮の身を免かれ出たり、魏齊は酒力醒めて後、脱出しをを悔いて、復尋ね求むること甚しかりしを、魏國の鄭安平と云ふ人の憐にて、匿亡げさせ、名姓を更めて張祿と稱す、此頃秦の昭王より、謁者の官人王稽を魏の國に使に來らせたるに、鄭安平歩卒の形に詐はり、王稽が許に隨侍するを見て、魏には賢人の秀でたる、我れ連れて西の方秦の國に往くべき者在りやと問ふ、鄭安平答て、臣が里の中に張祿先生と號する人、嘗てより君に見えて、天下の事を談ぜんと願へり、其の人此の國に仇あるに障へられて、登の見は得難しと云ふ、王稽聞いて、然らば夜に至て、與倶來れと云ふ、鄭安平夜に及びて、張祿と倶に王稽に見えて、語未だ卒らざるに、王稽早く范雎が賢なることを知りて、先生には、我れに先き立て、魏の國の邊境三亭の南に待ち玉へと、私に約して別れ、王稽魏の國を辭し去る時、范雎を

車に載せ、秦の國に入り湖關まで至る時、車騎多く西の方より來るを見て、范雎が來る人は誰ぞと問へば、王稽答へて、此れこそ秦の宰相穰侯の、今東の方縣邑の中を行るなりと云ふ、范雎聞いて、穰侯は秦の權威を專にして、他國諸侯の客を國に內るゝことを惡むと聞けり、必ず我を辱しめんことを恐る、我れ少らく車の中に匿れんと云ふ、兎角する間に、穰侯至りて王稽を見て、遠方の使者を遂げて歸らるゝこと、勞煩至極なりと、一禮を述べて後、關東には、(魏の國及び五國を指て云)何の變りたることか在りやと問ふ、王稽答て何の變なしと云ふ、又王稽に對して、謁君には、(王稽を指す)諸侯の客を連れて俱に來ること無きや、客を得ること益なくして、徒に人の國を亂るなりと云ふ、王稽客を連從へずと答て別れ去る、范雎王稽に告げるに、我れ答て穰侯は智士なりと聞きたるが、今其の事を見ること遲し、先に車の中に人あらんことを疑へども、車の中を索ることを忘れたりとて、范雎は車より下り、走りて此の人必ず悔いんと云ふ、穰侯行くこと十餘里計して、案の如く騎士を後に遣し、車の中を索めさせたれども客なければ、其の事息みぬ、王稽遂に范雎と同じく咸陽に入りて、使の事を告げ畢りて後、魏の國張祿先生と號するは、天下の辯士なり、今昭王の國は、卵を累ねたるよりも危ふきことと甚し、國の輔とする臣を、天下の中に得ることは安けれども、書を傳へては招き難し、是故に臣今般載せて來ると云ふ、然れども秦王信ぜずして、草菜の具を與へて、王稽が家に舍むるのみなりしが、後に昭王其の器量を感じて客卿に拜し、兵事悉く范雎と謀議きて、穰侯を逐ひ、遂に范雎を宰相と定め、應の地に封じて應侯と號すれども、故國の魏には、斯かる富貴に登げられたることを知らずして、范雎は久しき以前に死したりと思へる中に、秦より、兵を韓魏の國に出し、急に攻來ると聞いて、魏より須賈を使者に定めて、秦に來るを、范雎傳聞いて、往昔の遺恨今報ずべしと悅び、容貌を更め、故に敝れたる衣を著、唯一人步にて、須賈が舍に入りて、旅舍と定めたる處に行て見を請へば、須賈驚き、范叔は(叔は、人の齒長弟を論ずるに、末の義に用ふるを借りて賤賣る意に今用ひたり)今にも恙なしや、范雎進み出で、餘命存へて此の如しと云へば、須賈は彼れが微力したる底を見て、何と范叔は秦の國に來りて、己れが辯才を說き、人に感ぜられたりやと問ひ、嘲を吐く時に、范雎答へて、以前過を魏の宰相より被りたる故に、亡逃れて、漸く此の地に來る身の、誰にか說くことを得んと云、須賈又問ふ、汝此にあつて何をか勤むと云ふ、范雎答へて、人の爲めに傭れて、賃を受けて、命を養くると云、此

れを聞て、須賈が意に哀生じて、其の舍に一宿留め、與に坐して、飮食を與へ、且に汝が屑寒えたること、此に迫れりやとて、綈袍の美麗にして厚き一衣を施して後、汝は秦國の宰相張祿を知りたるや、我れ魏に在つて預より張祿は秦王に幸を被り、天下の事、皆宰相の意に任すると傳へ聞けり、我が今此に來て去留の二つ、合せて張君の計を伺ふ、汝が知れる人に張君と親しき客は無きか、其傳を宜しく憑むことを願ふと云へば、范雎答へて、某が平生傭はるゝ所の主人、幸に張君の門に入ることを常とせり、某も又時時見ゆることを得たれば、張君に某傳へて、見を遂げさせんと云へば、須賈又我れ遠方より來つて、馬病れ、車の軸も折損ねたり、相君に見ゆるには、大車駟馬ならずしては、出ること得難しと歎くを聞て、君の爲めに大車駟馬を我常に雇はれたる主人に借らんとて、范雎は踏りて大車駟馬を調へ、須賈が御者を勤め、秦の宰相の門に進む時、其の路に望見て、范雎なりと識る者は、皆避匿るを、須賈は深く怪しめり、既に宰相の門に至て、范雎は須賈に暫時此に待ち玉へ、我れ先づ入て、相君に君の來ることを通ぜんと云ふを、實なりと思ひ、須賈久しく門外に待ち、餘に遲きに依て、其の門下の者に、今門內に入りたる范叔が出でさることは何の故ぞと問ふに、門下の者、范叔と呼ぶ者は、此の門下に無しと答ふ、須賈彌怪しみて、獨に我と載り來りて、(御者は位ある人の右に乘るを法とす)今門に入りたる者なりと云へば、門下の者聞て、其の人は我國の宰相張君なりと答ふるに驚き、自欺れたることを知りて、慢汗したる罪を謝びん意にて、腐を露はし袒膝行りて、我が身は相君の意に委すると云ふ、此の時范雎帷帳を盛んにし、近習の者、甚だ衆く竝べ從へて、須賈を見る、須賈は其の威權に怖れ、首を頓て、死罪逃れずと叫びて後、君意はざりき、能く青雲の上に昇らんとは、(高位の勝れたるを喩て青雲の上と云)今より復た須賈天下の書を讀まし、復た天下の事に與らじ、我れには湯鑊爐炭の罪を免れず、胡貉の遠き地に屛れんことを請望む、死生の間は、君の仁心を仰ふぐと云ふ、范雎其の辭に就て、汝が罪幾あるやと問へば、某が髮を擢きて罪に數くとも、尙未だ足ずと答ふ、范雎聞て汝が罪三つあり、昔楚の昭王の時、申包胥と云へる臣は、楚の爲めに、吳國の軍勢を卻けたる功を、楚王感ずる故に、荊の地五千戶を(民の家に必ず出入の戶を備ふる故、民屋を數ふるには戶を用ふ)封ぜられるれども、包胥は辭退して受けざりしは、君の先祖の丘墓を長く荊に寄せ住めんと志せばなり、今雎が先人の丘墓も、又魏の國に在り、汝は前に我が心を齊に通ずると詐りて、魏齊に惡ま

せたる罪一つなり、魏齊が我れを厠の中に辱しむる時、汝が止めざるの罪二つなり、酔ひたる者の更來て、我れに溺す、是事之不可知者三也、宮車一日晏駕、君雖恨於臣、無可奈何、君卒然捐館舍、君雖恨於臣、亦無可奈何、使臣卒然塡溝壑、君雖恨於臣、亦無可奈何と云ふ、范雎懌はずして、王の宮に入りて、君に言すに、王稽が君に忠あるに依ずんば、臣を函谷關より内に入るゝことあらじ、大王の賢聖なるにあらずんば、臣を能く貴くすることあらず、今臣が官は、宰相に至て、爵は列侯となる、然れども王稽が官は、始めに變らず、謁者に止まるは、臣を朝廷に納るゝの意にあらずと、昭王此の辭を聞て、王稽を召して、河東郡の太守に任じ玉ひ、又鄭安平を將軍に任じ玉ふ時、范雎は家に蓄へたる財物を盡く散して、窘て困窮したる者に施こし、一飯の恩を受けたるにも、必ず償を遂げ、睚眦の小なる怨にも、必ず報ずることを快よしとせり、

〔第二十〕爲范雎昭王復舊讎

范雎秦の宰相たること二年は、昭王位に即いてより第四十二年に當る、今茲秦より東の方韓の少曲高平の兩地を伐ちて拔く、昭王今魏齊亡走りて、平原君が許に匿くれたりと聞て、范雎が爲に必ず其の仇を報じ遂げさせん方便に、好を結ぶ宵を伴造り、平原君に遣り、其の文に寡人常に君の義を高うすることを聞くが故に、君と布衣の友たらんことを願ふ、君の寡人が許に過來たることを得ば、幸甚し、寡人が意に、君と十日の飲を曇ねんことを願ふと言遣る、平原君が意に、秦に行くことを畏れ、又昭王の心、實に此の如くならんとも料り、遂に秦に入つて、昭王に見えて飲むこと數月の後、昭王より平原君に語るに、昔し周の文王は、呂尙を得て貴ぶこと、先君太公と同じくして、太公望と號し、齊の桓公は、管夷吾を得て、父の如く敬ひて、仲父と稱く、今范君も、又寡人が意に叔父と同じ、范君の仇、今君が家に居れり、人を國に歸し、其の頭を取來らせて、寡人に獻ぜよ、此の如くならずんば、君を關より出さじと、言を強く發ちたれば、平原君聞て、凡そ貴き時に友ふことを親しくするは、賤しきに忘れまじきが爲めなり、富める時に交を厚くするは、貧しきに陷りて、疎むまじきなりしが爲めなり、彼の魏齊は、勝が（平原君が名）宿き親友なれば、假令我が家に在りとも、出すべきの道なし、今又我が家にあらずと、辭爽に答へたるに依て、昭王より又趙王に書を遣して、王の弟は（平原君は趙の惠文王の弟なり）今秦に在り、范君が仇の魏齊は平原君が家に匿れたり、王より疾く其の頭を人に持たせて、寡人が國に來るべし、異義に及ばゝ、我れより兵を擧げて趙を伐たん、且王の弟を關より出さじと緊しく募求むる故に、趙の孝成王俄に兵卒を發し、魏齊を捕へ秦に贈り、國の難を脫れんとて、平原君が家を圍むこと急なり、魏齊早く此の事を知り、夜に紛れ、亡出でゝ趙の宰相虞卿に見えて、如何にもして我れを匿し玉はれと希ふ時、虞卿熟思慮すれども、趙王には、幾重說くとも我が言を用ふることあるまじと思ひを定め、宰相の印を解き、魏齊を連れて亡去るに及びて、虞卿又思量するに、今天下の諸侯に對して、急に魏齊を匿し玉はれと嘱へん方なし、魏には信陵君が客を招きても、其の下に容るゝことを好む者なれば、彼を憑にして、楚に往かんと志す、信陵君此の事を聞けども、强く秦を畏れ、猶豫して、虞卿に見ゆることを未だ肯はさる故に、虞卿とは何如なる人ぞやと云ふ時に、侯嬴旁に居て、信陵君に語りて曰く、人は固に未だ知り易からず、人を知ることも亦未だ易からざる也、彼の虞卿は始めに臆を蹈み、簦を擔へる貧夫なれども、一たび趙王に見えて、自璧一雙、黃金百鎰を賜り、再たび見えて、上卿に拜せられ、（國の高官を上卿と云ふ）三たび見えて、卒に宰相の印を受けて、萬戶侯に封ぜられ、今天下に知らざるの人なけれども、魏齊が今難に迫りて、其門に來れば、爵祿の尊を喪れて、宰相の印を解き、

萬戶侯を損て、國を去り、人の困窮を救ふことを急にして、公子に（信陵君を指す）歸せんとするを、防ぐに意あるは、公子は何如なる人ぞや、人は固に知り易からず、人を知ることも亦未だ易からざる也と、詞を反せば、信陵君も、大いに慙ぢ、車に駕り、野外まで迎に出たれども、魏齊は信陵君が我れを見るに憚りたるを聞き、怒を發して、自到ねたり、趙王は魏齊が生涯を、遂げたるを聞て、幸なりと悅び、其の頭を取りて、秦に贈れば、昭王より平原君を出して、趙に歸されたり、

（第二十一）聶政竝ニ全孝義、附姊彰ニ弟名ー

爰に聶政と云へる勇猛の士あり、己れが惡む所の人を殺し、其の仇を報ぜらるゝことを避けて、母姊を連れて、齊の國、軹深井里に深く潛れて、親姊を生育むの資に、獸の肉を屠ることを勤むること久し、時に韓の國の宰相俠累は、（一韓傀、史記如レ此）國中の政柄を握りて、威を逞しうす、又嚴遂と云ふ者、君に重んぜられて、寵恩を厚く戴き、兩虎の如くなれば、二人の交り和合せざるに依て、嚴遂機前を料り、卒に俠累が爲に讒せられ、誅戮に陷らんことを恐れ、先んじて俠累が過を數擧ぐる故に、俠累怒りて朝廷にて緊しく辱を與ふ、嚴遂劍を拔いて、亡去つて後、右の憤を彼れに報ずべき者を求むるに、齊人告ぐるに、深井里の聶政は、勇氣猛くして、死を輕んずる士なれども、身に受けたる仇を避けんとて、卑しき屠者の中に隱る、此れを雇ひて然るべしと云、嚴遂悅び、其の故を語らず、聶政と交りを厚くせり、聶政は嚴遂が數回來りて我れを慇懃にするを怪み、公には、我れを何の用に求むること在りやと問へば、嚴遂答へて、事今迫れども、我れ君に親しむの日淺くして、卒爾に請ひ望み難しと云ひて、乃ち酒を具へ、自ら聶政が母の前に進めて、老母の壽を祝し、黃金百鎰を奉る、聶政愈怪みて受けず、嚴遂强ひて進めんとする時、聶政が曰、我れに老母あつて家貧しく、殊に旅客の住居にて、狗を屠ることを營めども、旦夕母の口體を養ふ甘脆の味を供へるに足れり、親裔の由なき贈物は、受くべきの義なしと固く辭退する時、嚴遂邊側なる人を屏け、聶政に耳語き、我れは大なる仇に妨げられて、諸侯の列國に流浪すること久し、其の仇を報ぜんと願へども、我が力に及び難し、今齊に來りて、君は義甚だ高きことを聞て感じ、百金を進むることは、君の朝暮飲食の費に給さんことを求めて、君の讌を交へんことを願ふの外に、何の求めか在らんと云ふ、聶政熟聞いて後に、我れ志を降し、身を辱しむることをも顧みずして、市中屠者に雜居ることは、老母を養ふを幸とすればなり、老母今眼前に存在す、我が身何んぞ人の爲めに許すことを肯はずと云ふに依て、嚴遂も爲ん方なく、亙に賓主の禮を備へて別れ去りぬ、久しく經て、聶政が母死して、葬を終へ、喪服を除りて後、聶政劍を裹げて、嗟乎我れは今市中の賤人にて、刀を鼓し、獸を屠ることを業とす、彼の嚴仲子は（仲子は遂が字なり）諸侯の門に事へし卿相なれども、千里を遠しとせず、車騎を市中に枉げて、我れと交れり、我が仲子を待遇ひたるの道至極淺くして、大功の稱すべき事未だ有らず、仲子は百金を母の壽を祝すると云て贈られて、我れ義に契はずとて受けざれども、仲子は深く我れを知れる人なり、凡そ賢者は心を感じて忿激し、其の罪他人に在りて、睚眦の意を生ずる時は、困窮して僻地に埋まる、賤人をも、親しく信仰することは定まれり、我れ何んぞ嘿然として止むべけんや、且前日仲子の我れに要むるを、我れ其の意を徒にして、老母の存在すと云ひて其の求めを杜ちたり、今老母は天年を終盡したり、我れ能く己を知るの人に用ひられんと云て、遂に西の方濮陽の地に至り、嚴遂に見えて、前日仲子の求めを許さるの所以は、我が親在るに依れり、今親不幸にして死したり、仲子の仇を報ぜんと願ふ所の事に、我れ從はんと請ふと云、嚴遂悅て具に告ぐるに、我が仇は韓の國の宰相俠累なり、彼の俠累は韓の君の季父なれば、宗徒の一族繁多に、殊に居處には兵器警衛の人を多く設置きたるに依て、我れ前にも人に囑へて刺殺させんと求めたれども、終に其の願を未だ成就せず、今君來て我れを棄てざることを幸とす、益車騎壯士を具へて、君の羽翼を加へんと云へば、聶政答へて、韓の都する所の潁川の陽翟と、衛の都東郡の濮陽は、地の相ひ去る中間遠からざれば、今人の宰相を殺さんとし、又其の宰相は、國君の親族なれば、其の勢多くの人を用ふべからず、若し人を多く用ひば、得失の變を生ずること必定なり、得失生ずる時は、語必ず泄れん、語泄れば、韓より國を傾けて仲子と讎を累ねんこと、殆にあらずやと云ひて、遂に車騎人徒を止めて、唯一人劒を杖いて、韓に行く、此の時韓には東孟の地にて親を合せて會することありて、韓王を先として、宰相も皆來り、兵戟を持ちて、隨侍衛護する徒甚だ衆し、聶政は直に階に入りて、俠累を刺殺さんとすれば、俠累厳き周章走つて、烈侯を抱く、聶政失たず俠累を刺し殺す時、其の劒の末にて、烈侯をも傷けたり、左右の臣、大に亂れたるを、聶政大音を擧て呼り、遂に數十人を擊ち殺して後、自面皮を剝ぎ、兩眼を抉拔き、腸を出して死したり、韓には聶政が屍を取て、市

暴し、猶千金を懸けて、俠累を殺す者を購求むれども、久しく誰なることを知ることなし　聶政が姉の榮、此の事を聞て、我が弟は至極賢なり、妾が（女の己を卑下して妾と云通例なり）軀を愛すれども、我れ弟の名を滅すべからずと云て、韓の國に走り、聶政が暴されたる屍を視て、天晴勇なる哉　勢氣を持つことの隆なることは、孟賁夏育にも過ぎ、成荊よりも高し、今死して名なし、父母は前に沒し、兄弟有ることなし、其の名を顯はさるは、偏に其累我れに及ばんことを恐れてなれども、我が身を愛して、弟の名を揚げさるは我が忍びさる所なりと云、聶政が屍を抱いて、此れ我が弟にして軹の深井里に客居したる聶政と云ふ者なりと大音に呼はり、其身も屍の下に自殺しぬ、晉楚齊衛の國、皆此れを傳へ聞て、聶政一人が働のみならず、其の姉も亦烈女と稱すべしと感じたり、聶政が名の後世まで、廣施すことは其の姉身を醢にするの誅をも避けさるより其の名を揚げたり、

〔第二十二〕宋王喜妖爲ㇾ祥

九國の内（韓、魏、趙、燕、齊、楚、宋、衛、中山）六國は、秦の始皇に合せて一統せられ、中山は魏の文侯に滅され、宋は齊に伐たれ、衛は秦の二世胡亥の元年に、其の君名を角と云へるが、庶人に廢せられて、秦に奪はれて、先祖より傳へて、十一君、歳數九百八年の久しき祭祀遂に絶えたり、中にも宋の國の末主、名を偃と云ふは、剔成、戴公、父辟公の遺蹟を繼き、立て四十一年に、弟偃、兄剔成を、齊に逐奔らせ、自立して國を簒へり、偃が國主の時、雀の小鳥、蝿の形大いなるを城の隅に生む、奇異なること、思ひ、卜を掌どる史官に驗へさせたれば、小なる物が巨なるを生むことは　吉卓にして、必ず天下に霸王の勢を振ふの前表なりと告ぐるを大いに喜びて、此れより隣の國を滅し、薛の地を伐ち、淮北の地を取り得たるに、愈〳〵驕占を信ずること厚くして、霸者の功、速に成就せんことを願ひ、天に仰いで射、地に俯して笞うち、社稷を斬りて焚滅して、天下の鬼神をも、我が力にて威服すると稱へて、國老の徒を思り、諫を進むる臣を黜け、無顏の冠と名けて、額を覆はさるを被、晝夜酒色の二つに耽りて、勇氣を示し、背偃まる者を斬り、朝に水を涉る者の脛を割く、國人大いに駭き、上世の桀王に殊ならさる暴虐なれば、桀宋と云へり、齊の國より其の暴惡を聞て伐つ時、民人の怨怒積みたれば、城を守らず、皆散亂して、宋王偃は、臣倪侯が館に逃れたれども、遂に搜し得られて殺されたり、兄を殺して國を簒ふ、天誅逃るべからず、國の將に亡びんとする時は、天より必ず妖孽を降して、

警動かすことを識らず、庸闇の主は、反つて祺祥なりと欣びて、淫虐を恣にして、敗亡を速に招けり、抑上世周成王元年に、微子を（名を開と云）始めて宋の國に封じ玉ひしより、王偃に迄るまで、傳へて二十二君、其の歳數八百三十一年の長き宗廟社稷を、一時に斷絶したるは、偃が不道暴虐より釣起したり、其の滅びたるは、周の赧王の第三十九年に當る、

〔第二十三〕中山末主羊羹之怨　一壺之報

彼の中山は、周の威烈王の第十二年に、中山の武公初めて立つ、其の地は故の鮮の國にて、周の系と同じく姬姓なり、其の城中に山あるが故に、中山國と名くれども、列國に比べて、分内狹小なり、一旦秦韓燕宋等の國と合せて、五王と呼べども、土地褊小なるに慢られ、强國の兵を受くること毎毎にして、燕趙齊に惱まされ、卒に魏の文侯に國を奪はれたり、其の末君の時に當りて、前より其の器量を試られて、事を致す士大夫を召して、饗應しあるに及びて、司馬子期と云ふ臣も、其の列に在て、羊の羹の我れに遍からさるを怒りて、國を走り、楚國に往き、昭王を薦めて、中山を伐たせたる時、大國の猛勢に敗られて、中山の君亡げ玉ふ時、誰とも知れさる二人戈を挈て、其の後に隨へるを顧みて、汝等は何人ぞやと問へば、二人音を同じくして、我れ等が父前に餓に迫りて死なんとする時、君の壺の中に小食を與へ玉ふ恩に感じ、死するに臨みて、以後中山の國に、兵戈の事興らば、汝等必ず死せよと遺言したる故に、今來て君の爲めに死せんことを願ふと答へたり、君仰て歎息し、物を與ふることは多少を擇ばず、其の困厄を濟ふを要とす、怨を受ることは深淺に拘はらず、人の心を傷るより起る、我れ一杯の羊羹を惜みて、國を亡し、一壺の飡を施して、勇士二人を得たり、（衛の一國滅る事は錄に重りて之を記す）、

〔第二十四〕感恩救國難

孟嘗君が家人、君に近侍して事へる美女を潛に親愛するを或人知りて孟嘗君に見えて、君の家に在て、君に事へる美女と心を配せて愛することは、甚はだ不義ならずや、君此の者を殺すべしと云、孟嘗君其の事を聞いて、美なる貌を睹て悦ぶは人の情なり、其の意に隨せて打措け、重ねて言ふこと勿れと制して免しぬ、其の明年に、孟嘗君彼の美女を愛する人を召びて、汝は我が門に居ること久しけれども、此に在ては、大

官は覬覦しても未だ得べからず、小官は汝又喜ばざるべし、今衛國の君は、我れ布衣の卑きゝ時よりして親き交なり、汝に車馬束帛を具へん、衛の君の門下に至れと云、家人喜で、遂に衛に往き、甚はだ重んぜらる、其の後齊の國と衛の交解ける時、衛の君天下の兵を集めて、齊を攻めんと催すに至て、是の人君に諫むるに、孟嘗君は、臣が不肖なるを（形は人に同くして、心人の如くならざるを不肖と云）知らずして、臣を賢なりと進めて君を欺けり、且臣齊衛の先君は馬を殺し、羊を壓し、其の血を飲りて盟ひ、齊衛の國後世に至るまで、互に攻伐つことを爲し、或攻め伐つことあらば、命を絕つこと此の馬羊の如くならんと定めたると聞く、今君天下の兵を集めて、齊を攻め玉はゞ、是れ先君の盟約に背きて、孟嘗君を欺き玉ふなり、願はくは君、齊を攻むるの意を止め玉へ、君は臣が言を聽かば可なり、聽かずんば、臣は不肖なれども、頸ねて血を君の衿に瀉がんと云ふ、衛の君誠にもなりとして止められたり、齊人之を聞いて、孟嘗君は善く事を爲せり、禍を轉じて功を爲すと謂ふべしと批判したり、孟嘗君の門下に、君の意に稱はざる人あるを逐放たんと思へる時、齊人魯連君に見えて說く、猿と獼猴に、木を舍て、水に處る時は、魚鼈にも及ばず、險を歷危に乘る時は騏驥も（千里の遠を一朝に馳る馬）狐狸に及ぶことなし、曹沫が（齊桓公の勇士）三尺の劒を奮へば、一軍の多きも敵することを得ず、然れども、曹沫に劒を釋てさせ、銚鎒を操持せて、農人と同じく田畝の中に居く時は、農夫にも齊しからず、是の故に物其の長ずる所を舍てゝ、其短かき所を議すれば、堯帝にも亦足らざる所あり、今人の不能なるは、此れを不肖と賤しみ、人を敎へても不能なれば、此を拙しと譏る、拙をば用ふるを罷め、不肖なるをば放棄つ、人を逐棄てゝ相ひ與に處ることを喪する時は、其の人一旦他國に去ても、復來て其怨を報ず、此の如きは敎を立つる者の用ふる所にあらず、孟嘗君其の辭を感じ悅んで、遂ふことを止めたり、

〔第二十五〕馮煖爲二孟嘗君一市レ義

齊の國に馮煖と云ふ貧乏の士、自己の力にて、身を養ふことを得ずして、多くの士を懷養ふ孟嘗君の門下に寄らんことを求め、人に囑して君の下に食せんことを願ふ、孟嘗君尊問ふに其の士は何をか好むや、其求めを傳ふる人、答へて、彼れ何の好むことなしと云、君又問ふ、何の能かある、答ふるに能なしと云ふ、孟嘗君笑つて其の士を家に受け入れたり、君の左右に從ふ人、皆此の士は君の賤しむことを知て、肴肉を去

つて惡草の具を常に與へたり、馮煖其の下に身を寄すること俄頃して後、柱に形を倚り己が劒の柄を手に彈いて、長鋏歸來乎（鋏は劒の把也、倶に歸りまらんとなり）食無魚と歌ふを、左右の士聞いて、君に此れを告ぐ、孟嘗君食はしむるに、門下の魚を與ふる客に齊しくす、（孟嘗君が下に數千の多き客あるに依て、其の養を三等に分つ、上客には肉を供へ、中客には魚を食はし、下客には菜を與ふ）又居ること頃らくあつて鋏を彈いて、長鋏歸來乎出無レ車と歌ふ、左右聞いて、彼れは己が器量を逞れて、次第に驕る志强しと笑ひ、又君に此の如く歌ふと告げたれば、孟嘗君之れが爲めに車駕を與へ、門下車乘の客に同じくすれば、馮煖其の車に乘り、己れが劒を揭げて、親友の許に往きて、孟嘗君より、今我れを客の一列に連ぬると云ひ、其の後頃らくありて復た其の劒の鋏を彈きて、長鋏歸來兮無レ以爲レ家と歌ふ、左右聞て、皆此の士は貪つて足ることを知らずと誹惜む、孟嘗君此れを聞て、馮公には親ありやと問ふに、老母ありと答ふ、孟嘗君頓て、老母の飮食の用を給して、乏しきを賑す、是れより馮煖復た歌はず、其の後孟嘗君門下の諸客に對して、我が領地とする薛に往き、民の債を悉く納處を遂げて來る者は誰ならんと問へば、馮煖前み出て我れ能くせんと言ふ、孟嘗君怪みて此の人誰ぞと問へば、左右皆此れ彼の長鋏歸來んを歌へる者なりと對ふれば、君莞爾と笑て、此の客は決定して此の事を能せん、我れ久しく見ることを負り、今慇懃に相見せんとて、馮煖に對つて、我れ國の政道に倦れ、憂を懷き、思慮昏く亂れ、性又懦弱なれば、國家の事に紛れて、意ならず罪を先生より（馮煖を尊て先生と云）被れり、今先生は我が爲めに薛の地に至て、民の債を收むることを差とせざらんやと問へば、馮煖此を願ふ所なりと答ふる故に、車を飾へ裝を治め、民に借したる券契を載せて行かんとする時、債を畢く收めて後には、何をか市うて反らんぞと問ふ、孟嘗君聞いて、我が家に寡なき所を察、調來られよと云ふ、馮煖辭に往て、諸民の債を債ふを召集め、券を合せ了りて後、孟嘗君の命なりと矯り、諸民に悉く施し與へ、其の券を燒く、民大に悅んで、萬歲と稱ふ、其より齊に驅還りて、早朝に孟嘗君に見えんことを請ふ、君は馮煖が疾きを怪しみ、衣冠正しく整へ、債畢く收めたりや、來ることの疾きは何んの故ぞと問ふに、悉く收め畢りたりと答ふ、何をか市うて反りたるやと問へば、馮煖答へて、君の言に我家に寡なき所を市へと仰せられたるを以て、臣竊に計るに、君の宮中に珍寶を積み、狗馬は外廐に實ち、美人は閨閣の間に充てり、君の家に足らざるは義のみなり、臣竊に義を市へ

りと云ふ、孟嘗君聞いて、義を市ふとは奈何、馮煖答へて、今君は薛の地を有ちて、其の民を愛し、子の如くに爲ず、却て利を我れに得ることを勤め玉ふことを患ひて、君の命なりと矯り、債を民に與へ、其の券を燒きたれば、民悦んで萬歳を唱へたり、此れ君の爲めに臣が義を市ひたる所以なりと云へば、孟嘗君悦ばざるの色あり、其の後一年を過ぎて、齊王孟嘗君を疎んずる意にて、寡人が身として、先王の舊臣を臣となすべき理なしと云ひて、薛の地に就いて、居を安に定めさせ玉ふ時、薛の民皆老いたるを扶け、幼を携へ、我が君を迎ふると悦び、其の道中百里の外まで來れり、孟嘗君、此に於て馮煖を顧視て、先に先生我が爲めに義を市ふとは、今日正に之を見ると歎美したり、

〔第二十六〕齊閔王兇惡　附太史女親二法章一

齊の國の城外に卑劣にして住居する狐爰と云ふ人、閔王の正直ならざるを歎きて諫めつれば閔王怒つて斬るを憎みて、齊の中檀衢の市の百姓皆背くことを悲みて、宗徒の親しき、陳擧すれば東閭に殺すに依て、一族心を離れたる故に、閔王は遂に齊の宮中の鼓里に殺され、太子は（名は法章）民の怨むる難の我に及ぶことを怖れて、衣を解き服を脱ぎ、太史敫の家に逃れ、傭夫となりて、園に灑くことを勤とし玉へり太史が女、太子の容貌徒人にあらずと知て心を盡し、竊に衣食を與へて、私することを成す、莒中又齊の亡散りたる臣共、皆相聚つて、閔王の子を尋ね求めて、齊君に立たんことを願ふ、太子傳聞いて、我れ莒に潜居ることを告玉ふ、齊の舊臣田單、燕の國に奪はれたる齊國を復せんと、忠誠を傾け、已に壞られし即墨の城より、（齊城の名）亡去りたる餘の士卒を招會め、遂に燕の軍兵を破り、國を再び復して、太子を莒の地に迎立つ、此れを襄王と號す、王位に即いて太史の女を王后に立つ、齊王建を生み玉へり、太史敫は我女媒なくして嫁ぎたれば、今より我が種にあらず、我が家世を汙したりと怒り、終身女を視ることなしと云、然れども王后は、賢にして見されども、人の子の禮を失はず、襄王卒して、子の建、齊王に立つ、此時王后は強秦に能從ふことを謹み、列國の諸侯に信を守つて交り玉ふ故に、建立つてより四十餘年の久しき、兵を國に受くることなし、

〔第二十七〕王孫賈駁二母之言一討二國敵一

始め王孫賈と云ふ者、十五歳にして、閔王に事へたり、王燕の兵に攻められて出て走る時、賈は王の行方を失へり、其母賈に告ぐるに、汝朝に出て晩に來る時は、我れ門に倚りて望む、汝暮に出て遠らざる時は我れ閭に倚りて望を成す、汝は今王に事へ、王の出で走るに、汝が其の處を知らずして、尚何んぞ歸るやと云ふに驚き、王孫賈頓て市中に入り、呼號びて、淖齒、齊の國を亂りて、閔王を殺したり、我れと與に彼れを誅せんと志さす者は、右の肩を袒ぬげと觸回るに、市人其の意に從ふ者四百人、此れと力を戮せて、淖齒を擒へて刺殺したり、弱齡にして、母の敎を愧ぢ、大敵を討つの忠感ずべし、又母の賢にして、其の詞の嚴なるに依て、義正しきより、卒に其の子の忠を能く成就すること滋感ずべし、

通俗戰國策卷第五

〔第二十八〕虞卿說二趙王一逐二樓緩一

趙の國に用ひられて名を高く揚げたる虞卿は、素列國を遊行し、辯才を諸侯に盡したれども、信用を受けず、益貧困にして、蹻を蹈み、簦を擔へる形狀に落魄れて、卒に趙の國に往き、孝成王に說くに至て、一たび見るに、感ぜられて、黄金百鎰、白璧一雙を賜り、再び見えて、趙の上卿に遷補ひられ、虞の邑を封地に領したる故に、虞卿と號し、趙の君臣共に、其の才を愛して、國の治亂盛衰の沙汰、虞卿が與聞かざることなし、秦より趙の國長平に兵を前めて合戰するに、趙は勝つことを得ず、剩へ味方には都尉の官一人を亡へり、趙王は樓昌と虞卿を召びて、軍の利を喪ふのみならず、都尉も討たれぬ、寡人重ねて卷甲に命じて、復び秦の兵に交へて、勝負を決せんこと如何と仰せらるゝ時、樓昌承りて重ねての合戰を催し玉ふこと、益あるべからず、秦に使を遣りて、兩國和睦を求め玉ふに超えたることはあるまじと言ず、虞卿此れを聞て、此の議然るべからず、今昌が和睦を願ふは、若し和合せざる時は、趙の軍必ず破れんと怖るゝより外なし、然も和睦を制ふことは、秦の國の意に在て、我れより强ひて求め難し、且王の秦の兵を論じ玉ふは、趙の軍を破らんことを願ひ玉ふや又然らずやと問へば、王の答へに、秦よりは手を休めずして、必ず趙の軍を破らんと求むることを第一にすと云ふ、又虞卿が言すには、王は臣が言を聽納れ玉ふならば、使を楚魏の國に馳せ、王の重寶を出して與へ玉へ、楚魏には、此れを得るを喜びて、必ず王の使ひを兩國に納るゝこと決れり、趙の使、楚魏に入る時は、秦は必ず天下縱の國皆意を合すると疑ひ、

疑ふのみならず、必ず恐るゝ意生ずべし、此の如くならば、自然と嫣ぐこと遂ぐべし、趙王此れを肯はず、平陽君と計り、秦と嫣ぐことを同意して、鄭朱に命じて、秦の國へ使者として遣る、秦に其の使者を納れたるを聞いて後に、趙王は虞卿を召びて、客人今平陽君が評議に與して、秦の國に嫣の使者を遣したるに、秦には使者の鄭朱を納れたりと聞く、卿の意に此事奚如が定まらんと思ふと、尋ね玉ふ時、虞卿は對へて、王の嫣の望遂げさる時は、趙の軍必ず破れて、天下の戰勝ちたるを賀する者は、皆秦に赴かん、鄭朱は貴人なり、秦に入らば、秦王と應侯意を合せ、必ず貴重する底を顯さん、楚魏の國には、趙は秦と嫣ぐ故に、必ず王を救ふことを止めん、秦は天下の諸侯皆趙王を救ふに意なしと知らば、嫣を求め玉ふとも成就することを遂げずと云、然て秦には虞卿が案に外れず、應侯は鄭朱が來るを幸として、天下の秦に戰勝ち玉ふを賀する者に顯示して、趙王求むる所の嫣ぎを肯はざる故に、長平の軍大いに敗北したり、趙王の惱重なるを思ひて、趙郝を使者に定め、趙の六縣を割きて、秦に獻じ、長く秦に事へんとの約に遣らんとする時、虞卿は趙王に見えて、秦より王の國を攻めたれども、今軍に倦れて歸陣したりや、又王の意に秦の威力尙能く嫣んにして、進攻むれども、王を愛して攻めずと思ひ玉ふやと問ふ、王聞いて秦より我が國を攻むることは、其の力を餘すこと何んぞ有らんや、必定倦れて歸るならんと答へらる、虞卿其の返答に乘りて、王の思慮の如くに、秦の軍勢力を盡しても、取ることを得さる故に、倦れて歸るなるべし、然るに王今秦の力にて取ることを得さるの地を、此方より彼れに與へることは、是れ秦の助を施して、自ら保つ所の國を攻むるにあらずや、來年秦より復王を攻むる時は、王其の難を救ふに路なきを奈何と云ふ、王聞訖りて後、虞卿が言を趙郝に語り玉ふに、趙郝聞いて、虞卿何んぞ實に秦の力の至らさる所を曉らめ盡さんや、實に秦の力にても、進む能はさる所を知るぞならば、少分の地も與ふべからず、秦より來年復た王を攻めば、王は有つ所の內を割與へて、嫣ぐことを煩とせずと云へば、王悅びて、汝が言に聽せて、今地を割かん、汝必ず來年に秦より我が國を攻むることなきを必ず定めんやと問へば、趙郝答ふるに、此れは臣が能く決する所に非らされども、他日以後に三晉の秦に交はるに、今日まで秦より韓魏を親しくして、王を攻むることは、王の秦に事ふること、必ず韓魏に及ばさるが故なり、今臣王の爲め親を負きたるの攻を解き、關を開き、幣帛を通じて、韓魏と齊しく交はることを遂げば、來年に至りて、王は獨り秦に攻められゝこと決まれり、此れ必ず王の秦に事へずして休むべからさる處なり、然も秦に事ふること、韓魏の後なれば、臣が意に定め難き所なりと云ふ、王の意に一大事斯に在りと、案に煩ふに依て、復虞卿に對して、趙郝が意慮を傾けて語るに、虞卿聞いて、趙郝が今年嫣らがずんば、來年に復た王を攻めん時、王には其の領內を割いて嫣らがずんばあるべからずと云、今嫣らぐとも、郝が意に秦より重ねて攻めさることを定むることは未だ能はず、然らば今趙より六城を割いて與ふるとも、是何んの益かあらん、來年復た攻むることは決れり、秦の力にも卒易に取ることを得さるを先立ち割て嫣ぐは、此れ自盡るの術なれば、嫣ぎを求むることなきに勝れたるはあらじ、假令秦より善く攻むるとも、一朝に六縣を取ることを得じ、趙に守を遂げずとも、六城を合せて失ふまでに至らじ、秦倦れて歸らば、兵卒も必ず罷れん、我が六城を楯にし、天下の兵を合せて、罷れたる秦を攻むるならば、是れ我が六城を天下の爲めに失うて、其の償は、秦より取らん、此の如くして我が國に利あれば、坐にして先き立ち、地を割き、自弱めて、秦を强くするとは孰與ぞや、今趙郝が王に言ず所は、秦には韓魏を親みて、趙を攻めんとは、必ず韓魏より趙を救ふこと在らじと思へり、王の軍に與する者なき時は、王の秦に事へても、韓魏には劣れりとす、是れ王より每年六城を獻じて、秦に事ふるにして、坐に我が城は盡きなん、來年秦より復地を我れに割かんことを求めば、王復た與へ玉はんか、其の時に當りて與へずんば、彼の趙郝が匠みたる前の功を棄てゝ、秦の禍を招くにあらずや、若し與へんとせば、給すべき地なからん、昔しより强き者は善く攻め、弱き者は守ること能はずと傳へ云へり、今坐にして、秦の望む所を聽かんとならば、秦には兵を弊さずして、地を得ること多からん、是れ秦を滋〻强うして、趙を彌〻弱ますなり、益〻强くする秦を、敵に受けて、愈〻弱き趙より地を割かんとせば、其計止む期なからん、王の地は盡ることありて、秦の求めは斷えず、盡ることあるの地に居て、止まさる求めを給さんとならば、其の勢必ず趙は滅亡するに定まれりと云、趙王は二人の辭一同ならさるを聞て、意恐多きが故に、兩端定まることなく、思惟に煩へる間に、樓緩秦より來るを、趙王は見るに賅き、樓緩に問ひ計るには、秦に地を我より與ふること何如、與へずして止まんか、孰れが吉ならん、樓緩慇懃に辭の禮を盡して、臣に尋ね玉ふ所は、臣が意に能く知る所にあらずと云ふ、王復た、然れども公の內意を聞くことを願ふと、强ひて問ふ時、樓緩が對へに、王には彼の公甫文伯が母の事を聞き玉へりや、（文伯は周の代の末春秋の時、魯國の君に事へたる大夫なり）彼の公甫文伯は、嘗て

魯國に仕へ、病みて死したる時に、此れを悲哀して、女子の房中に自殺する者二人、其の母は子の死を聞いても哭泣せず、其の傅姆此れを怪しみて、何ぞ子死して哭すまじきの道なしと云へば、其の母聞いて、孔子は賢人なり、魯を逐れたれども、我が子は隨はず、今死すれば、婦人之が爲めに自殺する者二人、是の如くなれば、必ず我が子は長者に薄くして、婦人には厚しと云へり、此の事を論ずるに、母を沙汰すれば賢母なり、婦人を批判すれば、其の夫に執深き妻なり、其の死を云ことは、一つなれども其の死を論ずる人異なれば、人の心も又別なり、今臣は新に秦より來れり、地を與ふること勿れと云へば、難を免るゝの計にあらず、與へよと云はゞ、王の心には臣を秦の爲をする者とし玉はん、是の故に今對ふること默止せり、臣が意を傾けて、大王の爲に計ることを遂ぐるとならば、與へ玉ふに勝ることはあらじと云へば、趙王此を肯ひ玉ふ、虞卿此の事を傳へ聞いて、王の前に見えて、樓緩が言は、皆辯を飾りて、秦の爲を第一に計れり、必ず與へ玉ふ勿れと禁しむるを、又樓緩聞き、王の許に往き見ゆる時、王又虞卿が止ることを告げ玉へば、樓緩對へて、虞卿が思慮に與し玉ふべからず、虞卿は僅に一を知り得て、其の二を知ることを得ず、今秦と趙に難を擇へるを、天下に皆悦とすることは、何の

故とか思ひ玉ふ、此れ皆彊に因りて弱を凌がんとす、今趙の兵は、秦の爲に困しめるが故に、天下の戰に勝ちたるを賀する者、盡く秦に在るを以て、臣は王に進めて、早く地を割き、和睦を請ひ、天下の疑を發させ、秦の心を一旦慰んずるに超えたるはあらじと思ふ、若し此の如くならざる時は、秦より怒を彊くして、力の弊たる趙の地を、瓜の如くに分たんと攻むるに至ては、趙は亡びなん、其の節に迫りて、何を用ひてか、秦に勝つことを圖り玉はんや、是を以て臣が虞卿は一を得たれども、其の二を得ずと言ず、願はくは王に能く思惟して決定し玉へ、重ねて虞卿に諮議り玉ふことを止め玉へと、彌辯を細にして說きたるを、虞卿復た聞いて王に見えて說く、樓緩が意は、趙を己が辯舌にて欺むき、秦の爲を勵ますと思へども、反つて危き事にして、愈天下を疑はするの基なり、秦の心を何んぞしも安ぜんや、彼れ天下に弱きを示すことを云へるにあらずや、且臣が王の地を與へ玉ふことを止め玉へと言すは、必ず固く與へ玉はざれと云ふにはあらず、秦に與へずして、他に一旦與へて、後に大に得るの術なり、今秦より王に趙の六城を索むるを、秦に與へずして、齊に賂ひ玉はゞ、齊は秦の深き讎の國たり、齊は王の六城を得て、王と力を幷せて、西の方秦を擊つには、王の言の畢るを待たじ、然れば一旦六城を齊に

失ふに似たれども、秦は彊き齊に地を益し、趙と合ふことを聞かば、怖れて王には反つて秦より償を取りて、遂に齊趙の久しき讎を能く報ずることを天下に示さん、王此の如き聲を世に震かし玉はゞ、敵の兵趙の境を未だ窺はざる前に、臣も秦より重き賂、趙に來りて、王に媾を願ふことを見ん、秦より媾を求むると、韓魏は聞かば、二國必ず王を重んずること決まれり、兩國より王を重んぜば、必ず重寶を出して、王に獻ずるに先きを爭はん、然らば王には齊に六城を割與ふることを、一時に行うて、三國の（韓魏趙を指す）親を結び、剩へ前に秦より攻められて、惱を此の國に運せんは、何と快かるまじやと說くに至て、趙王悦び、最なりと肯ひ、虞卿に命じ、東の方齊王に見えさせて、與に秦を弱めんことを謀り玉ふ、虞卿齊より未だ返らざるに、秦に早く此の事漏聞えて、使者來りて趙に在るを、樓緩は聞くと同じく、已前辯を飾りて、王を欺きたる罪に充てられんことを畏れて亡去りぬ、趙には虞卿が智慮を遠く用ひて、其の信を得たるを感じ、一城を虞卿に與へて居住を定めさせらる、須ありて、魏の國より趙に使者を來らせ、平原君を賴み、縱の交を結ばんことを請ふ、平原君、三たび孝成王に言せども聽かざる故に、出て虞卿に遇ひ、王の前に入て、縱の事を語

り玉へと云へば、平原君が辭に應じて、虞卿は王の許に入るを見て、王は先立つて、平原君が魏の爲めに縱の約を請へども、寡人聽かず、子の意に如何と思ふと問ひ玉ふ時に、虞卿は魏過てりと答ふるを、王は子の言の如くなるに依て、寡人は聽ずと仰せらるゝ時、虞卿又答ふるに、王も亦過てりと云ふ、王此れを聞て、寡人にも過つとは如何、虞卿が對に、去れば臣前より承はるに、小國と大國交りて、事に從ふに利あれば、大國必ず其の福を受け、敗ある時は、小國必ず其の禍を被ると云へり、今魏は小國を以て、其の禍を請ふ、王は大國を以て、其の福を辭り玉ふ、是を以て臣は王にも過てり、魏も亦過てりと言す、臣竊に料るに、縱を約し玉ふは、王の便なりと云ふ、王最とも至極せりとて、魏と縱の約を定め玉へり、然れども、虞卿は魏齊が趙に匿るゝことを遂げざるを恨み、萬戶侯卿相の印を重んぜず、魏齊と共に、趙を出で去りぬ、

〔第二十九〕楚國子良欺齊有東地

楚國の頃襄王、始め太子の時、質となりて齊の國に、留まる間だに、懷王（頃襄王の父）薨じ玉ふを聞て、齊の閔王に、本國に歸り、喪を勤めんことを願ひ玉へども、齊王許さずして、我れに楚國の東地五百里を與へば、歸さん、與へずんば、歸